

岐阜県文化財保護センター

調査報告書 第131集

荒尾南遺跡B地区Ⅱ

(第2分冊)

2015

岐阜県文化財保護センター

あら お みなみ
荒尾南遺跡B地区Ⅱ
(第2分冊)

2015

岐阜県文化財保護センター

目次（第2分冊）

第4章 西部域の調査成果	（藤田・河瀬・宗宮・吉田・山本・小野木）	1
第3節 弥生時代後期から古墳時代前期の遺構と遺物		1
1 建物跡・柵跡		1

第1分冊目次

第1章 調査の経緯
第1節 調査に至る経緯
第2節 調査の方法と経過
第2章 遺跡の環境
第1節 地理的環境
第2節 歴史的環境
第3章 調査の成果
第1節 基本層序
第2節 遺構の概要
第3節 遺物の概要
第4章 西部域の調査成果
第1節 縄文時代晩期から弥生時代前期の遺構と遺物
第2節 弥生時代中期の遺構と遺物
第3節 弥生時代後期から古墳時代前期の遺構と遺物

第3分冊目次

第4章 西部域の調査成果
第3節 弥生時代後期から古墳時代前期の遺構と遺物

第4分冊目次

第4章 西部域の調査成果
第3節 弥生時代後期から古墳時代前期の遺構と遺物
第4節 古墳時代中期以降の遺構と遺物
第5節 遺物包含層出土遺物
遺構一覧表
遺物観察表

第5分冊目次

第5章 東部域の調査成果
第1節 弥生時代前期の遺構と遺物
第2節 弥生時代中期の遺構と遺物
第3節 弥生時代後期から古墳時代前期の遺構と遺物

第6分冊目次

第5章 東部域の調査成果
第3節 弥生時代後期から古墳時代前期の遺構と遺物
第4節 古墳時代中期以降の遺構と遺物
第5節 遺物包含層出土遺物

第7分冊目次

第5章 東部域の調査成果
遺構一覧表
遺物観察表
遺構全体図分割図

第8分冊目次

第6章 自然科学分析
第1節 分析の概要
第2節 放射性炭素年代測定
第3節 赤色顔料分析
第4節 花粉分析
第5節 プラント・オパール分析
第6節 堆積物粒度分析
第7節 樹種同定
第8節 種実同定
第9節 鍛冶関連遺物分析
第10節 金属製品分析
第11節 白色塊分析
第12節 粘土塊分析
第13節 昆虫遺体群集分析
第14節 地形環境

第7章 総括

第1節 方形周溝墓の様相
第2節 B地区における建物跡等の概観
第3節 土器組成の概観
第4節 土器の時期細分
第5節 石器類
第6節 木製品
第7節 金属製品
第8節 遺跡の変遷

第9分冊目次

写真図版

挿図目次

図 388 SB258 遺構図 (1) 1	図 435 SB277 遺構図 37
図 389 SB258 遺構図 (2) 2	図 436 SB278 遺物実測図 38
図 390 SB259 遺物実測図 3	図 437 SB278 遺構図 38
図 391 SB259 遺構図 (1) 3	図 438 SB279 遺物実測図 39
図 392 SB259 遺構図 (2) 4	図 439 SB279 遺構図 40
図 393 SB260 遺構図 (1) 5	図 440 SB280 遺構図 (1) 41
図 394 SB260 遺構図 (2) 6	図 441 SB280 遺構図 (2) 42
図 395 SB260 遺物実測図 6	図 442 SB280 遺構図 (3) 43
図 396 SB261 遺物実測図 7	図 443 SB280 遺物実測図 (1) 44
図 397 SB261 遺構図 7	図 444 SB280 遺物実測図 (2) 45
図 398 SB262 遺物実測図 8	図 445 SB281 遺物実測図 46
図 399 SB262 遺構図 9	図 446 SB281 遺構図 47
図 400 SB263 遺構図 (1) 10	図 447 SB282 遺物実測図 48
図 401 SB263 遺構図 (2) 11	図 448 SB283 遺物実測図 48
図 402 SB263 遺物実測図 12	図 449 SB282 遺構図 49
図 403 SB264 遺物実測図 12	図 450 SB283 遺構図 50
図 404 SB264 遺構図 13	図 451 SB284 遺構図 (1) 51
図 405 SB265 遺構図 14	図 452 SB284 遺構図 (2) 52
図 406 SB265 遺物実測図 15	図 453 SB284 遺物実測図 53
図 407 SB266 遺物実測図 15	図 454 SB285 遺物実測図 53
図 408 SB266 遺構図 (1) 16	図 455 SB285 遺構図 54
図 409 SB266 遺構図 (2) 17	図 456 SB286 遺物実測図 55
図 410 SB267 遺物実測図 17	図 457 SB286 遺構図 56
図 411 SB267 遺構図 (1) 18	図 458 SB287 遺構図 57
図 412 SB267 遺構図 (2) 19	図 459 SB287 遺物実測図 58
図 413 SB268 遺物実測図 19	図 460 SB288 遺構図 59
図 414 SB268 遺構図 20	図 461 SB289 遺構図 59
図 415 SB269 遺構図 21	図 462 SB291 遺物実測図 60
図 416 SB270 遺物実測図 22	図 463 SB290 遺構図 61
図 417 SB270 遺構図 (1) 22	図 464 SB291 遺構図 62
図 418 SB270 遺構図 (2) 23	図 465 SB292 遺構図 (1) 63
図 419 SB271 遺構図 (1) 24	図 466 SB292 遺構図 (2) 64
図 420 SB271 遺構図 (2) 25	図 467 SB292 遺物実測図 64
図 421 SB271 遺物実測図 25	図 468 SB293 遺構図 65
図 422 SB272 遺構図 (1) 26	図 469 SB293 遺物実測図 66
図 423 SB272 遺構図 (2) 27	図 470 SB294 遺物実測図 66
図 424 SB272 遺物実測図 28	図 471 SB294 遺構図 67
図 425 SB273 遺構図 29	図 472 SB295 遺構図 (1) 68
図 426 SB273 遺物実測図 30	図 473 SB295 遺構図 (2) 69
図 427 SB274 遺構図 (1) 31	図 474 SB295 遺物実測図 69
図 428 SB274 遺構図 (2) 32	図 475 SB296 遺構図 (1) 70
図 429 SB274 遺物実測図 32	図 476 SB296 遺構図 (2) 71
図 430 SB275 遺構図 33	図 477 SB296 遺物実測図 71
図 431 SB275 遺物実測図 34	図 478 SB297 遺構図 72
図 432 SB276 遺構図 (1) 34	図 479 SB297 遺物実測図 73
図 433 SB276 遺物実測図 35	図 480 SB298 遺構図 (1) 73
図 434 SB276 遺構図 (2) 36	図 481 SB298 遺構図 (2) 74

図 482	SB298 遺物実測図	74	図 532	SB319 遺構図 (2)	113
図 483	SB299 遺構図	75	図 533	SB320 遺構図 (1)	114
図 484	SB299 遺物実測図	76	図 534	SB320 遺構図 (2)	115
図 485	SB300 遺構図	77	図 535	SB320 遺物実測図	117
図 486	SB300 遺物実測図	78	図 536	SB321 遺構図	118
図 487	SB301 遺物実測図	78	図 537	SB321 遺物実測図	119
図 488	SB301 遺構図 (1)	79	図 538	SB322 遺構図	120
図 489	SB301 遺構図 (2)	80	図 539	SB322 遺物実測図	120
図 490	SB301 遺構図 (3)	81	図 540	SB323 遺構図 (1)	121
図 491	SB302 遺構図 (1)	82	図 541	SB323 遺構図 (2)	122
図 492	SB302 遺構図 (2)	83	図 542	SB323 遺構図 (3)	123
図 493	SB302 遺物実測図	84	図 543	SB323 遺物実測図	124
図 494	SB303 遺構図	85	図 544	SB324 遺構図	125
図 495	SB303 遺物実測図	86	図 545	SB324 遺物実測図	126
図 496	SB304 遺構図	87	図 546	SB325 遺構図	127
図 497	SB304 遺物実測図	87	図 547	SB325 遺物実測図	127
図 498	SB305 遺物実測図	88	図 548	SB326 遺構図	128
図 499	SB305 遺構図	89	図 549	SB326 遺物実測図	129
図 500	SB306 遺構図 (1)	90	図 550	SB327 遺物実測図	129
図 501	SB306 遺構図 (2)	91	図 551	SB327 遺構図	130
図 502	SB306 遺物実測図	92	図 552	SB328 遺構図 (1)	131
図 503	SB307 遺物実測図	92	図 553	SB328 遺構図 (2)	132
図 504	SB307 遺構図	93	図 554	SB328 遺物実測図	132
図 505	SB308 遺物実測図	94	図 555	SB329 遺構図	133
図 506	SB308 遺構図	95	図 556	SB329 遺物実測図	134
図 507	SB309 遺構図	96	図 557	SB330 遺物実測図	134
図 508	SB310 遺構図 (1)	97	図 558	SB330 遺構図	135
図 509	SB310 遺構図 (2)	98	図 559	SB331 遺構図 (1)	136
図 510	SB310 遺物実測図	98	図 560	SB331 遺構図 (2)	137
図 511	SB311 遺構図 (1)	99	図 561	SB331 遺物実測図	137
図 512	SB311 遺構図 (2)	100	図 562	SB332 遺構図 (1)	138
図 513	SB311 遺物実測図	100	図 563	SB332 遺物実測図	139
図 514	SB312 遺構図 (1)	101	図 564	SB332 遺構図 (2)	139
図 515	SB312 遺構図 (2)	102	図 565	SB333 遺構図 (1)	140
図 516	SB312 遺物実測図	102	図 566	SB333 遺構図 (2)	141
図 517	SB313 遺物実測図	102	図 567	SB333 遺構図 (3)	142
図 518	SB313 遺構図	103	図 568	SB333 遺物実測図	143
図 519	SB314 遺物実測図	104	図 569	SB334 遺構図	145
図 520	SB314 遺構図	104	図 570	SB334 遺物実測図	146
図 521	SB315 遺構図 (1)	105	図 571	SB335 遺物実測図	146
図 522	SB315 遺構図 (2)	106	図 572	SB335 遺構図 (1)	147
図 523	SB315 遺物実測図	107	図 573	SB335 遺構図 (2)	148
図 524	SB316 遺物実測図	107	図 574	SB336 遺構図 (1)	148
図 525	SB316 遺構図	108	図 575	SB336 遺構図 (2)	149
図 526	SB317 遺構図	109	図 576	SB336 遺構図 (3)	150
図 527	SB317 遺物実測図	109	図 577	SB336 遺物実測図	150
図 528	SB318 遺構図	110	図 578	SB337 遺物実測図	151
図 529	SB318 遺物実測図	111	図 579	SB337 遺構図 (1)	152
図 530	SB319 遺物実測図	111	図 580	SB337 遺構図 (2)	153
図 531	SB319 遺構図 (1)	112	図 581	SB338 遺構図	154

図 582	SB339 遺構図 (1)	155	図 632	SB360 遺構図 (1)	199
図 583	SB339 遺構図 (2)	156	図 633	SB360 遺構図 (2)	200
図 584	SB339 遺構図 (3)	157	図 634	SB361 遺構図 (1)	201
図 585	SB339 遺物実測図	157	図 635	SB361 遺構図 (2)	202
図 586	SB340 遺物実測図	158	図 636	SB361 遺物実測図	203
図 587	SB340 遺構図	159	図 637	SB362 遺物実測図	203
図 588	SB341 遺構図 (1)	160	図 638	SB362 遺構図 (1)	204
図 589	SB341 遺構図 (2)	161	図 639	SB362 遺構図 (2)	205
図 590	SB341 遺物実測図	162	図 640	SB363 遺構図 (1)	206
図 591	SB342 遺構図 (1)	164	図 641	SB363 遺構図 (2)	207
図 592	SB342 遺構図 (2)	165	図 642	SB363 遺物実測図	207
図 593	SB342 遺物実測図	166	図 643	SB364 遺物実測図	208
図 594	SB343 遺構図 (1)	167	図 644	SB364 遺構図 (1)	209
図 595	SB343 遺構図 (2)	168	図 645	SB364 遺構図 (2)	210
図 596	SB343 遺物実測図	168	図 646	SB365 遺構図 (1)	211
図 597	SB344 遺物実測図	169	図 647	SB365 遺構図 (2)	212
図 598	SB344 遺構図 (1)	170	図 648	SB365 遺物実測図	213
図 599	SB344 遺構図 (2)	171	図 649	SB366 遺物実測図	214
図 600	SB345 遺構図	172	図 650	SB366 遺構図	215
図 601	SB345 遺物実測図	172	図 651	SB367 遺構図 (1)	216
図 602	SB346 遺構図	173	図 652	SB367 遺構図 (2)	217
図 603	SB346 遺物実測図	174	図 653	SB367 遺構図 (3)	218
図 604	SB347 遺構図 (1)	175	図 654	SB367 遺物実測図	218
図 605	SB347 遺構図 (2)	176	図 655	SB368 遺構図	219
図 606	SB347 遺物実測図	176	図 656	SB369 遺物実測図	219
図 607	SB348 遺構図	177	図 657	SB369 遺構図	220
図 608	SB349 遺構図 (1)	178	図 658	SB370 遺構図 (1)	221
図 609	SB349 遺構図 (2)	179	図 659	SB370 遺構図 (2)	222
図 610	SB349 遺物実測図	180	図 660	SB370 遺物実測図	223
図 611	SB350 遺物実測図	181	図 661	SB371 遺構図	225
図 612	SB350 遺構図	182	図 662	SB372 遺構図	226
図 613	SB351 遺構図	183	図 663	SB372 遺物実測図	226
図 614	SB352 遺構図 (1)	185	図 664	SB373 遺構図 (1)	227
図 615	SB352 遺構図 (2)	186	図 665	SB373 遺構図 (2)	228
図 616	SB352 遺構図 (3)	187	図 666	SB373 遺物実測図	228
図 617	SB352 遺物実測図	187	図 667	SB374 遺構図 (1)	229
図 618	SB353 遺構図	188	図 668	SB374 遺構図 (2)	230
図 619	SB354 遺物実測図	189	図 669	SB374 遺物実測図	230
図 620	SB355 遺物実測図	189	図 670	SB375 遺構図 (1)	231
図 621	SB354 遺構図	190	図 671	SB375 遺物実測図	232
図 622	SB355 遺構図	191	図 672	SB375 遺構図 (2)	232
図 623	SB356 遺構図 (1)	192	図 673	SB376 遺物実測図	233
図 624	SB356 遺構図 (2)	193	図 674	SB376 遺構図 (1)	234
図 625	SB356 遺物実測図	193	図 675	SB376 遺構図 (2)	235
図 626	SB357 遺構図	194	図 676	SB377 遺物実測図	236
図 627	SB357 遺物実測図	195	図 677	SB377 遺構図 (1)	237
図 628	SB358 遺構図	196	図 678	SB377 遺構図 (2)	238
図 629	SB359 遺物実測図	197	図 679	SB378 遺物実測図	238
図 630	SB360 遺物実測図	197	図 680	SB378 遺構図 (1)	239
図 631	SB359 遺構図	198	図 681	SB378 遺構図 (2)	240

図 682	SB379 遺物実測図	240	図 732	SB399 遺構図 (2)	277
図 683	SB379 遺構図 (1)	241	図 733	SB399 遺物実測図	277
図 684	SB379 遺構図 (2)	242	図 734	SB400 遺構図	277
図 685	SB380 遺構図	243	図 735	SB401 遺構図	278
図 686	SB380 遺物実測図	244	図 736	SB402 遺構図 (1)	279
図 687	SB381 遺物実測図	244	図 737	SB402 遺構図 (2)	280
図 688	SB381 遺構図 (1)	245	図 738	SB402 遺物実測図	280
図 689	SB381 遺構図 (2)	246	図 739	SB403 遺構図 (1)	281
図 690	SB382 遺物実測図	246	図 740	SB403 遺物実測図	282
図 691	SB382 遺構図	247	図 741	SB403 遺構図 (2)	282
図 692	SB383 遺構図 (1)	248	図 742	SB404 遺構図	283
図 693	SB383 遺構図 (2)	249	図 743	SB404 遺物実測図	284
図 694	SB384 遺物実測図	249	図 744	SB405 遺物実測図	285
図 695	SB384 遺構図 (1)	250	図 745	SB405 遺構図	286
図 696	SB384 遺構図 (2)	251	図 746	SB406 遺構図	287
図 697	SB385 遺物実測図	251	図 747	SB406 遺物実測図	287
図 698	SB385 遺構図	252	図 748	SB407 遺構図 (1)	288
図 699	SB386 遺構図 (1)	253	図 749	SB407 遺物実測図	289
図 700	SB386 遺物実測図	254	図 750	SB407 遺構図 (2)	289
図 701	SB386 遺構図 (2)	254	図 751	SB408 遺構図 (1)	290
図 702	SB387 遺構図 (1)	255	図 752	SB408 遺物実測図	291
図 703	SB387 遺物実測図	256	図 753	SB408 遺構図 (2)	291
図 704	SB387 遺構図 (2)	256	図 754	SB409 遺構図 (1)	292
図 705	SB388 遺物実測図	257	図 755	SB409 遺物実測図	293
図 706	SB389 遺物実測図	257	図 756	SB409 遺構図 (2)	293
図 707	SB388 遺構図	258	図 757	SB410 遺物実測図	293
図 708	SB389 遺構図	259	図 758	SB410 遺構図	294
図 709	SB390 遺構図 (1)	260	図 759	SB411 遺物実測図	295
図 710	SB390 遺構図 (2)	261	図 760	SB411 遺構図	296
図 711	SB390 遺物実測図	261	図 761	SB412 遺構図 (1)	297
図 712	SB391 遺構図	261	図 762	SB412 遺物実測図	298
図 713	SB392 遺構図 (1)	262	図 763	SB412 遺構図 (2)	298
図 714	SB392 遺物実測図	263	図 764	SB412 遺構図 (3)	299
図 715	SB392 遺構図 (2)	263	図 765	SB413 遺構図 (1)	300
図 716	SB393 遺物実測図	263	図 766	SB413 遺物実測図	301
図 717	SB393 遺構図	264	図 767	SB413 遺構図 (2)	301
図 718	SB394 遺構図 (1)	265	図 768	SB414 遺構図	302
図 719	SB394 遺構図 (2)	266	図 769	SB415 遺構図 (1)	303
図 720	SB394 遺物実測図	267	図 770	SB415 遺構図 (2)	304
図 721	SB395 遺物実測図	267	図 771	SB415 遺物実測図	304
図 722	SB395 遺構図 (1)	268	図 772	SB416 遺構図 (1)	305
図 723	SB395 遺構図 (2)	269	図 773	SB416 遺構図 (2)	306
図 724	SB396 遺構図 (1)	270	図 774	SB416 遺物実測図	307
図 725	SB396 遺構図 (2)	271	図 775	SB417 遺物実測図	307
図 726	SB396 遺物実測図	271	図 776	SB417 遺構図 (1)	308
図 727	SB397 遺物実測図	272	図 777	SB417 遺構図 (2)	309
図 728	SB397 遺構図	273	図 778	SB418 遺構図 (1)	310
図 729	SB398 遺構図	274	図 779	SB418 遺構図 (2)	311
図 730	SB398 遺物実測図	275	図 780	SB418 遺構図 (3)	312
図 731	SB399 遺構図 (1)	276	図 781	SB418 遺物実測図	312

図 782	SB419 遺構図	313	図 824	SB433 遺構図 (2)	348
図 783	SB420 遺構図 (1)	314	図 825	SB433 遺物実測図	349
図 784	SB420 遺物実測図	315	図 826	SB434 遺構図	350
図 785	SB420 遺構図 (2)	315	図 827	SB435 遺構図	352
図 786	SB420 遺構図 (3)	316	図 828	SB436 遺構図 (1)	353
図 787	SB421 遺構図 (1)	317	図 829	SB436 遺構図 (2)	354
図 788	SB421 遺構図 (2)	318	図 830	SB437 遺物実測図	354
図 789	SB422 遺構図 (1)	319	図 831	SB437 遺構図	355
図 790	SB422 遺構図 (2)	320	図 832	SB438 遺構図 (1)	357
図 791	SB422 遺物実測図	320	図 833	SB438 遺構図 (2)	358
図 792	SB423、SA024、SA025 遺物実測図	321	図 834	SB439 遺物実測図	358
図 793	SB423 遺構図 (1)	322	図 835	SB439 遺構図 (1)	358
図 794	SB423 遺構図 (2)	323	図 836	SB439 遺構図 (2)	359
図 795	SB424 遺物実測図	323	図 837	SB440 遺構図	360
図 796	SB424 遺構図	324	図 838	SB441 遺構図	361
図 797	SB425 遺構図 (1)	325	図 839	SB442 遺物実測図	362
図 798	SB425 遺物実測図	326	図 840	SB442 遺構図	362
図 799	SB425 遺構図 (2)	326	図 841	SB443 遺構図 (1)	363
図 800	SB426 遺構図	327	図 842	SB443 遺構図 (2)	364
図 801	SB426 遺物実測図	328	図 843	SB443 遺物実測図	365
図 802	SB427 遺構図 (1)	329	図 844	SB444 遺構図 (1)	366
図 803	SB427 遺構図 (2)	330	図 845	SB444 遺構図 (2)	367
図 804	SB427 遺物実測図	331	図 846	SB444 遺物実測図	368
図 805	SB428 遺物実測図	331	図 847	SB445 遺構図 (1)	369
図 806	SB428 遺構図 (1)	332	図 848	SB445 遺構図 (2)	370
図 807	SB428 遺構図 (2)	333	図 849	SB445 遺物実測図	371
図 808	SB429 遺構図 (1)	334	図 850	SB448 遺構図	371
図 809	SB429 遺構図 (2)	335	図 851	SB448 遺物実測図	372
図 810	SB429 遺構図 (3)	336	図 852	SB449 遺構図	372
図 811	SB429 遺物実測図 (1)	336	図 853	SB449 遺物実測図	373
図 812	SB429 遺物実測図 (2)	337	図 854	SB450 遺物実測図	374
図 813	SB430 遺物実測図	338	図 855	SB450 遺構図	374
図 814	SB430 遺構図 (1)	339	図 856	SB451 遺物実測図	375
図 815	SB430 遺構図 (2)	340	図 857	SB451 遺構図 (1)	376
図 816	SB431 遺構図	342	図 858	SB451 遺構図 (2)	377
図 817	SB432 遺構図 (1)	343	図 859	SB452 遺物実測図	377
図 818	SB432 遺物実測図	344	図 860	SB452 遺構図	378
図 819	SB432 遺構図 (2)	344	図 861	SB453 遺物実測図	378
図 820	SB432 遺構図 (3)	345	図 862	SB453 遺構図 (1)	379
図 821	SB432 遺構図 (4)	346	図 863	SB453 遺構図 (2)	380
図 822	SB432 遺構図 (5)	347	図 864	SB454 遺構図 (1)	380
図 823	SB433 遺構図 (1)	347	図 865	SB454 遺構図 (2)	381

SB258 (遺構：図388・389)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域の西側に位置する。南西側をSB259とSB260に切られ、両遺構の床面で平面形を確認した。検出面は西側に比べ東側が低く、南東側の埋土はほとんどないよ

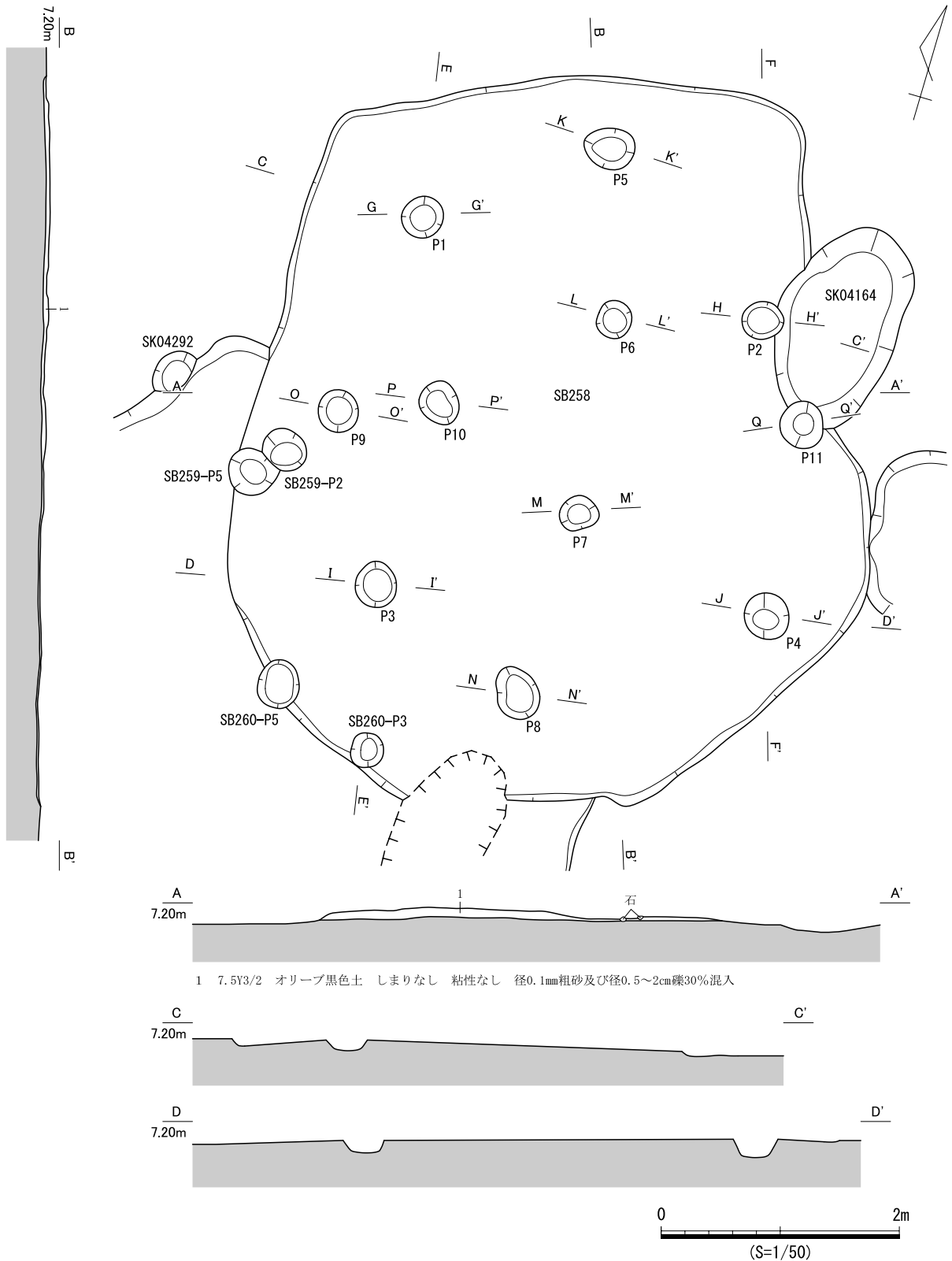


図388 SB258 遺構図(1)

1 7.5Y3/2 オリーブ黒色土 しまりなし 粘性なし 径0.1mm粗砂及び径0.5~2cm礫30%混入

2 第4章 西部域の調査成果

うな状態であった。平面形は不整形を呈するが、柱穴の推定から竪穴住居跡と考えた。

形状 北側半分は方形から台形状、南側半分は楕円形状を呈し、全体的には不整形である。南北長約6.1m、東西長約5.3mである。深さは0.1m未満と浅く、壁面の傾斜は緩やかである。

埋土 単層で粗砂と礫が混入するが、その成因は不明である。

床面 ほぼ平坦であり、貼床は確認できず、床面にて11基の小穴を検出した。小穴の埋土は単層から2層であり、P7は掘形が深い。全体形が不整形を呈するため柱穴の想定が難しいものの、4本柱を想定するのであれば平面的な位置関係からP1～P4の4基が妥当と考えられる。また、それにP5やP8を加えた多角形状の柱穴配置も想定できる。

遺物出土状況 埋土中から土器212点、灰釉陶器1点、中近世陶磁器3点、小穴から土器9点が出土した。遺構の重複関係から、陶磁器類は混入と考えられる。なお、出土土器はいずれも小片であり、図示しなかった。

時期 V～VI期のSB259、SB260に切られることから、それ以前と考えられる。

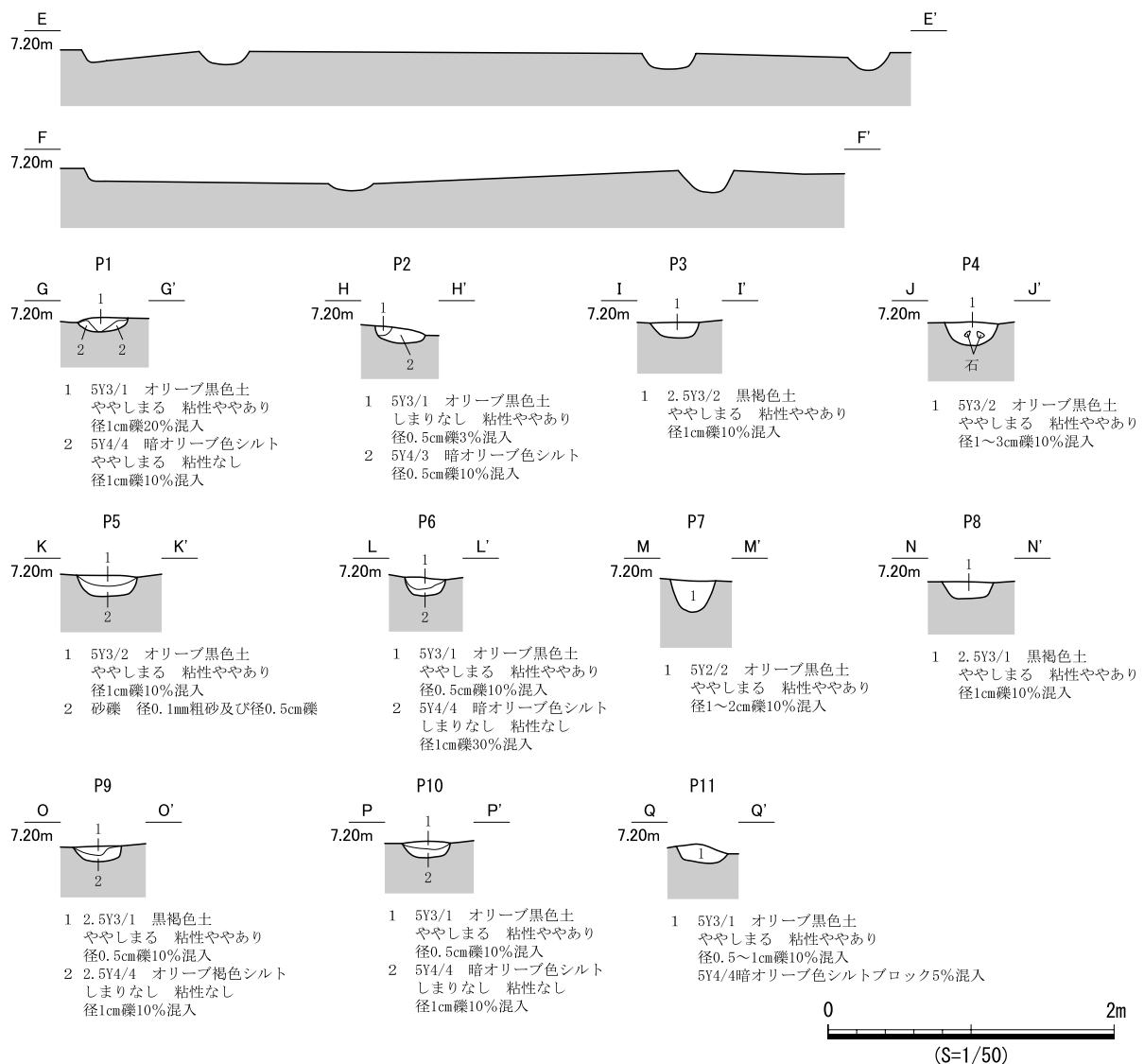


図 389 SB258 遺構図 (2)

SB259 (遺構：図 391・392、遺物：図 390)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、南東辺は攪乱により失われている。住居の北西辺の平面形は明瞭であったが、他は不明瞭であり、南側をSB260に切られ、北側でSB258を切る。

形状 南東辺の形状はやや不明瞭であるが、北東-南西長約5.0mの不整長方形を呈すると考えられる。壁面の傾斜は緩やかであり、深さは約0.1mである。

埋土 黒褐色土が単層で堆積する。本遺構の時期が重複するSB260の時期と近似することから、人為堆積の可能性がある。

床面 ほぼ平坦であり、貼床は確認できず、床面にて8基の小穴を検出した。小穴の埋土は単層から2層であり、P2とP3で柱痕跡もしくは抜取り痕と考えられる堆積を確認した。そのため、平面的な位置関係からP1～P3、P8を柱穴と考えた。

遺物出土状況 埋土中から土器758点、小穴から土器71点が出土した。土器の多くはVI期頃のものであるが、摩耗が著しい。なお、P7から壺(1098)が出土した。

出土遺物 1097はV期の高坏J類、あるいは鉢。大型品で直線的に坏底部が開き、口縁部が直立する。端部は平坦で、わずかに外方に拡張され、その直下に幅広の沈線が認められる。口縁部に数条の棒状浮文が認められるが、何条で1単位となるかは不明である。端部には赤彩が認められる。IV期の高坏にも類似するが、棒状浮文や丁寧なつくりであること、ミガキが精緻であることなどから、V期とした。1098はV期～VI期の壺H類底部。外面のミガキが顕著である。

時期 P7出土土器と、VI期のSB260に切られることから、V期～VI期と考えられる。

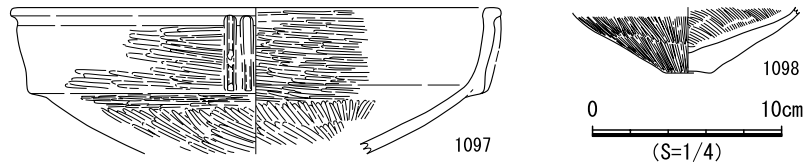


図 390 SB259 遺物実測図

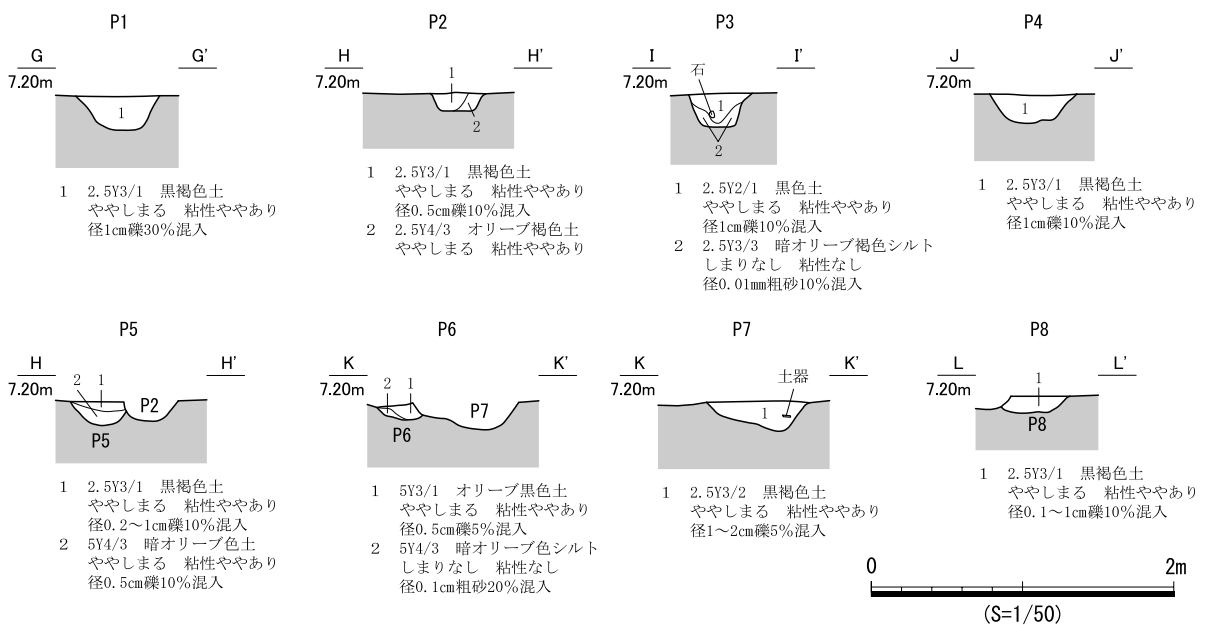


図 391 SB259 遺構図 (1)

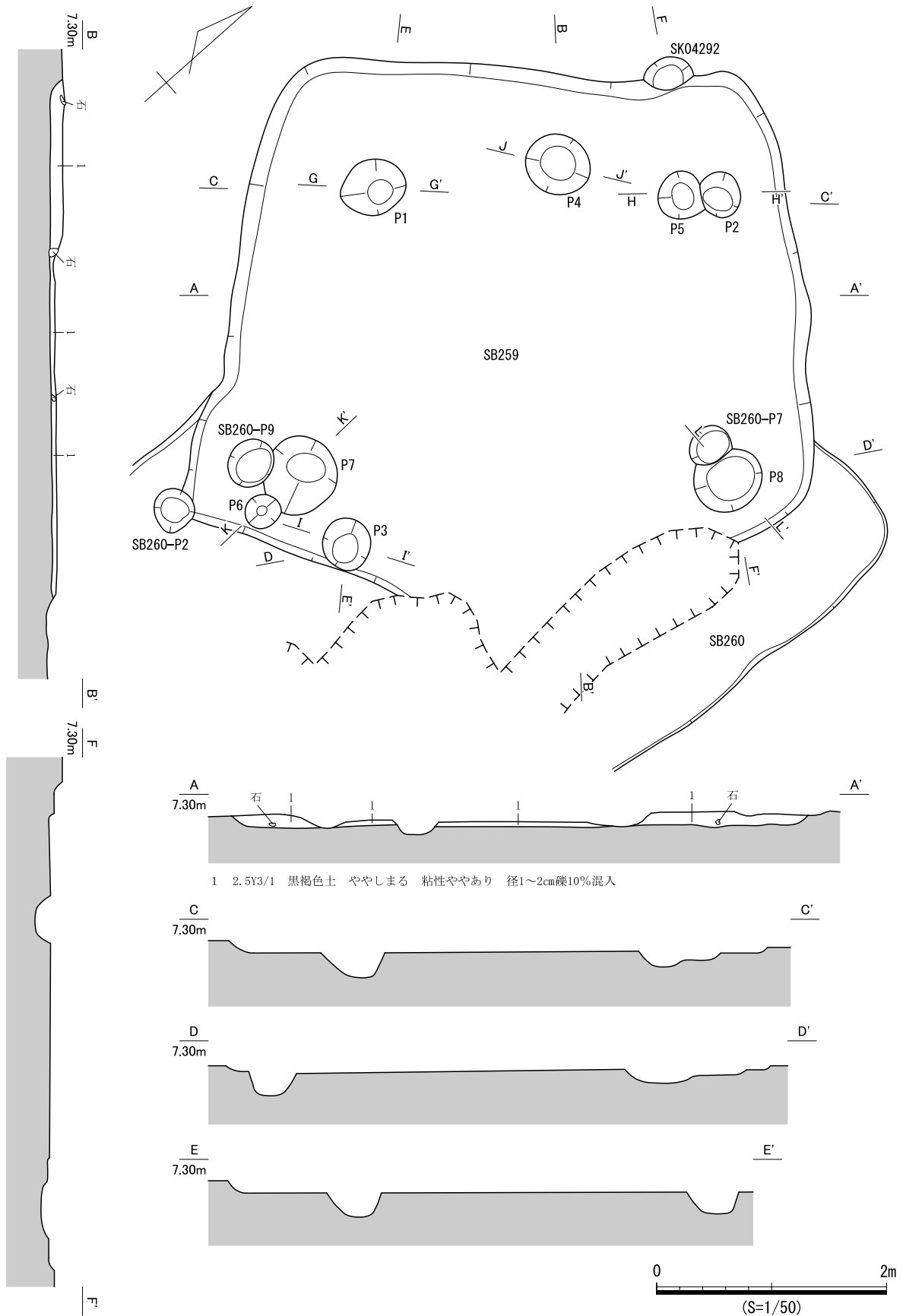


図 392 SB259 遺構図 (2)

SB260 (遺構：図393・394、遺物：図395)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。中央から南側を攪乱により失っており、北側でSB259を切る。

形状 南側を攪乱により失っているが、東西長約5.0mの不整形を呈すると考えられる。深さは約0.1mで、壁面傾斜は緩やかである。

埋土 単層であり礫の混入が目立つものの、その成因は不明である。

床面 ほぼ平坦であり、貼床は確認できず、床面にて14基の小穴と壁溝を検出した。小穴の埋土は大半が単層である。平面的な位置関係からP1～P3の3基を柱穴と考えたが、住居の全体形と比べて

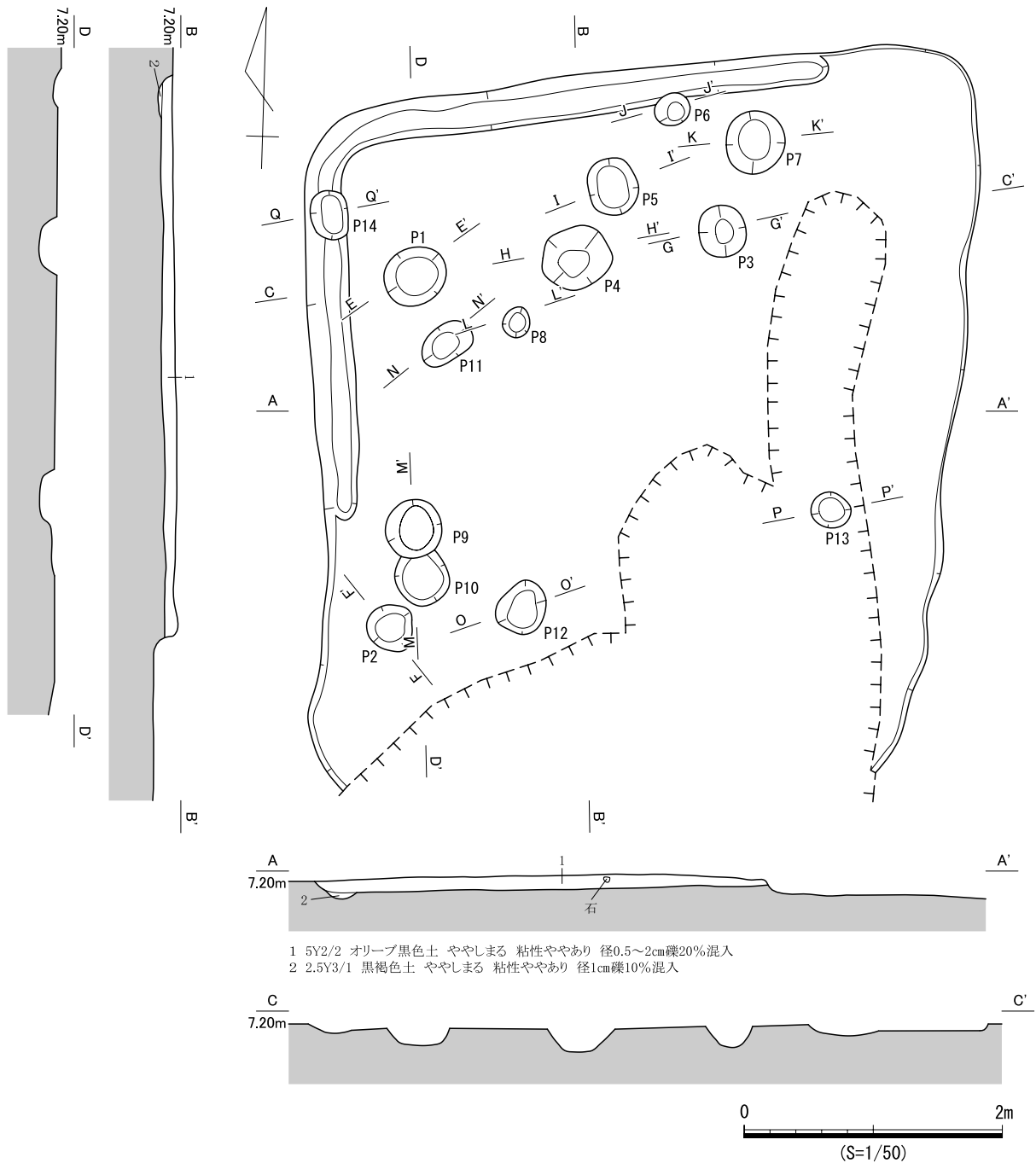


図393 SB260 遺構図(1)

6 第4章 西部域の調査成果

やや西に寄っている。壁溝は北辺から西辺沿いにかけて検出し、幅約0.3mと広く底面は丸みを帯びている。

遺物出土状況 埋土中から土器986点、小穴から土器77点、石器類1点、壁溝から土器18点が出土した。土器の多くはVI期のものである。

出土遺物 1099はI期壺胴部。胴部が強く膨らみ、中程に3帯の直線文が認められる。1100はVI期高坏C1a類坏部。口縁部が直線的に外傾する。

時期 VI期の土器片が多いことと残りの良い高坏（1100）の時期から、VI期と考えられる。

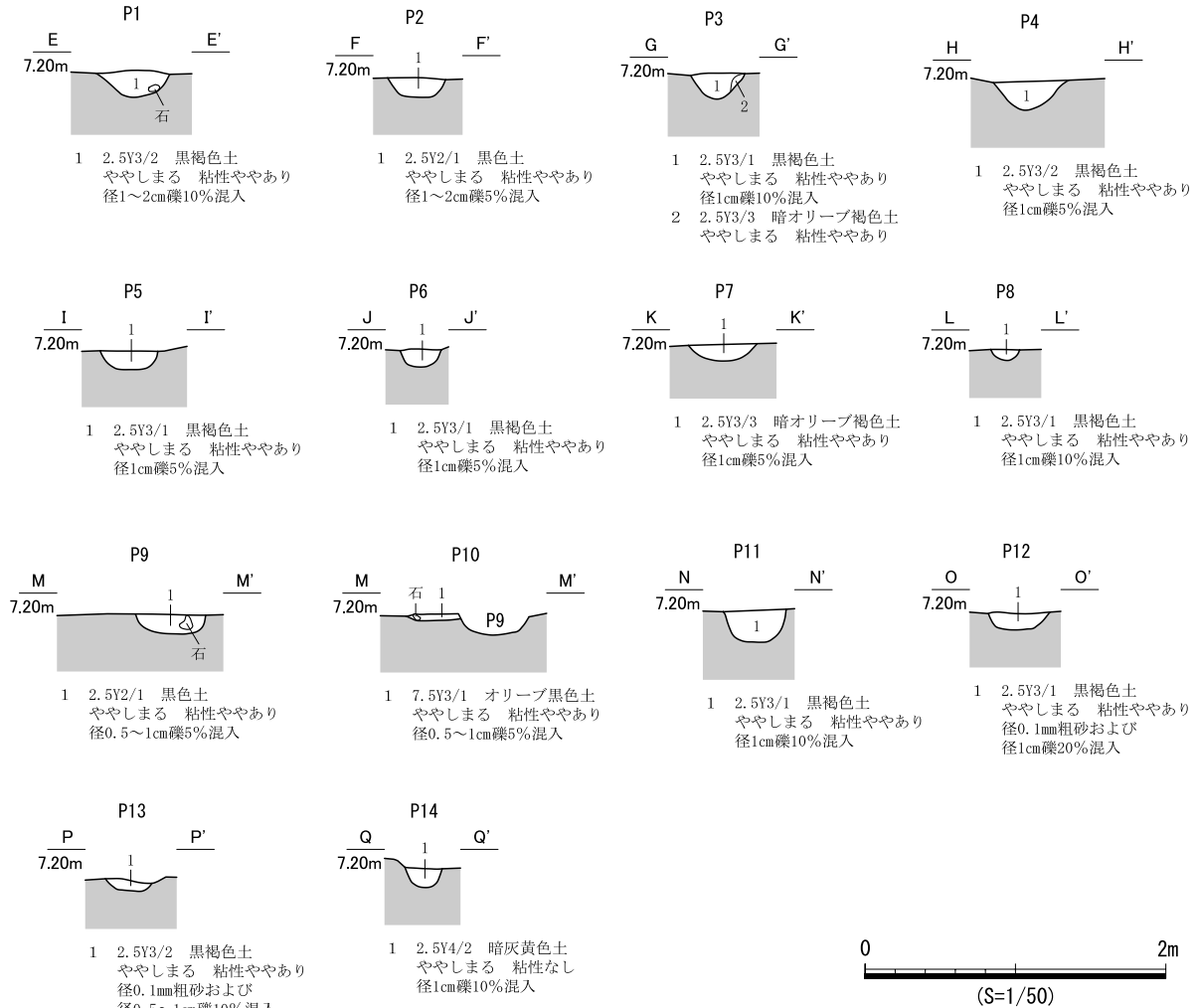


図 394 SB260 遺構図 (2)

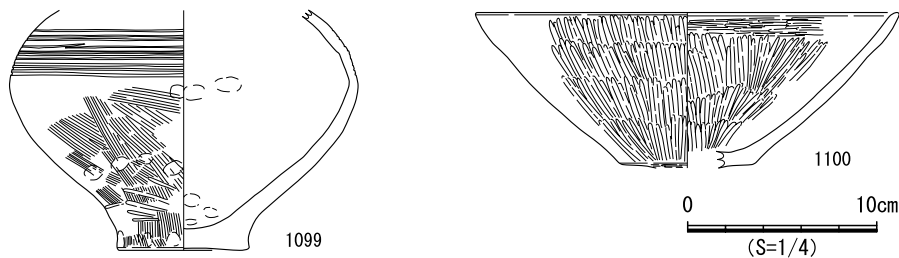


図 395 SB260 遺物実測図

SB261 (遺構：図 397、遺物：図 396)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。西側と南側を攪乱により失い、攪乱内及び攪乱の南・西側で本遺構に連続する遺構は確認できなかった。

形状 東辺は直線的に延び、隅部は丸みを帯びている。深さは0.1m未満と浅く、壁面傾斜は緩やかである。

埋土 単層であり礫の混入が目立つものの、その成因は不明である。

床面 ほぼ平坦であり、貼床は確認できず、床面にて2基の小穴を検出した。小穴の埋土はいずれも単層であるが、P1は深く、壁面傾斜も急であることから、柱穴の可能性はある。P2は柱穴の可能性はあるものの、住居の全形が不明であるため、定かではない。

遺物出土状況 埋土中から土器 261 点、小穴から土器 13 点が出土したが、いずれも小片である。

出土遺物 1101はVI期甕A2b類。口縁部が屈折して直立し、端部は内傾面を形成する。

時期 出土遺物の時期から、VI期以降と考えられる。

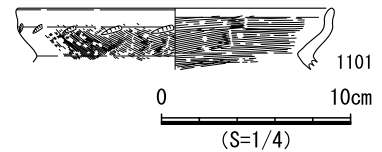


図 396 SB261 遺物実測図

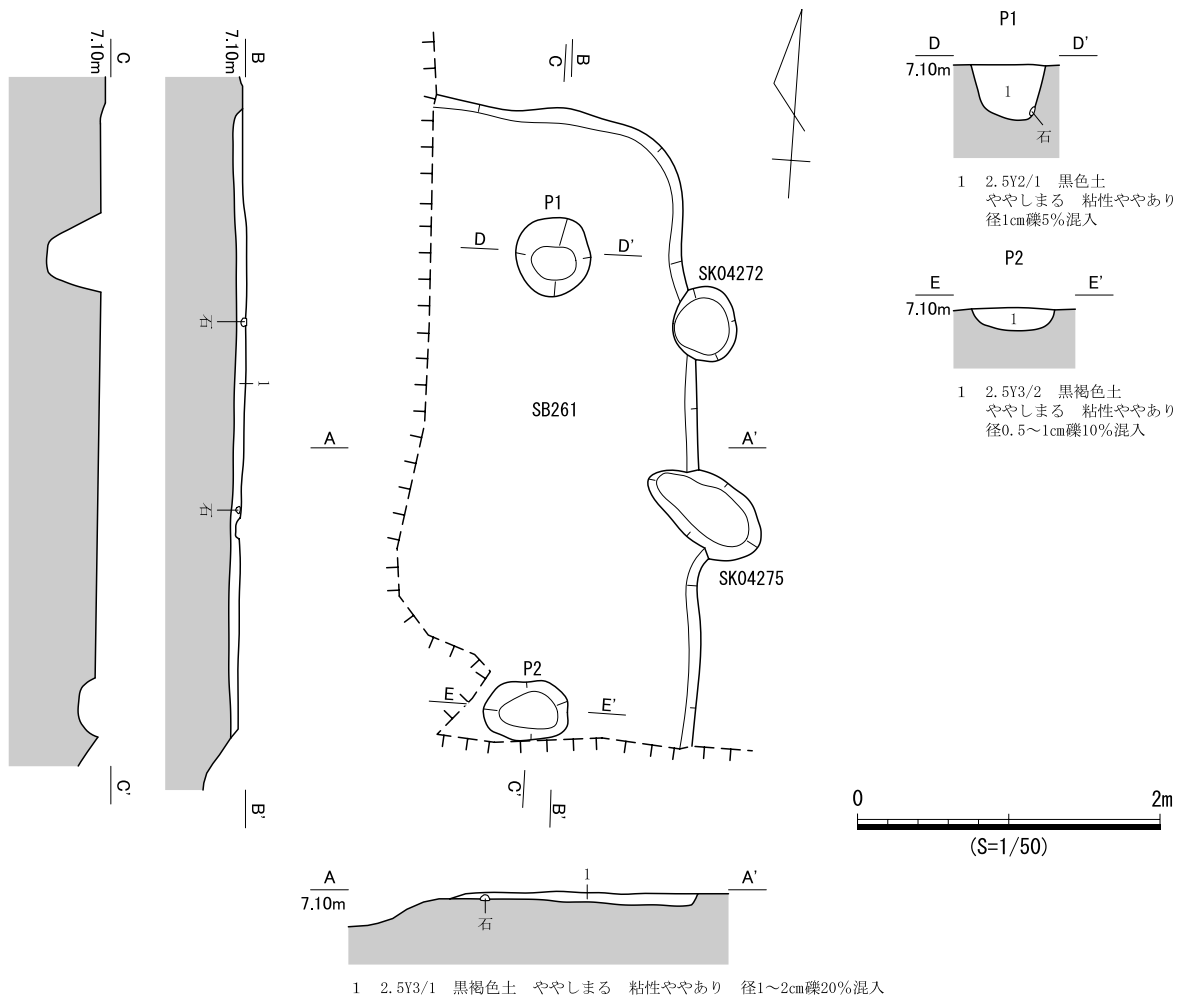


図 397 SB261 遺構図

SB262 (遺構：図 399、遺物：図 398)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。東側を攪乱により失い、SB263を切る。平面形は不明瞭であったが、検出面の礫の混入具合が周辺と異なっていたことから、平面形を推定できた。

形状 東側の形状は不明だが、南北長約5.9mの隅丸方形を呈すると考えられる。壁面傾斜は比較的緩やかで、掘形底面までの深さは約0.1mである。

埋土 2層に分層し、上層が住居埋土、下層が掘形埋土である。上下層の識別は困難であり、上層は人為堆積の可能性がある。

床面 ほぼ平坦であり、貼床（整地土）がある。住居跡のほぼ中央で割礫及び焼土、炭化物の広がり（SF1）を確認できた2層上面を床面と判断した。床面では礫が表出し、小穴等の平面形は不明瞭であったが、4基の小穴等を検出した。小穴の埋土はいずれも単層であるが、平面的な位置関係からP1～P4の4基を柱穴と考えた。SF1検出面では炭化物が広い範囲で薄く堆積しており、その南西隅では焼土も確認できた。それらを掘削するとSF1の掘形を検出した。SF1は長軸1.55m、短軸0.91m、深さ0.18mで不整形を呈する。埋土は8層に分層でき、ブロック土や礫、炭化物の混入が認められることから、人為堆積である。1・2層は再掘削後の堆積と考えられ、SF1を繰り返し使用していたと考えられるが、SF1の掘形壁面に被熱痕跡はみられなかった。

掘形 埋土は単層である。底面はほぼ平坦で、SB263に伴う複数の遺構を検出した。

遺物出土状況 埋土上層から下層にいたるまで全体的に土器片が出土しており、点数は土器480点、小穴から土器17点である。1103は住居南西隅の床面直上にて、口縁部を北に向けて出土した。脚端部を除き、ほぼ完形に復元できる。

出土遺物 1102はV期～VI期壺A1b類。外面に縐状文にもみえる刺突文、内面に羽状文が認められる。1103はIX期甕D類。口縁部が弱く屈折する。胴部は中程が強く膨らみ、やや下膨れ気味である。1104はV期壺A類胴部。貼付突帯の上下に刺突文と円形刺突文が認められる。1105はV期高坏B2a類。口縁部が短く直立する。端部がやや外上方へ拡張されて、強い凹面を形成する。1106は把手。V期にみられる盤状高坏J類の把手の可能性がある。

時期 V期～VI期の遺物が含まれるものの、出土遺物の時期とV期～VI期のSB263を切ることから、IX期と考えられる。

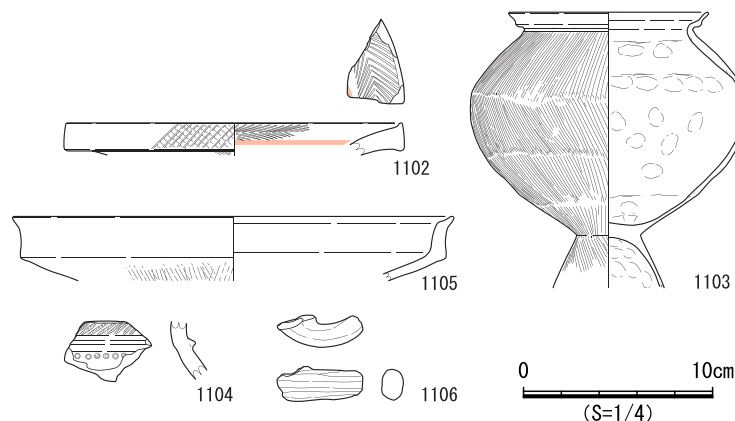


図 398 SB262 遺物実測図

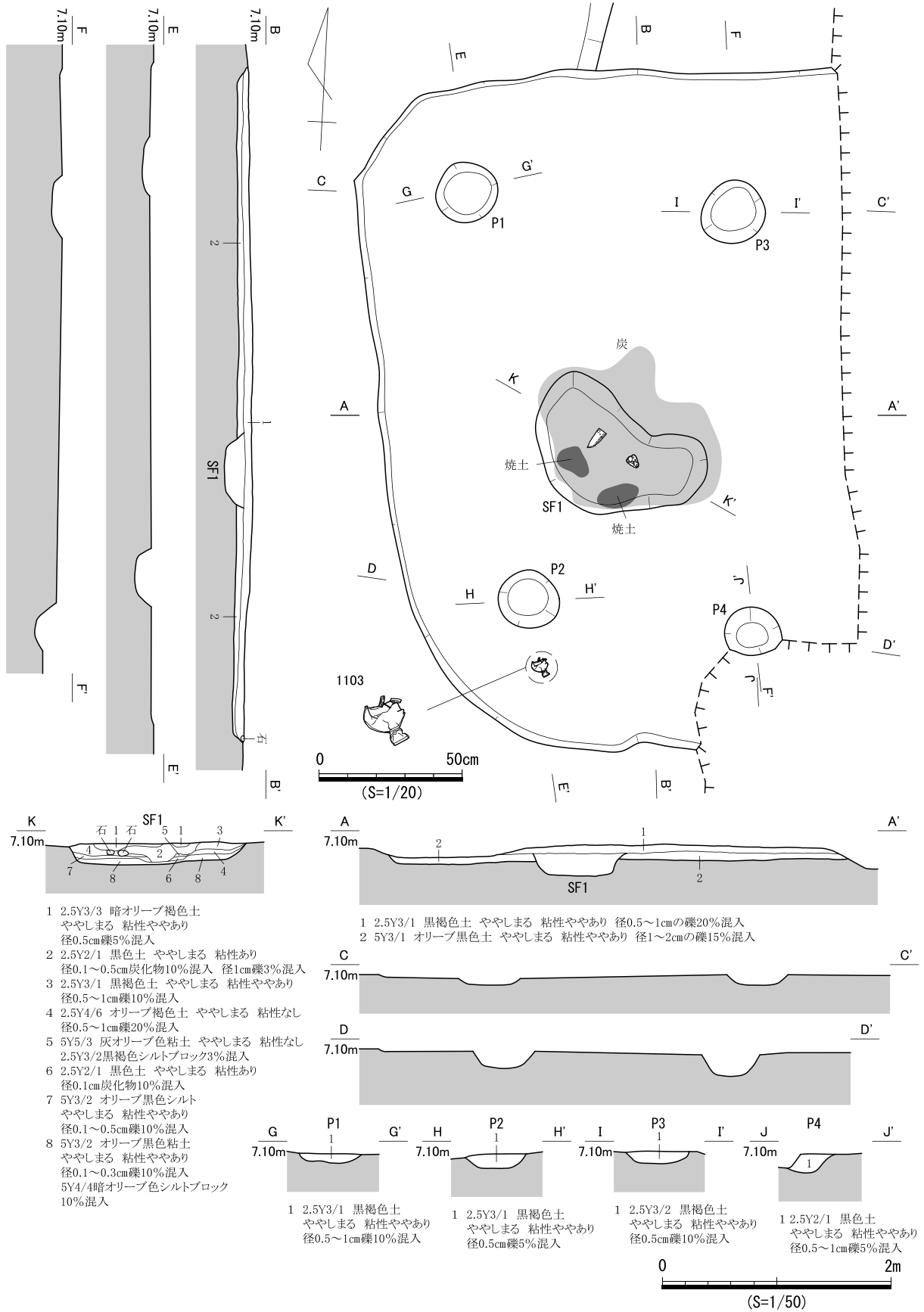


図 399 SB262 遺構図

SB263 (遺構：図400・401、遺物：図402)

検出状況 西部東側中央の堅穴住居跡密集域に位置する。砂礫面に黒色土が広がり、平面形は明瞭であった。東側を攪乱により失い、遺構の大半をSB262に切られ、壁溝や小穴の一部はSB262掘形除去後に検出した。

形状 南北長約5.8mの隅丸方形を呈する。壁面の傾斜は比較的急で、深さは約0.1mである。

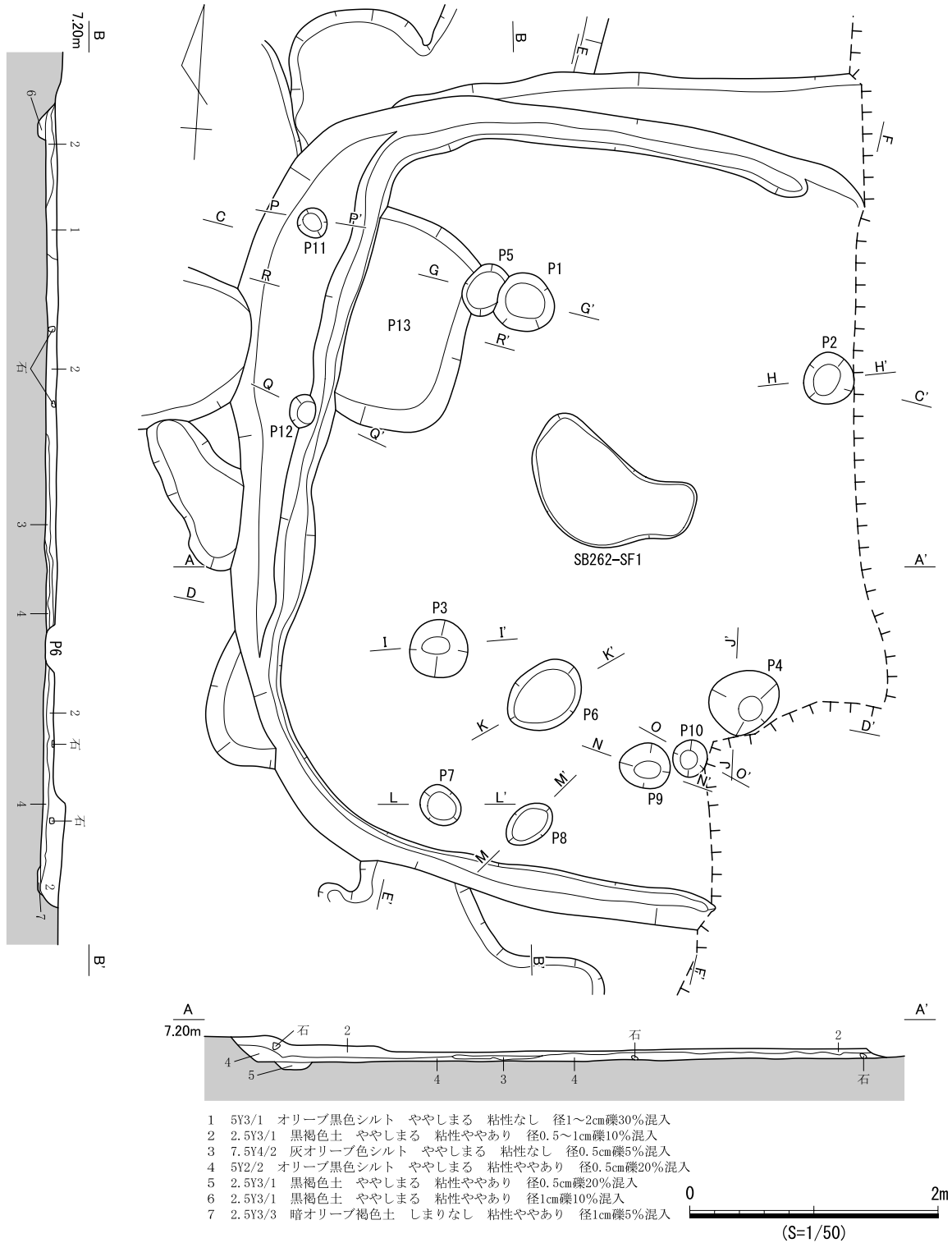


図400 SB263 遺構図(1)

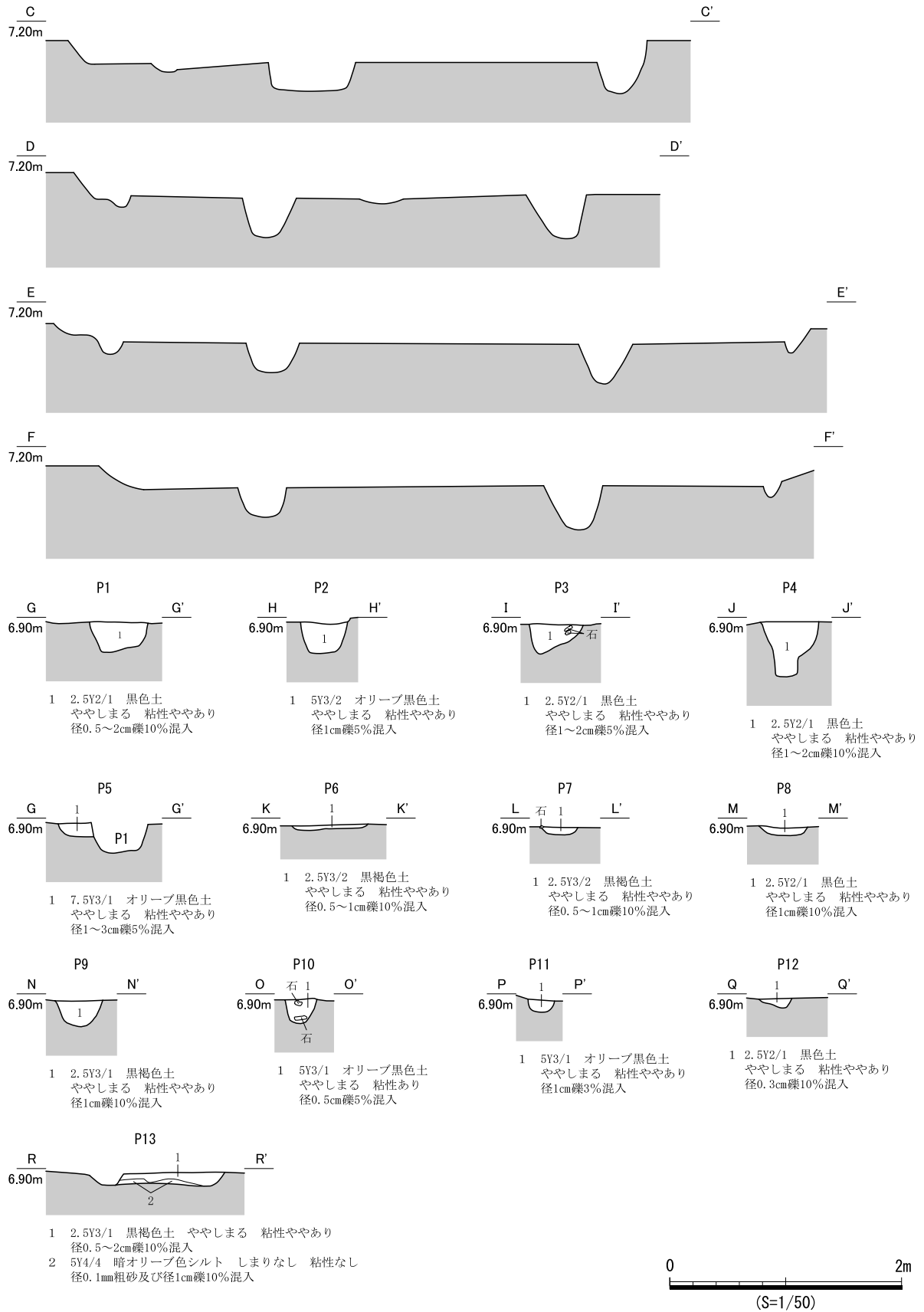


図 401 SB263 遺構図 (2)

埋土 4層に分層した。ほぼ水平堆積であるが礫の混入が多く、人為堆積の可能性がある。

床面 ほぼ平坦であり、貼床は確認できず、床面にて13基の小穴を検出した。小穴の埋土はP13を除いていずれも単層であり、P4は掘形底面が円形に窪む。平面的な位置関係からP1～P4の4基が柱穴と考えられ、他の小穴は住居南側に集中するがその性格は不明である。なお、P13は長さ1.74mの方形土坑で、底面は平坦であり、V～VI期の土器が出土した。壁溝はほぼ確認した範囲のうち北東隅を除いて全周している。

遺物出土状況 埋土中から土器188点、小穴から土器20点が出土した。

出土遺物 1107はⅦ期甕B4類。口縁部が短く外反し、端部を丸くおさめる。1108はⅤ期～Ⅵ期の壺底部。1109はⅤ期の高坏I脚部。

時期 埋土中からⅦ期の土器片が出土したが、これはⅨ期以降のSB262造成時等に混入した可能性がある。ここではP13出土遺物の時期を重視し、Ⅴ期～Ⅵ期と考える。

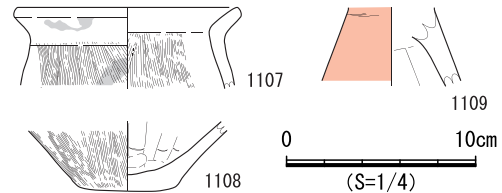


図 402 SB263 遺物実測図

SB264 (遺構：図 404、遺物：図 403)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、北側は攪乱により失われ、東側は調査区域外にある。西側でSB266を、南側でSB265をそれぞれ切る。検出面において炭化材及び直径約1～3cmの炭化粒が住居北西側で出土した。

形状 全体の形状は不明であるが、確認した範囲から南北長約4.3mの隅丸方形を呈すると考えられる。深さは0.1m未満と浅く、壁面傾斜は緩やかである。

埋土 単層であり、ブロック土の混入が目立つ。埋土中の炭化物の混入が顕著で、検出面でも炭化材と炭化粒が出土していることから、焼失家屋の可能性もある。

床面 ほぼ平坦であり、貼床は確認できず、床面にて7基の小穴と壁溝を検出した。そのうち、P2とP5は堆積状況や掘形の形状から柱穴の可能性があるものの、平面的な位置関係からP1とP2を柱穴と考えた。なお、壁溝は隅部で痕跡的に確認できた。

遺物出土状況 埋土中から土器391点、小穴から土器128点、壁溝から土器5点が出土した。土器の多くはⅥ期からⅦ期のものである。なお、炭化材のC14年代測定を実施した(第6章第2節参照)。

出土遺物 1110はⅥ期～Ⅶ期甕A・B類脚部。脚部が短くハの字に開く。1111はⅦ期高坏C類脚部。

時期 炭化物のC14年代測定の結果は弥生時代後期初頭(Ⅴ期)であったが、出土遺物の時期やⅦ期のSB265を切ることから、Ⅶ期と考えられる。

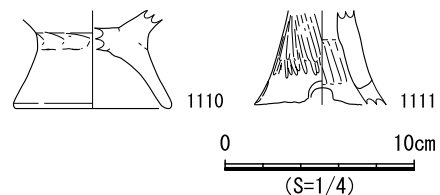


図 403 SB264 遺物実測図

SB265 (遺構：図 405、遺物：図 406)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、北側は攪乱により失われ、東側は調査区域外にある。北側をSB264に、西側をSK04178に切られ、西側でSB266とSB268を切る。

形状 大半が調査区域外に位置するため全形は不明であるが、西辺は直線的にのび、南西隅はほぼ直

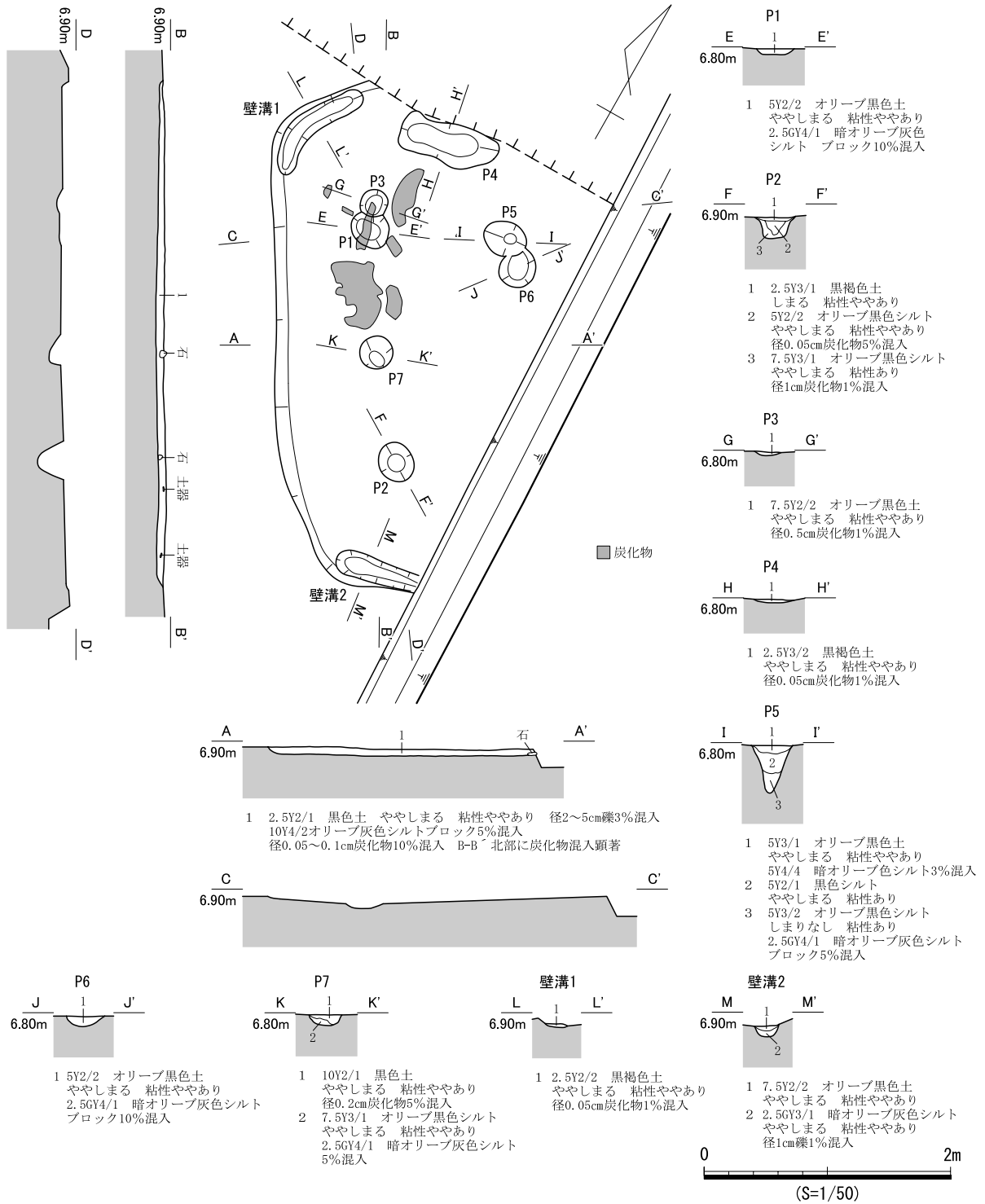


図 404 SB264 遺構図

角に曲がることから、隅丸方形を呈すると考えられる。掘形底面までの深さは 0.15 m で、壁面傾斜は比較的急である。

埋土 3層に分層した。そのうち、1層が埋土、2層が貼床、3層が掘形埋土である。1層中にはブロック土が混入していることから、人為堆積の可能性が高い。

床面 ほぼ平坦であり、貼床（整地土）がある。床面にて硬化面は確認できなかったが、2基の小穴を検出した。それらの埋土や掘形形状、及び平面的な位置関係から P1 と P2 の 2 基は柱穴と考えられ

る。なお、壁溝は確認できた範囲を全周し、深さ0.14mで壁面の傾斜は急である。

遺物出土状況 埋土中から土器803点、金属製品1点、小穴から土器63点、壁溝から土器65点が出土した。土器の大半はⅦ期のものであるが、一部にⅤ期のものが含まれる。P1からⅥ期の甕(1114)とⅦ期の土器、壁溝からⅥ期の甕(1115)、Ⅶ期の高坏(1117)、Ⅴ～Ⅵ期の壺(1112)が出土し、掘形埋土から銅鎌1点(1118)が出土した。

出土遺物 1112はⅤ期壺K類。貼付突帯間に同心円状のスタンプ文を施文し、その間をヘラ描きで

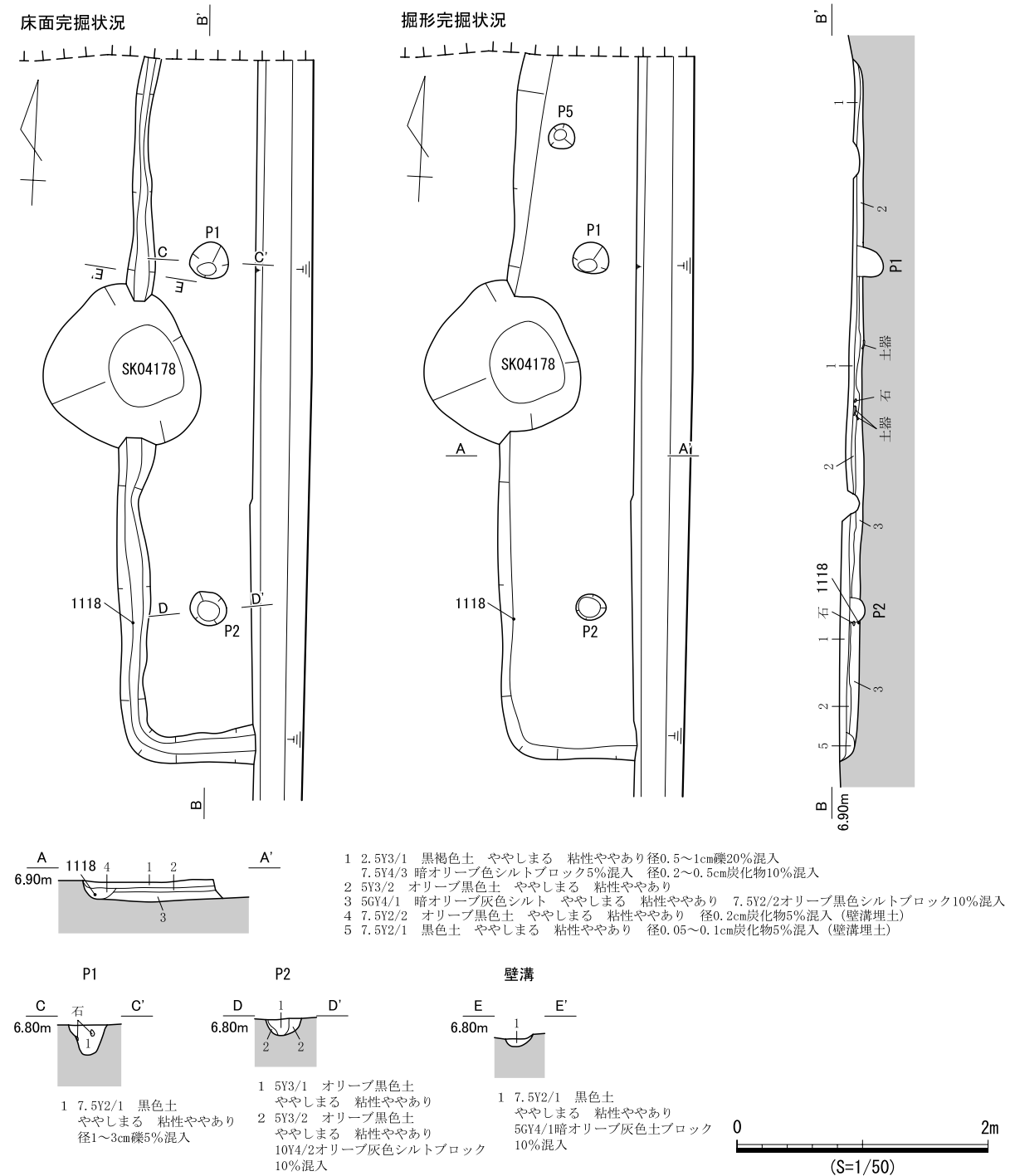


図 405 SB265 遺構図

連結して双頭渦巻文状としている。1113はⅦ期高坏G3c類。多条沈線と山形文を交互に施文する。1114、1115はⅥ期甕D1類。口縁部が短く直立して屈曲する。端部は外方に引き出され、凹面を形成する。1116はⅦ期甕D2b類。1117はⅦ期高坏C4d類。幅広の多条沈線間に2帯の山形文を施文する。1118は銅鏃。鏃身は平面五角形状、断面菱形で、基部は鋳型段階の腸袂が明瞭に残る。

時期 全体的にⅦ期の土器片が多く、P1からもⅦ期の土器が出土している。遺構の重複関係とも矛盾しないため、Ⅶ期と考えられる。

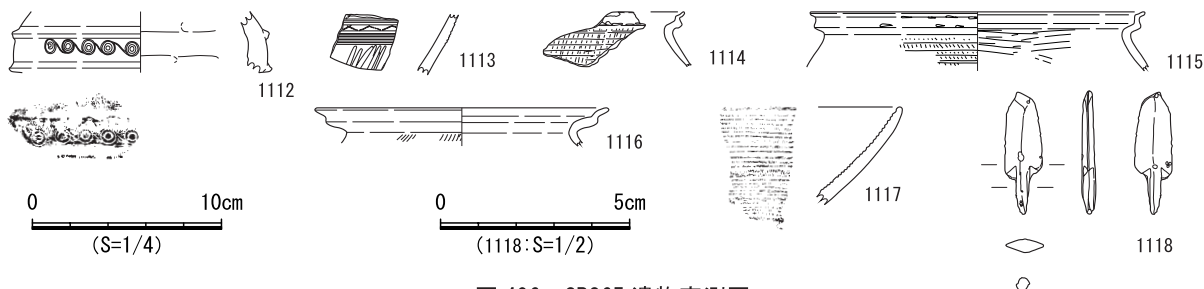


図 406 SB265 遺物実測図

SB266 (遺構：図 408・409、遺物：図 407)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。竪穴住居跡の重複が著しく、西側をSB267に、東側をSB264とSB265に切られ、南側でSB268を切る。平面形は不明瞭であり、その大半を他の竪穴住居跡の床面で検出した。

形状 南北長約4.1mで、東西に長い隅丸方形を呈する。しかし、柱穴の位置が西側に偏っていることから、東側は別遺構と重複している可能性もある。深さは0.1m未満と浅く、壁面傾斜は緩やかである。

埋土 単層である。ブロック土の混入が目立ち、遺構の重複が著しいことから、人為堆積の可能性が高い。

床面 ほぼ平坦であり、貼床は確認できず、床面にて15基の小穴と溝を検出した。住居西側の床面直上にて炭化材が散在して出土し、なかには材の方向が判別できるものもあった。炭化材の遺存状況が比較的良好で、広範囲で確認できたことから、焼失住居の可能性はある。小穴のうちP2、P4、P14などでは柱痕跡が確認でき、平面的な位置関係からP1～P4を柱穴と考えた。また、P11やP13などは堆積状況から再掘削された可能性がある。なお、SD1の性格については不明である。

遺物出土状況 埋土中から土器116点、小穴から土器7点が出土した。土器はⅣ期のもものわずかにあるが、大半はⅥ期～Ⅶ期に属する。

出土遺物 1119はⅣ期壺A類。口縁部外面に2条の凹線文があり、その間に刺突文が認められる。口縁端部は直立し、端部上面はほぼ水平に面取りされている。

時期 出土遺物の時期と、Ⅵ～Ⅷ期のSB264、SB265、SB267に切られ、Ⅴ～Ⅵ期のSB268を切ることから、Ⅵ～Ⅶ期と考えられる。

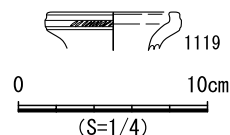


図 407 SB266 遺物実測図

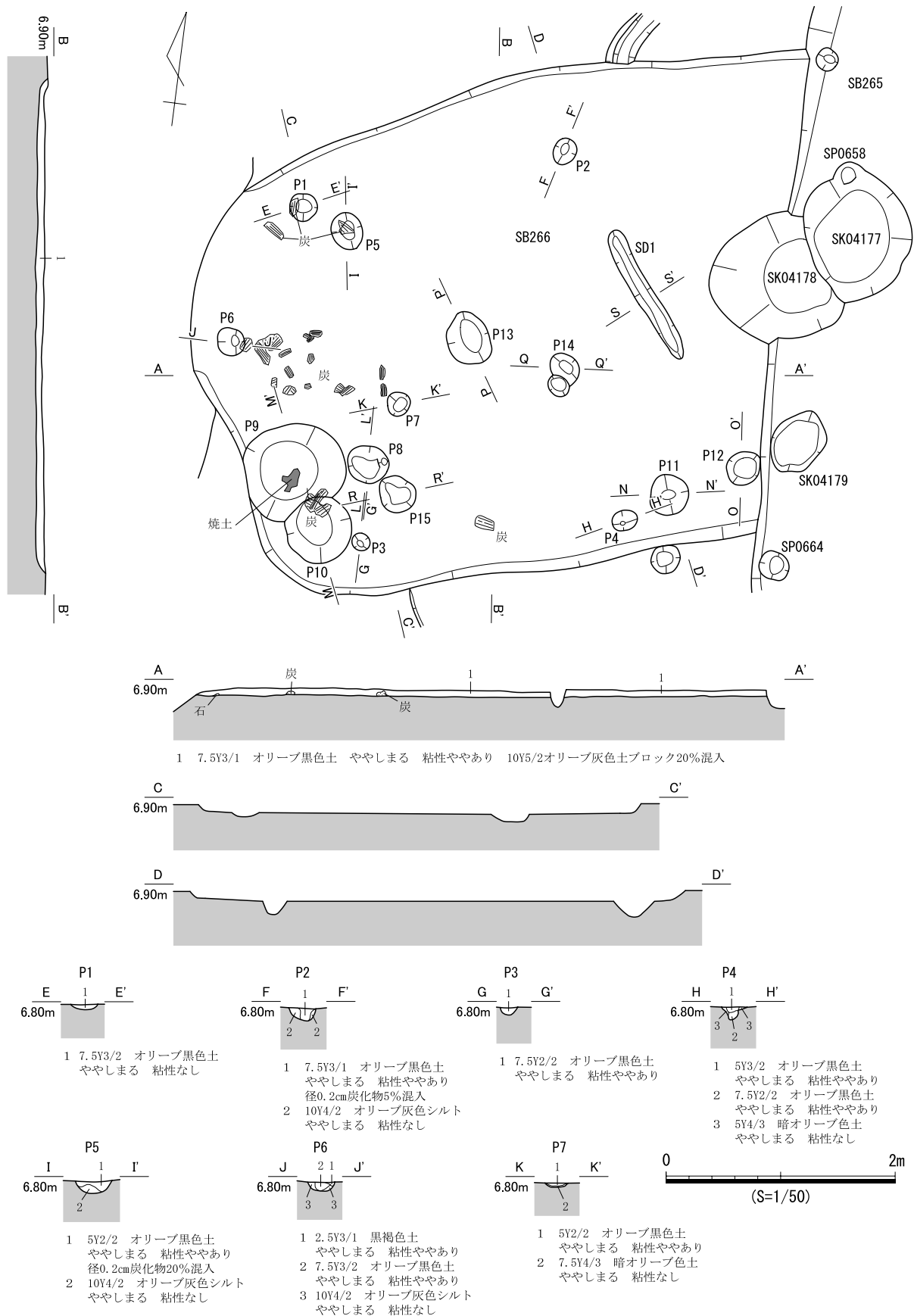


図 408 SB266 遺構図 (1)

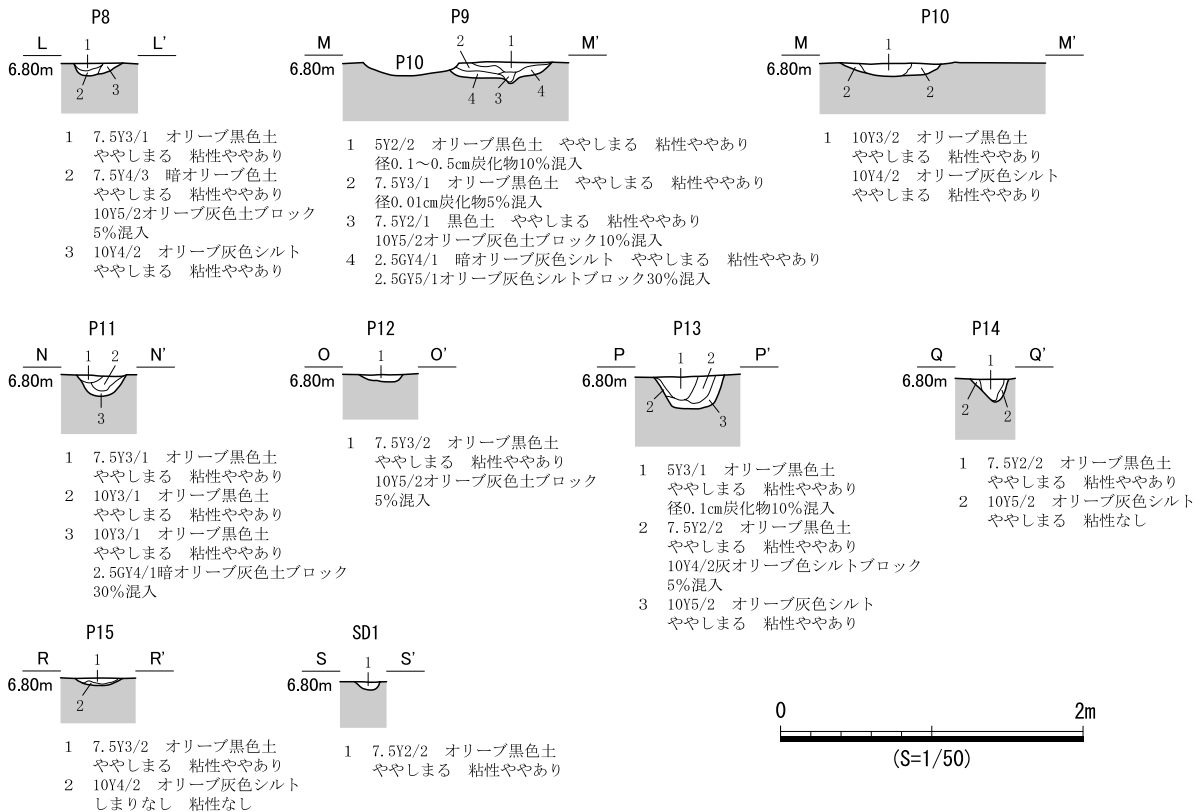


図 409 SB266 遺構図 (2)

SB267 (遺構：図 411・412、遺物：図 410)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、西側が攪乱により本来の形状をとどめていない。東側でSB266とSB268を切る。

形状 南北長約4.6mで、全体形は確認できた範囲から隅丸方形もしくは隅丸台形状を呈すると考えられる。深さは0.1m未満と浅く、壁面は急である。

埋土 2層に分層した。上下層ともに礫や炭化物の混入が目立つものの、その成因は不明である。

床面 ほぼ平坦であり、貼床は確認できず、床面にて8基の小穴を検出した。小穴の埋土は単層が多いものの、P4では土層で柱痕跡を確認し、P8の掘形は底面が円形に窪む形状である。平面的な位置関係からP1～P3、P8が柱穴と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器146点、石器類1点、小穴から土器27点が出土した。土器は縄文土器やVI期～VIII期のものが含まれている。

出土遺物 1120はVII期～VIII期の高坏J類。脚部内面と坏部内外面に煤が付着する。坏部は碗状を呈し、粘土積痕が残る。1121は縄文晩期後半の深鉢。

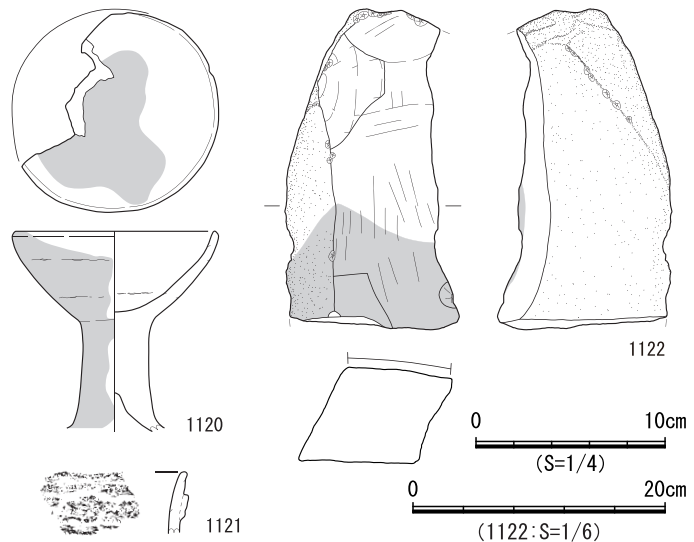


図 410 SB267 遺物実測図

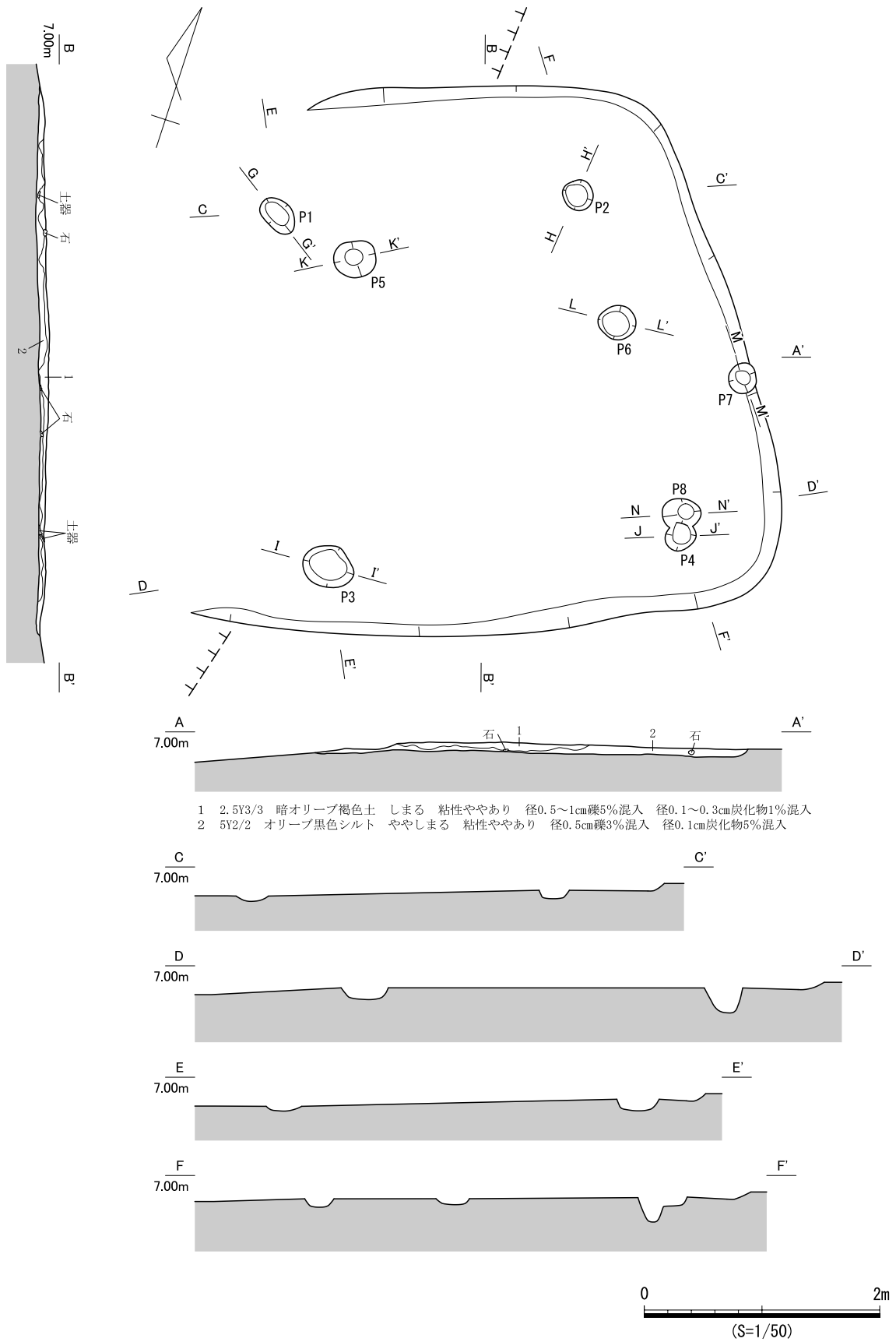


図 411 SB267 遺構図 (1)

住居の下に縄文時代の遺構と考えられるSD0967がある。また、西側のSD0966も縄文時代の遺物が目立つ。これらの遺構から遺物が混入したと考えられる。1122は大型の砥石で、砥面下端と側面に煤が付着している。

時期 出土遺物の時期とVI期～VII期のSB268を切ることから、VII期～VIII期以降と考えられる。

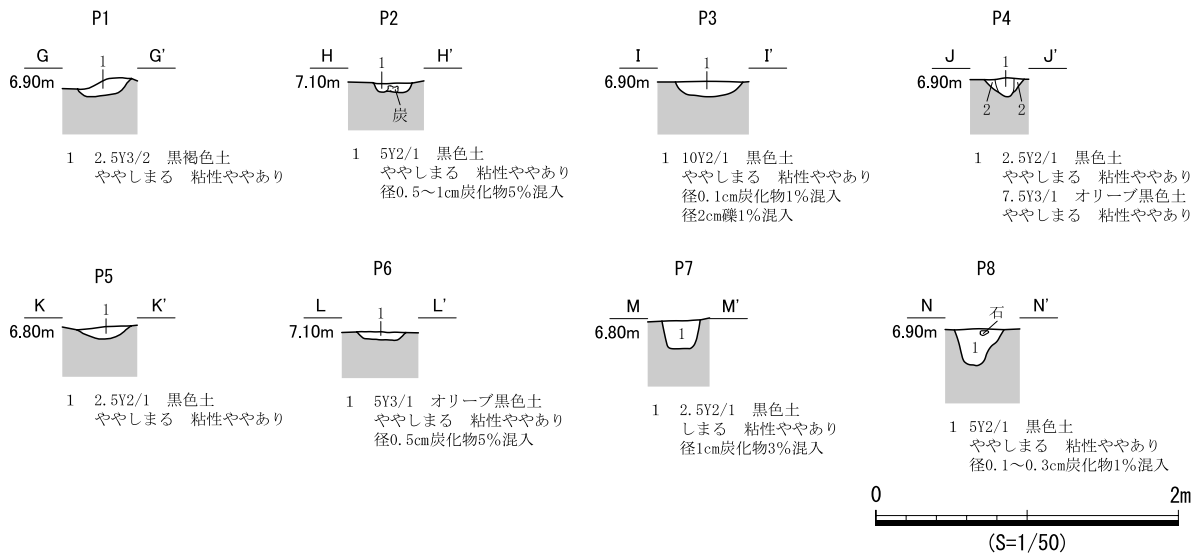


図 412 SB267 遺構図 (2)

SB268 (遺構：図 414、遺物：図 413)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。住居の大半をSB265～SB267に切られ、周辺の竪穴住居跡間の重複関係では最も先行する。

形状 遺構の重複が著しく、全体の形状は不明である。南辺は直線的で隅部は丸みを帯び、深さは0.1m未満と浅い。

埋土 単層であり、本遺構の時期が重複するSB266、SB267の時期と近似することから、人為堆積の可能性はある。

床面 ほぼ平坦であり、貼床は確認できず、床面にて8基の小穴を検出した。そのうち、P1、P2、P6～P8で柱痕跡に類似する堆積を確認した。また、P5は4層に分層でき、ブロック土の混入が目立つ。住居跡の全形が不明なため柱穴の想定は困難だが、重複する竪穴住居跡における柱穴以外の小穴の平面的な位置関係で検討すると、SB266-P12、SB267-P4、SB267-P6が位置的には適当と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器12点、小穴から土器15点が出土し、そのうちP1埋土上層からV～VI期の壺(1123)が出土した。また、P5からは縄文土器が2点出土した。

出土遺物 1123はV～VI期の壺A類胴部と考えられる。

時期 P1出土遺物の時期とVI期～VII期のSB265～SB267に切られることから、V～VI期と考えられる。

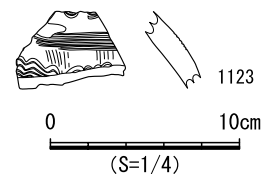


図 413 SB268 遺物実測図

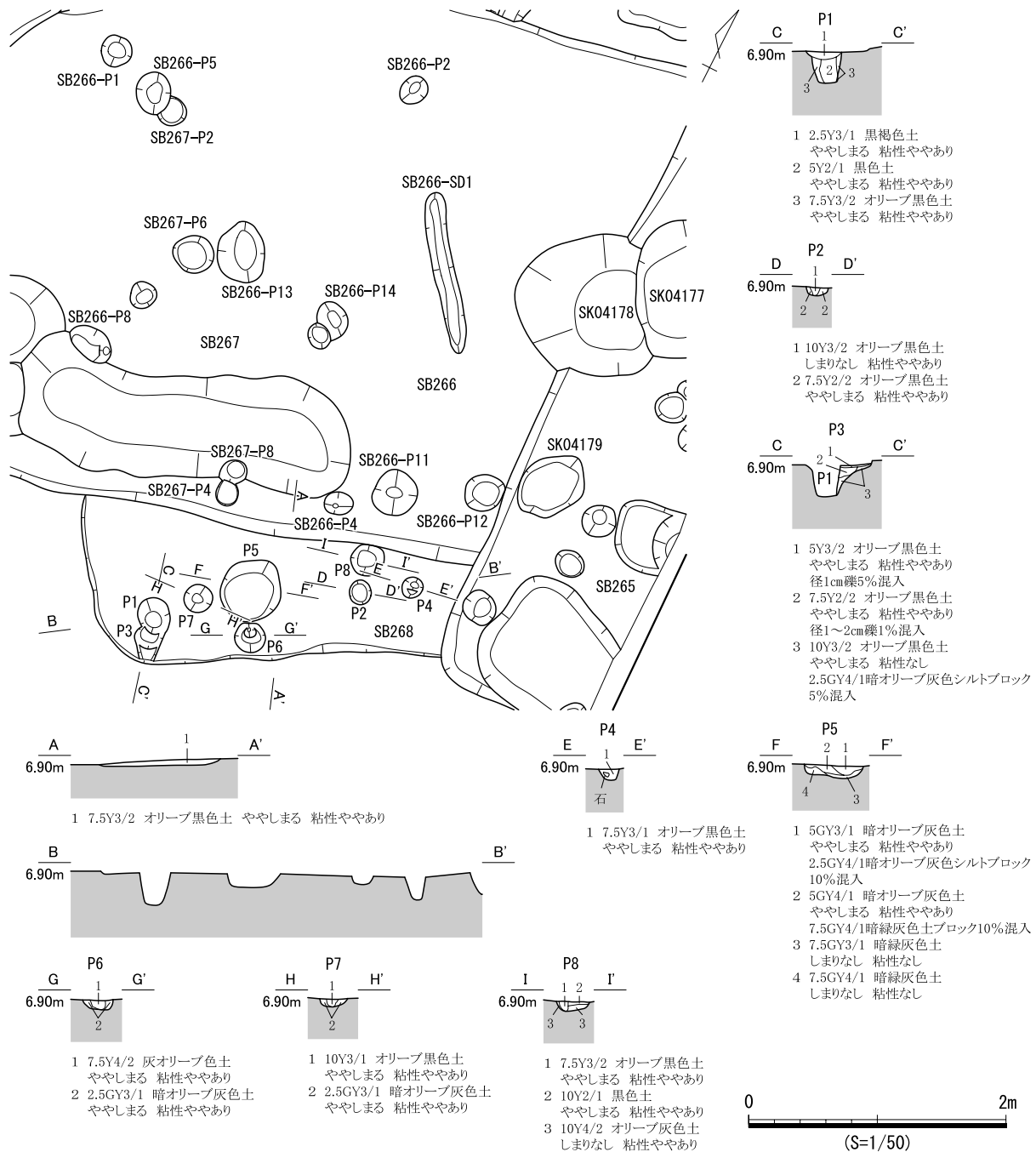


図 414 SB268 遺構図

SB269 (遺構：図 415)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。南側は調査区域外にのび、南側でSH024に切られ、SB270を切る。

形状 約半分が調査区域外にあるが、北東-南西長約4.8mの隅丸方形を呈すると考えられる。深さは0.1m未満と浅く、壁面傾斜はやや緩やかである。

埋土 単層でありブロック土が混入することから、人為堆積と考えられる。

床面 ほぼ平坦であり、貼床は確認できず、床面にて6基の小穴を検出した。小穴のうちP1~P3で柱痕跡を確認し、平面的な位置関係からP1とP2を柱穴と考えた。なお、P6は不整長方形を呈する

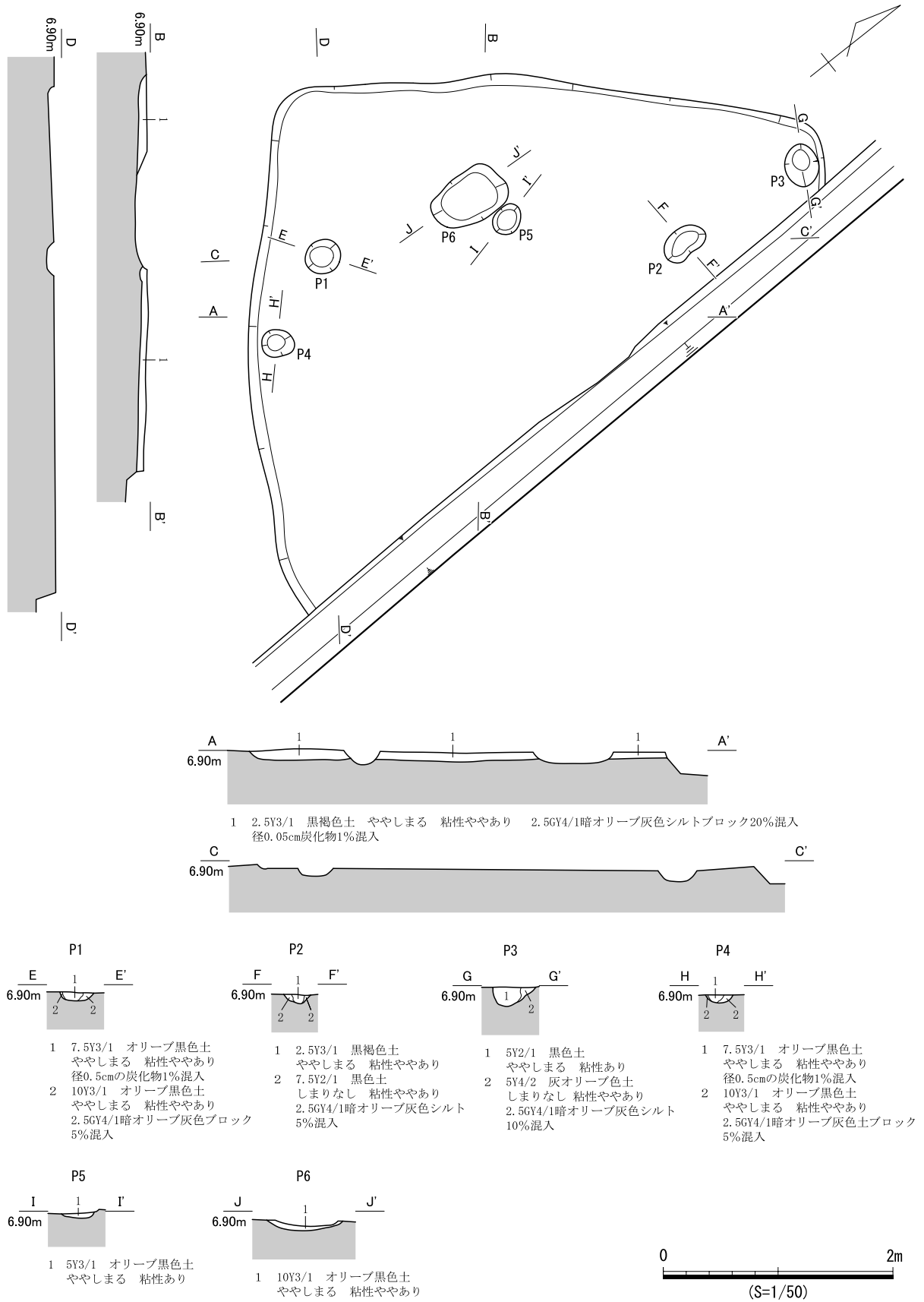


図 415 SB269 遺構図

浅い土坑であり、その性格は不明である。

遺物出土状況 埋土中から土器61点、小穴から土器19点が出土した。これらは縄文土器やV～VII期の土器片であるが、いずれも小片であり図示しなかった。

時期 出土遺物の時期と、VI期～VII期以降のSB270を切り、VII期以降のSH024に切られることから、VI期～VII期以降と考えられる。

SB270 (遺構：図417・418、遺物：図416)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。北側でSB269に、南側でSB271にそれぞれ切られる。検出時の埋土はオリーブ灰色ブロック土を含む土であったが、遺構の重複が著しく、その平面形は不明瞭であった。

形状 確認できた範囲では、南北長約4.0m、東西長約5.2mの隅丸方形を呈し、東辺は南側が大きく外側に膨らむ。深さは0.1m未満と浅く、壁面傾斜は緩やかである。

埋土 2層に分層した。検出時からブロック土が目立ち、上下層ともにブロック土が混入することから、人為堆積と考えられる。

床面 ほぼ平坦であり、貼床は確認できず、床面にて11基の小穴を検出した。小穴のうちP7とP8には柱痕跡が認められたが、平面的な位置関係からP1～P3を柱穴と考えた。なお、SB271床面上にて、柱穴の南西隅に該当する位置に遺構は検出されなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器69点、小穴から土器13点が出土した。これらには縄文時代晩期から古墳時代前期までのものが含まれているが、VI期からVII期の土器が目立つ。

出土遺物 1124はV期壺A類頸部。頸部に突帯が貼付され、下半に円形刺突文を加える。円形刺突文は内面では縦方向に施文され、内外面ともに赤彩が施される。赤彩は突帯上部にも認められる。1125、1126は口縁部がやや外反するI期深鉢。端部が平坦である。1127はI期壺胴部。木葉文が認められる。

時期 出土遺物の時期と、VII期のSB271に切られることから、VI期～VII期と考えられる。

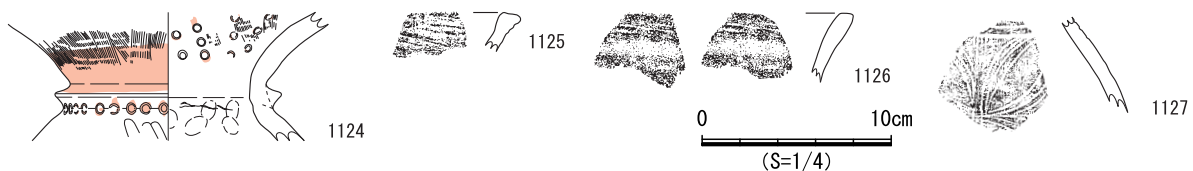


図416 SB270 遺物実測図

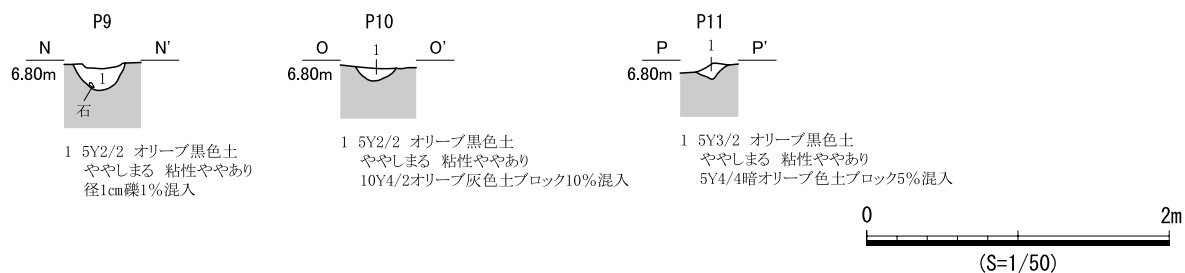


図417 SB270 遺構図(1)

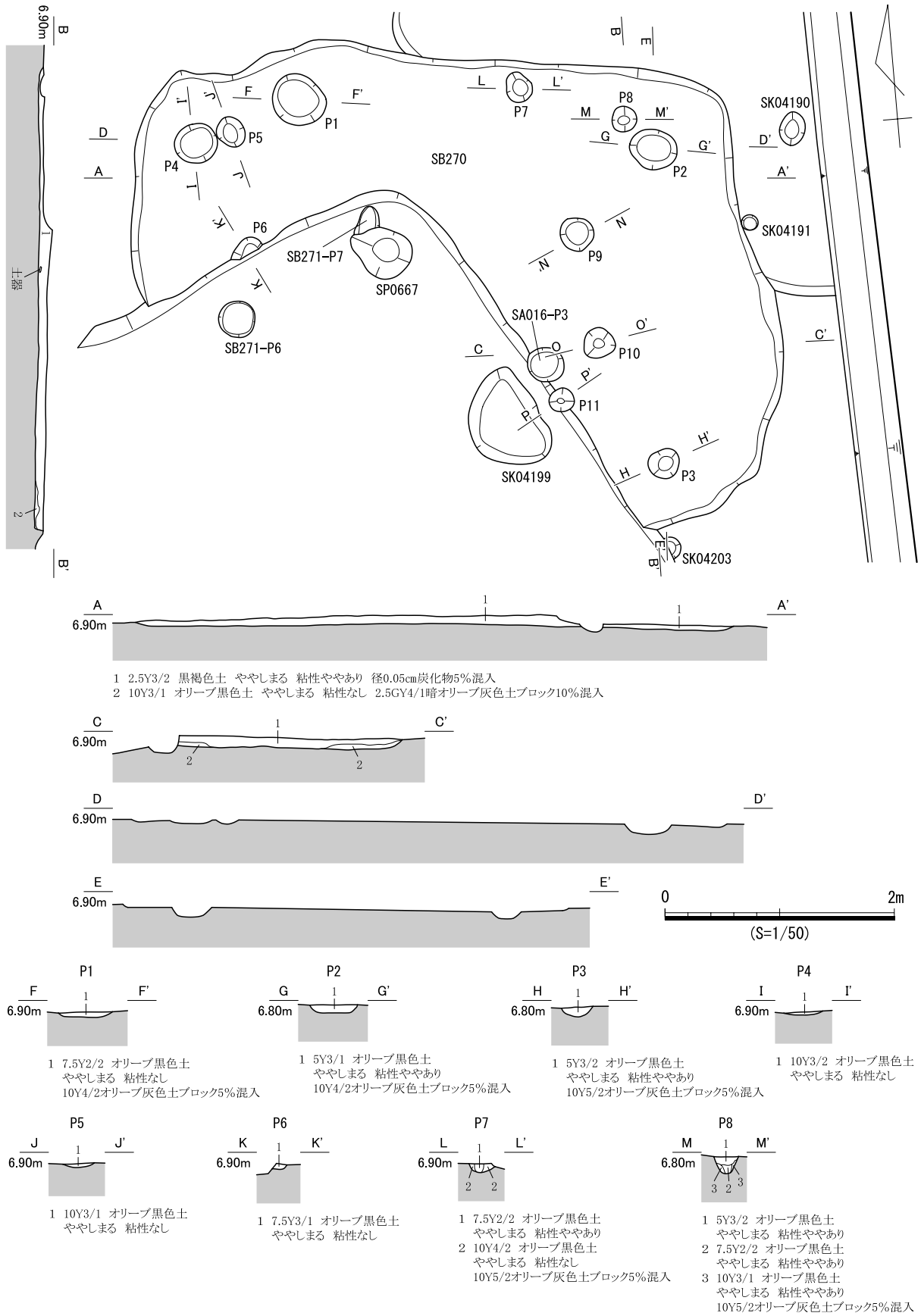


図 418 SB270 遺構図 (2)

SB271 (遺構：図419・420、遺物：図421)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。西側は攪乱により失われ、北側でSB270を切り、南側でSB272に切られる。北側の平面形は明瞭であったが、南側は不明瞭であった。

形状 隅丸方形を呈し、南北長は壁溝1の外縁で計測すると約4.5m、壁溝1と壁溝2の外縁で計測すると約5.0mである。深さは0.1m未満と浅く、壁面の傾斜は比較的急である。

埋土 2層の埋土が認められ、ほぼ水平堆積である。礫や炭化物、ブロック土の混入が顕著で、遺構の重複もあることから、人為堆積と考えられる。

床面 ほぼ平坦であり、貼床は確認できず、床面にて18基の小穴と壁溝2条を検出した。壁溝1は北辺中央から南辺まで途切れることなく続いており、北辺中央の南縁ラインがやや乱れている。壁溝2は南東隅部で確認できたのみであり、壁溝1との重複関係はない。住居全体の土層B-B'とみると、壁溝1上部に土層の断絶が認められないことから、住居を拡張した際に、南側の壁溝を壁溝1から壁溝2へ作り替えた可能性が高い。小穴の埋土はいずれも単層で、底面が丸みを帯び、浅いものが多い。

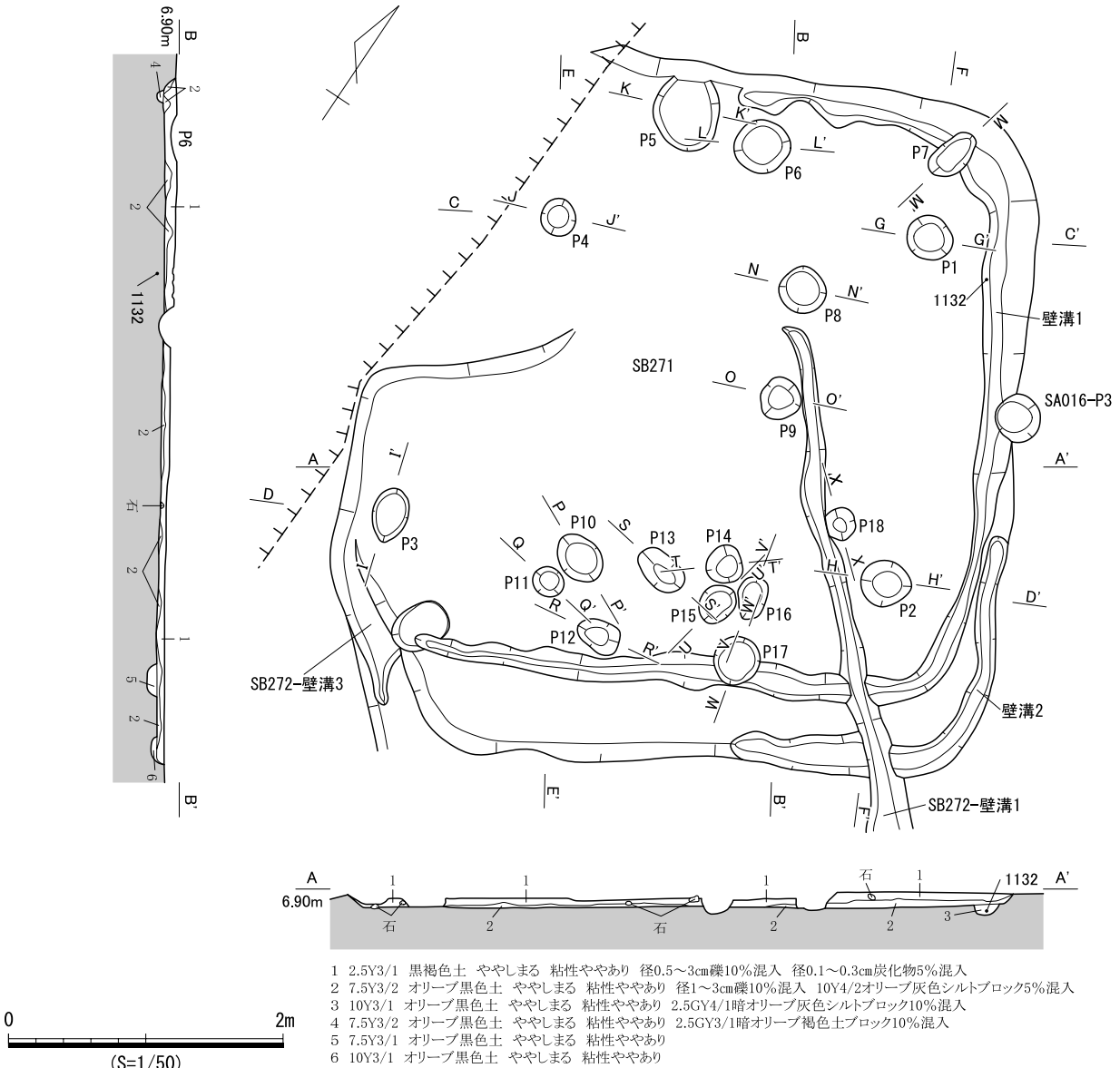


図419 SB271 遺構図(1)

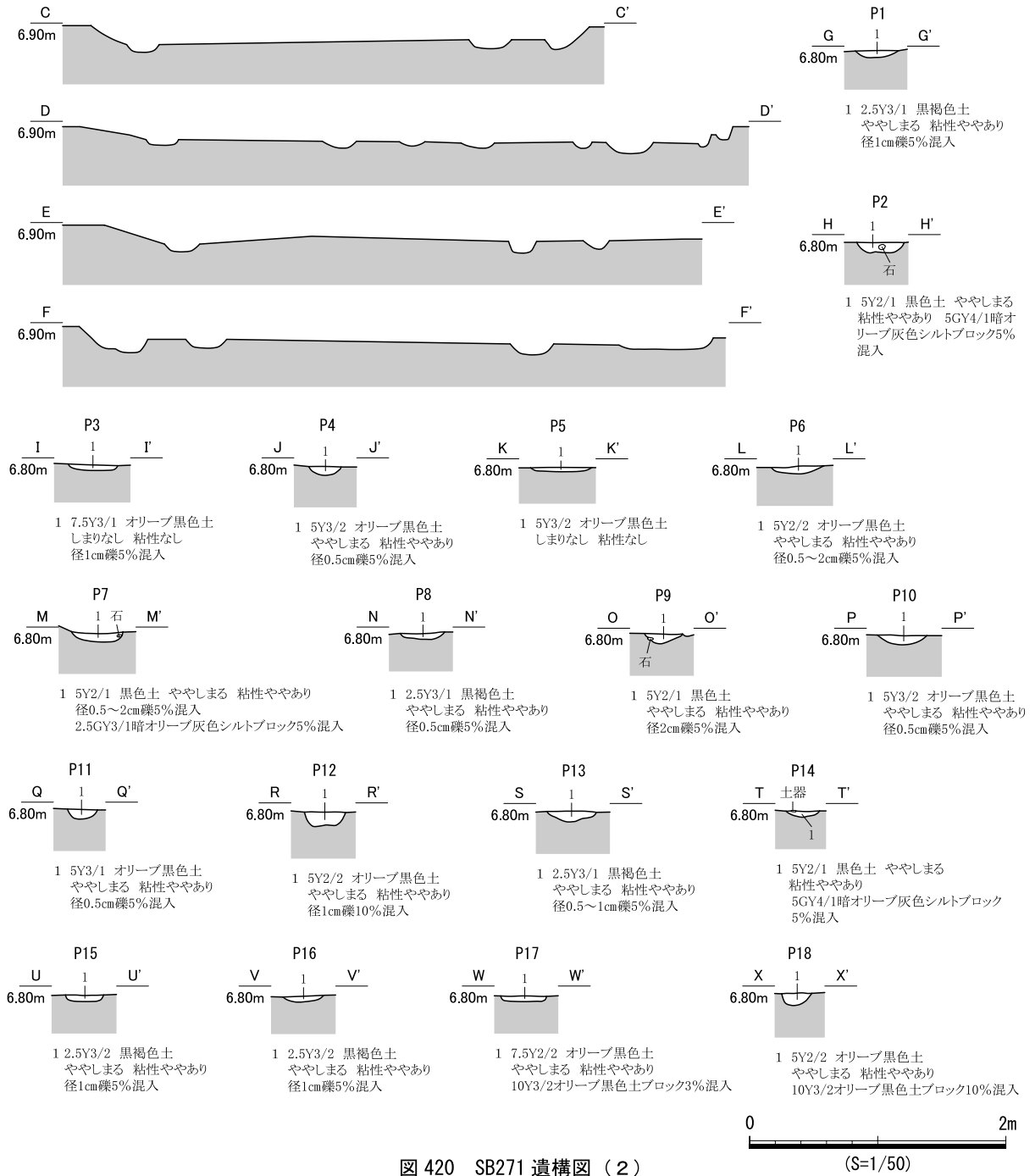


図 420 SB271 遺構図 (2)

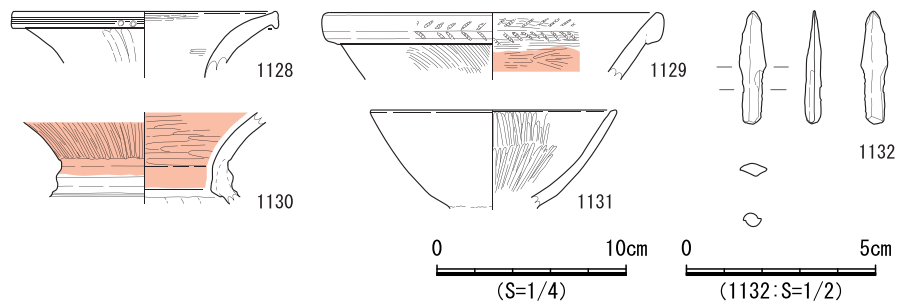


図 421 SB271 遺物実測図

そのため柱穴の想定は難しいが、平面的な位置関係からP1～P3の3基は当初の柱穴の可能性はある。しかし、作り替えに伴う柱穴は推定できなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器1,701点、金属製品1点、小穴から土器95点、壁溝から土器56点が出土した。出土した土器はⅦ期のもが多い。なお、壁溝1北東部から銅鏃1点が出土した。

出土遺物 1128はⅤ期壺A類。口縁部が外反して、端部下端をやや拡張する。1129はⅦ期壺A5類。口縁端部に羽状文を施文する。1130はⅤ期壺A類頸部。頸部に貼付突帯があり、内外面に赤彩が認められる。1131はⅥ期高杯G類。1132は銅鏃。鏃身は平面三角形状、断面菱形で、基部は腸袂が不明瞭である。

時期 出土遺物の時期と、Ⅵ期～Ⅶ期のSB270を切り、Ⅶ期のSB272に切られることから、Ⅶ期と考えられる。

SB272 (遺構：図422・423、遺物：図424)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。北側でSB271、南側でSB274を切り、南東側でSB273に、北側でSK04197に切られる。平面形は比較的明瞭であったが、SK04197との重複関係の把握が困難であった。

形状 北西－南東長約4.8m、北東－南西長約3.6mの隅丸長方形であるが、西隅のみやや内側に入り込む。深さは0.1m未満と浅く、壁面の傾斜は比較的急である。

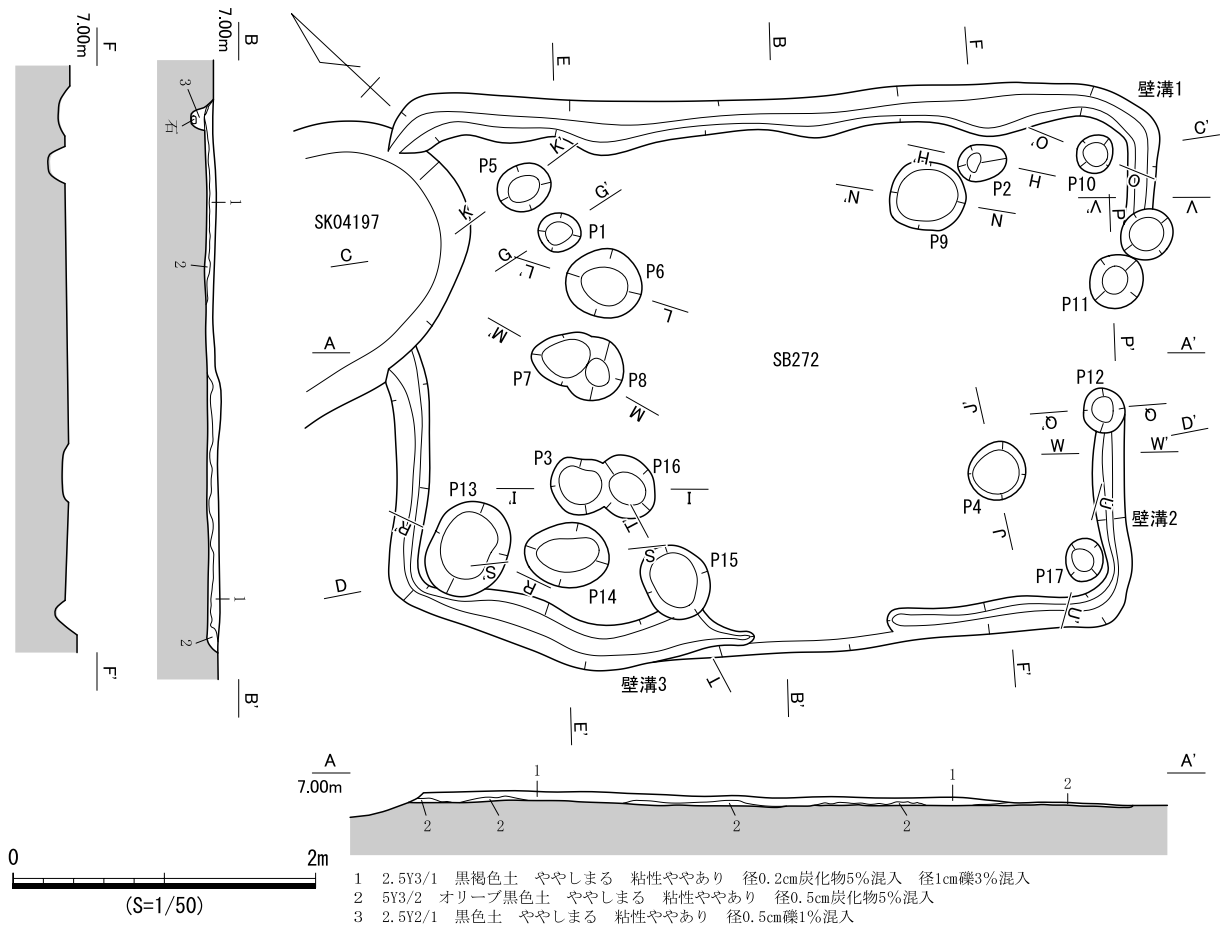


図422 SB272 遺構図(1)

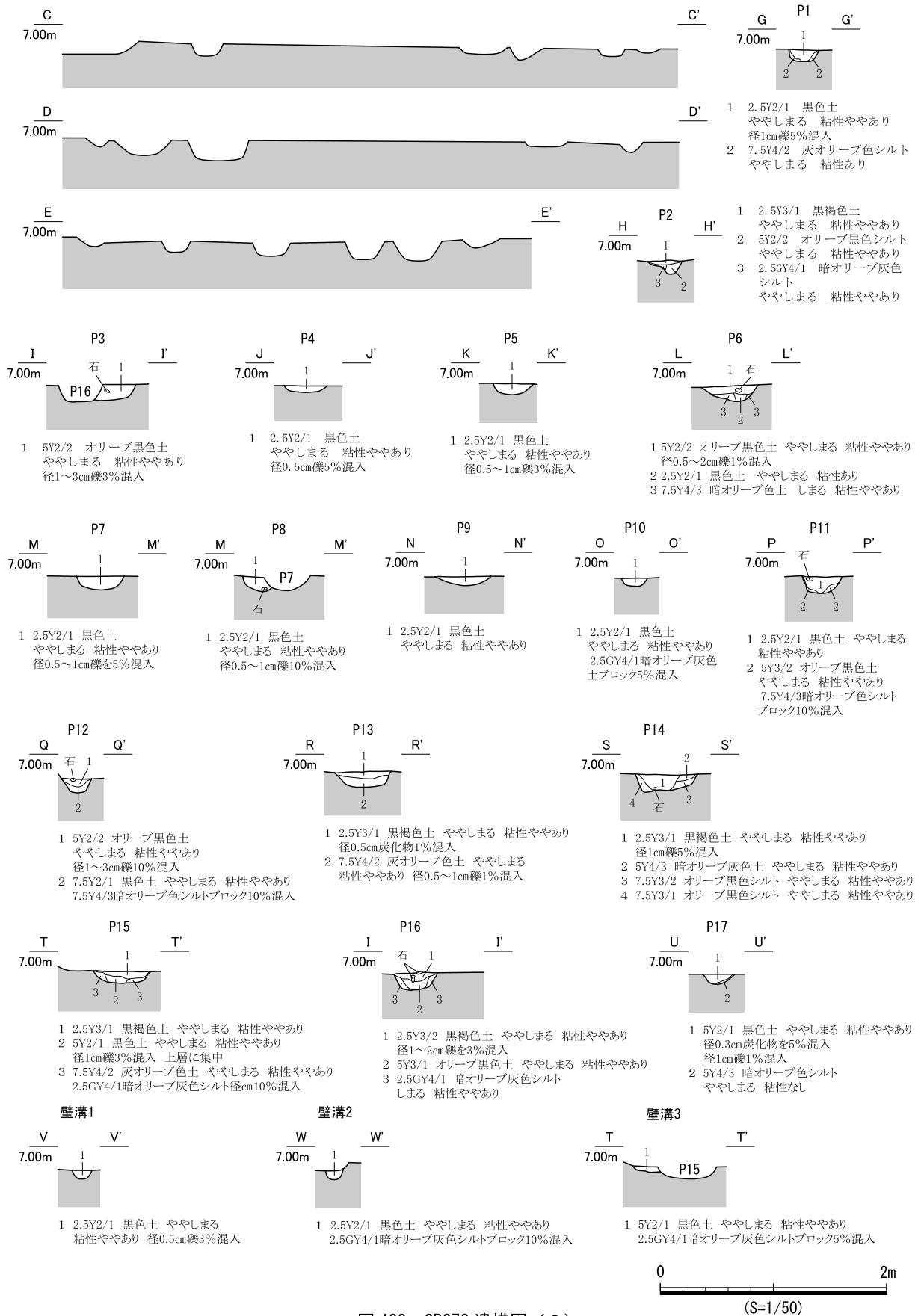


図 423 SB272 遺構図 (2)

埋土 2層に分層した。埋土中の炭化物の混入が顕著である。上下層の層界に凹凸があることや、遺構の重複が著しいことなどから、人為堆積の可能性がある。

床面 ほぼ平坦であり、貼床は確認できず、床面にて17基の小穴と壁溝3条を検出した。小穴の多くは浅いが、P1、P2、P6、P14、P15、P16で柱痕跡を確認でき、平面的な位置関係からP1～P4の4基を柱穴と考えた。なお、住居中央付近の小穴の分布が希薄である。

遺物出土状況 埋土中から土器768点、石器類5点、小穴から土器153点、石器類1点、壁溝から土器73点が出土した。土器の多くはⅦ期に属し、わずかにⅤ期～Ⅵ期とⅨ期の遺物が混入する。

出土遺物 1133はⅤ期～Ⅵ期壺A1b類。口縁端部に直線文と刺突文が認められる例外的な資料。内面には羽状文が施文される。頸部直下には直線文が認められる。1134はⅦ期壺A類胴部。直線文と山形文を交互に施文する。山形文は貝による施文で、その上に赤彩が塗布される。1135はⅨ期壺。口縁部が頸部で屈折して内傾する。胎土が精緻で、山陰系の壺である。1136はⅥ期～Ⅶ期壺底部。1137はⅦ期鉢G類。口縁部が短く立ち上がる。胴部の膨らみは弱く、粗いハケが認められる。1138はⅦ期高坏D2類。口縁部が直線的に開く。

時期 Ⅶ期の土器片を中心に出土しており、重複している竪穴住居跡や土坑との新旧関係も矛盾しないので、Ⅶ期と考えられる。

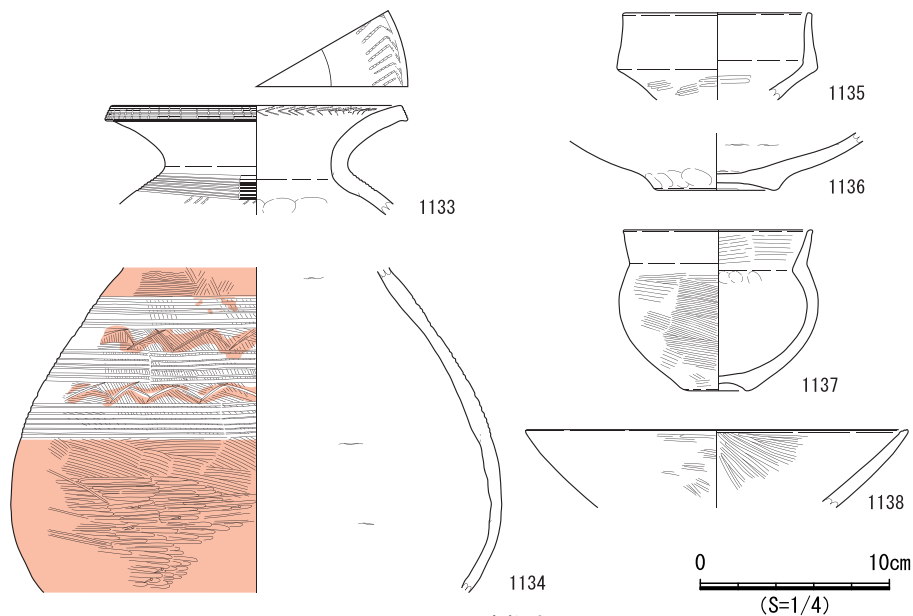


図 424 SB272 遺物実測図

SB273 (遺構：図 425、遺物：図 426)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、東側は調査区域外にのびる。SB272、SB274、SB275を切り、重複する竪穴住居跡の中では最も後出する。

形状 南北長約4.2mの隅丸方形を呈し、深さは0.1m未満と浅く、壁面の傾斜は急である。西辺はやや湾曲しており、北辺は凹凸がみられる。

埋土 単層であり、礫や炭化物が混入するが、その成因は不明である。

床面 ほぼ平坦であり、貼床は確認できず、床面にて6基の小穴を検出した。小穴の埋土はいずれも単層で、P3以外の底面は丸みを帯びている。平面的な位置関係からP1～P3の3基が柱穴と考えら

れる。

遺物出土状況 埋土中から土器493点、石器類3点、小穴から土器32点が出土した。土器の多くはVI期からVII期のものであり、P3からV期の高坏が出土した。なお、砥石などの石器類は埋土の上位で出土している。

出土遺物 1139はV期高坏B3類。口縁部が短く外反する。1140、1141は砥石である。1140は長辺26.5cmの大きな扁平な礫の表裏面を砥面として使用し、1141は垂円礫の三面を砥面にし、表面に煤が付着している。1142は叩石である。断面三角形を呈し、側縁の三辺に煤が付着し、下端に敲打痕が残る。

時期 P3からV期の高坏が出土したものの、埋土中の遺物の時期と、VII期のSB272を切ることから、VII期以降と考えられる。

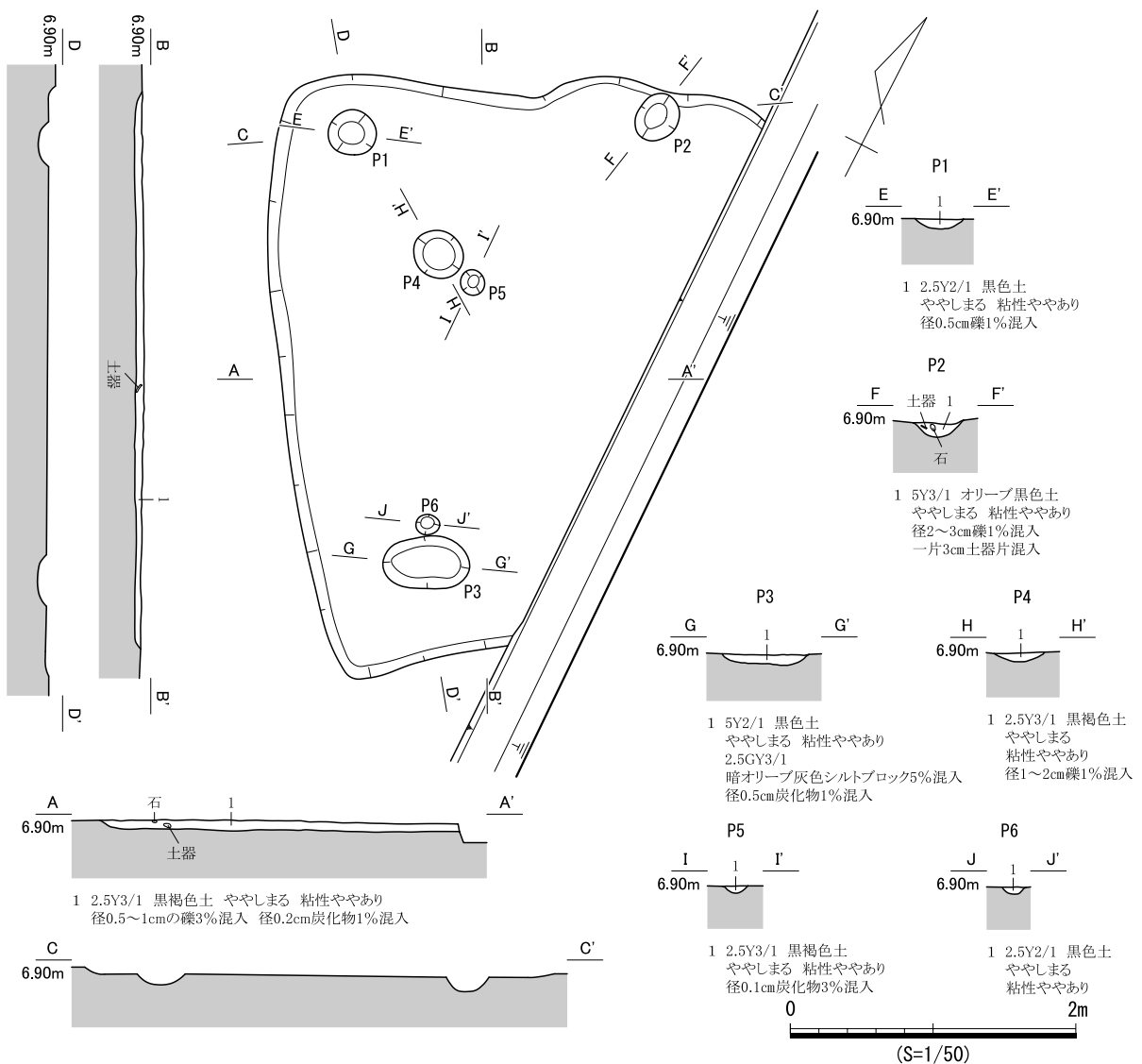


図 425 SB273 遺構図

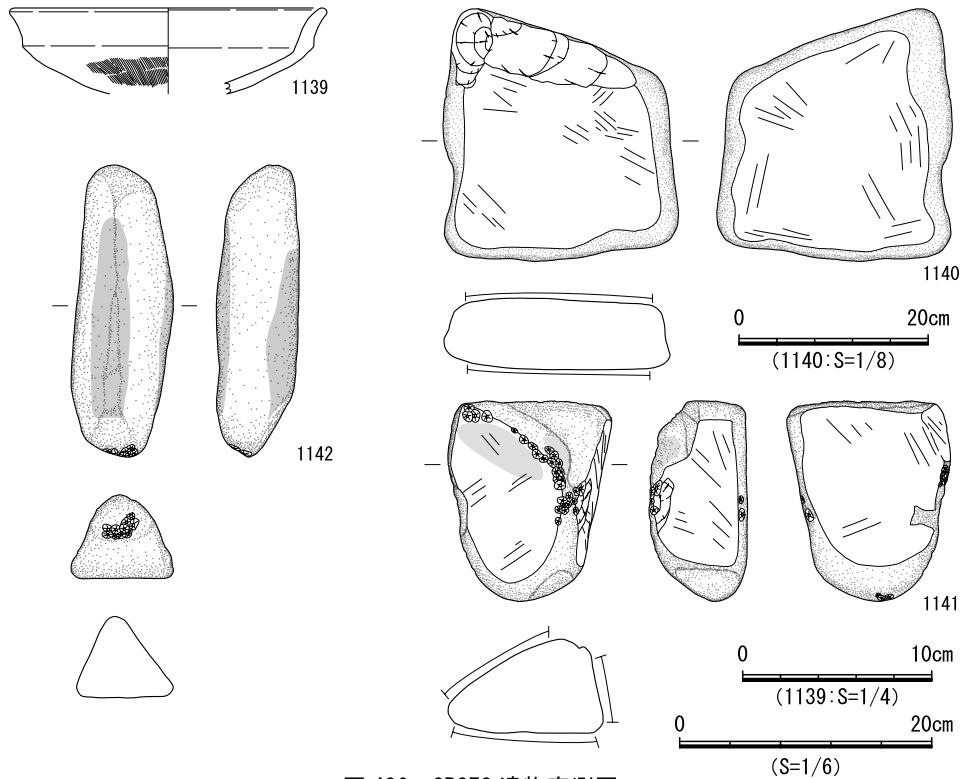


図 426 SB273 遺物実測図

SB274 (遺構：図 427・428、遺物：図 429)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。北側をSB271とSB272に、東側をSB273に切られ、南東側でSB275を切る。

形状 東部の一部が調査区域外となるが、南北長約4.3m、東西長約5.0mで、東西に長い隅丸長方形を呈する。深さは約0.1mで、壁面傾斜は急である。

埋土 3層に分層した。全体的にブロック土の混入が目立ち、人為堆積と考えられる。

床面 ほぼ平坦であり、貼床は確認できず、床面にて16基の小穴を検出した。小穴の埋土は単層から2層に分層でき、P10で柱痕跡を確認した。平面的な位置関係からP1～P4の4基を柱穴と考えたが、P5とP13はそれぞれP1～P3、P2～P4間の柱筋の中間に位置することから、6本柱建物や2本柱建物であった可能性も否定できない。

遺物出土状況 土中から土器364点、小穴から土器67点、石器類1点が出土した。住居中央から南側にかけて、床面からやや浮いた位置で土器(1143)が散在して出土した。

出土遺物 1143はVI期甕A3類。口縁部がわずかに直立して、端部は平坦である。端部下端には刺突文が認められる。胴部はなだらかに膨らみ、底部は平底である。頸部より下には刺突文が2帯施文され、その間に直線文を充填する。1144はVI期鉢A1類。口縁部が短く直立する。端部に刺突文、頸部直下には直線文と刺突文が認められる。1145はVI期甕胴部。甕A類の胴部と考えられる。1146はVI期器台B類。口縁部が直線的に伸び、わずかに柱状気味の脚部から裾部が外反する。1147はVI期の土製品。口縁部に2個1組の穿孔が認められ、合子と考えられる。

時期 床面出土土器(1143)やP14出土土器(1145)がVI期であることと、VI期のSB275を切り、VII期以降のSB271～SB273に切られることから、VI期と考えられる。

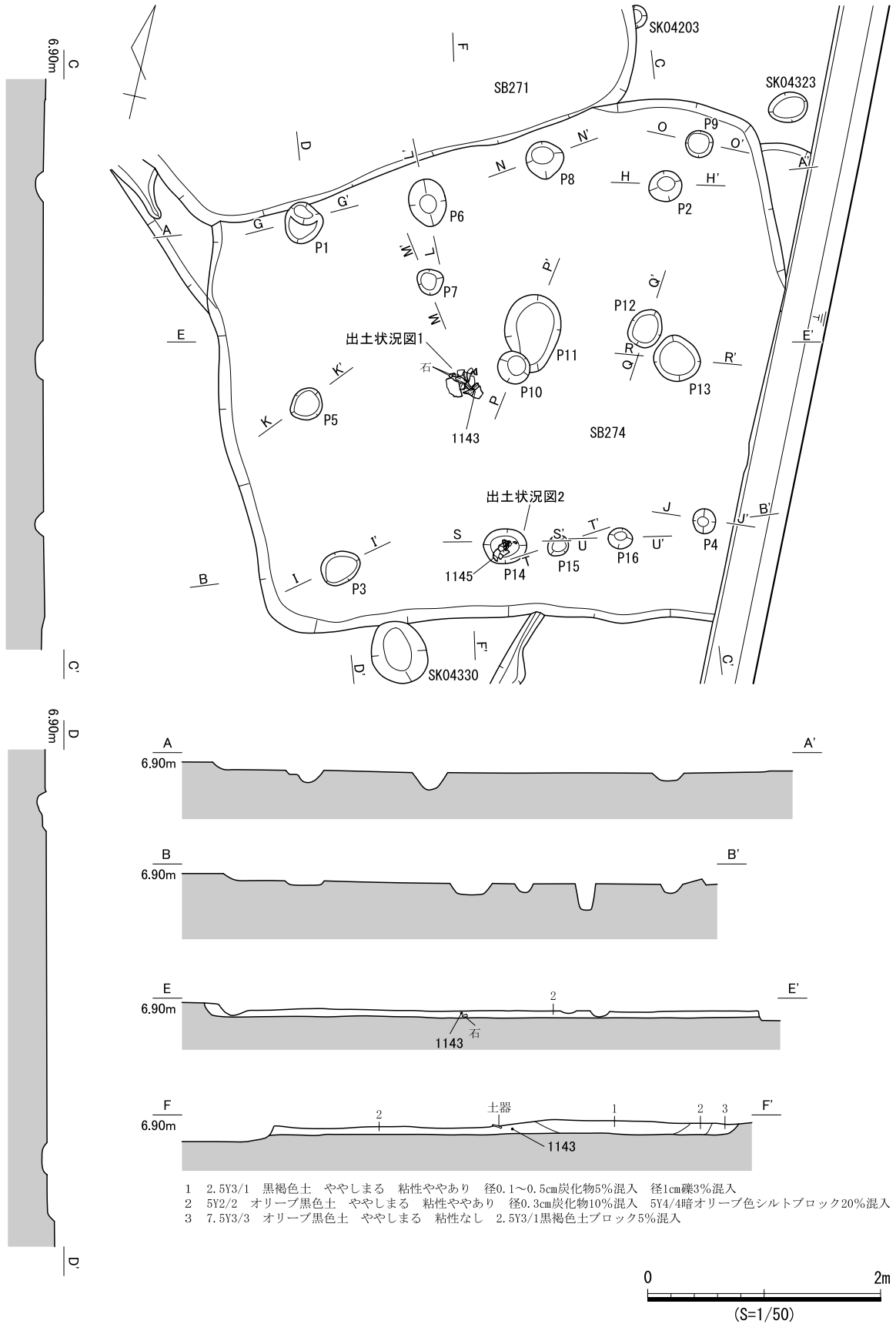


図427 SB274 遺構図(1)

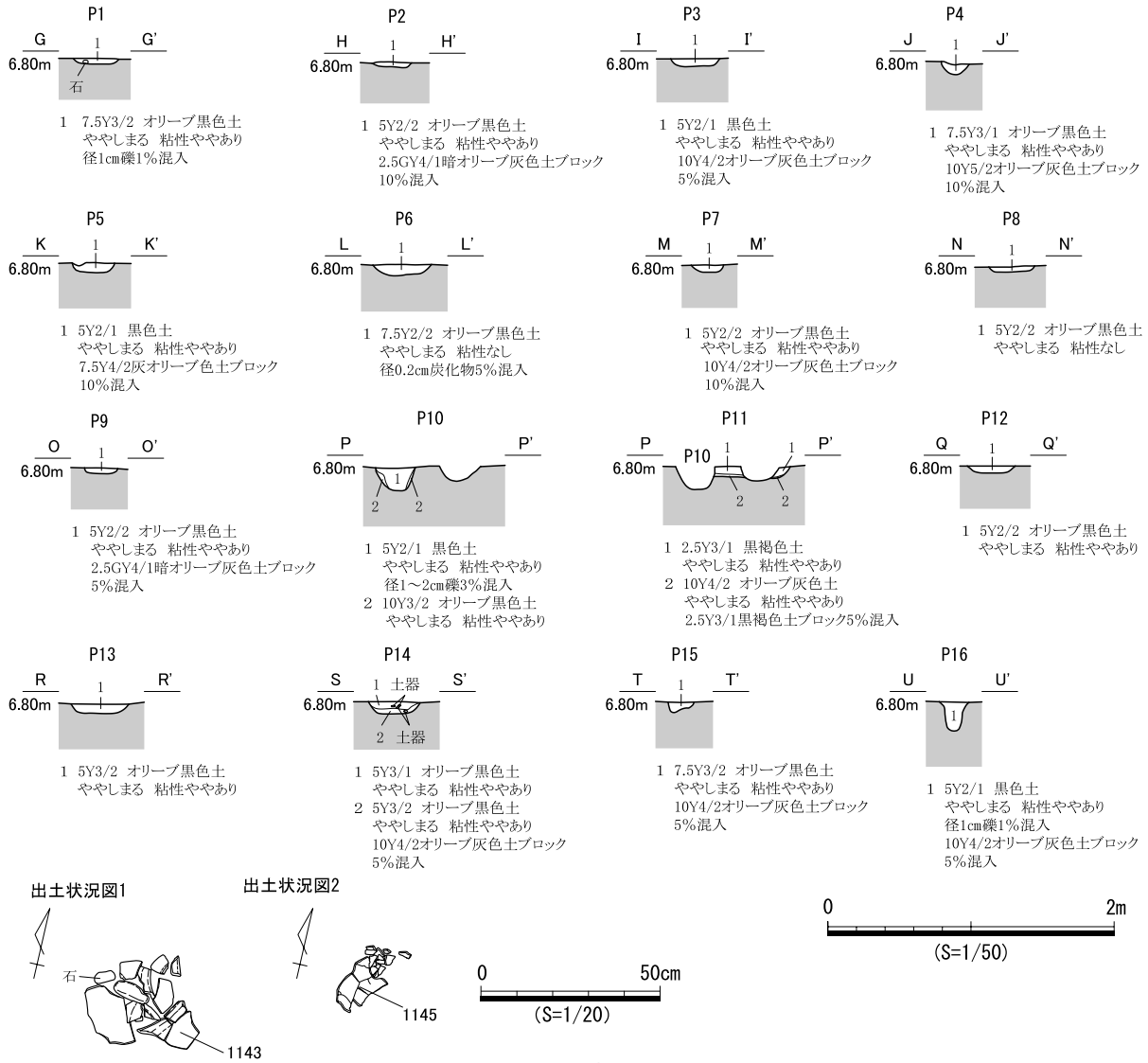


図 428 SB274 遺構図 (2)

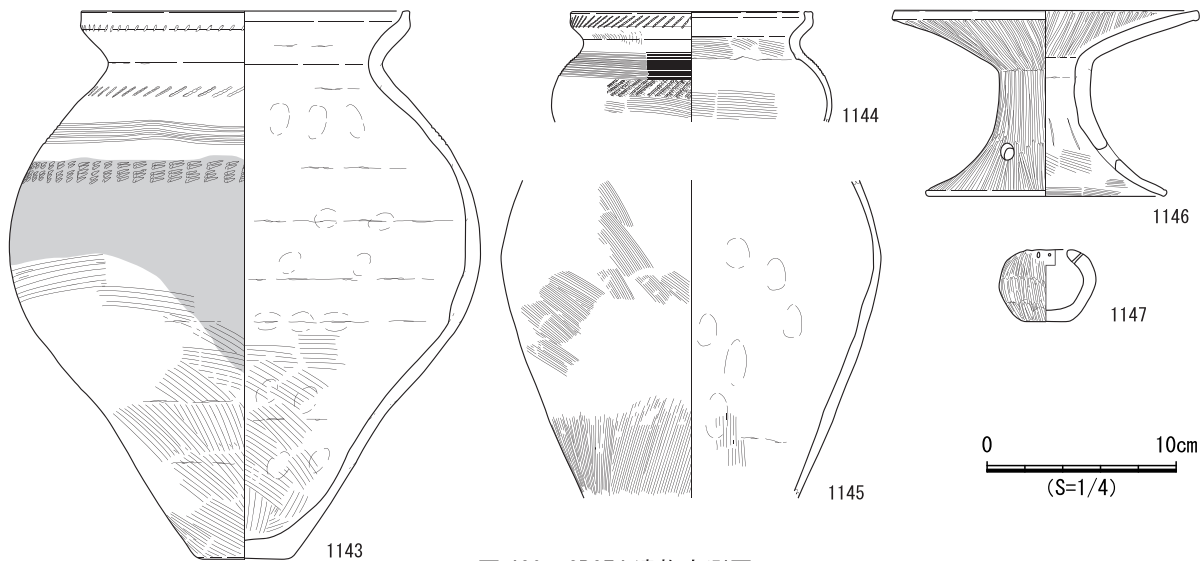


図 429 SB274 遺物実測図

SB275 (遺構：図430、遺物：図431)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、東側は調査区域外にのびている。また、北側をSB273とSB274に切られ、南側でSB277を切る。

形状 確認できた範囲では、南北長約4.1mの隅丸方形を呈するが、西辺に対して北辺と南辺がやや南東側に傾いており、全体的には平行四辺形気味となっている。深さは0.1m未満と浅く、壁面の傾斜は緩やかである。

埋土 単層であり、ブロック土が混入することや遺構の重複が多いことから、人為堆積と考えられる。

床面 ほぼ平坦であり、貼床は確認できず、床面にて3基の小穴と壁溝を検出した。小穴はいずれも浅く、底面は丸みを帯びている。平面的な位置関係からP1とP2の2基が柱穴と考えられ、P1では柱痕跡を確認した。壁溝は北辺から西辺にかけて検出した。平面形がやや乱れており、深さ0.08mと浅い。

遺物出土状況 埋土中から土器53点、壁溝から土器4点が出土した。土器の多くはVI期のものである。

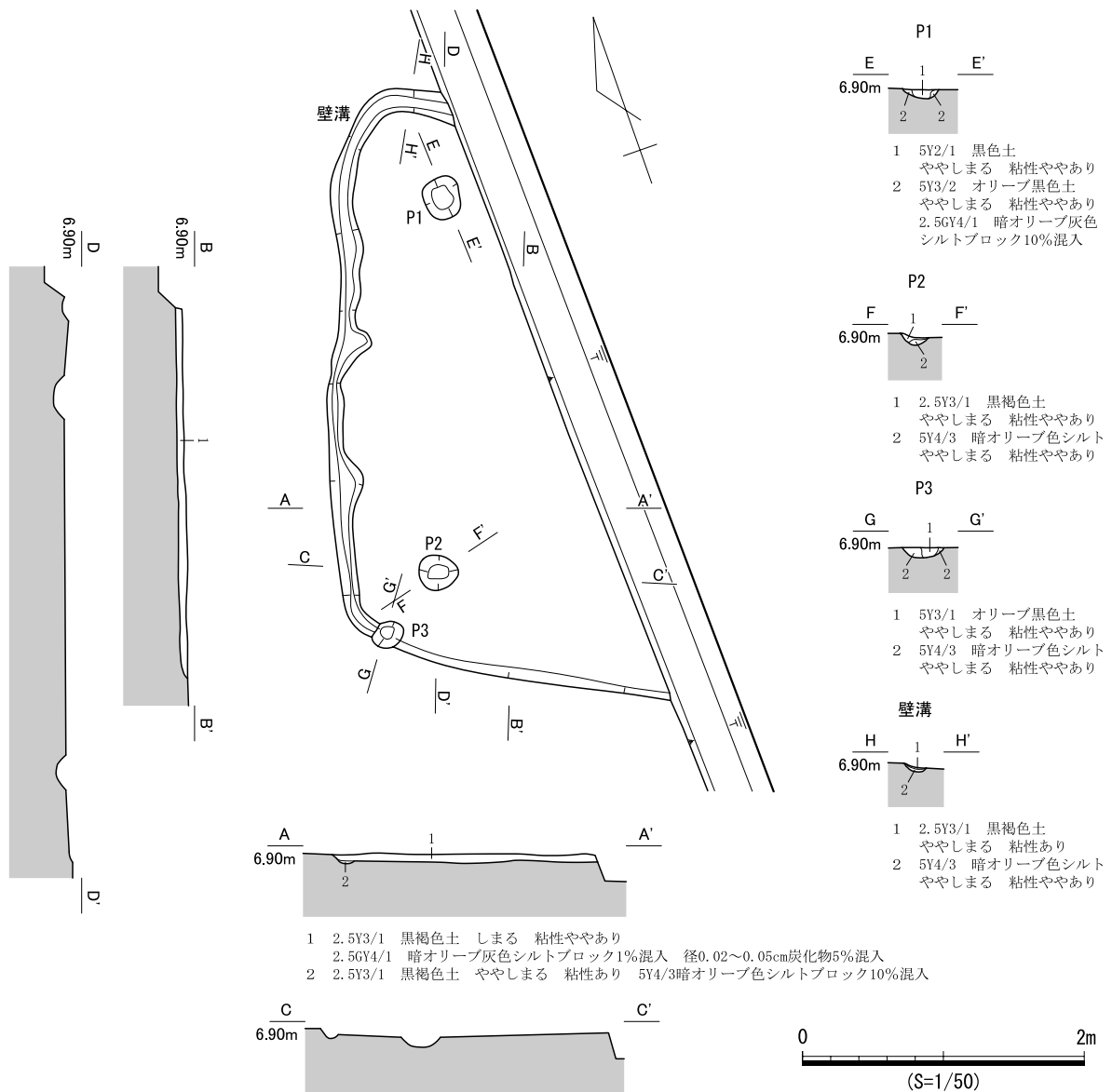


図430 SB275 遺構図

出土遺物 1148はVI期の甕A3類。

口縁端部が内傾する。1149はVI期の高坏C1類。1150はVI期の高坏J類。坏部が特異な形状で内面に煤が付着する。

時期 出土遺物の時期とVI期のSB274に切られることから、VI期と考えられる。

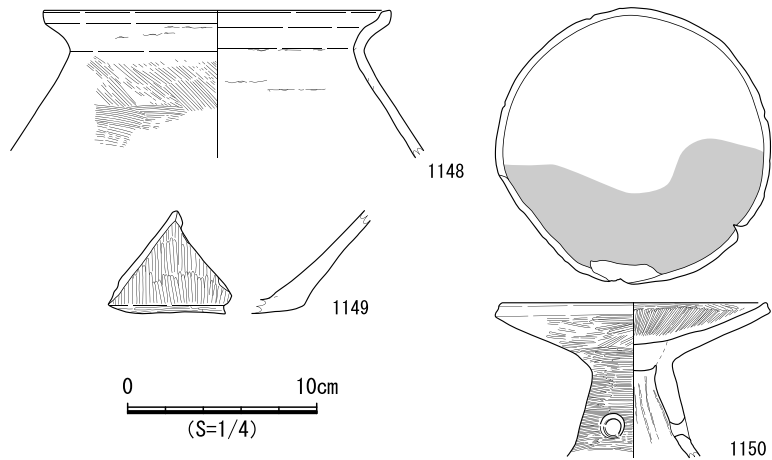


図 431 SB275 遺物実測図

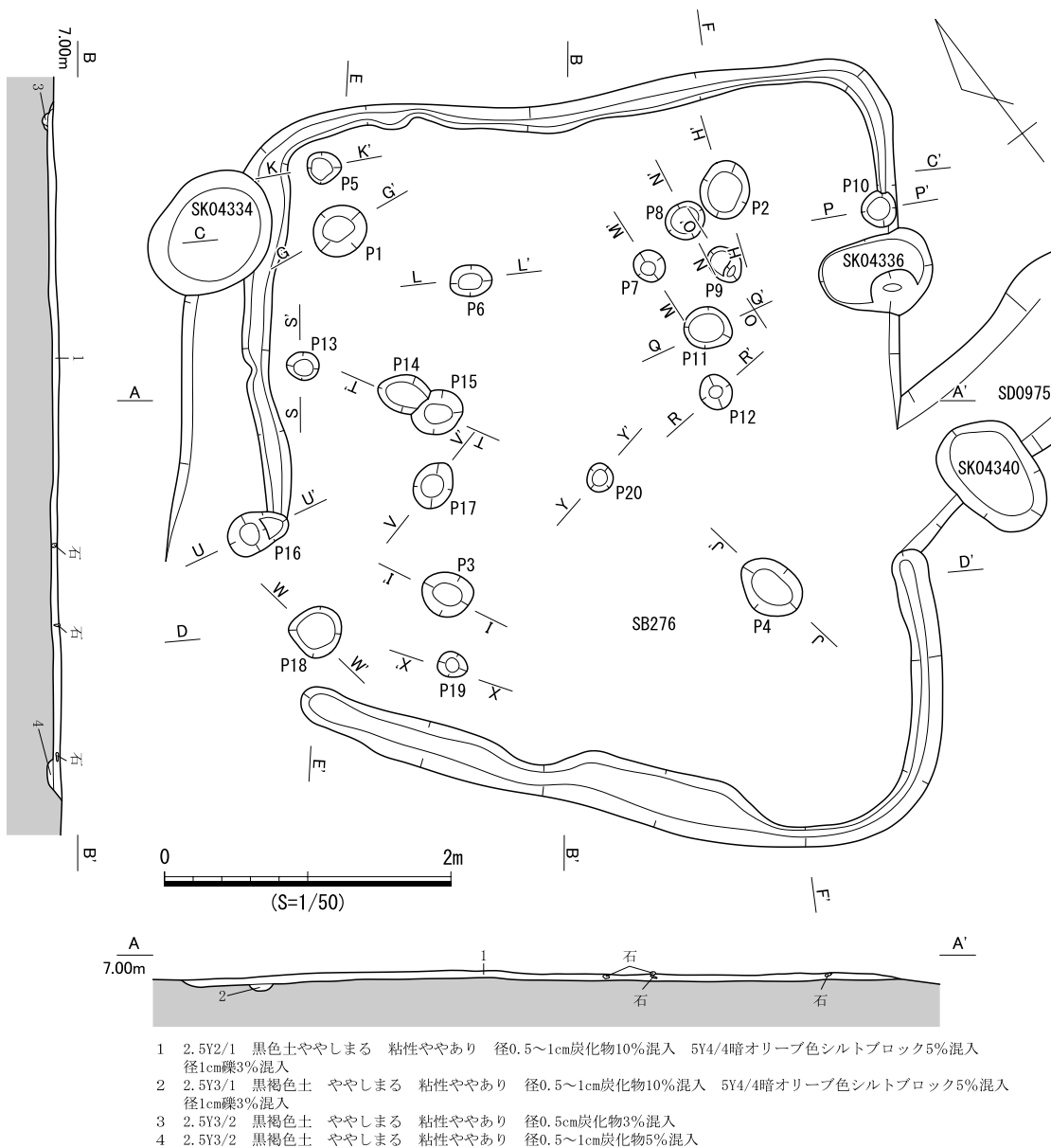


図 432 SB276 遺構図 (1)

- 1 2.5Y2/1 黒色土ややしまる 粘性ややあり 径0.5~1cm炭化物10%混入 5Y4/4暗オリーブ色シルトブロック5%混入 径1cm礫3%混入
- 2 2.5Y3/1 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり 径0.5~1cm炭化物10%混入 5Y4/4暗オリーブ色シルトブロック5%混入 径1cm礫3%混入
- 3 2.5Y3/2 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり 径0.5cm炭化物3%混入
- 4 2.5Y3/2 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり 径0.5~1cm炭化物5%混入

SB276 (遺構：図 432・434、遺物：図 433)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。東側でSB277を、南側でSB282を切り、西辺をSK04334に、東辺をSK04336に切られる。

形状 北西－南東長約4.5m、北東－南西長約5.4mの隅丸方形を呈し、南隅は外側へ張り出す。深さは0.1m未満で、壁面の傾斜は緩やかである。

埋土 単層で、ブロック土や炭化物が混入することから、人為堆積の可能性がある。

床面 ほぼ平坦であり、貼床は確認できず、床面にて20基の小穴と壁溝を検出した。小穴の埋土は多くが単層であるが、P3、P4、P15、P17で柱痕跡を確認した。そのため、平面的な位置関係からP1～P4の4基を柱穴と考えた。壁溝は西隅と北東辺中央付近が途切れており、北西側は住居の平面形よりやや内側を巡る。

遺物出土状況 埋土中から土器371点、小穴から土器101点、壁溝から土器4点が出土した。

出土遺物 1151はⅧ期甕D3類。1152、1153はⅦ期高坏D類。1152は多条沈線間に山形文、1153は連弧文を施文する。

時期 Ⅵ期～Ⅶ期のSB282を切ることと出土遺物の時期から、Ⅶ期～Ⅷ期と考えられる。



図 433 SB276 遺物実測図

SB277 (遺構：図 435)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。東側は調査区域外にあり、北側をSB275に、西側をSB276に切られている。

形状 北西辺と南西辺は直線的にのび、隅部はほぼ直角である。深さは0.1m未満と浅く、壁面の傾斜は急である。

埋土 2層に分層でき、大半の遺構を1層掘削後に検出した。2層はブロック土の混入が認められることから整地土と考えられる。

床面 やや凹凸があり、貼床(整地土)があり、床面にて14基の小穴と壁溝を検出した。小穴のうちP1、P6、P7で柱痕跡を確認し、P5、P11、P12は掘形が深く、壁面がほぼ垂直である。これらのいずれかが柱穴と考えられるものの、住居の全体形が不明であるため、その特定は困難である。なお、P5～P7、P12、P14は住居の壁面に平行してL字状に配列している。西壁沿いのP8は長軸長1.04mと大きく、底面は平坦である。なお、P13から北にのびるSD1を検出したが、その性格は不明である。

掘形 埋土はブロック土が混じる単層であり、底面にて壁溝2とP15を検出した。壁溝2はやや幅が広く、ブロック土を含む。また、P15もブロック土を含むことから、人為堆積の可能性がある。

遺物出土状況 埋土中から土器43点、小穴から土器42点、壁溝から土器6点が出土した。いずれも小破片であり図示しなかったが、P4の出土土器はⅤ～Ⅵ期のものである。

時期 P4出土遺物の時期とⅥ期のSB276に切られることから、Ⅵ期と考えられる。

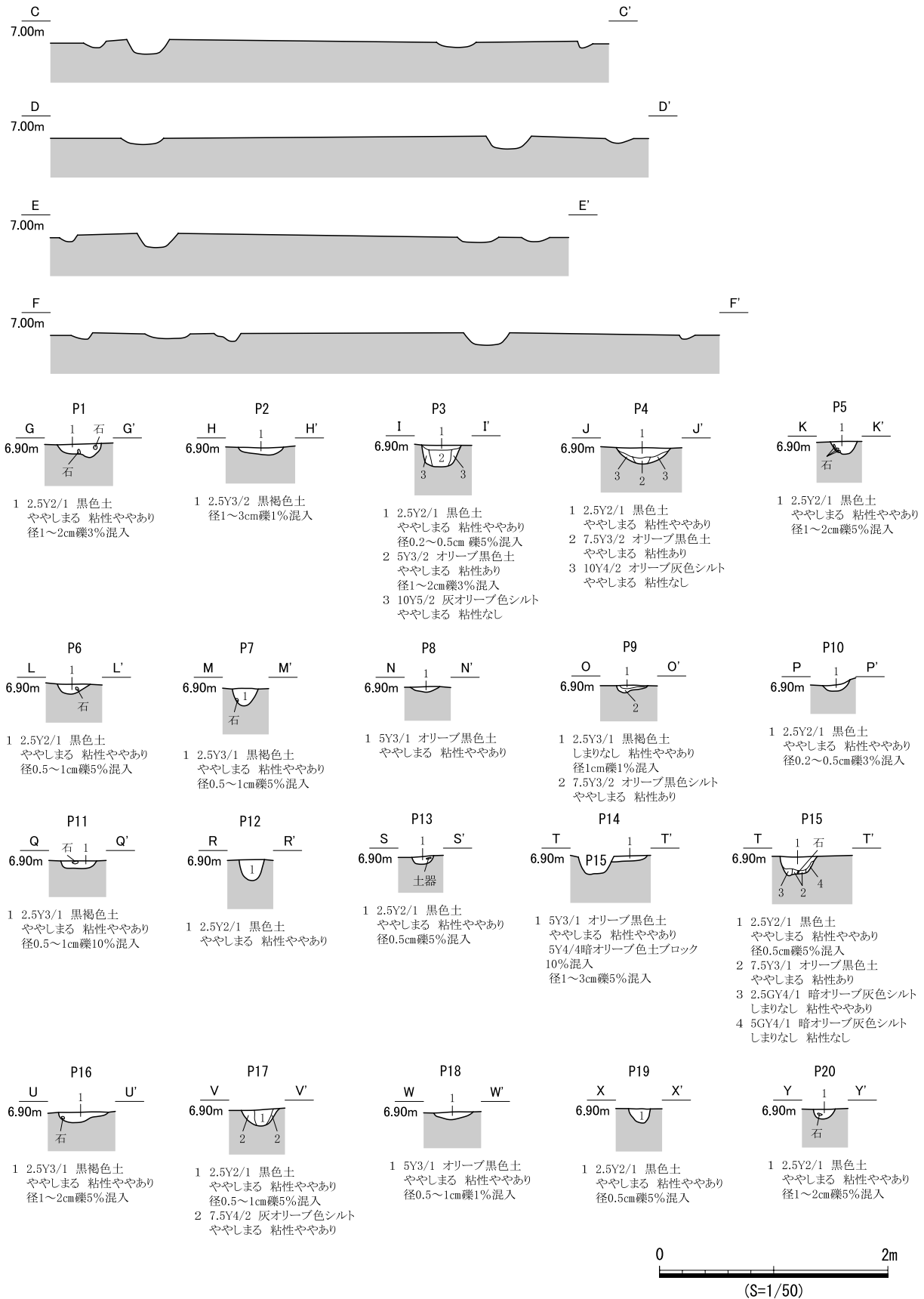
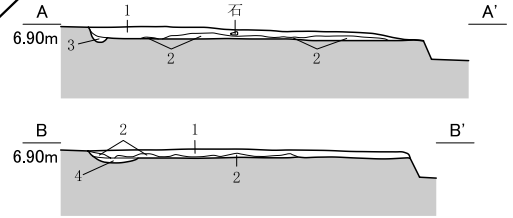
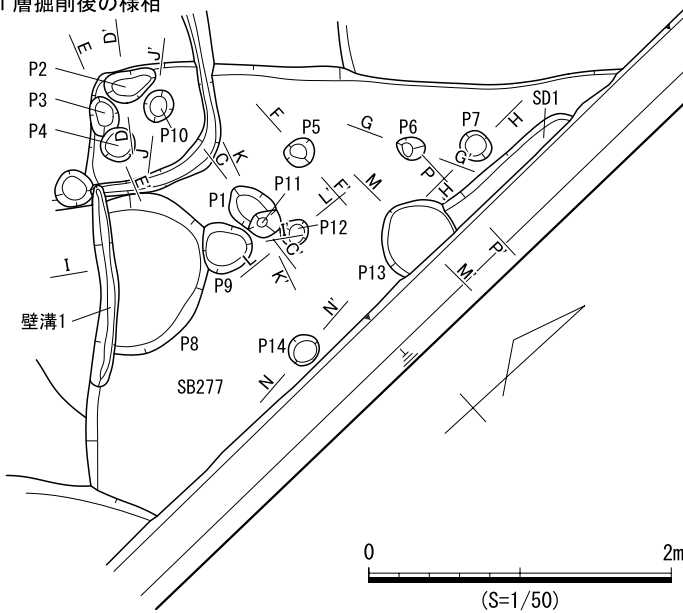
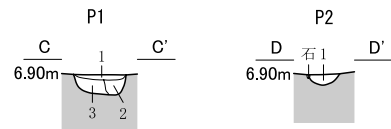


図 434 SB276 遺構図 (2)

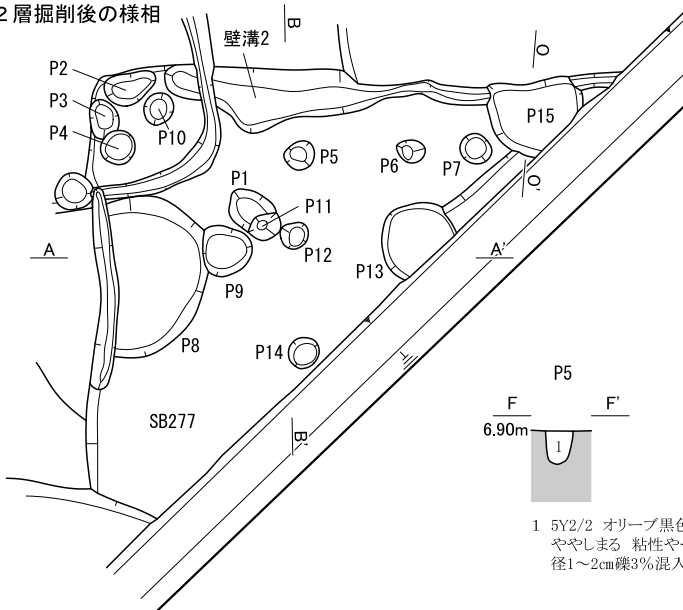
1層掘削後の様相



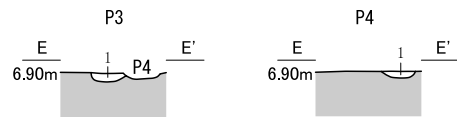
- 1 2.5Y2/1 黒色土 ややしまる 粘性ややあり
径0.1~0.5cm炭化物5%混入
- 2 2.5Y3/2 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり
5Y4/4暗オリーブ色シルトブロック10%混入
- 3 2.5Y2/1 黒色土 ややしまる 粘性ややあり
- 4 2.5Y3/2 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり
5Y4/4暗オリーブ色土ブロック10%混入



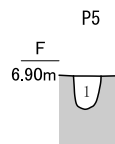
2層掘削後の様相



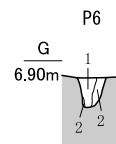
- 1 7.5Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり
- 2 5Y2/2 黒色土 ややしまる 粘性ややあり
- 3 5Y4/3 暗オリーブ色シルト しまる 粘性なし
- 1 5Y2/2 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり
2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルトブロック 5%混入



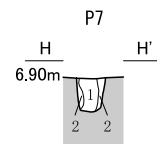
- 1 2.5Y3/1 黒褐色土 ややしまる 粘性なし
2.5Y4/4オリーブ褐色土ブロック 5%混入
- 1 2.5Y3/2 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり



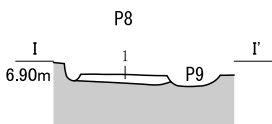
- 1 5Y2/2 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり
径1~2cm礫3%混入



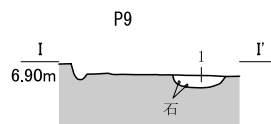
- 1 2.5Y3/2 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり
- 2 5Y4/3 暗オリーブ色土 ややしまる 粘性ややあり
径0.2~0.5cm炭化物5%混入



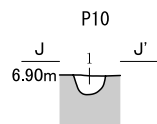
- 1 5Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり
- 2 10Y3/2 オリーブ黒色土 しまる 粘性ややあり



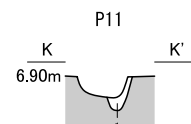
- 1 5Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり
10Y4/2オリーブ灰色土ブロック10%混入



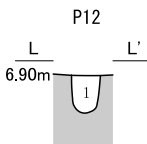
- 1 2.5Y3/1 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり



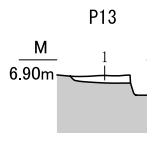
- 1 5Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり



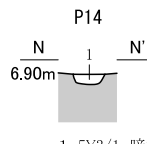
- 1 5Y2/2 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり
径1cm礫3%混入



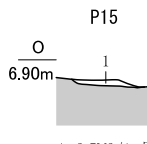
- 1 5Y2/2 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり



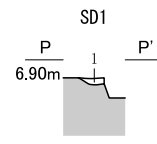
- 1 5Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり



- 1 5Y3/1 暗オリーブ色土 ややしまる 粘性ややあり
2.5GY4/1暗オリーブ灰色土ブロック10%混入



- 1 2.5Y3/1 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり
2.5Y4/1黄灰色土ブロック 5%混入



- 1 5Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり

図 435 SB277 遺構図

SB278 (遺構：図437、遺物：図436)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、大半は調査区域外にのびている。SB279、SB281、SB283を切り、周辺の竪穴住居跡の重複関係では最も後出する。

形状 西辺は直線的にのび、隅部は丸みを帯びていることから、隅丸方形の可能性はある。南北長約4.6m、深さ約0.25mで、壁面の傾斜は急である。

埋土 4層に分層した。各層ともにほぼ水平な堆積であり、ブロック土の混入がみられず、壁面際はわずかに斜め上方向に堆積土が傾斜していることから、自然堆積の可能性はある。

床面 ほぼ平坦であり、貼床は確認できず、床面にて4基の小穴を検出した。小穴の埋土はいずれも単層で、底面は平坦である。住居全体の平面形が不明であるため、柱穴の推定は困難である。

遺物出土状況 埋土中から土器635点、石器類1点、小穴から土器7点が出土した。P4の埋土上層から口縁部を南側に向けた甕(1154)が横位で出土したが、何らかの理由で混入の

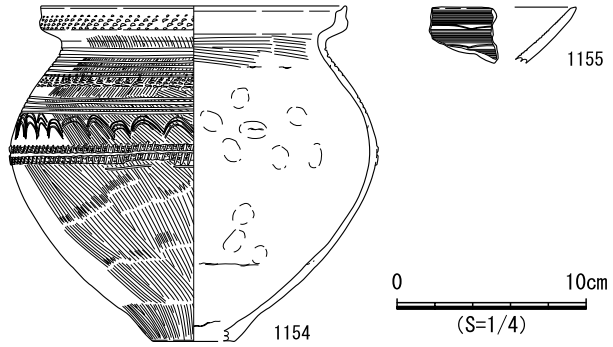


図436 SB278 遺物実測図

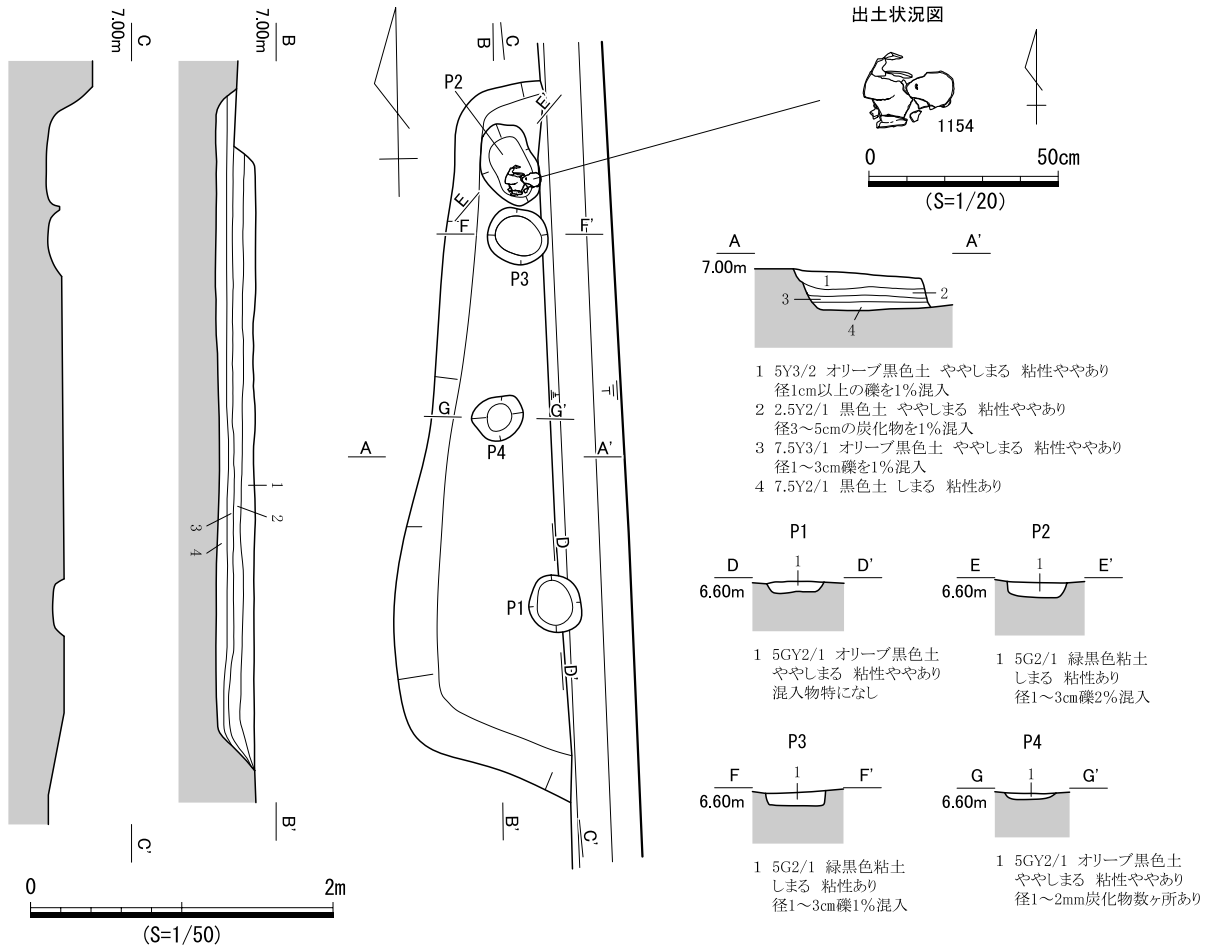


図437 SB278 遺構図

可能性が高い。

出土遺物 1154はIV期甕B2類。口縁部が鋭く直立し、端部には強い凹面を形成する。胴部高が低く、胴部上半に直線文2帯、その間に刺突文と連弧文的な波状文を施文する。胴部最大径付近に突帯を貼付し、その上に刺突を加える。1155はVII期高坏D4類。直線文と連弧文を交互に施文する。

時期 出土遺物の時期とVII期以降のSB279を切ることから、VII期以降と考えられる。

SB279 (遺構：図439、遺物：図438)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、東側は調査区域外にのびている。平面形は北西隅部が明瞭であり、他は不明瞭であった。なお、北側をSB278に切られ、東側でSB280を、北側でSB281とSB283を切る。

形状 西辺は直線的にのび、南北辺はそれにほぼ直角方向にのびることから、隅丸方形と考えられる。なお、南北長約5.5m、深さ約0.2mで、壁面の傾斜は比較的急である。

埋土 7層の埋土が認められる。下層にブロック土の混入が目立ち、層界の凹凸が顕著であるため、人為堆積の可能性が高い。

床面 ほぼ平坦であり、貼床は確認できず、床面にて8基の小穴を検出した。小穴の埋土は2～3層に分層したが、いずれも浅く、壁面の傾斜も緩やかであるものが多い。平面的な位置関係からP1、P2の2基を柱穴と考えた。

遺物出土状況 埋土中から土器2,586点、小穴から土器42点が出土した。土器の多くはV期～VII期のものである。

出土遺物 1156はVII期壺A類胴部。直線文と羽状文が認められる。1157はVII期壺B2b類頸部。1158～1160はVII期甕D2類。口縁部が短く屈曲する。1161はV期高坏A類脚部。丁寧なミガキがあり、細身の付根から脚部が円錐形に広がり、裾部が外反する。

時期 土遺物の時期とVII期のSB280を切ることから、VII期以降と考えられる。

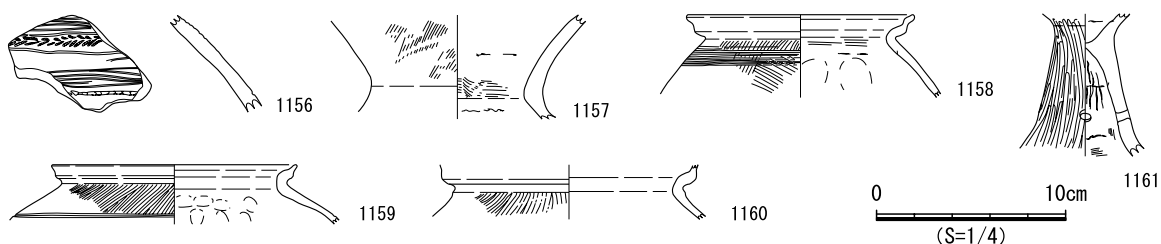


図438 SB279 遺物実測図

SB280 (遺構：図440～442、遺物：図443・444)

検出状況 部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、東側をSB279に切られ、SK04358、SK04365、SK04367は埋土上面から掘り込まれている。本遺構付近では遺物包含層掘削時から土器の出土が多かった。

形状 南北長約4.3mの隅丸方形を呈する。掘形までの深さは0.15mで、壁面傾斜は比較的急である。

埋土 4層に分層し、上層(1・2層)が住居埋土、下層(3・4層)が掘形埋土である。上層はブロック土が含まれ、人為堆積の可能性が高い。

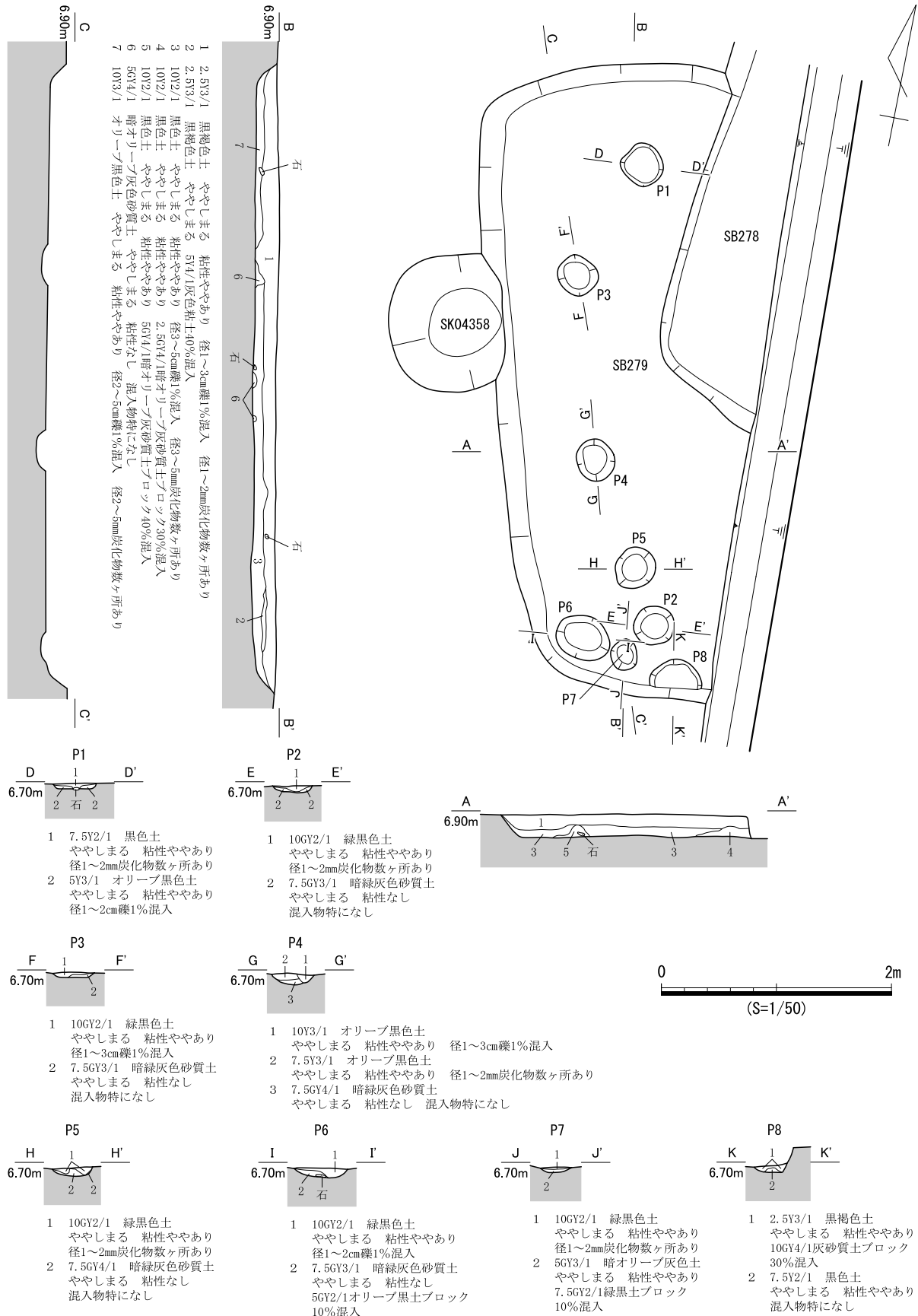


図 439 SB279 遺構図

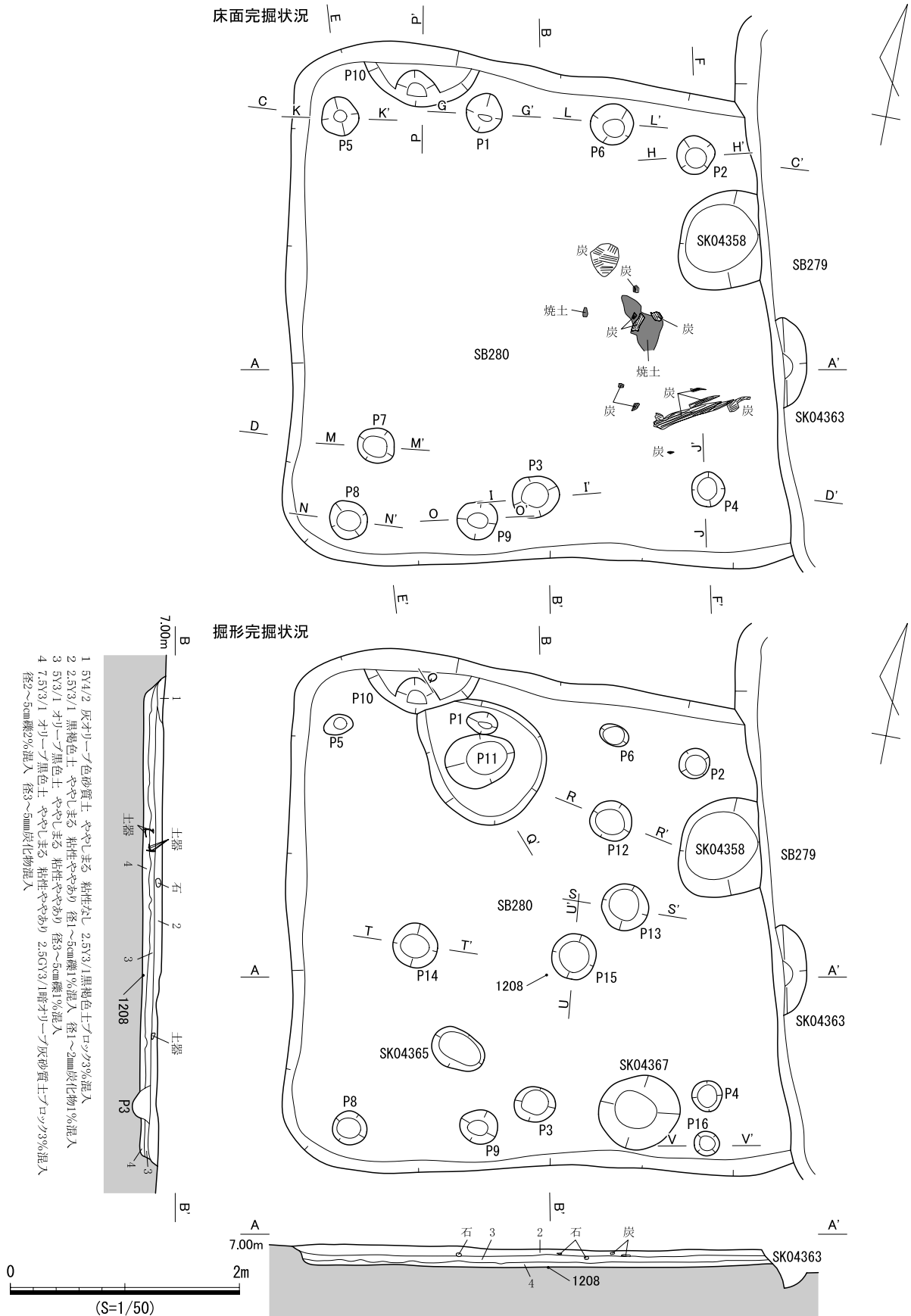


図 440 SB280 遺構図 (1)

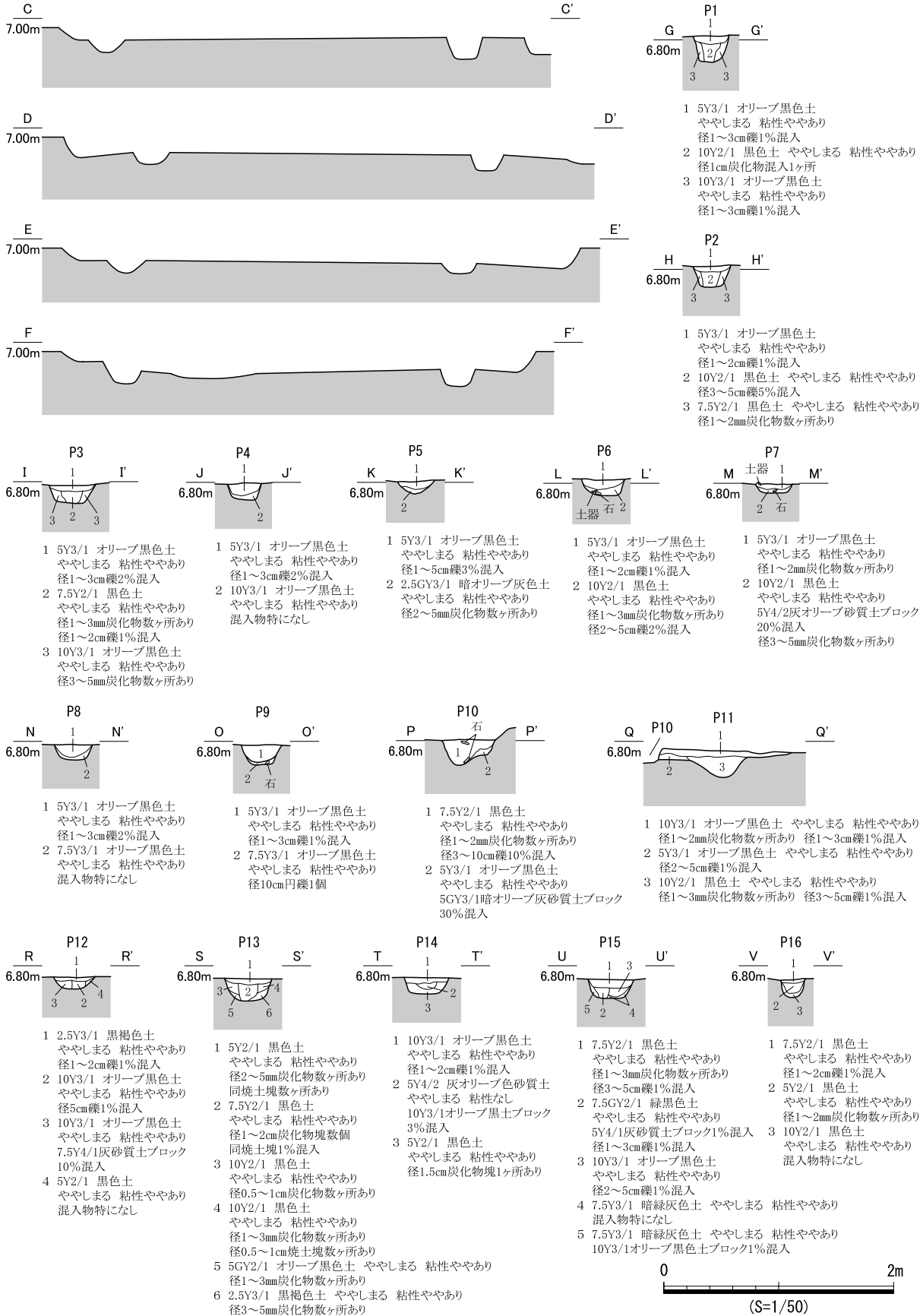


図 441 SB280 遺構図 (2)

床面 ほぼ平坦であり、貼床（整地土）がある。床面中央付近では土器がまとまって出土し、土器とともに礫や焼土粒、炭化粒も確認した。土器の向きは横位や縦位が混在しており、人為廃棄と想定できる。これらの遺物を取り上げるとその直下から焼土がまとまって出土し、それとともに炭化材も出土した。南端の炭化材は長さ約70cmの棒材であり、端部を東西に向けて出土した。床面では10基の小穴を検出した。そのうちP1～P3で柱痕跡を確認し、P10の土層は柱抜き痕を示すと考えられる。柱穴の想定は難しいが、平面的な位置関係からP2、P4、P5、P7の4基と考えた。本住居は床面直上で炭化材が広がり、その周囲で焼土粒や炭化粒が出土したことから、焼失家屋の可能性もある。また、出土した土器には手捏ね土器や小型高坏、小型鉢などが含まれ、焼土や炭化材の上から出土していることから、住居焼失後にここに据えられたものか、あるいは廃棄されたものとする。

掘形 埋土は2層であり、土器片や礫を含む。掘形底面はほぼ平坦であり、小穴6基を検出した。そのうち、P12、P13、P15、P16で柱痕跡を確認したが、その性格は不明である。なお、管玉(1208)は住居中央の掘形底面直上で出土した。

遺物出土状況 埋土中から土器2,887点、石器類11点、小穴から土器270点が出土した。埋土中の多くは床面を覆う堆積土から出土しており、Ⅶ期に属するものが多い。

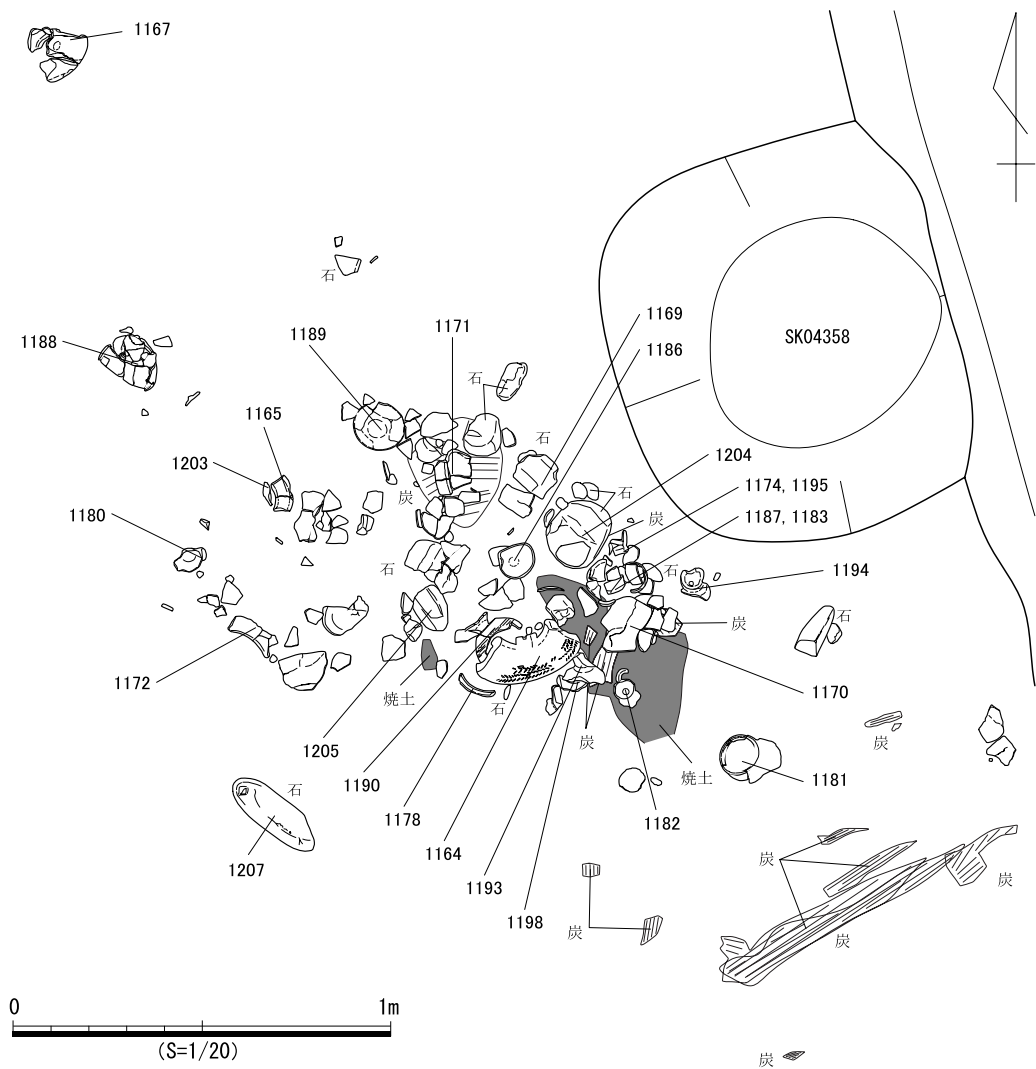


図 442 SB280 遺構図 (3)

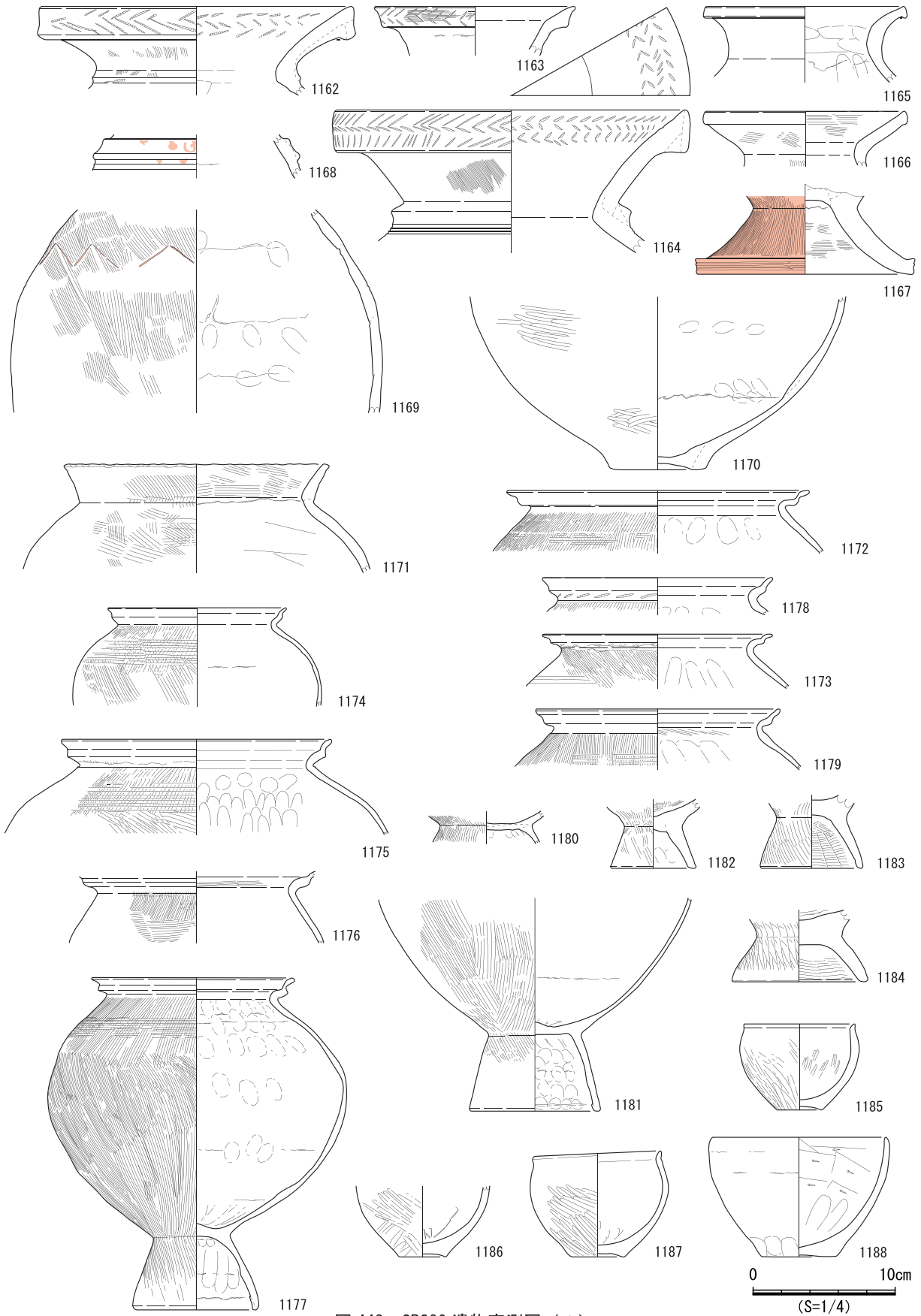


図 443 SB280 遺物実測図 (1)

出土遺物 1162～1164はⅦ期壺A類。口縁部が外反し、端部下端を拡張する。1163内面を除いて、内外面に羽状文が認められる。1165、1166はⅦ期壺B類。口縁部が外反して、端部は平坦である。1167はⅤ期壺A類脚部。端部に擬凹線が認められる。1168、1169はⅦ期壺A類胴部。1169は山形文1帯が認められる。1170はⅥ期～Ⅶ期の壺底部。1171はⅦ期甕B3類。口縁部が短くくの字に屈折して立ち上がり、端部は平坦である。内外面に粗いハケが認められる。1172～1177はⅦ期甕D2b類。口縁部が短く外上方に屈折する。1177は中型品の完存品。胴部が倒卵形を呈し、最大径が中程やや上位に位置する。1178、1179は口縁部の屈曲がやや弱いⅦ期甕D2類。1180、1181はⅥ期～Ⅶ期甕D類脚部。1182はⅦ期甕E類脚部。1183、1184はⅥ期～Ⅶ期甕脚部。脚部がやや内湾する。1185～1188はⅦ期鉢C類。口縁部が内湾しながら立ち上がる。1185、1187は端部がやや直立気味となる。いずれも丁寧なミガキが認められるが、1188はケズリが認められ、つくりが粗い。1189、1190はⅦ期高坏G類。1189には打ち欠きが認められる。1190は精緻な文様が認められる。口縁部には少条の多条沈線を5帯

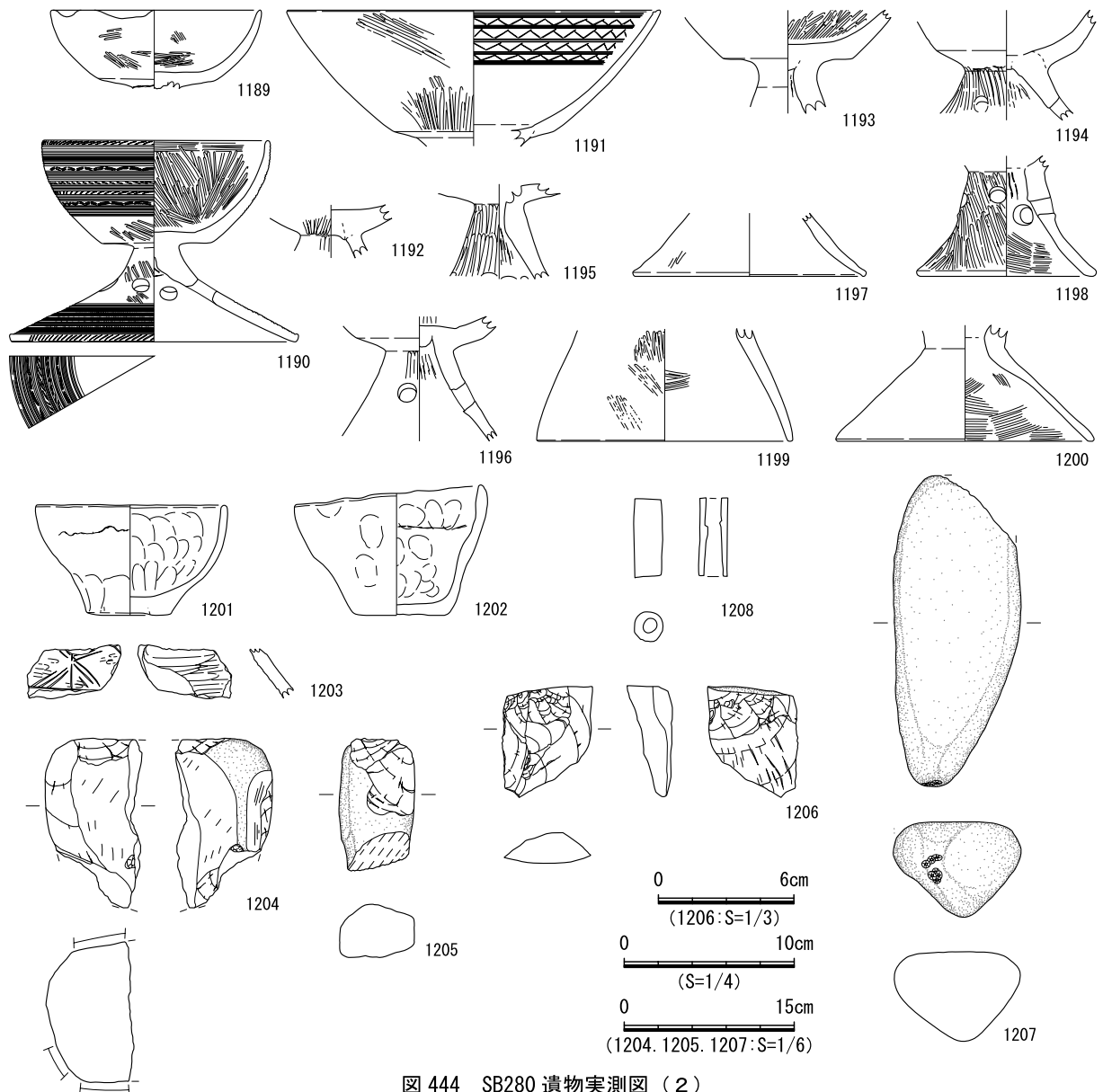


図 444 SB280 遺物実測図 (2)

配し、その間を振幅の小さい二重の山形文、刺突文を対向するよう施文する。端部直下にも刺突文が認められる。同様の文様を脚裾部にも施文する。1191～1193はⅦ期高坏D類。1191は少条の多条沈線を5帯配し、その間を対向するように山形文を施文する。1194、1196はⅦ期高坏C類。1197はⅤ期～Ⅵ期高坏B類脚部。1198はⅦ期高坏D類脚部。透孔が上下で交互となるよう配置される。1199はⅥ期高坏C類脚部。1200はⅦ期器台C類脚部。1201、1202はⅦ期手捏ねB類。1203はⅠ期壺胴部。木葉文が認められる。1204は垂円礫を素材とする砥石で、上下面と側面の一部を砥面としている。1205、1207は叩石で、いずれも長楕円礫を素材としている。1206はサヌカイト製のMFで、上端に自然面が残り、左側縁に細かい剥離が観察できる。1208は管玉で、孔は上下2方向から穿たれている。

時期 床面上でまとまって出土した遺物の時期から、Ⅶ期と考えられる。

SB281 (遺構：図446、遺物：図445)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。東側は調査区域外にあり、南側でSB278とSB279に切られ、西側でSB282を切る。また、掘形底面でSB283を検出した。

形状 南北長約4.2mの隅丸方形を呈する。掘形底面までの深さは約0.3mで、壁面傾斜は比較的急である。

埋土 6層に分層した。1～3層が住居埋土で、4～6層が掘形埋土である。住居埋土には炭化物や礫が混入し、層界に凹凸が認められることから、人為堆積の可能性がある。

床面 ほぼ平坦であり、貼床(整地土)がある。床面では小穴を10基検出し、そのうち、P1、P3、P6、P8で柱痕跡を確認した。また、他の小穴も掘形が深く、壁面傾斜も垂直に近いものが多く、平面的な位置関係からP1とP2を柱穴と考えた。なお、P8とP9は北西隅にあるやや大きな穴であり、いずれもP1に切られている。

掘形 3層に分層でき、西壁際の埋土にはブロック土が含まれる。底面はほぼ平坦であり、SB283の小穴や壁溝を検出した。

遺物出土状況 埋土中から土器343点、小穴から土器18点が出土した。土器の多くはⅤ～Ⅶ期のものである。

出土遺物 1209、1210はⅣ期甕B2類。口縁部が強く屈曲して内傾する。端部は内傾面を形成する。1209は頸部に刺突文、その直下に直線文が認められる。1211はⅤ期～Ⅵ期高坏B3b類。口縁部が強く外反する。1212はⅥ期～Ⅶ期甕脚部。裾部がわずかに内湾する。

時期 土遺物の時期と、Ⅶ期以降のSB278とSB279に切られ、Ⅵ期～Ⅶ期のSB282を切ることから、Ⅵ期～Ⅶ期と考えられる。

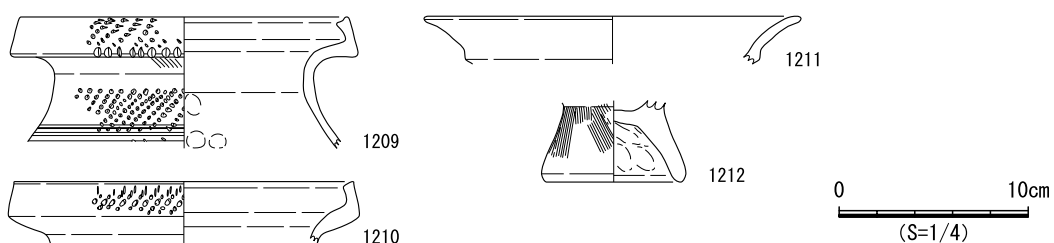


図445 SB281 遺物実測図

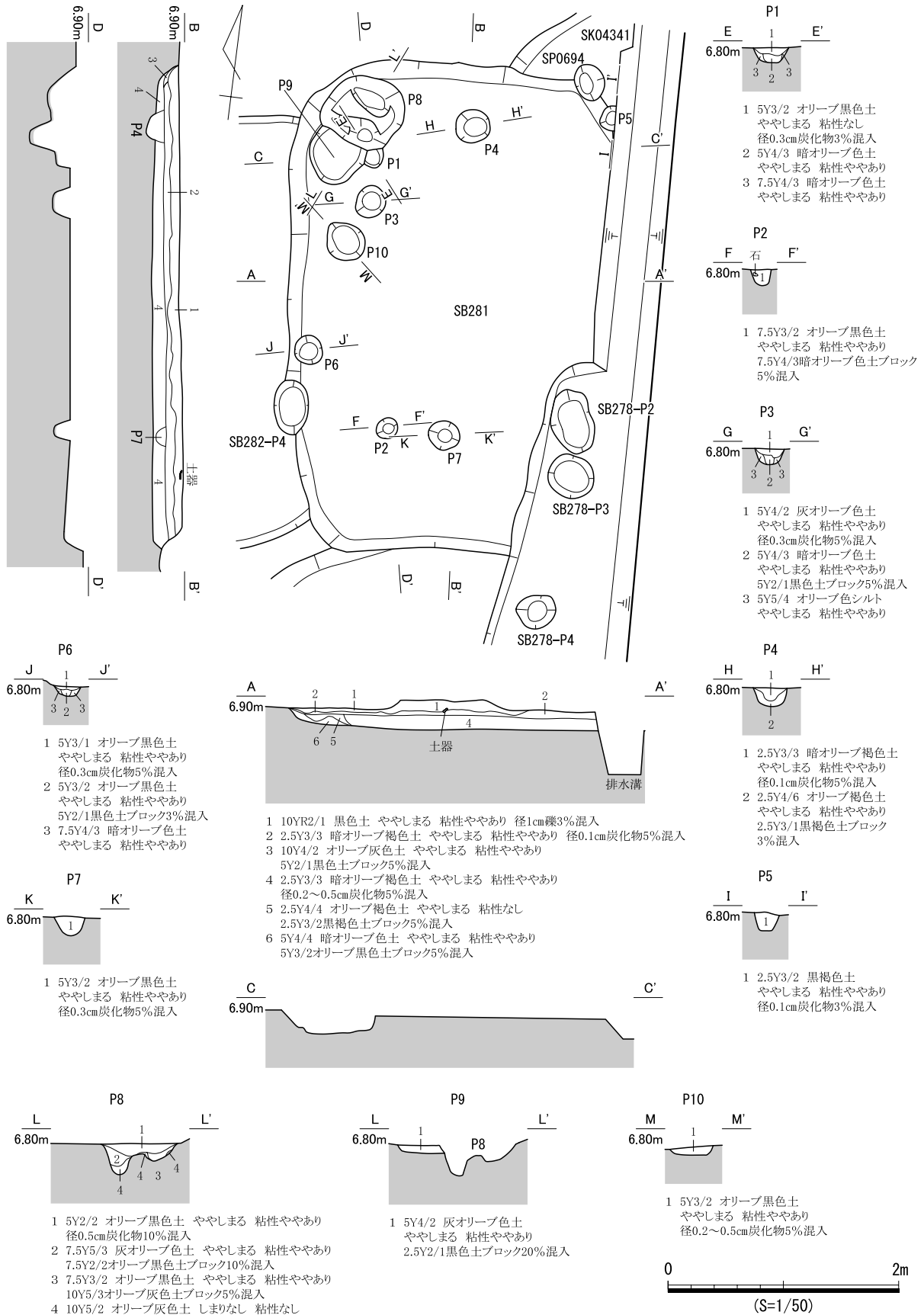


図 446 SB281 遺構図

SB282 (遺構：図449、遺物：図447)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、北側でSB276に、東側でSB281に切られる。

形状 南北長約3.6m、東西長約4.1mの不整形を呈する。東西北辺はやや凹凸があるものの比較的直線的であるのに対し、南辺は外側に膨らみ、南辺両端の隅部は弧状を呈している。深さは約0.1mで、壁面の傾斜は比較的急である。

埋土 単層であり、検出面からブロック土の混入が全体的に認められたので、人為堆積と考えられる。

床面 ほぼ平坦であり、貼床は確認できず、床面にて10基の小穴を検出した。その埋土は単層から3層まで分層でき、P2とP4で柱痕跡を確認した。また、平面的な位置関係からP1、P3～P5を柱穴と考えた。

遺物出土状況 埋土中から土器362点、石器類1点、小穴から土器55点が出土した。土器の多くはV～VII期のものである。

出土遺物 1213はVII期甕A4類。口縁部を尖り気味におさめる。1214はVI期鉢A2類。口縁端部が尖り気味で、頸部直下に直線文、刺突文が認められる。1215はV期高坏I1b類。口縁部がわずかに直立気味で、波状文が認められる。1216はVI期高坏C類。坏底部から口縁部がわずかに外反しながら、直線的に外傾する。

時期 出土遺物の時期と、VI期～VII期のSB281に切られることから、VI期～VII期と考えられる。

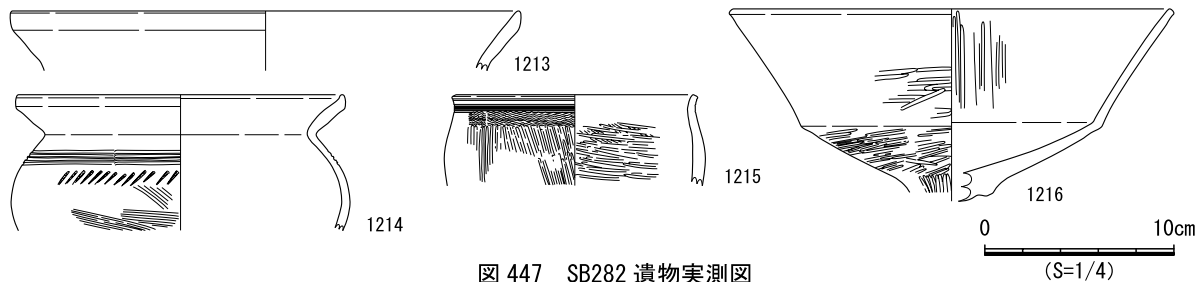


図447 SB282 遺物実測図

SB283 (遺構：図450、遺物：図448)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB279とSB281に切られ、両者の床面及び掘形底面で検出した。なお、東側の大半は調査区外にのびている。

形状 南北長約5.8mの隅丸方形を呈する。掘形底面までの深さは約0.1mで、壁面傾斜は急である。

埋土 3層に分層した。1層が住居埋土であり、2・3層が掘形埋土である。1層は粘性が高い。

床面 ほぼ平坦であり、貼床(整地土)がある。床面にはブロック土の混入が認められ、小穴や壁溝の平面形は不明瞭であった。床面では小穴を4基検出した。その埋土はいずれも単層であるが、P1の掘形がやや深く、平面的な位置関係からP1、P2の2基を柱穴と考えた。壁溝は確認できた範囲を全周している。幅0.10～0.15m、深さ0.05～0.10mで、壁溝内側の検出ラインは直線的でない。

掘形 埋土は単層であり、底面はほぼ平坦である。

遺物出土状況 埋土中から土器31点、小穴から土器1点、壁溝から土器3点が出土した。土器の多くはV～VI期の土器片である。

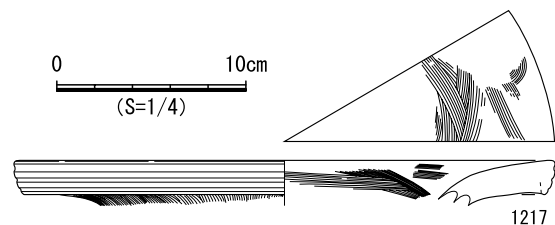


図448 SB283 遺物実測図

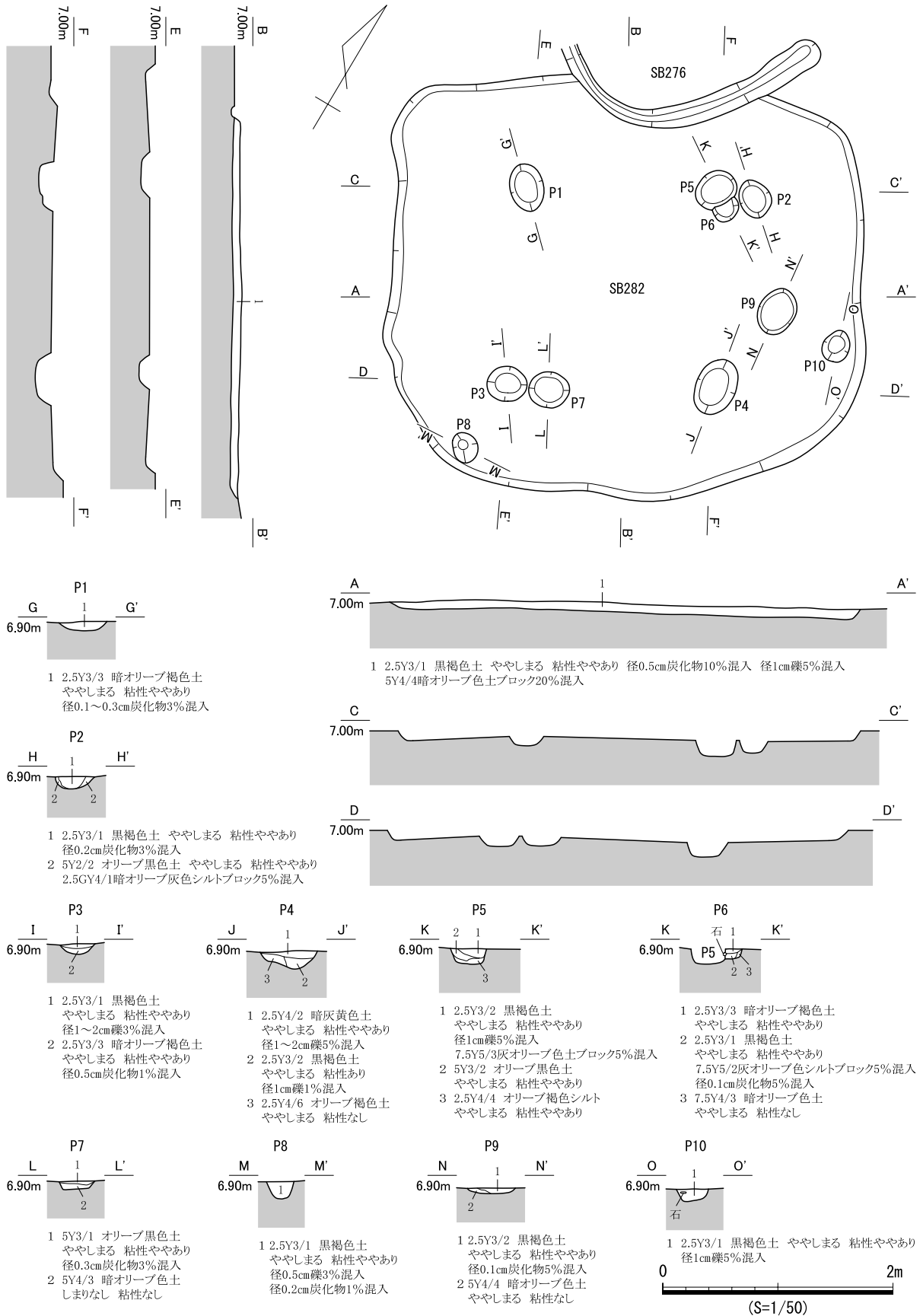


図 449 SB282 遺構図

出土遺物 1217はV期壺A1b類。大型品の口縁部。口縁部が強く外反する。

時期 出土遺物の時期と、VI期～VII期のSB281に切られることから、V期～VI期と考えられる。

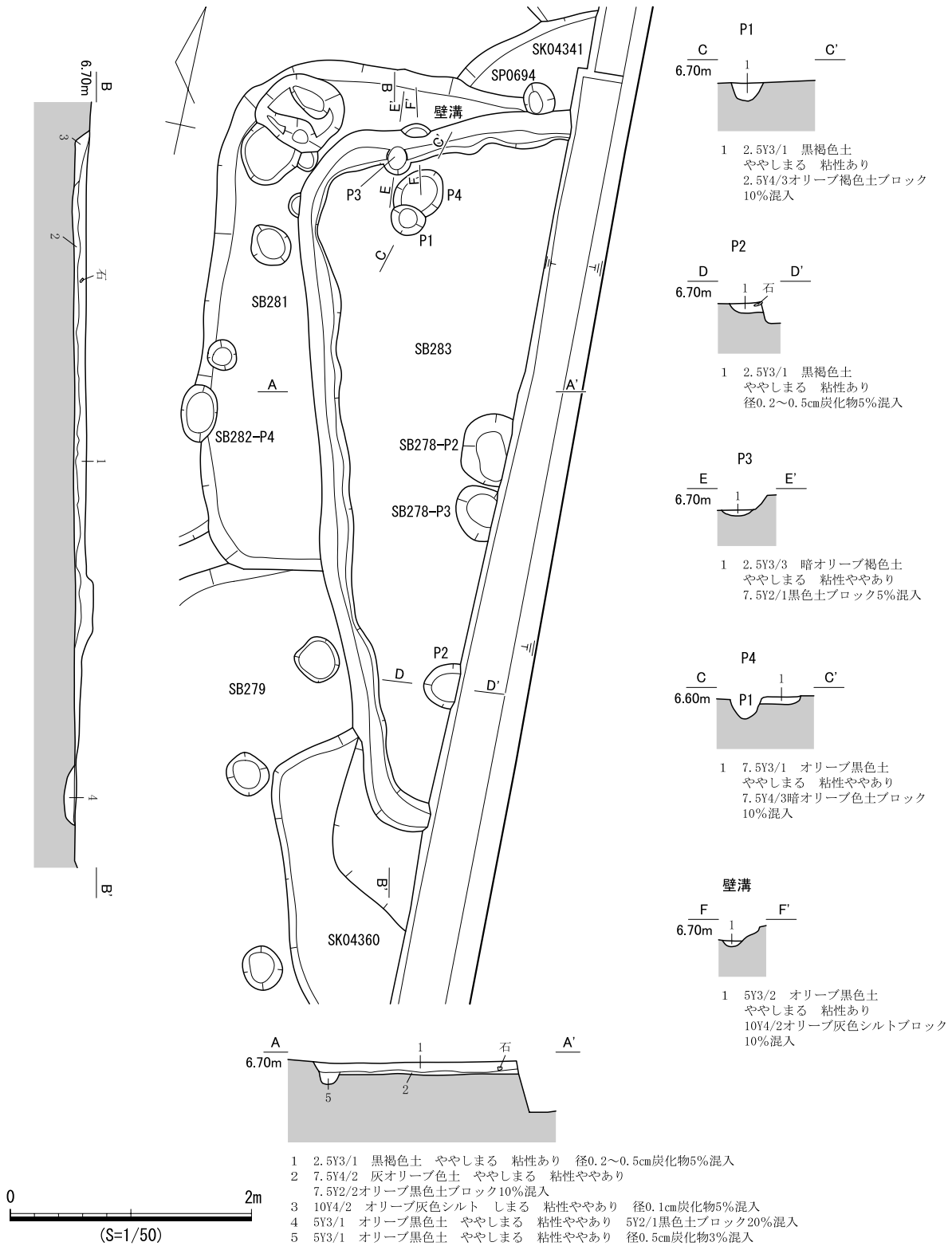


図 450 SB283 遺構図

SB284 (遺構：図451・452、遺物：図453)

検出状況 西部東側中央の堅穴住居跡密集域に位置する。北東側でSK04251に、中央でSD0971、SD0972に切られ、SB285を切る。平面形はやや不明瞭であった。

形状 南北長約4.6m、東西長約6.3mの隅丸長方形を呈する。東西辺は比較的直線的だが、南北辺

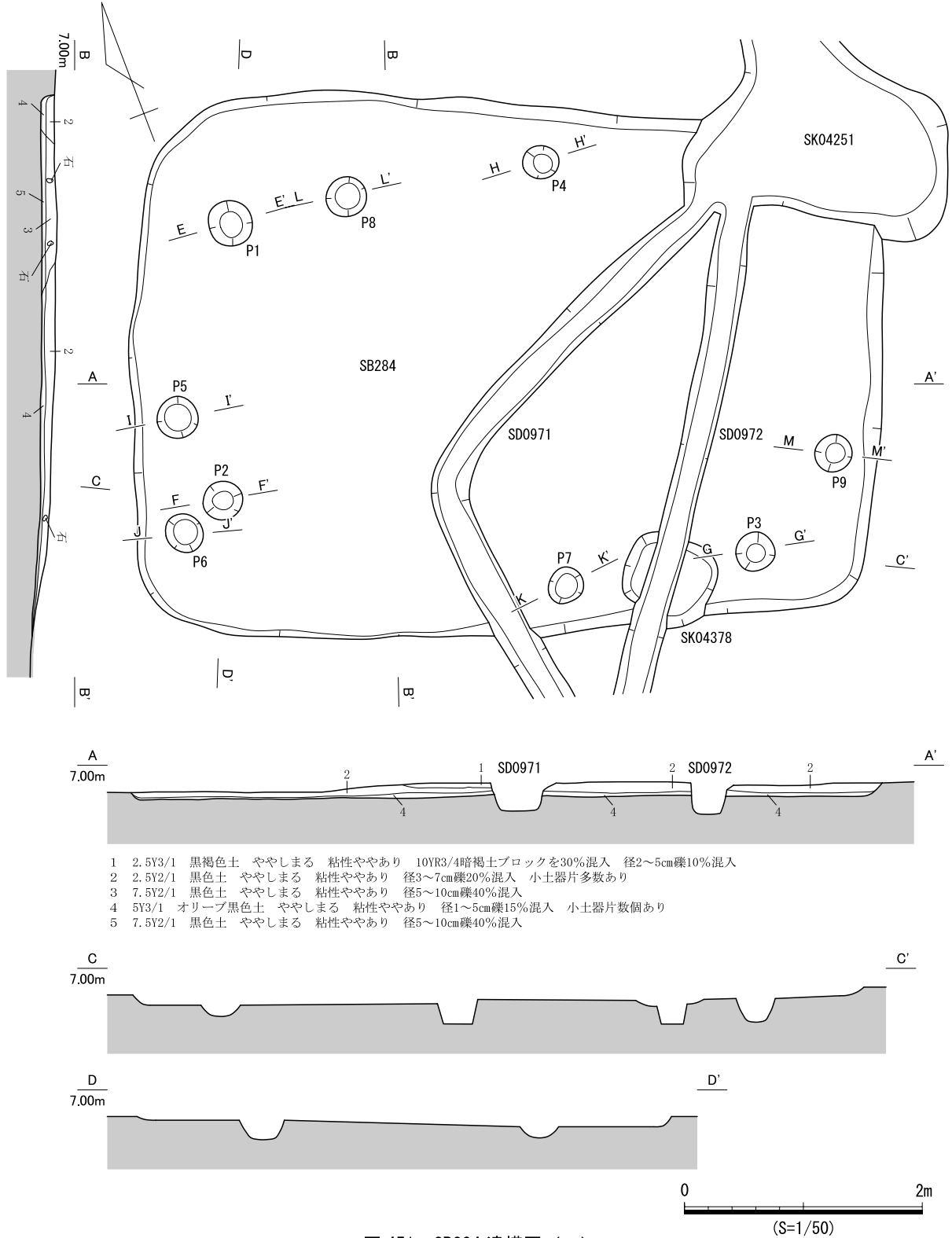


図451 SB284 遺構図(1)

はやや外側に膨らむ。西辺両端の隅部は弧状を呈する。深さは約0.1mで、壁面傾斜は急である。

埋土 5層に分層した。ほぼ水平な堆積状況であるが、礫の混入が多くブロック土が観察できることから、人為堆積と考える。

床面 ほぼ平坦であるが、南西側がやや低く、北東側が高い。貼床、硬化面は認められなかった。床面では小穴を9基検出した。P3はやや深いが、他は浅く底面は丸みを帯びている。平面的な位置関係からP1～P3の3基が柱穴の可能性はある。壁溝と炉跡は確認できなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器1,204点、小穴から土器23点が出土した。縄文土器やV期～VII期の土器片が出土した。

出土遺物 1218はVI期壺A類胴部。直線文と刺突文が交互に施文される。1219はV期甕A2b類。口縁部が強く屈折して、直立する。端部に刺突文、頸部以下に直線文、刺突文が施文される。1220はVI期～VII期甕A4類。口縁部が短くくの字形となり、端部がわずかにつまみ上げられ気味となる。円形刺突文が認められる。1221はVII期甕B類。口縁部が短く立ち上がり、端部は凹面を形成し、断続的な強いナデの痕跡が認められる。1222はV期甕B1b類。口縁部が頸部で屈折して、くの字形を呈する。端部には刺突文が認められる。胴部は強く膨らみ、内面には入念なケズリが認められる。1223はVI期～VII期甕C1類。口縁部がやや内湾する。1224～1226はVI期～VII期甕脚部。1224の脚部は内湾気味で、1226は外反気味である。1227はV期高坏B3a類。口縁部が強く外反し、端部がやや外方へ拡張される。脚部は付根から円錐形を呈し、裾部が強く外反する。1228は蓋。板状で口縁端部に一条の突帯が貼付される。胎土と調整からVI期～VII期と考えられる。1229は土製品で中央に穿孔がある。胎土、調整からVI期～VII期と考えられる。1230は把手。胎土、調整からVI期～VII期と考えられる。

時期 出土遺物の時期から、VII期と考えられる。

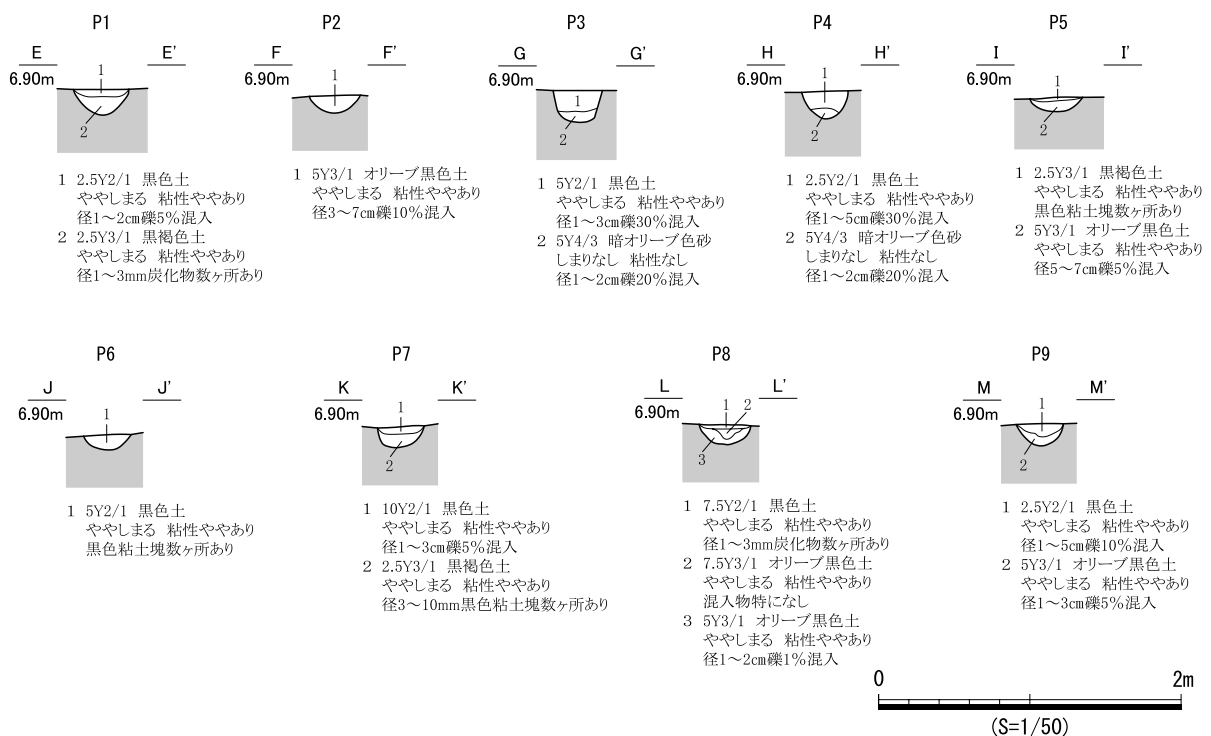


図 452 SB284 遺構図 (2)

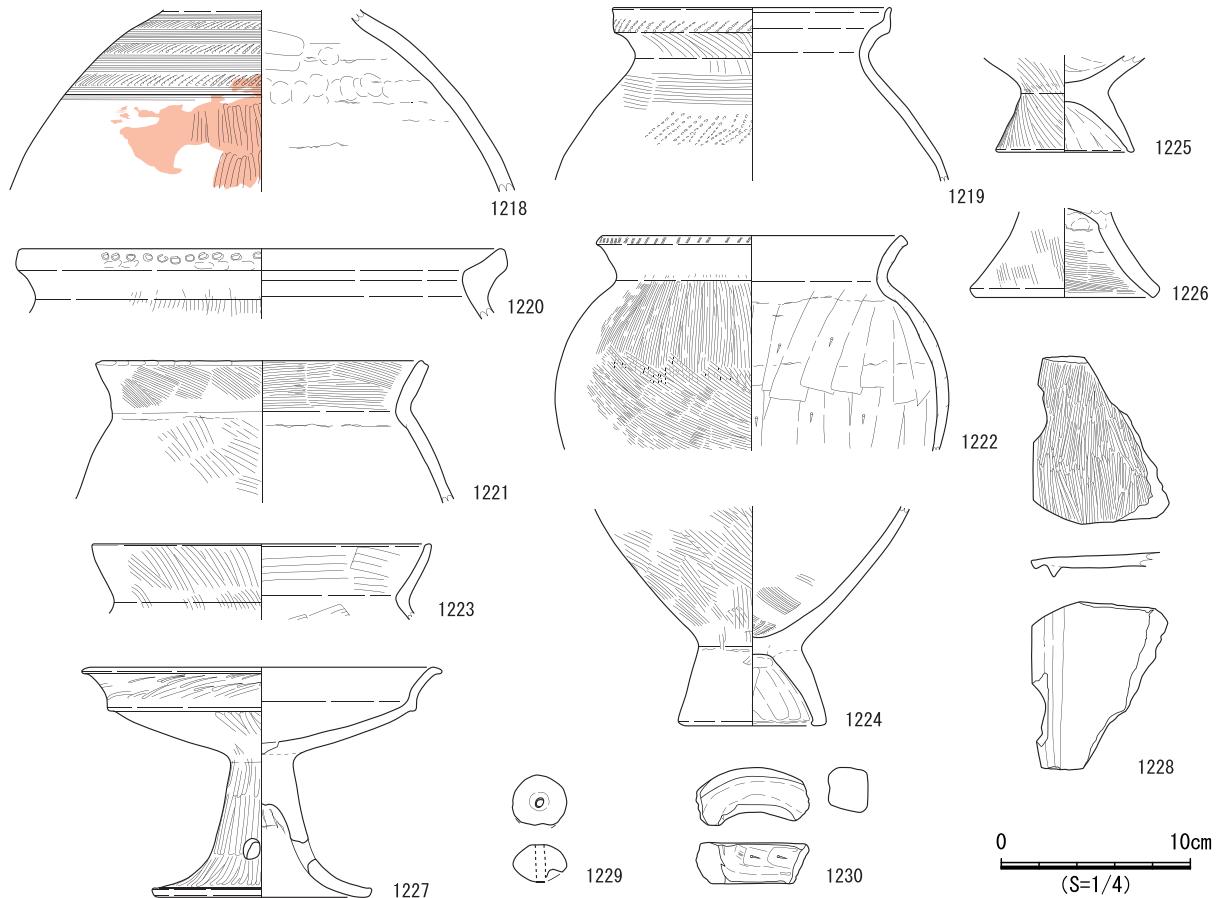


図 453 SB284 遺物実測図

SB285 (遺構：図 455、遺物：図 454)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。南西側の大半をSB284に、中央北側をSK04251に切られ、南東隅部は攪乱によって失われている。北辺と西辺及び北東隅部の平面形は、比較的明瞭であった。

形状 遺構の重複があるため全体の形状は不明だが、確認できた範囲から平面形は隅丸方形と考えられる。南北長、東西長ともに約4.2m、深さは約0.1mで、壁面傾斜は急である。

埋土 2層に分層した。埋土中に礫や土器片が多く混入する。また、灰オリーブ色砂がブロック状に混入することから、人為堆積と考えられる。

床面 ほぼ平坦であり、隣接するSB284のような傾斜はない。床面上にて4基の小穴を検出したが、いずれも柱痕跡は認められず、浅くて底面は丸みを帯びている。平面的な位置関係からP1～P3の3基が柱穴と考えた。なお、壁溝と炉跡ともに確認できなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器150点が出土したが、その多くはV期～VI期の小片である。

出土遺物 1231はV期～VI期鉢A1類。口縁部が短く直立し、頸部直下に直線文、刺突文を施文する。

時期 出土遺物の時期から、V期～VI期と考えられる。

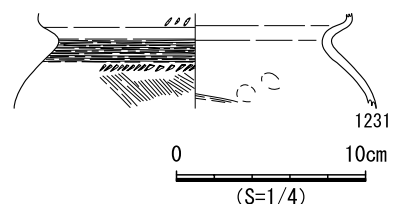


図 454 SB285 遺物実測図

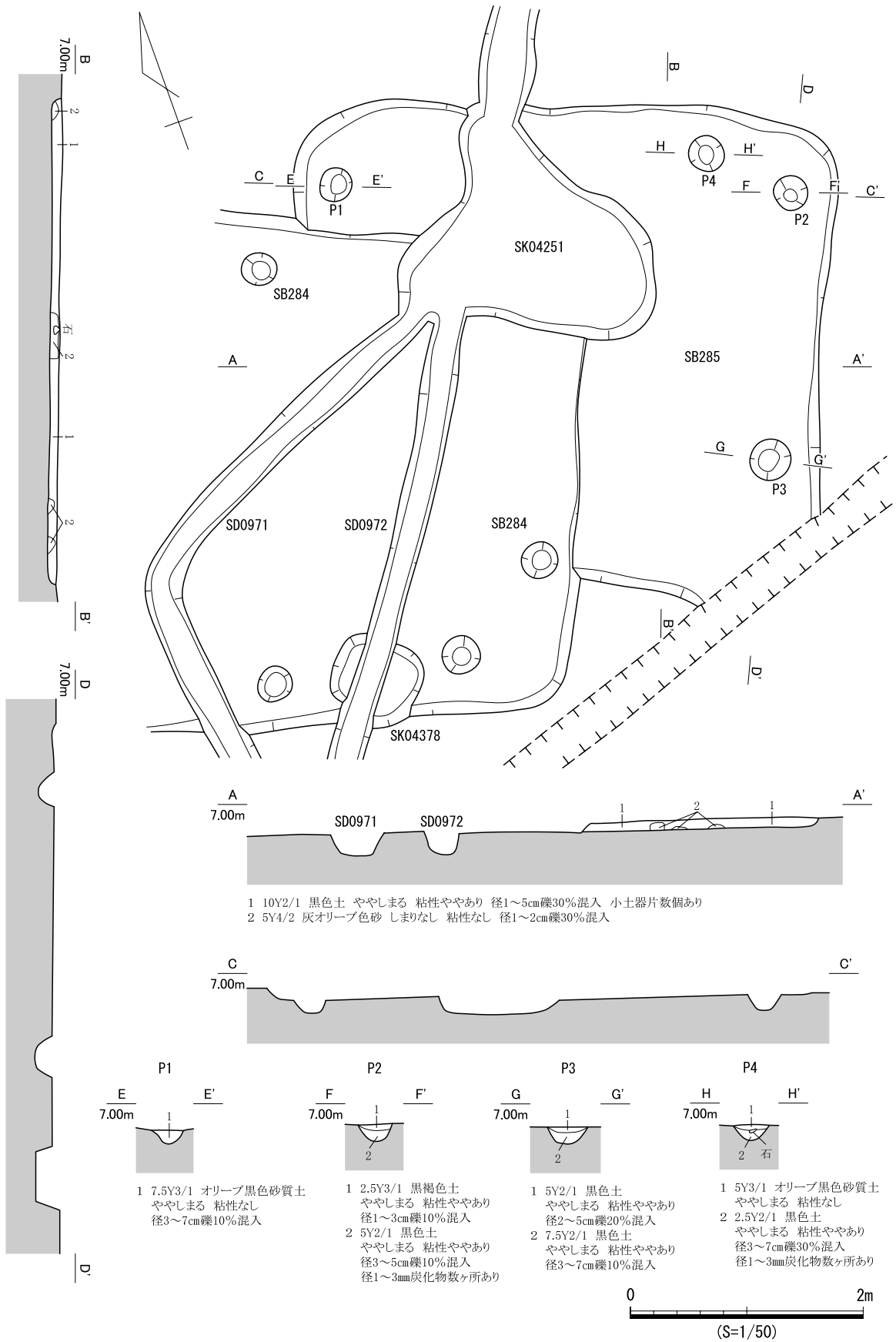


図 455 SB285 遺構図

SB286 (遺構：図 457、遺物：図 456)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。南隅部をSK04393及びSK04388に切られ、SB287を切っている。平面形はやや不明瞭であった。

形状 遺構の重複があるため全形は不明である。確認できた範囲から平面形は隅丸方形と考えられ、北西-南東長約4.9m、北東-南西長約4.5mである。北西辺及び北東辺は直線的だが、南西辺及び南東辺はやや膨らむ。深さは約0.2mで、壁面傾斜は急である。

埋土 3層に分層した。全体的には水平な堆積だが、層界に凹凸がみられるため、人為堆積の可能性はある。

床面 ほぼ平坦だが、貼床は確認できない。床面上にて6基の小穴を検出したが、いずれも柱痕跡は認められなかった。P1～P4は直径が小さく浅いため、柱穴の推定は困難である。P5とP6はやや直径が大きいものの、その性格は不明である。壁溝と炉跡は確認できなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器811点、小穴から土器41点が出土した。その多くがVI期～VII期の土器片である。

出土遺物 1232はVI期～VII期甕A4類。口縁端部がわずかに直立する。1233はVI期～VII期甕脚部。裾部に打ち欠きが認められる。

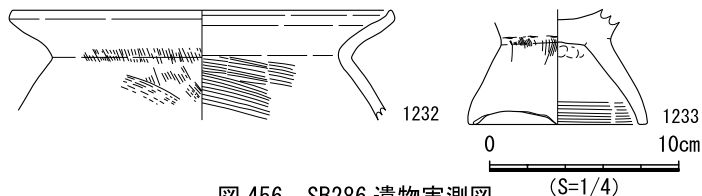


図 456 SB286 遺物実測図

時期 出土遺物の時期から、VI期～VII期と考えられる。

SB287 (遺構：図 458、遺物：図 459)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。南東側をSB286に大きく切られる。平面形はやや不明瞭であった。

形状 遺構の重複があるため全形は不明だが、確認できた範囲から平面形は隅丸方形と考えられる。南北長約4.8m、東西長約4.5mである。西辺は直線的だが北辺は東にむかうにつれて北へ広がり、北東隅部は大きく丸みを帯びる。深さは約0.1mで、壁面傾斜は急である。

埋土 3層に分層した。大部分は黒色土に土器片と小礫を含む。オリーブ黒色砂がブロック状に混入することや、重複する遺構と時期が近似するため、人為堆積と考えられる。

床面 ほぼ平坦だが、貼床は確認できない。床面上にて4基の小穴を検出したが、いずれも柱痕跡は認められなかった。P1、P2は直径が大きく、P2付近の床面からは土器がまとまって出土した。平面的な位置関係からP1、P3が柱穴の可能性はある。壁溝と炉跡は確認できなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器460点、小穴から土器5点が出土した。P2付近の埋土からVI期の壺(1237、1239、1240)、鉢(1238)、甕(1234、1235)がまとまって出土した。

出土遺物 1234、1235はVI期甕A4類。口縁端部がわずかに屈曲する。1234の胴部の膨らみはなだらかである。1235は胴部上半に刺突文を施文する。1236はVII期甕B4類。口縁部がくの字に外反し、端部を丸くおさめる。1237、1239はVI期壺I類。1237は胴部が球形で、入念なミガキが認められる。1239は口縁部が短く立ち上がり、胴部は偏平である。1238はVI期鉢A3a類。外面に直線文と刺突文

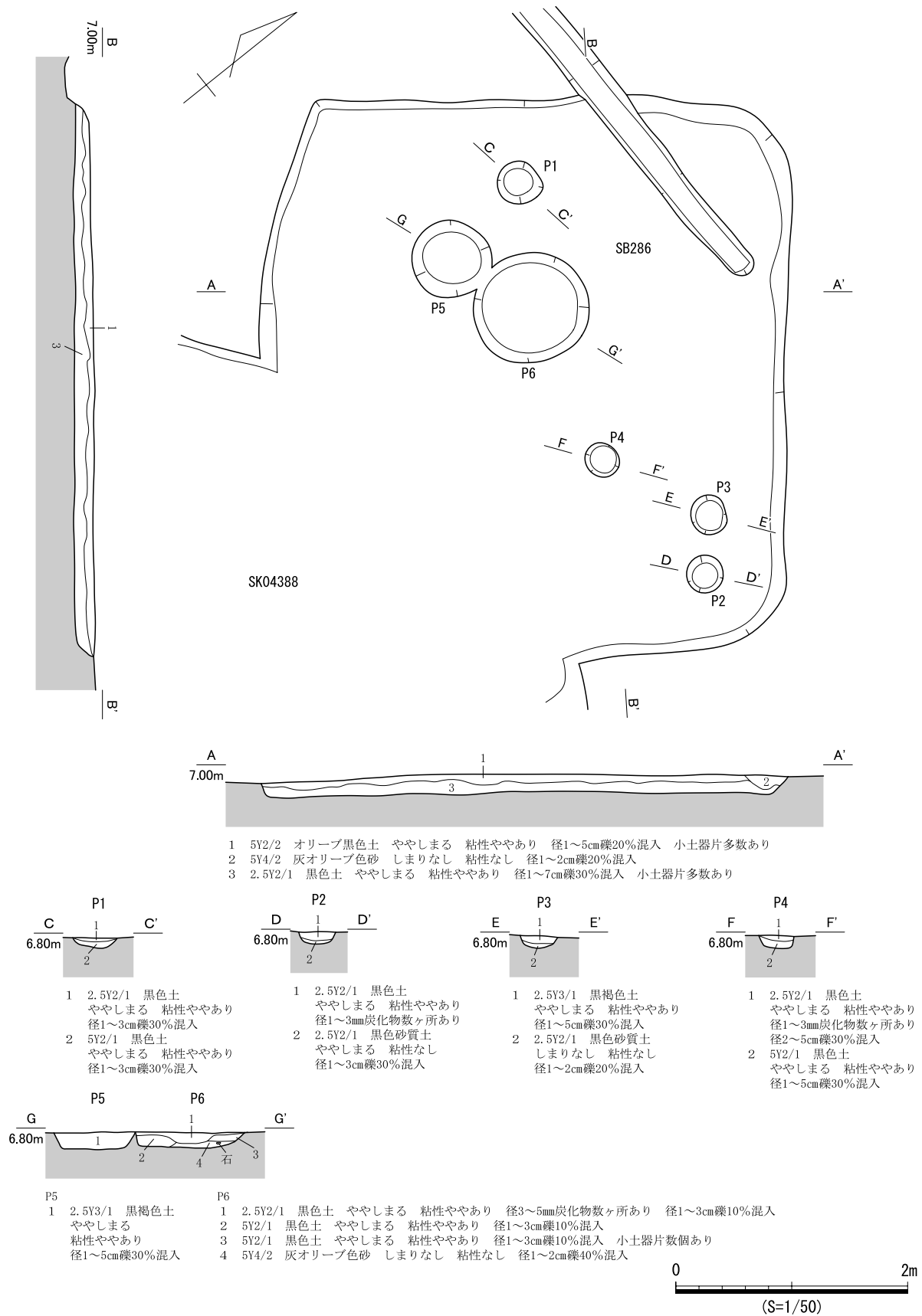


図 457 SB286 遺構図

を施す。1240はVI期壺J1類。口縁部が直立し、胴部は球形である。

時期 P2付近の床面上の遺物の時期から、VI期と考えられる。

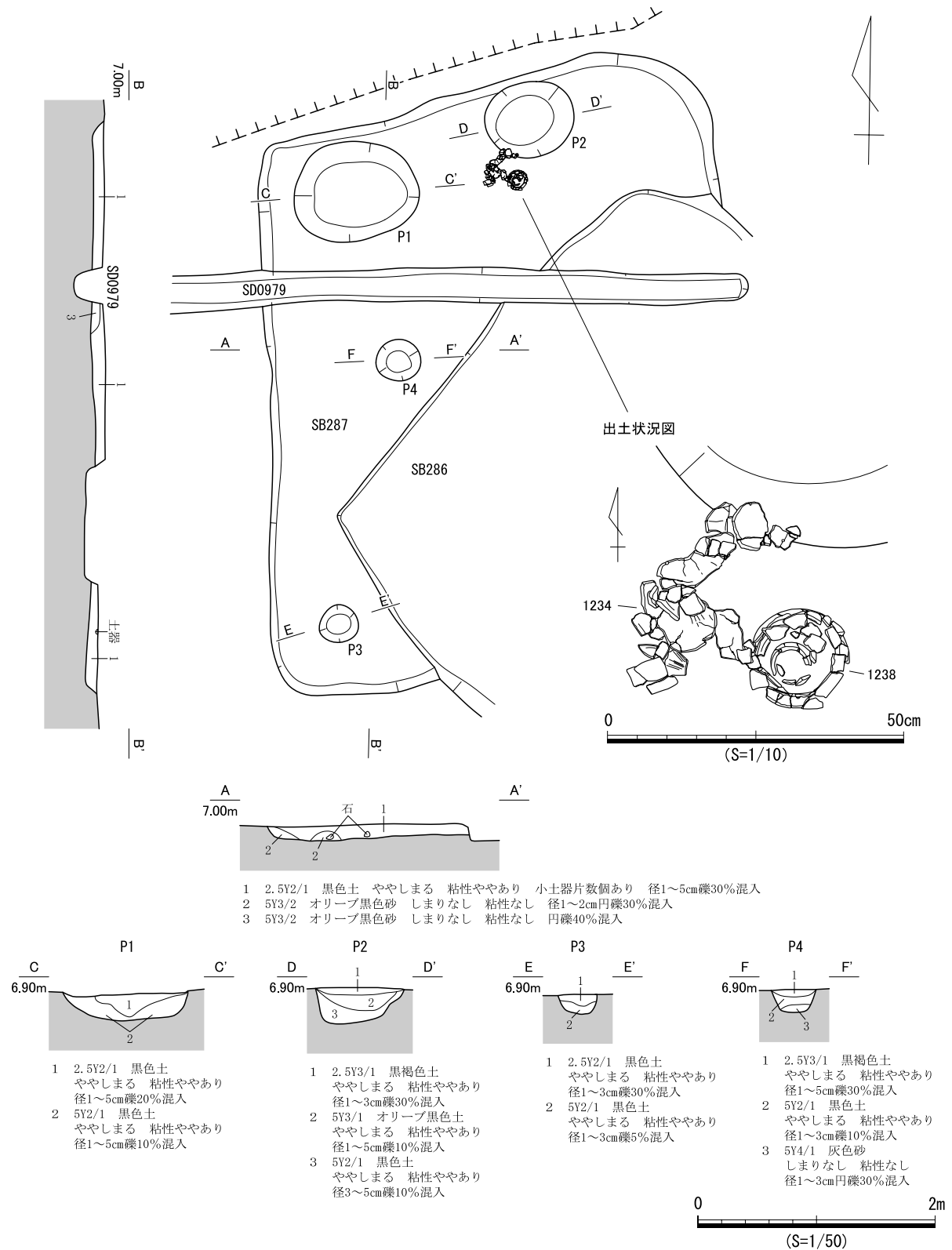


図 458 SB287 遺構図

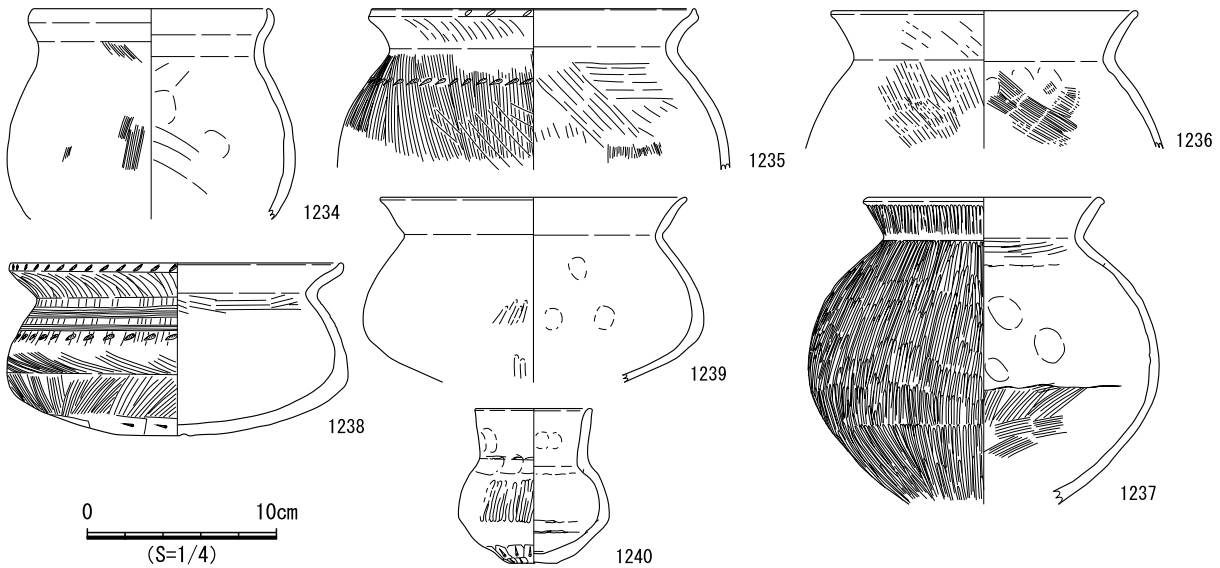


図 459 SB287 遺物実測図

SB288 (遺構：図 460)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。北西側をSK04246に切られ、南側でSB289を切る。また北側及び東側は攪乱により滅失する。平面形は明瞭であった。

形状 北側と東側を攪乱によって失われているため全形は不明だが、確認できた範囲から平面形は隅丸方形と考えられる。南辺、西辺ともに直線的だが、南西隅部はやや丸みを帯びる。深さは約0.1mで、壁面傾斜は緩やかである。

埋土 3層に分層した。大部分は黒色土で、土器片や小礫を含む。オリーブ黒色砂がブロック状に混入することから、人為堆積と考えられる。

床面 ほぼ平坦だが、貼床は確認できない。床面上にて4基の小穴を検出した。その埋土は単層から2層に分層でき、いずれも柱痕跡は認められず掘形が浅いことから、柱穴の想定は困難である。壁溝と炉跡は確認できなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器102点、小穴から土器7点が出土した。Ⅵ期～Ⅶ期の土器片が多く出土し、Ⅶ期のものが多い。しかし、いずれも小片であり図示しなかった。

時期 出土遺物の時期から、Ⅶ期と考えられる。

SB289 (遺構：図 461)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。北側をSB288に切られ、南側でSK04281を切る。東側は攪乱により滅失する。平面形は明瞭であった。

形状 遺構の重複や攪乱のために全形は不明だが、確認できた範囲から平面形は隅丸方形と考えられる。西辺はやや外側に膨らみ、南辺は蛇行している。深さは約0.1mで、南壁面の傾斜は比較的急である。

埋土 2層に分層した。ほぼ水平堆積であり、その成因は不明である。

床面 ほぼ平坦だが、貼床は確認できない。床面上にて3基の小穴を確認し、平面的な位置関係からP1の1基が柱穴の可能性がある。壁溝と炉跡は確認できなかった。

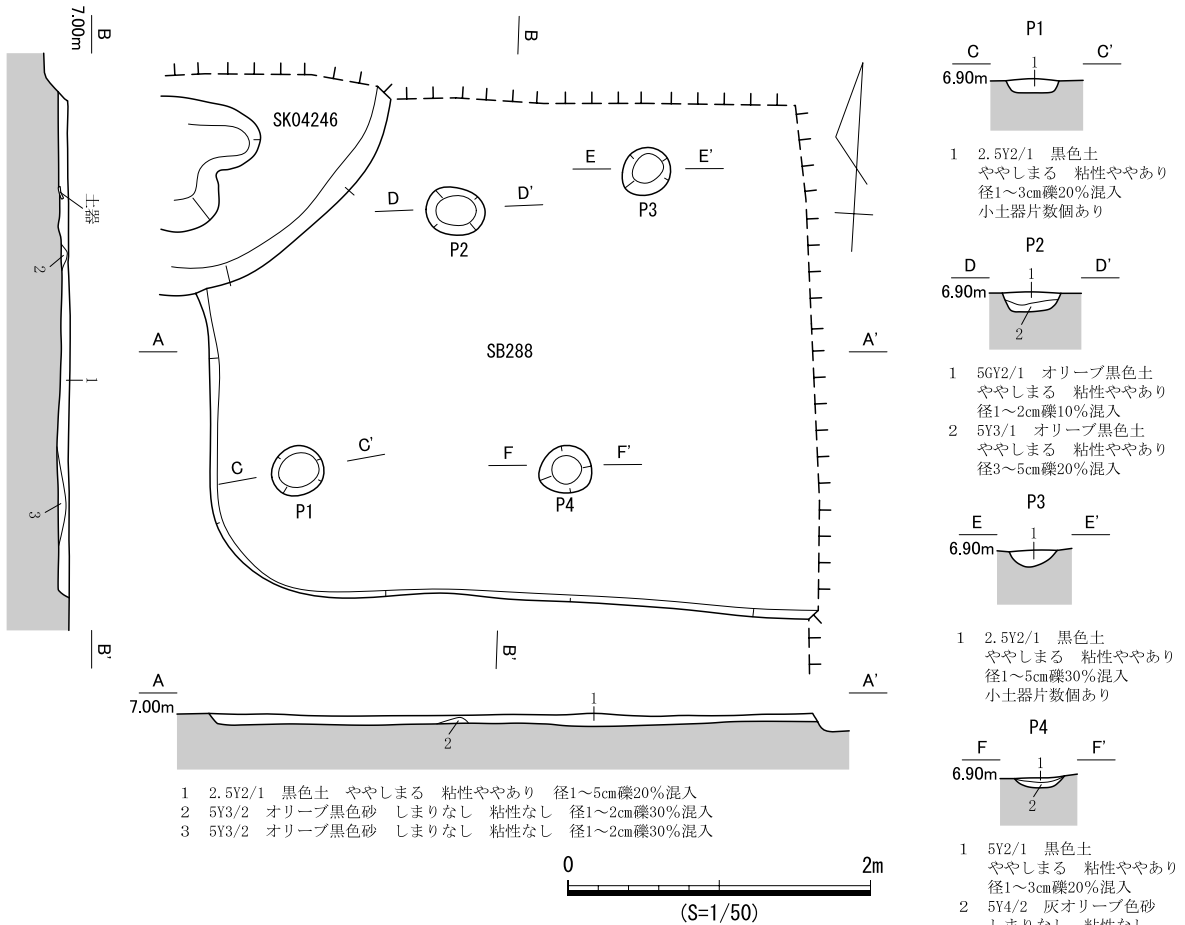


図 460 SB288 遺構図

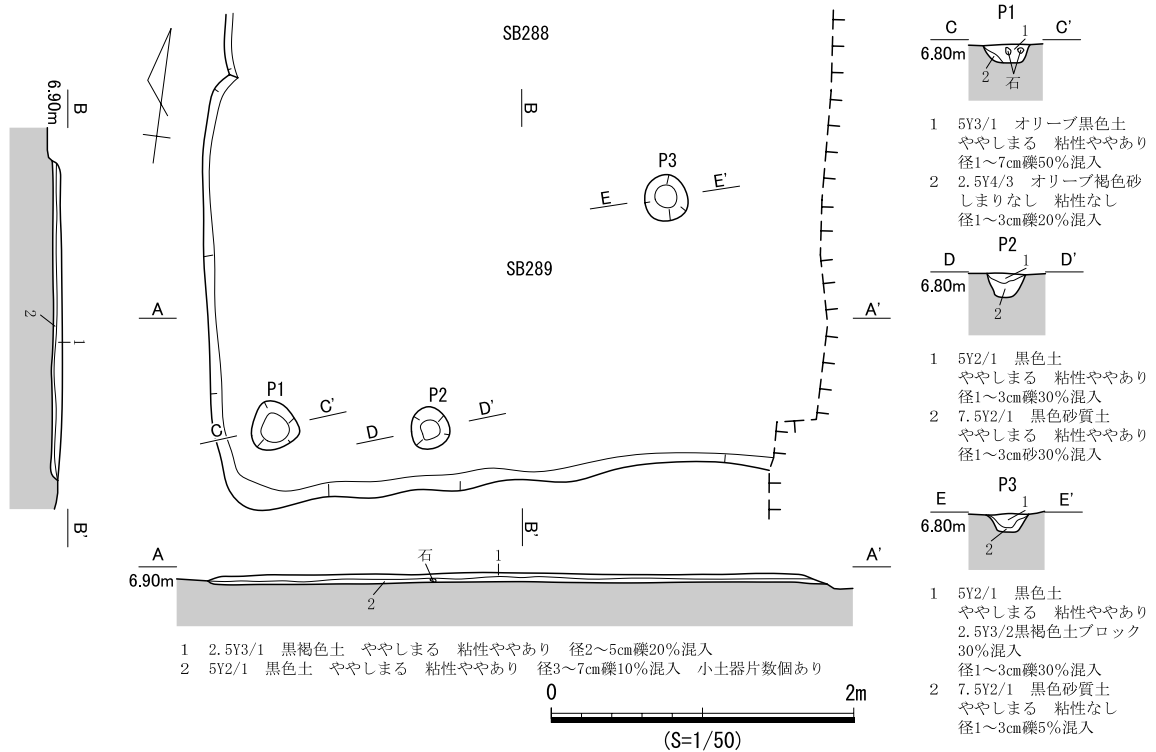


図 461 SB289 遺構図

遺物出土状況 埋土中から土器308点、小穴から土器26点が出土した。土器は大半がVI期～VII期のものであり、特にVII期が多い。しかし、いずれも小片であり図示しなかった。

時期 出土遺物の時期とVII期のSB288に切られることから、VII期と考えられる。

SB290 (遺構：図463)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。東側の一部をSK04312、北側をSK04300とSD0974、西側の一部をSK04297に切られる。また北側を攪乱により滅失する。平面形は比較的明瞭であった。

形状 北側を攪乱に切られるため全形は不明だが、確認できた範囲から隅丸方形と考えられる。深さは約0.1mで、壁面傾斜は緩やかである。

埋土 単層で小礫の混入が目立つが、その成因は不明である。

床面 ほぼ平坦だが、貼床は確認できない。床面上にて6基の小穴を検出したが、いずれも柱痕跡は認められなかった。柱穴の推定は困難であるが、P3とP4は掘形がやや深いことから2本柱建物の可能性もある。なお、壁溝と炉跡は確認できなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器57点、小穴から土器33点が出土した。VI期～VII期の土器片が大半だが、いずれも小片であり図示しなかった。

時期 出土遺物の時期から、VII期と考えられる。

SB291 (遺構：図464、遺物：図462)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域の西に位置し、南側でSB292を切る。平面形はやや不明瞭であった。

形状 SD0982とSD0983が埋土上層から掘り込まれているが、ほぼ全形を確認した。平面形はほぼ正方形を呈し、南北長約4.3m、東西長約は4.2mである。各隅部はやや丸みを帯びるが、四辺はそれぞれ直線的である。深さは約0.1mで、壁面傾斜は急である。

埋土 2層に分層したが、埋土2層は部分的な堆積にとどまる。小礫や土器小片の混入が認められるが、その成因は不明である。

床面 ほぼ平坦であり、貼床は確認できない。床面上にて4基の小穴を検出し、P2では柱痕跡と考えられる堆積を確認した。しかし、柱穴配置の推定は困難である。なお、壁溝と炉跡は確認できなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器534点、小穴から土器81点が出土した。VI期～VII期のものが多い。

出土遺物 1241、1242はVII期襦脚部。いずれもP1出土で、1242は脚部が短くハの字に開く。

時期 P1出土遺物の時期から、VII期と考えられる。

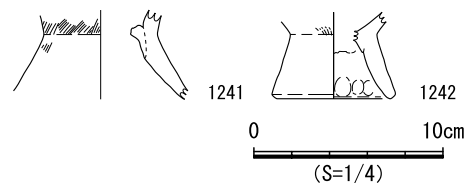


図462 SB291 遺物実測図

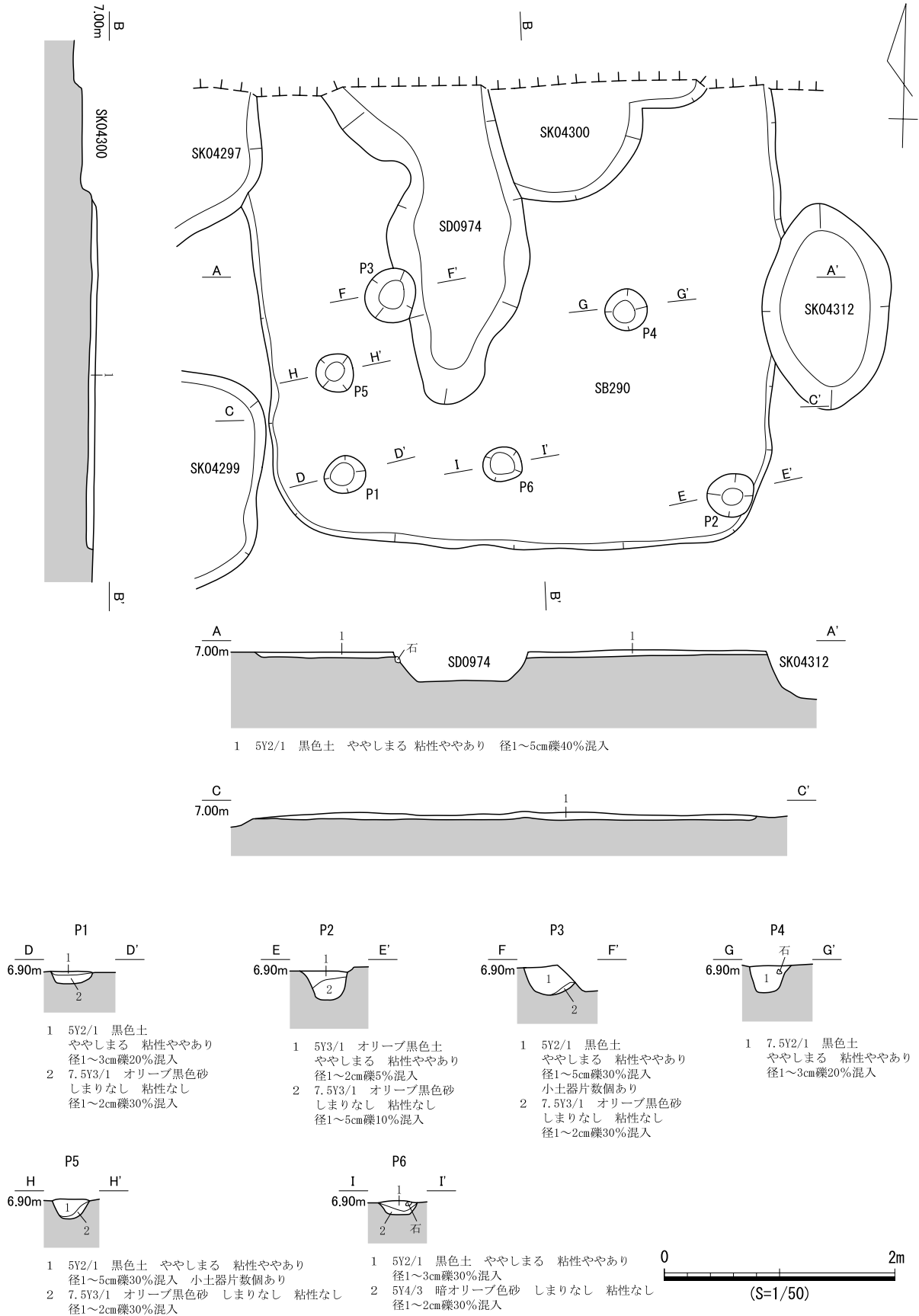


図 463 SB290 遺構図

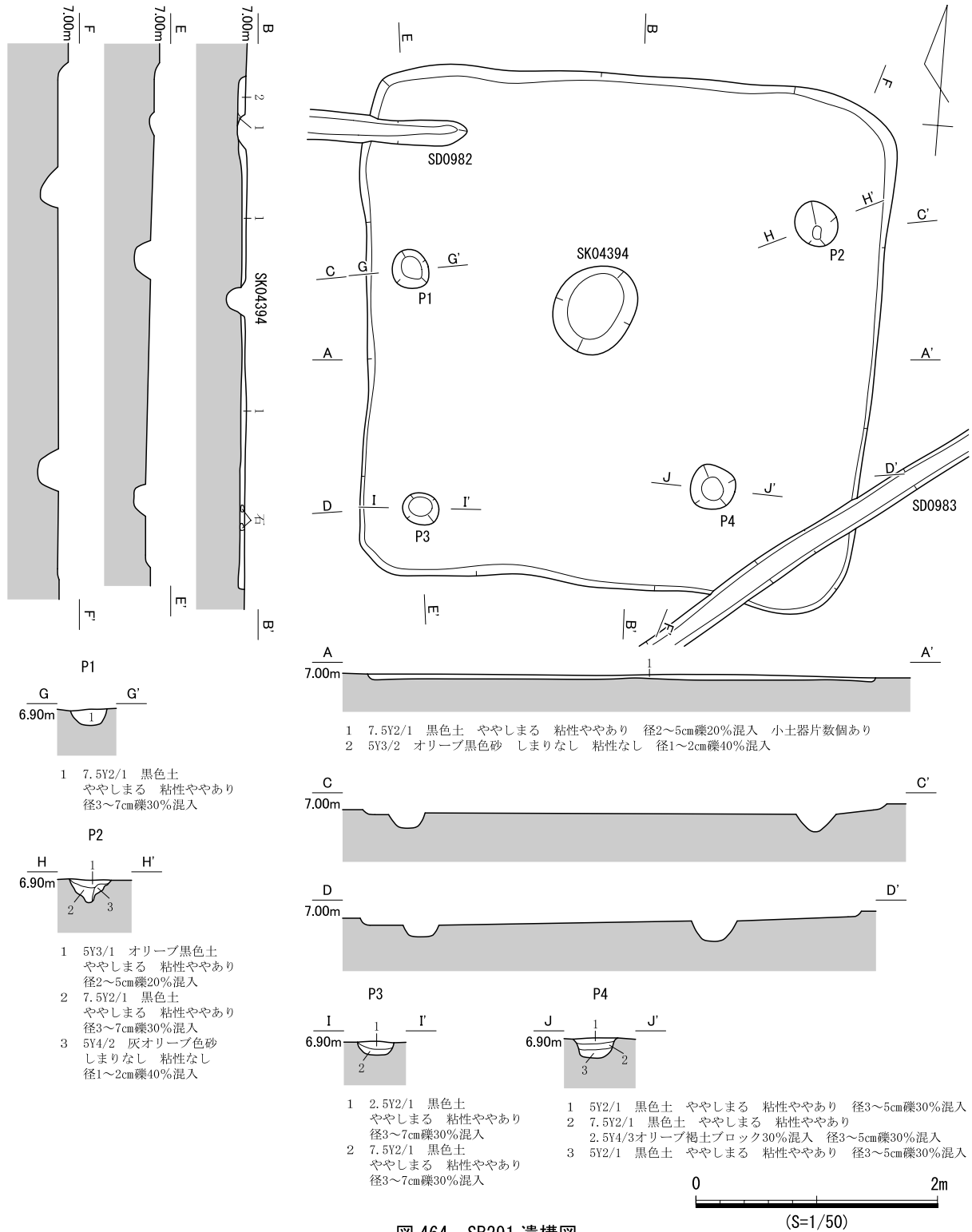


図 464 SB291 遺構図

SB292 (遺構：図 465・466、遺物：図 467)

検出状況 西部東側中央の竪六住居跡密集域の西に位置する。北東側をSB291に切られ、南西側でSB293、南東側でSK04396を切る。平面形はやや不明瞭であった。

形状 北東側の一部をSB291に切られるが、ほぼ全形を検出した。平面形は、南東隅部が東に張り出

す不整形を呈する。南北長約4.3m、東西長約5.2mである。東辺以外の三辺は直線的だが、東辺だけは南半が東側へ大きく張り出す。南辺両端隅部は、やや丸みを帯びる。深さは約0.2mで、壁面

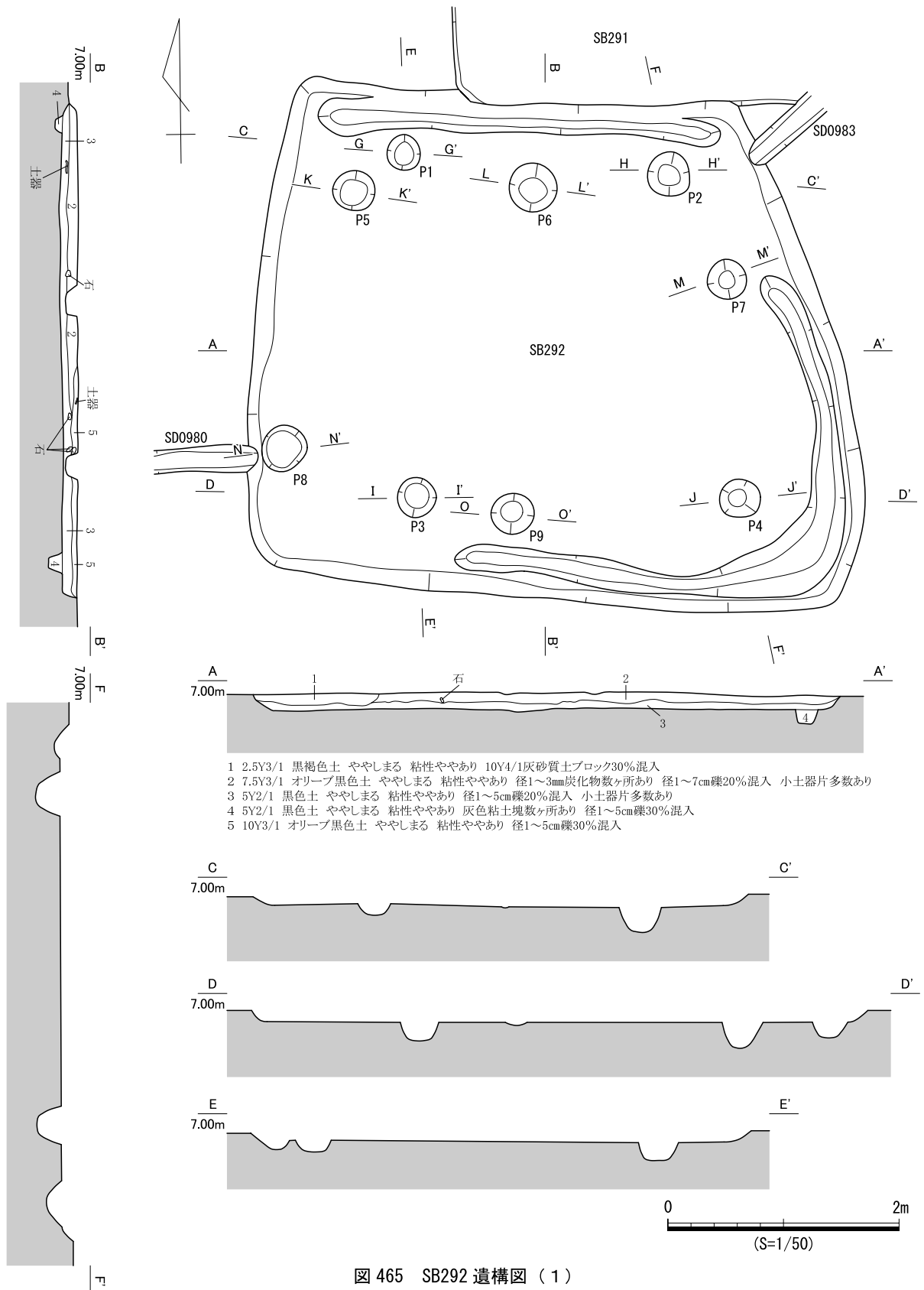


図 465 SB292 遺構図 (1)

傾斜は比較的急である。

埋土 4層に分層した。全体的に礫や小土器片を多く含む。ブロック土の混入は一部にしか確認できないが、層界に凹凸が認められることから人為堆積と考えられる。

床面 平坦でほぼ水平だが、貼床は確認できない。床面上にて9基の小穴を検出したが、いずれも柱痕跡は認められなかった。P2、P4、P7はやや深く、壁面の傾斜が急である。平面的な位置関係からP1～P4の4基が柱穴の可能性もある。また、北辺と南辺中央から東辺中央にかけて、幅0.20m～0.25m、深さ0.05m～0.12mの壁溝を確認した。なお、炉跡は確認できなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器2,821点、小穴から土器131点、壁溝から土器199点が出土した。V期～VII期のものが多い。

出土遺物 1243はI期壺胴部。粗い直線文が施文される。1244はV期甕B1a類。口縁部が短くくの字に屈折し、胴部は肩部の張りが強い。内面にはケズリが認められる。1245はV期～VI期の甕A3類。口縁部が直立して、直線文を施文する。頸部直下には刺突文が認められる。1246はVI期～VII期壺H類胴部。1247はIV期高坏A類。1248はVI期～VII期甕E類脚部。裾部に打ち欠きが認められる。1249、1250は小片だが、V期壺K類胴部と考えられる。いずれも同心円状のスタンプ文が認められる。1249はスタンプ文をヘラ描き沈線によって連結して、双頭渦文状の文様構成である。

時期 VII期のSB291より先行するが、出土遺物の時期からV期～VII期と考えられる。

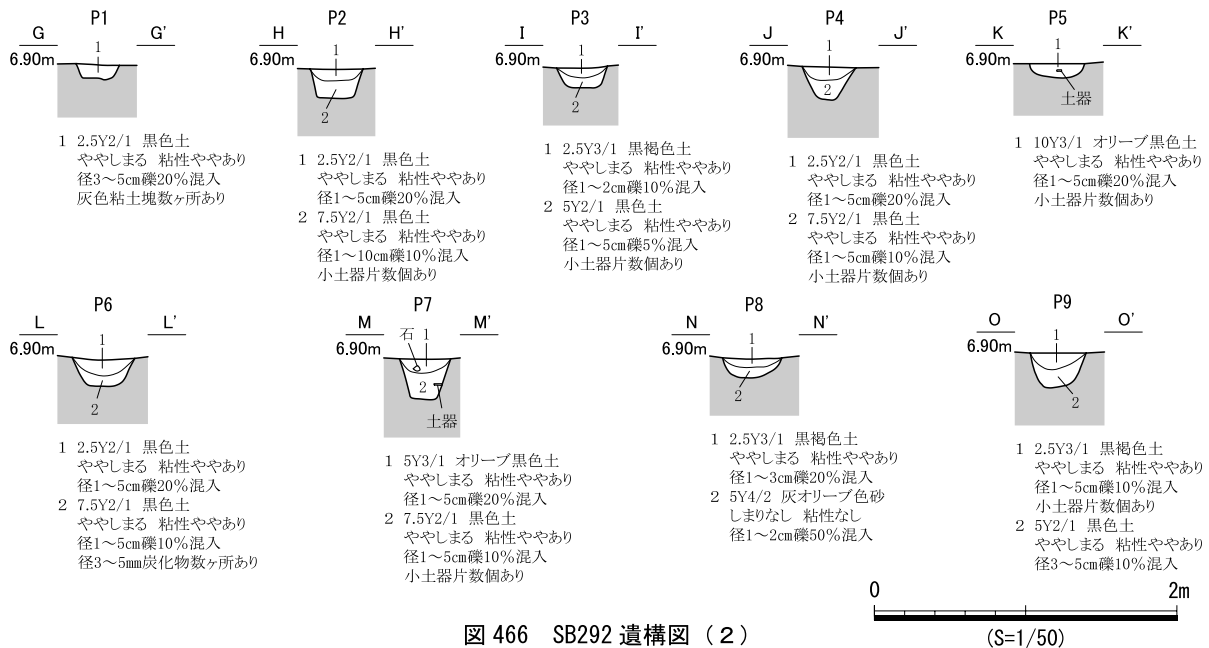


図 466 SB292 遺構図 (2)

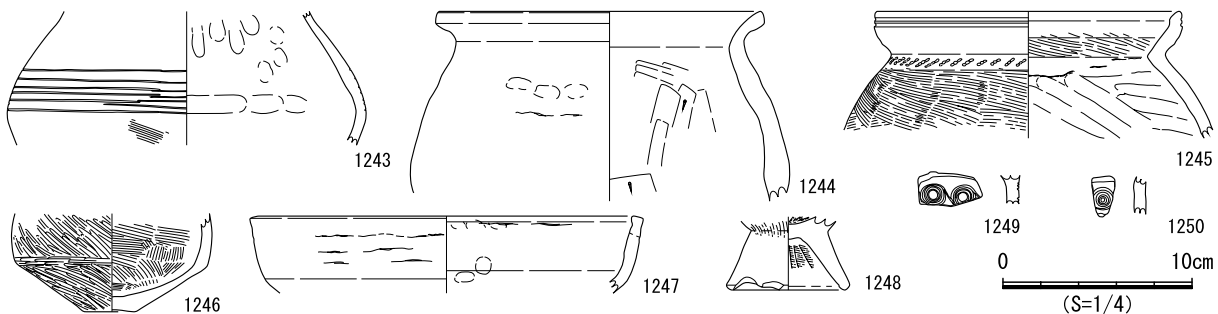


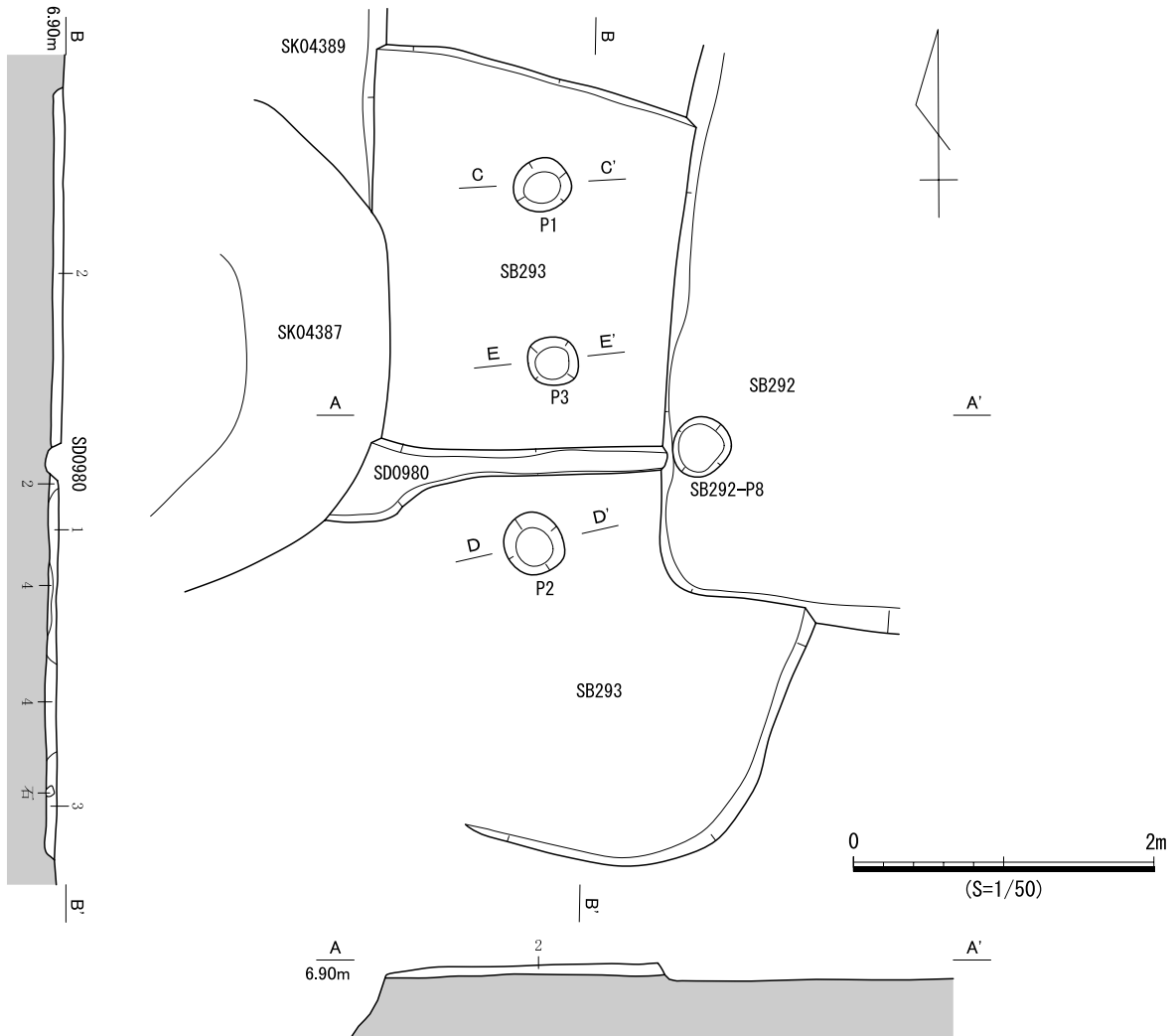
図 467 SB292 遺物実測図

SB293 (遺構：図468、遺物：図469)

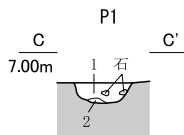
検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域の西に位置する。北東側をSB292に切られ、北西側はSK04389、SK04387に切られる。平面形はやや不明瞭であった。

形状 遺構の重複が著しく全形は不明であるが、およそ方形を呈し、南北長約5.1m、東西残存長約2.1mを測る。深さは約0.1mで、壁面傾斜は比較的急である。

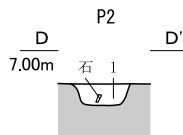
埋土 4層に分層した。小礫や炭化物の混入が目立つ。埋土4層がブロック状に混入することから、人為堆積と考えられる。



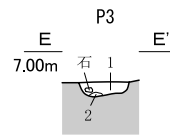
- 1 5Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径3~5mm炭化物数ヶ所あり 径1~2cm礫5%混入
- 2 2.5Y3/1 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり 小土器片数個あり 径3~5mm炭化物数ヶ所あり
- 3 2.5Y3/1 黒褐色砂質土 ややしまる 粘性なし 径1~2cm礫5%混入
- 4 2.5Y3/2 黒褐色砂 しまりなし 粘性なし 径1~3cm礫30%混入



- 1 2.5Y2/1 黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径1~3mm炭化物数ヶ所あり 径1~5cm礫20%混入
- 2 5Y4/2 灰オリーブ色砂 しまりなし 粘性なし 径1~3cm礫30%混入



- 1 5Y2/1 黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径1~3mm炭化物数ヶ所あり 径1~5cm礫5%混入



- 1 2.5Y2/1 黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径3~5mm炭化物数ヶ所あり 小土器片数個あり 径1~5cm礫30%混入
- 2 5Y4/2 灰オリーブ色砂 しまりなし 粘性なし 径1~3cm礫30%混入

図468 SB293 遺構図

床面 ほぼ平坦だが、南西側がわずかに低くなる。床面上にて3基の小穴を検出し、いずれも底面は平坦で、柱痕跡は認められなかった。住居の全形が不明であるため、平面的な位置関係から柱穴の位置を推定するのは困難である。

遺物出土状況 埋土中から土器196点、小穴から土器20点が出土した。

そのうち、P1からVI期器台(1251)が出土した。

出土遺物 1251はVI期器台B類脚部。端部が面取りされている。

時期 P1出土遺物の時期から、VI期と考えられる。

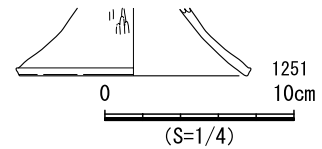


図 469 SB293 遺物実測図

SB294 (遺構：図 471、遺物：図 470)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域の西側に位置する。東側をSK04414、SK04409、SB296に切られ、北側でSB295を切る。

形状 遺構の重複が著しいため全形は不明だが、確認できた範囲から平面形は隅丸方形と考えられる。南北長約5.5mで、確認できた各辺は直線的である。深さは約0.1mで、壁面傾斜は急である。

埋土 2層に分層し、小礫や土器片が混入する。広い範囲の埋土が単一層であることや、重複する遺構の時期が近似するため、人為堆積と考えられる。

床面 ほぼ平坦であり、貼床は確認できなかった。床面から5基の小穴を検出したが、いずれも柱痕跡は認められなかった。近接するP3、P4、P5の3つはいずれも掘形が深くなるが、その性格は不明である。平面的な位置関係からP1とP2が柱穴の可能性があるものの、東側に位置するSB296とSK04414底面においてそれらに対応する小穴は確認できなかった。なお、壁溝と炉跡は確認できなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器1,362点、小穴から土器20点が出土した。土器の多くはVI期～VII期に属する。

出土遺物 1252はV期甕A2b類。口縁部が短く直立して、刺突文が認められる。1253はVI期甕D1b類。口縁部が短く直立して、刺突文が認められる。1254はVI期鉢A3a類。口縁端部が尖り気味で、頸部直下に直線文と刺突文を施文する。1255はVI期～VII期甕脚部。短くハの字に開く。裾部に打ち欠きが認められる。1256はVII期高坏G3b類。幅広の多条沈線が認められる。1257、1258はVII期高坏D4類。多条沈線、山形文を交互に施文する。1259はV期高坏脚部。複合鋸歯文が認められる。

時期 出土遺物の時期から、VI期～VII期と考えられる。

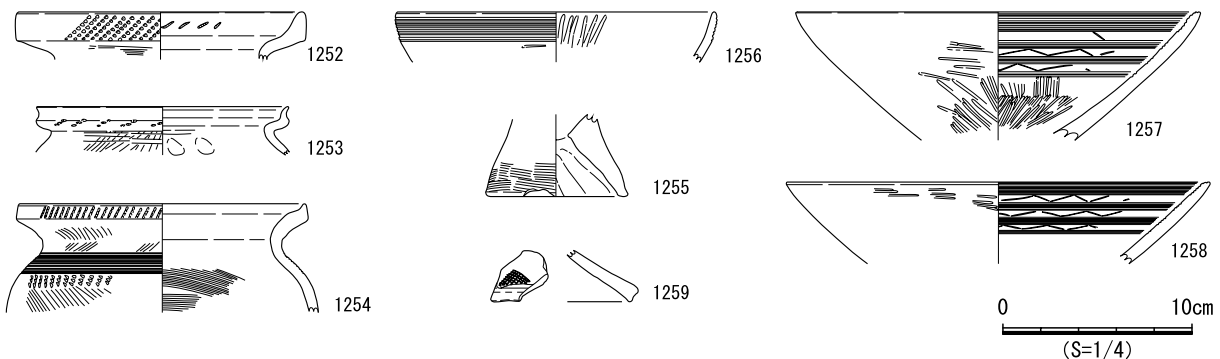


図 470 SB294 遺物実測図

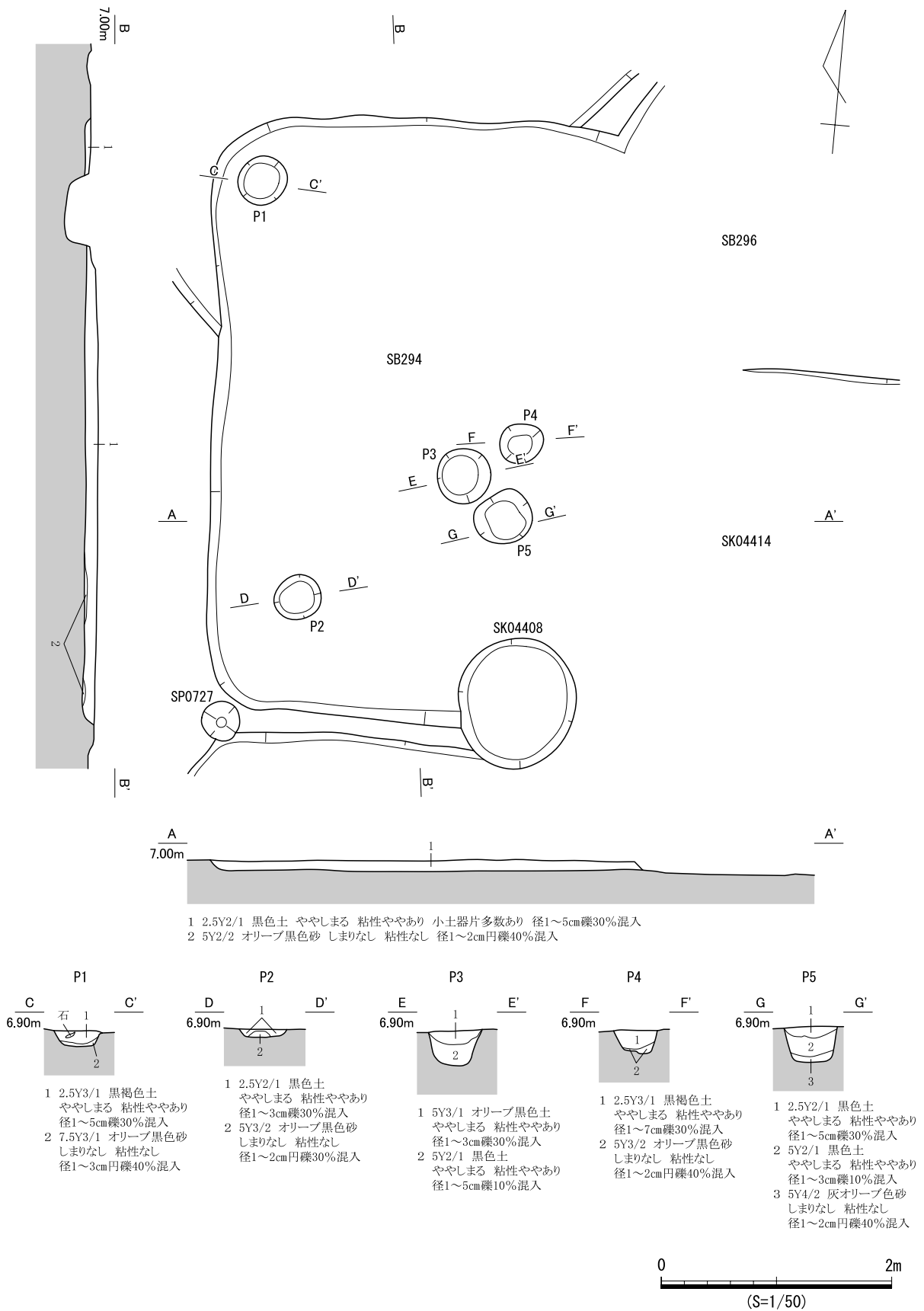


図 471 SB294 遺構図

SB295 (遺構：図472・473、遺物：図474)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域の西に位置する。SB294に南隅部を、SK04302に北隅部を切られる。平面形はやや不明瞭であった。

形状 遺構の重複があるため全形は不明だが、確認できた範囲から平面形は隅丸長方形と考えられる。各辺は直線的だが、北東辺は外側にやや膨らむ。北西-南東長約6.2m、北東-南西長約5.2mである。壁溝は確認できなかった。深さは約0.1mで、壁面傾斜は緩やかである。

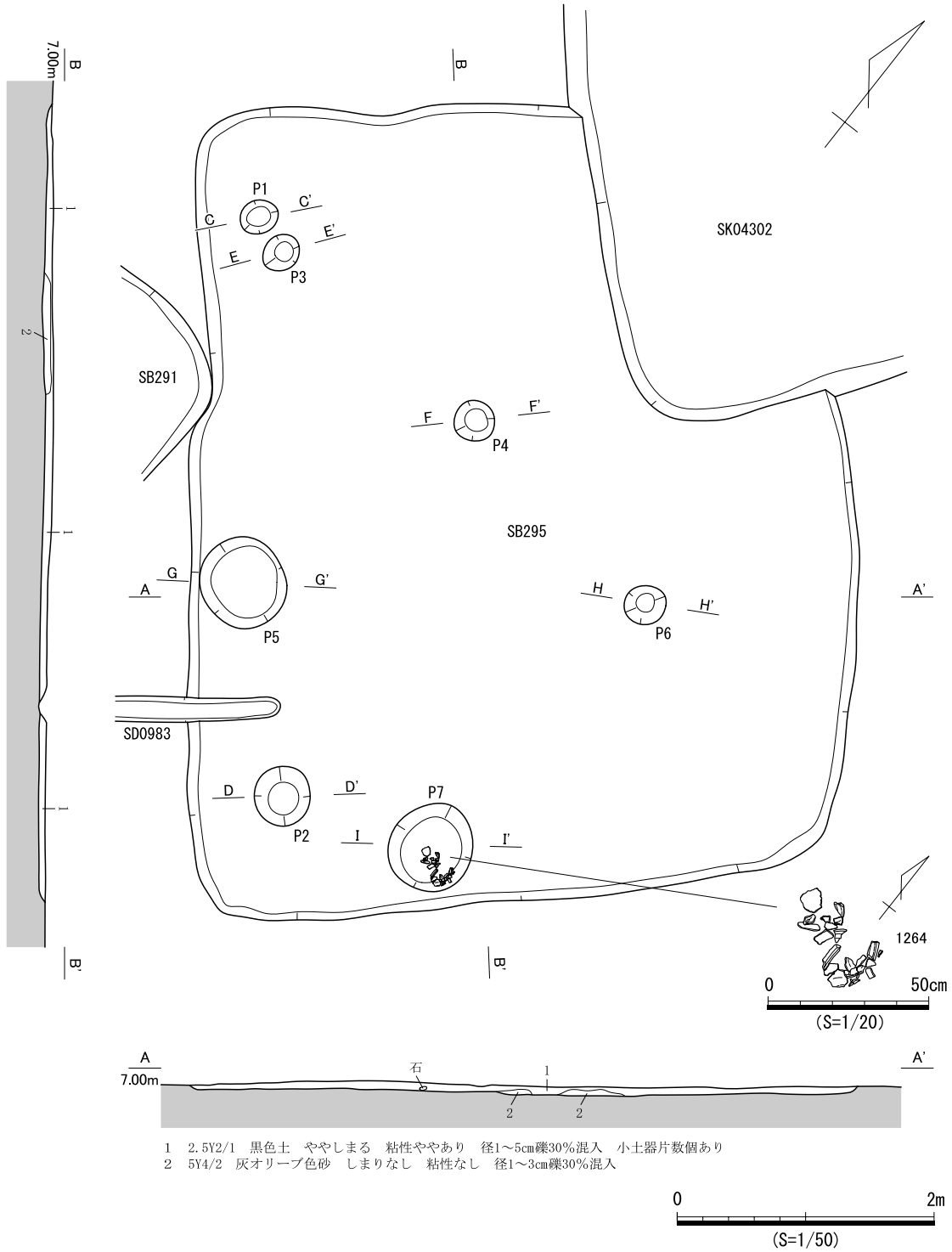


図472 SB295 遺構図(1)

埋土 2層に分層した。埋土中全般に小礫、土器片が多く混入する。遺構の重複が著しく、2層がブロック状に入ることから、人為堆積の可能性が高い。

床面 ほぼ平坦で貼床は確認できなかった。床面から7基の小穴を検出したが、いずれも柱痕跡は認められなかった。P2は掘形が深く、3層に分層できるが、それ以外の小穴はいずれも浅い。平面的な位置関係からP1（もしくはP3）、P2の2基が柱穴の可能性ある。壁溝と炉跡は確認できなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器633点、石器類1点、小穴から土器98点が出土した。VI期を中心とした時期のものが大半を占める。P7の1層と2層の層界付近から、鉢(1264)がまとまって出土した。

出土遺物 1260はVI期甕A3類。1261はVII期甕B4類。口縁部外反して、端部を丸くおさめる。1262はVI期～VII期甕脚部。1263はVII期甕D類脚部。付根が細身である。1264、1265はVI期鉢A1類。1264は口縁部がわずかに直立する。外面屈曲部に刺突文が認められ、胴部上半は強く膨らむ。下半は小さな底部に向かって直線的となる。1265は口縁部が短く屈折して、端部が平坦である。端部と外面に多条沈線が認められる。1266はV期～VI期高坏B3b類。口縁部が強く外反し、外面には暗文状の波状文が認められる。1267、1268はV期器台A類口縁部。1267は端部が平坦である。1268は端部に円形刺突文が認められる。1269は有孔石製品。扁平な楕円礫の中央付近に直径8mmの孔が穿たれている。

時期 出土遺物の時期から、VI期～VII期と考えられる。

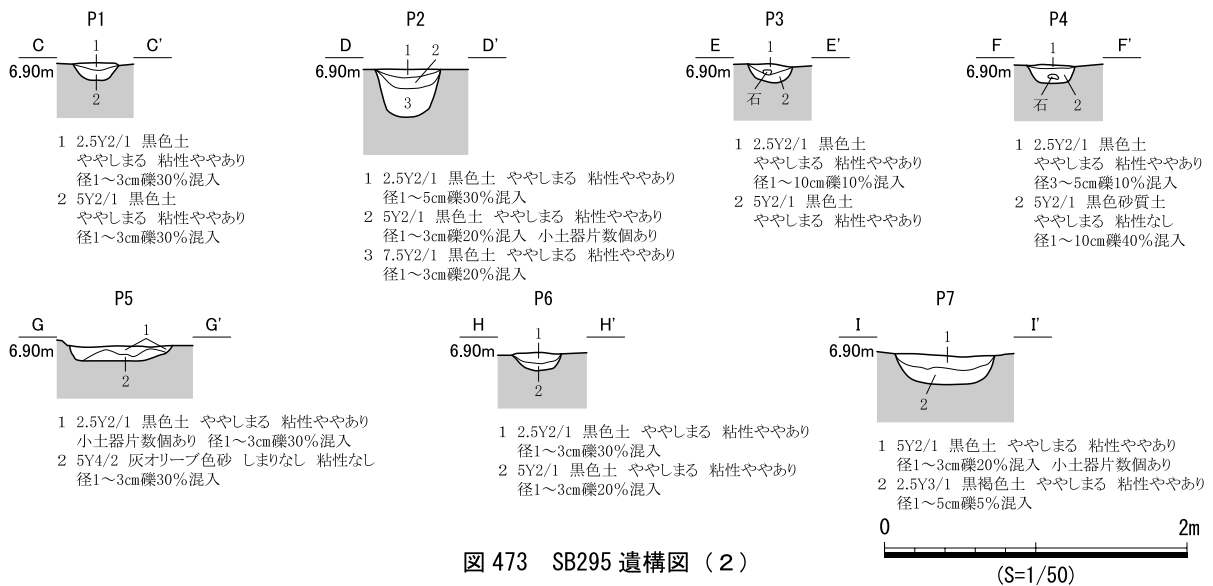


図 473 SB295 遺構図 (2)

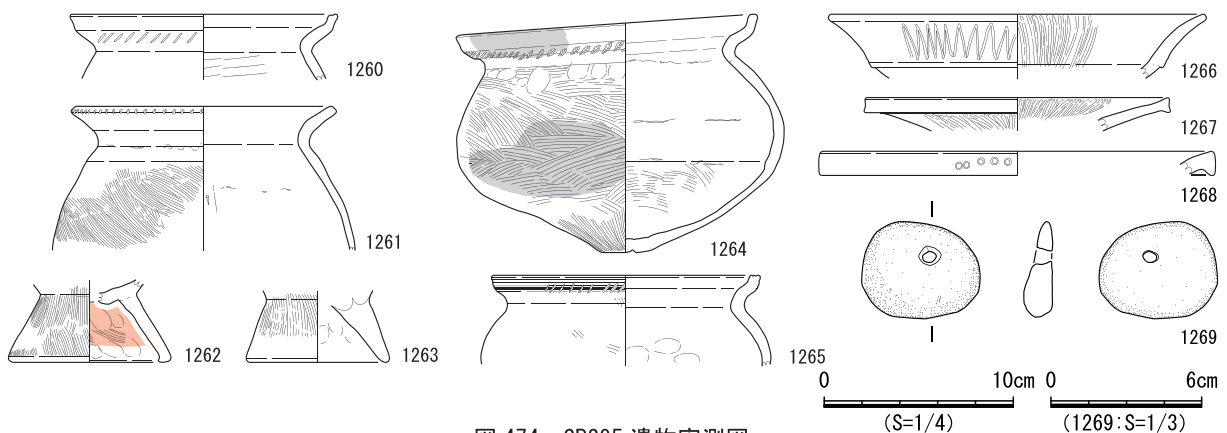


図 474 SB295 遺物実測図

SB296 (遺構：図475・476、遺物：図477)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域の西側に位置する。南隅部をSK04414に切られ、北側でSB297を、西側でSB294を切る。平面形はやや不明瞭であった。

形状 遺構の重複があるため全形は不明だが、確認できた範囲から不整な隅丸方形と考えられる。各辺とも直線的で、北隅部はほぼ直角となるが、東西両隅部はやや開き、丸みを帯びる。北東-南西長約5.1m、北西-南東長約4.8mである。深さは約0.1mで、壁面の傾斜は比較的急である。

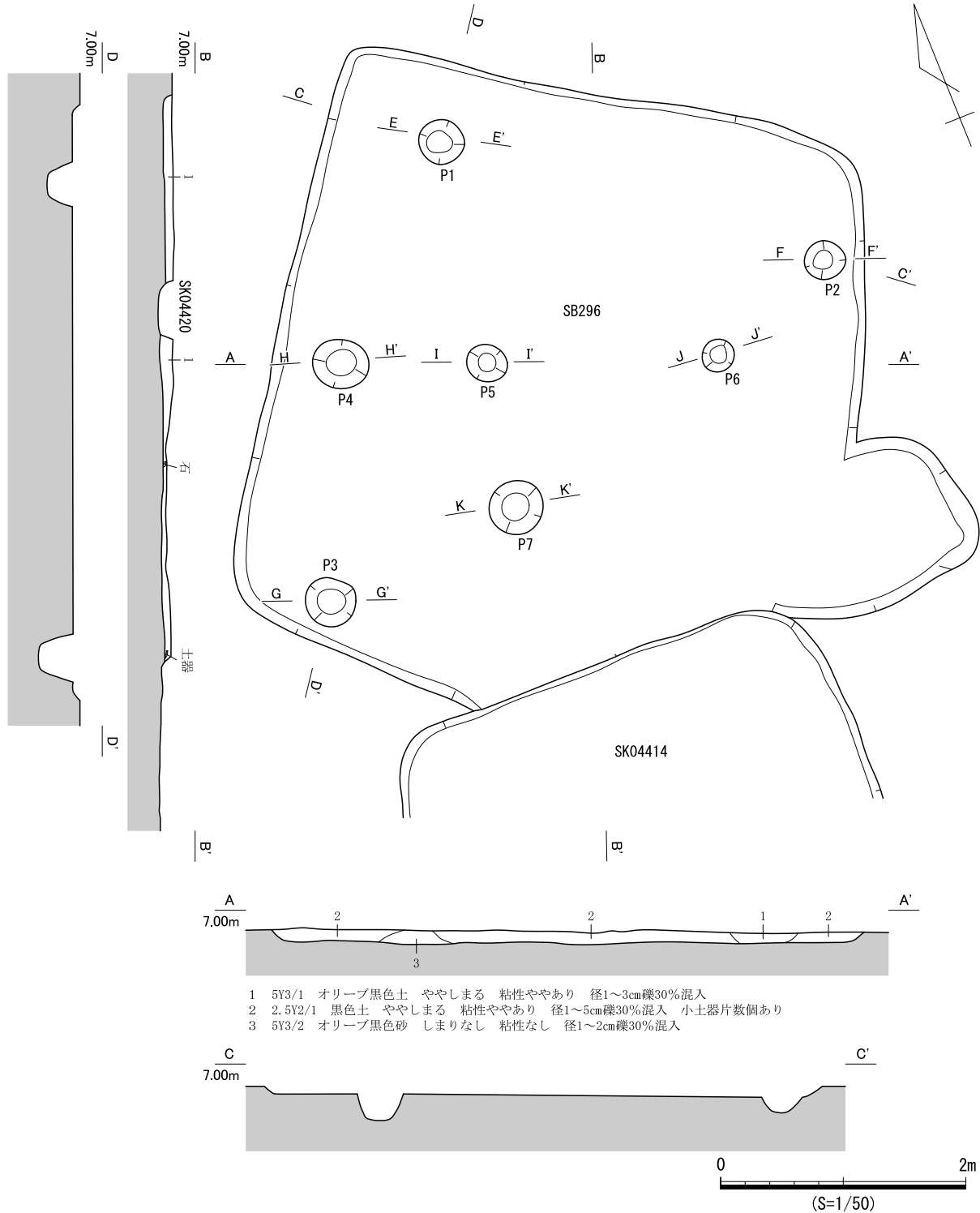


図475 SB296 遺構図(1)

埋土 3層に分層した。埋土全体に小礫が含まれ、3層がブロック状に入り込むことから、人為堆積と考えられる。

床面 ほぼ平坦でVI層（砂礫層）が表出する。貼床は確認できなかった。床面から7基の小穴を検出したが、いずれも柱痕跡は認められなかった。平面的な位置関係からP1～P3の3基が柱穴の可能性があり、特にP1、P3は掘形が深い。なお、SK04414底面において北側の柱穴は確認できなかった。また、壁溝と炉跡は確認できなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器1,264点、小穴から土器14点が出土した。

出土遺物 1270はVI期～VII期甕A4類。1271はVIII期甕D3類。口縁部が短く外方へ屈曲する。1272は上半に直線文、中央に鋸歯文の認められる小片。V期器台と考えられる。1273は縄文時代晩期後半の深鉢。口縁端部に連弧状の文様がある。

時期 出土遺物の時期から、VI期～VIII期と考えられる。

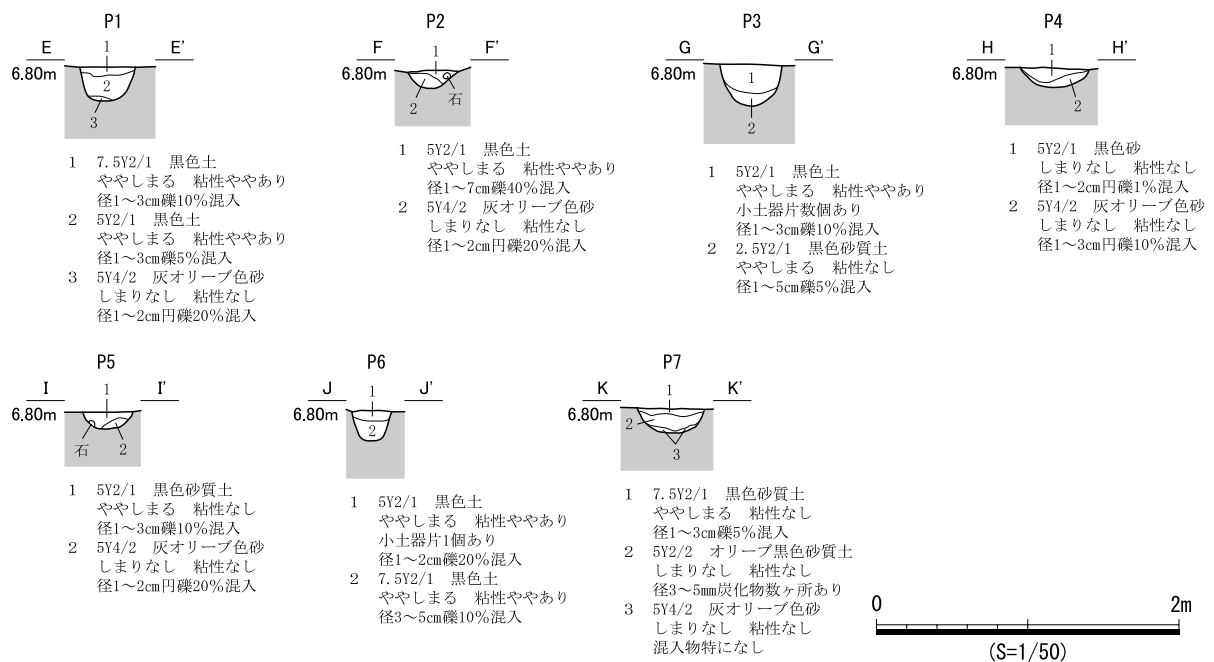


図 476 SB296 遺構図 (2)

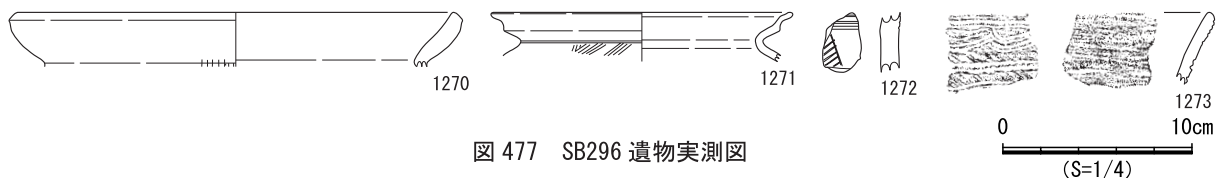


図 477 SB296 遺物実測図

SB297 (遺構：図 478、遺物：図 479)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域の西側に位置する。南側をSB296に切られ、北側を攪乱によって消失する。平面形はやや不明瞭であったが、北西隅部は比較的明瞭であった。

形状 北側と南側を他の遺構に切られるため、全形は不明であるが、確認できた範囲から隅丸方形と考えられる。東西長約4.8mである。検出した各辺は直線的であるが、南に向かって東西幅が狭くなる。深さは約0.1mで、壁面傾斜は比較的緩やかである。

埋土 4層に分層した。粗砂と小礫がブロック状に多く混入することから、人為堆積と考えられる。

床面 ほぼ平坦であるが、貼床は確認できなかった。床面から3基の小穴を検出したが、いずれも柱痕跡は認められなかった。P3はやや規模が大きいものの、柱穴とするには東壁際に寄りすぎている。また、SB296床面でも本遺構の柱穴に該当する小穴は確認できなかった。なお、壁溝と炉跡は確認できなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器728点、小穴から土器9点が出土した。その大半はIV期～VII期の土器片であり、縄文土器も少量出土した。VIII期の土器は混入と考えられる。

出土遺物 1274はVIII期壺胴部。直線文と波状文が認められる。1275はV期～VI期高坏B3b類。口縁部

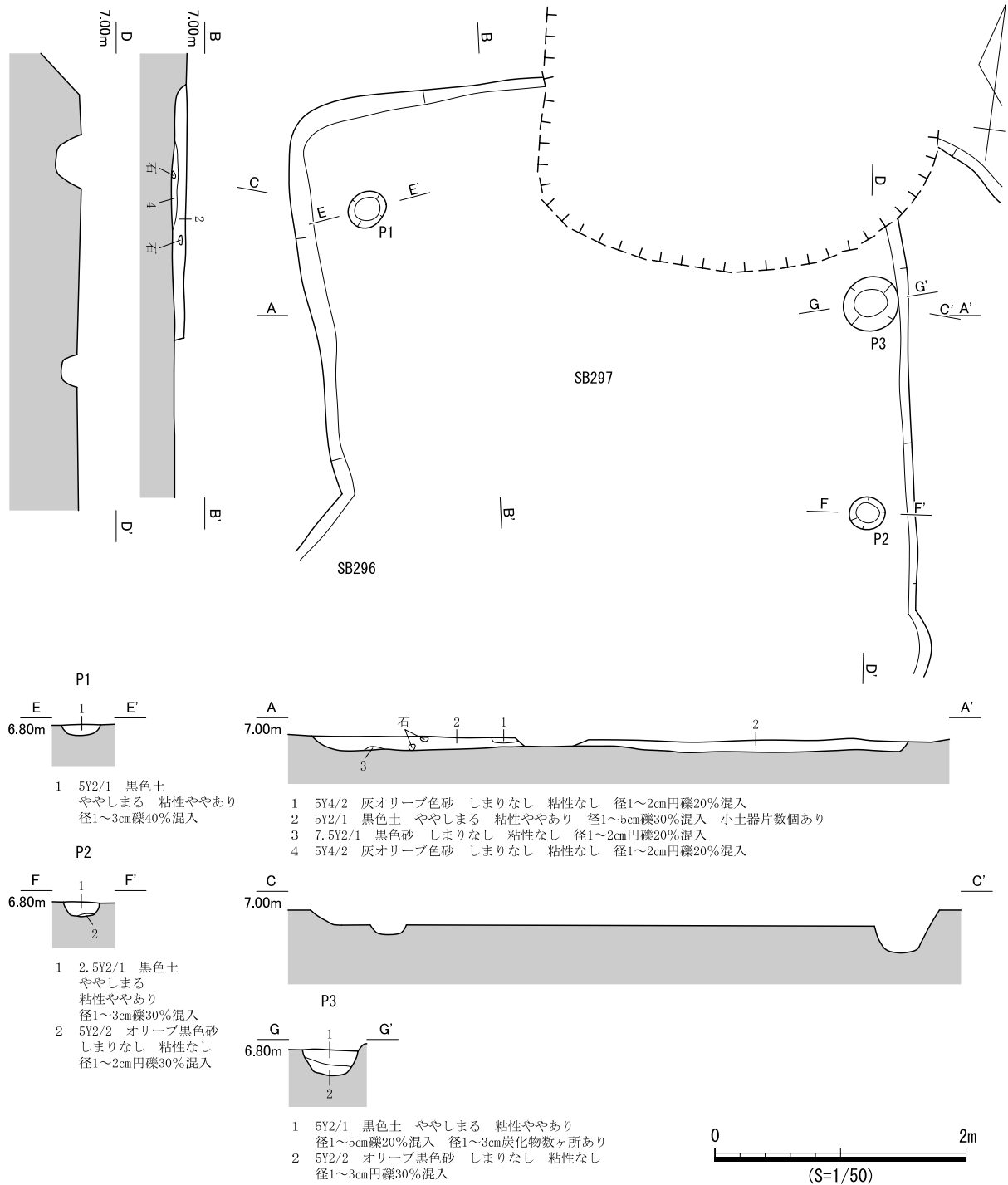


図 478 SB297 遺構図

が強く外反する。ミガキによる暗文状の波状文が認められる。

時期 出土遺物の時期からVI期～VII期と考えられる。

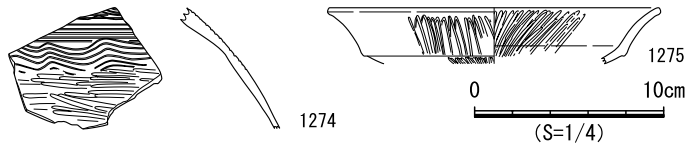


図 479 SB297 遺物実測図

SB298 (遺構：図 480・481、遺物：図 482)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。東側をSD0976に切られ、西側を攪乱により滅失している。平面形はやや不明瞭であった。

形状 遺構の重複や攪乱のため全形は不明である。しかし、北側と南側で隅部を検出しており、隅丸方形を呈する可能性がある。底面は平坦であり、深さは約0.1mで壁面傾斜は比較的急である。

埋土 4層に分層した。1層中に炭化物が広がり、なかには塊で確認した箇所もある。2層や4層がブロック状に入り込むことから、人為堆積と考えられる。

床面 ほぼ平坦だが、貼床は確認できなかった。住居中央部にて、床面よりやや上位で、地床炉と考えられる焼土域と炭化物集積を確認した。また、床面上にて9基の小穴を検出し、P2、P7は柱痕跡、もしくは柱抜き痕跡と考えられる堆積を確認した。平面的な位置関係からP1、P2の2基が柱穴の可能性はある。壁溝は確認できなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器738点、石器類1点、小穴から土器1点が出土した。土器の多くはVI期～VII期に属し、小穴からはVII期の土器片が出土した。

出土遺物 1276はVI期～VII期の甕D類脚部。1277はチャートの石核で、自然面がわずかに残る。

時期 出土遺物の時期から、VI期～VII期と考えられる。

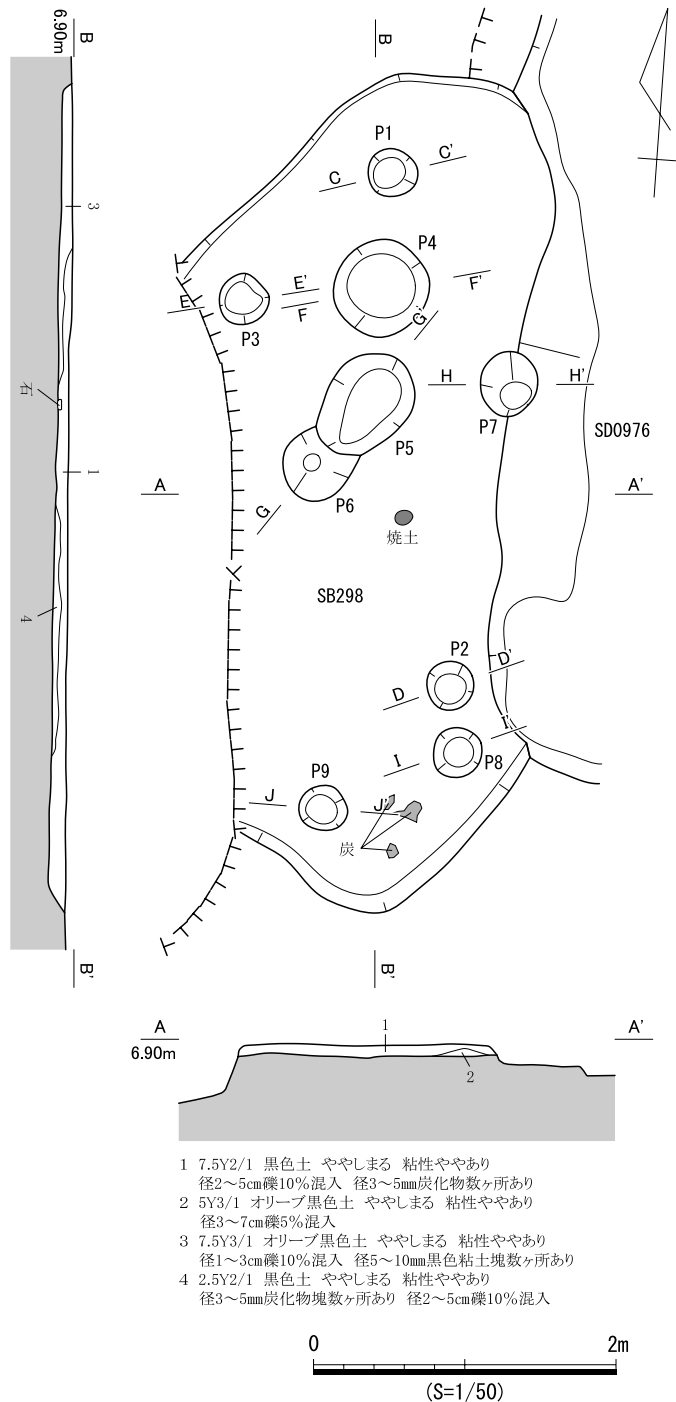


図 480 SB298 遺構図 (1)

- 1 7.5Y2/1 黒色土 ややしまる 粘性ややあり
径2～5cm礫10%混入 径3～5mm炭化物数ヶ所あり
- 2 5Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり
径3～7cm礫5%混入
- 3 7.5Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり
径1～3cm礫10%混入 径5～10mm黒色粘土塊数ヶ所あり
- 4 2.5Y2/1 黒色土 ややしまる 粘性ややあり
径3～5mm炭化物塊数ヶ所あり 径2～5cm礫10%混入

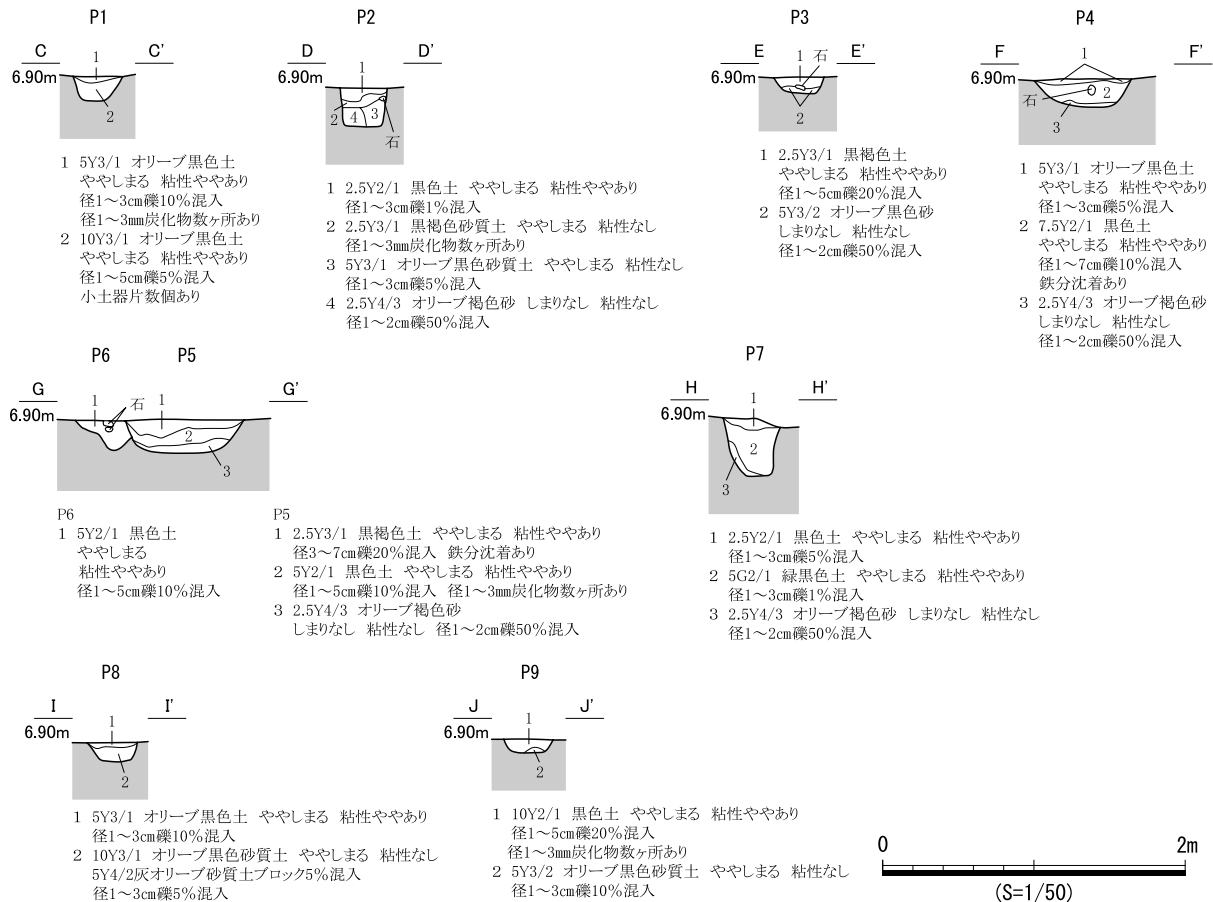


図 481 SB298 遺構図 (2)

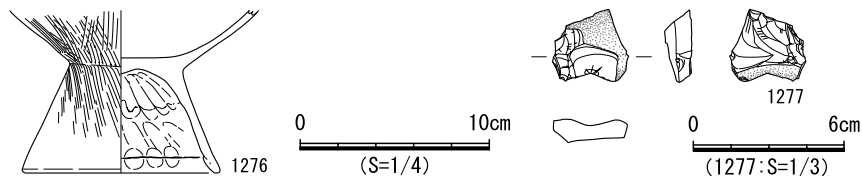


図 482 SB298 遺物実測図

SB299 (遺構：図 483、遺物：図 484)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SB300、SB301、SB304を切る。平面形は比較的明瞭であった。

形状 東側が調査区域外に及ぶため全形は不明だが、確認できた範囲から隅丸方形と考えられる。南北長約4.3mで、各辺とも直線的である。北西隅部はやや鋭角、南西隅部はやや鈍角となる。深さは約0.2mで、壁面の傾斜は比較的急となる。

埋土 3層に分層した。埋土全般にわたって、微細な炭化物混入が認められる。水平な堆積であるが、土器が縦位で出土し、後世の改変が認められないため、人為堆積と考えられる。

床面 ほぼ平坦で、貼床は確認できなかった。床面から9基の小穴を検出したが、いずれも柱痕跡は認められなかった。埋土は単層及び2層で、掘形が浅いものばかりである。平面的な位置関係からP1、P2の2基が柱穴の可能性がある。また、住居南側では床面よりやや上位で長楕円礫2点が横位で出土した。その付近には焼土や炭化物が確認できていないことから炉石の可能性は低い。また、使用時

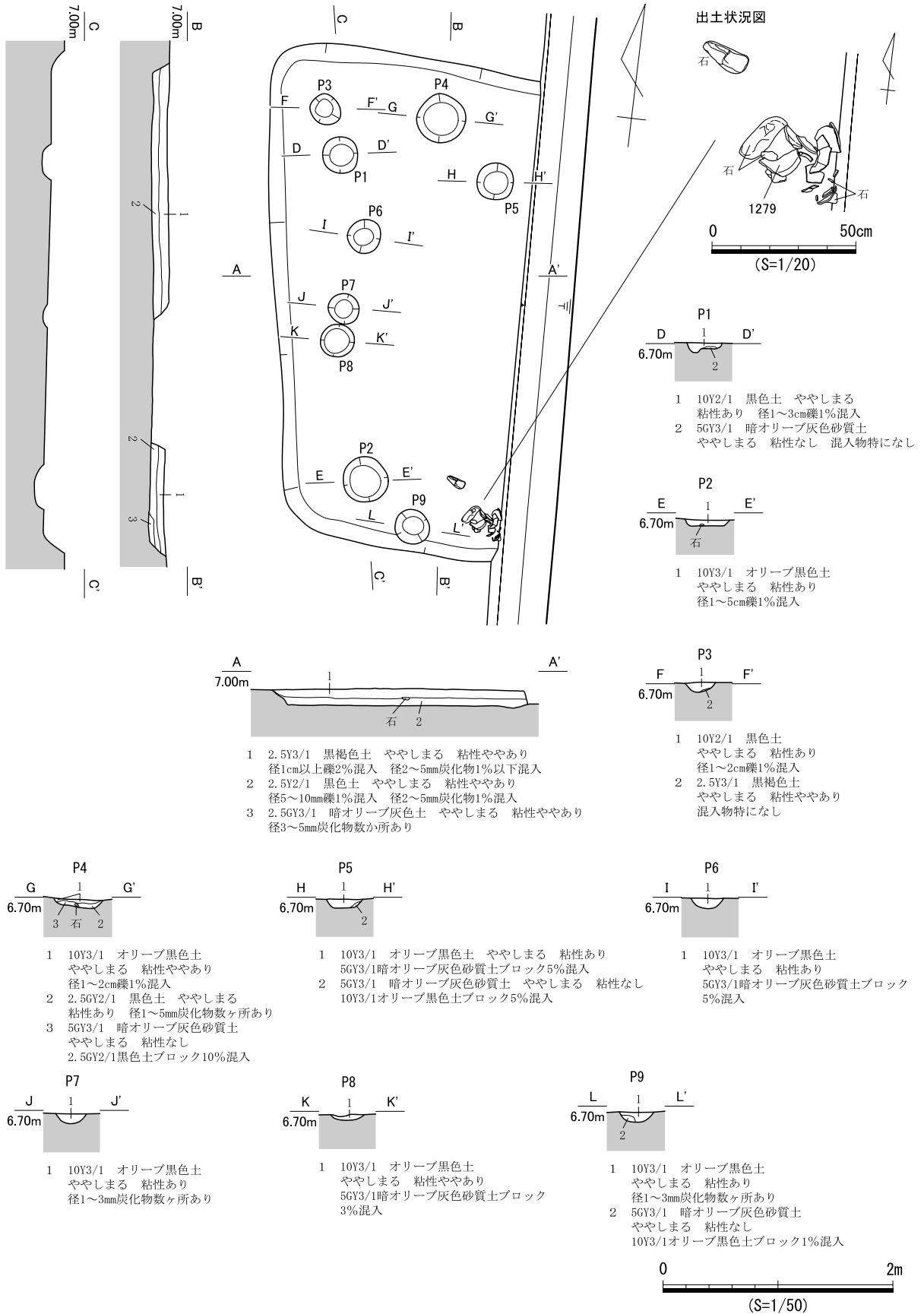


図 483 SB299 遺構図

の原位置を保っているか否かの判断もできなかつた。なお、壁溝と炉跡は確認できなかつた。

遺物出土状況 埋土中から土器 2,044 点、石器類 2 点、小穴から土器 56 点が出土した。土器はⅣ期～Ⅶ期に属するものが目立つ。住居南側の床面よりやや上位で土器 (1279) が出土した。土器は横位と縦位で出土しており、ここに廃棄されたと考えられる。

出土遺物 1278はⅦ期壺A3類。口縁部下端を拡張する。内面に羽状文が認められる。1279はⅨ期の二重口縁壺。1280はⅤ期～Ⅵ期壺底部。1281はⅣ期甕B類。口縁部が内傾して、胴部には刺突文と直線文が認められる。1282はⅦ期甕D2b類。口縁部が短く外方へ屈曲する。胴部は肩部が強く張り、胴部上半にヨコハケが認められる。1283はⅤ期甕E類。口縁部が短く立ち上がり、端部、頸部直下に刺突文が認められる。1284～1286はⅦ期高坏G類。1284は口縁部上半に多条沈線を施文する。1286は脚部で、少条の多条沈線と連弧文を交互に施文する。1287はⅤ期高坏I類。直線文間に羽状文を施文する。

時期 Ⅶ期以前の土器が多いものの、床面上位の出土遺物の時期からⅨ期と考えられる。

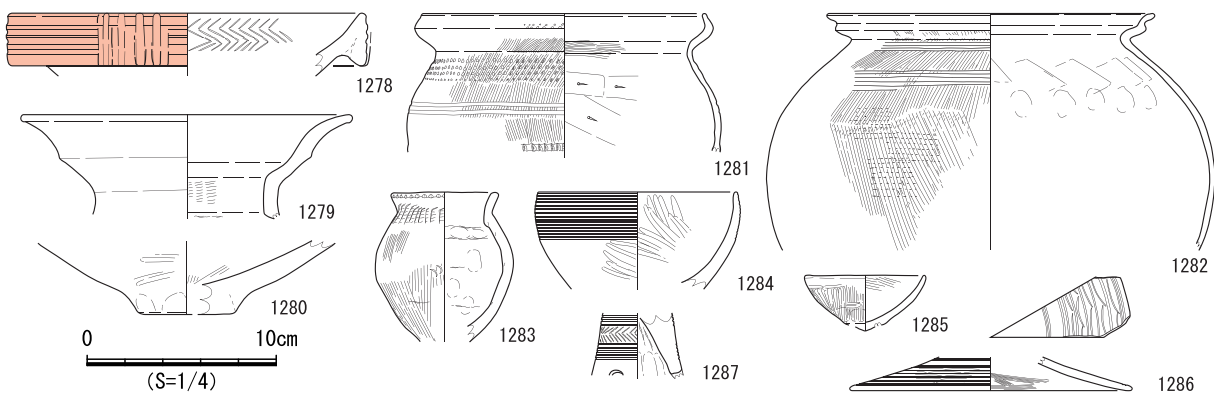


図 484 SB299 遺物実測図

SB300 (遺構：図 485、遺物：図 486)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB299に切られ、SZ128の北側を切る。平面形の形状や小穴から竪穴住居跡と判断した。なお、平面形は比較的明瞭であった。

形状 東側が調査区外に及ぶため全形、規模は不明だが、確認できた範囲から隅丸方形の可能性がある。西辺、南辺は共に直線的だが、南西隅部は大きく丸みを帯びる。深さは約0.1mで、壁面傾斜は急である。

埋土 2層に分層した。上層に微細な炭化物が混入する。基本的には水平堆積だが、層界に凹凸が認められることから、人為堆積と考えられる。

床面 ほぼ平坦で、貼床は確認できなかつた。床面から9基の小穴を検出したが、いずれも柱痕跡は確認できなかつた。検出範囲が狭いため、平面的な位置関係から柱穴を想定するのは困難である。P1、P2、P3、P9はやや掘形が深くなり、P2では柱抜き痕と考えられる堆積が確認できた。なお、壁溝と炉跡は確認できなかつた。

遺物出土状況 埋土中から土器 361 点、小穴から土器 57 点、石器類 1 点が出土した。P9では上層からⅦ期壺口縁部(1288)が出土し、その北側から長楕円礫が出土した。全体的にはⅥ期～Ⅶ期の土器片が出土しており、特にⅦ期の土器片が目立つ。

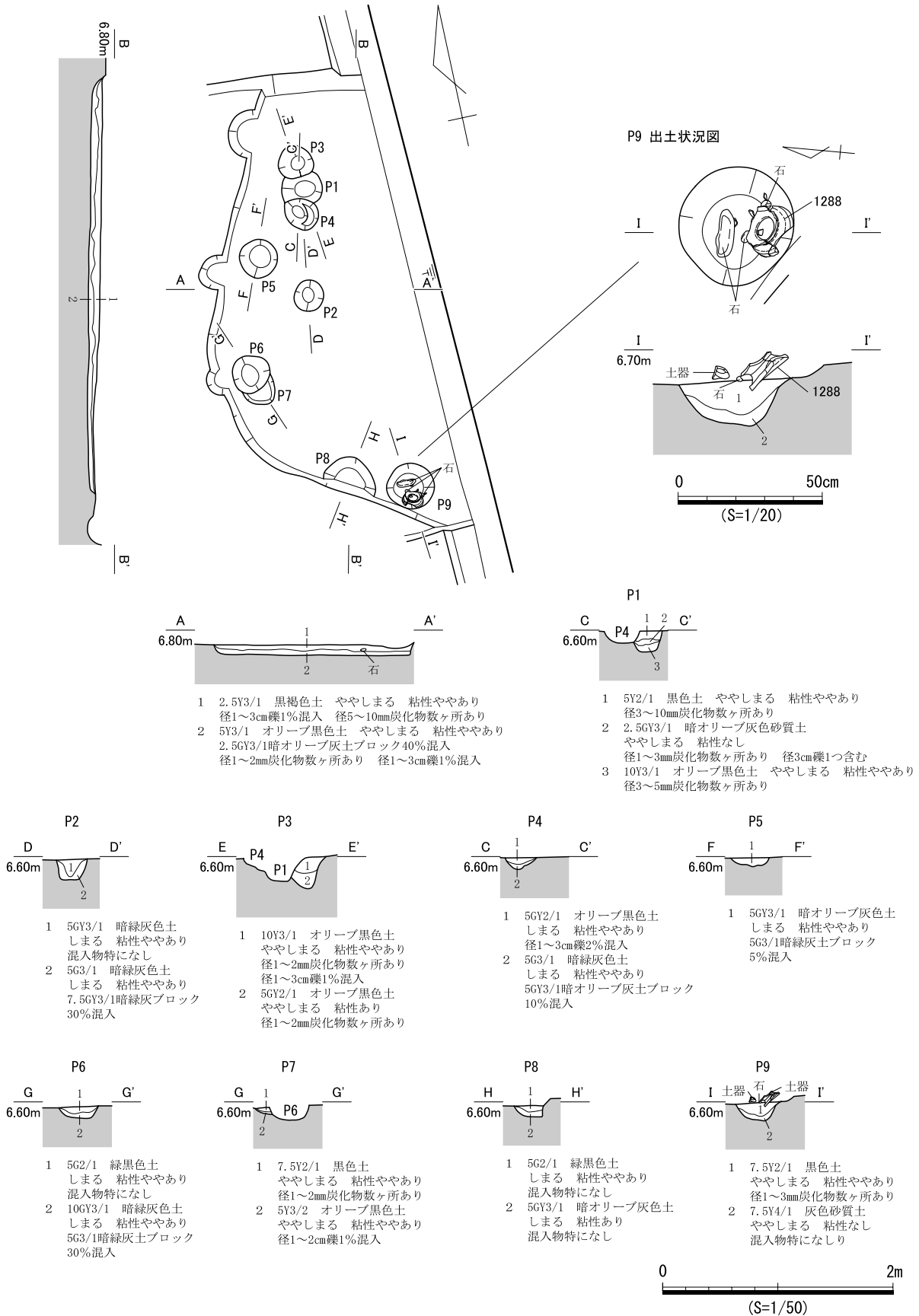


図 485 SB300 遺構図

出土遺物 1288はⅦ期壺A3類。口縁端部をやや上方に拡張し、端部は外傾する。内面には羽状文が認められる。1289はⅦ期高坏G3b類。口縁部が内湾しながら立ち上がり、内外面に入念なミガキが認められる。口縁部には多条沈線が認められ、端部には打ち欠きが認められる。脚部は付根から強く外反する。1290はⅤ期器台A類脚部。直線文2帯が認められる。

時期 出土遺物の時期から、Ⅶ期と考えられる。

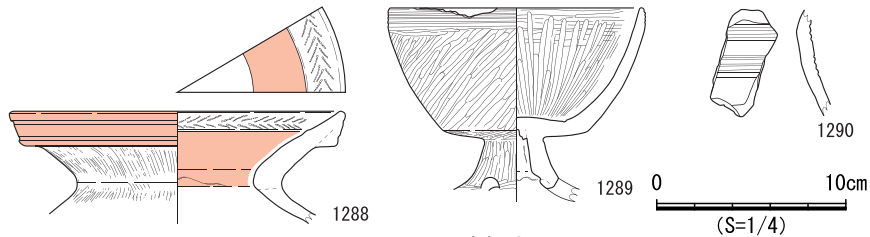


図 486 SB300 遺物実測図

SB301 (遺構：図 488～490、遺物：図 487)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。東側をSB299に切られ、南西側でSB302を切る。平面形は比較的明瞭であったが、特に北辺は明瞭であった。

形状 東側をわずかにSB299に切られるが、平面形は南北長約4.5mの隅丸方形を呈する。北辺、南辺はほぼ直線的だが、西辺はわずかに膨らむ。深さは約0.1mで、壁面の傾斜は急である。

埋土 4層に分層した。1・2層が住居埋土、3・4層が掘形埋土である。床面まではほぼ水平な堆積で、埋土上層には微細な炭化物が混入する。ブロック土が混入することから、人為堆積と考えられる。

床面 ほぼ平坦で、貼床（整地土）があるものの、硬化面は確認できなかった。床面上でP1～P14の14基の小穴を検出し、P1、P2、P5、P9では柱痕跡と考えられる堆積が認められる。平面的な位置関係からP1～P4の4基を柱穴と考えた。

掘形 埋土は2層に分層し、ブロック土の混入が顕著である。底面においてP15～P20の小穴を検出した。床面上で検出した小穴に比べてやや径が大きめであるが、その機能・性格は不明である。壁溝と炉跡は確認できなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器2,411点、小穴から土器286点が出土した。出土した土器片の多くはⅦ期である。

出土遺物 1291はⅦ期壺H2b類。口縁部が内湾する。上半に幅広の多条沈線、下半に少条の多条沈線と振幅の小さい山形文を施文する。1292は線刻状の文様があるⅥ期～Ⅶ期の壺胴部。1293はⅥ期～Ⅶ

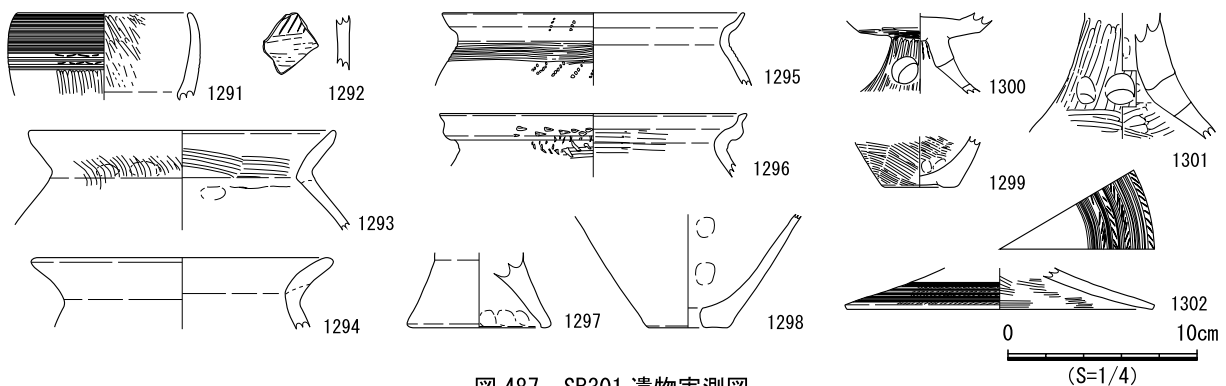


図 487 SB301 遺物実測図

期甕A4類。口縁部端部がわずかに屈曲する。1294はⅦ期甕B4類。口縁部が外反気味を丸くおさめる。1295はⅥ期鉢A2類。口縁部がわずかに屈曲して、頸部直下に直線文が認められる。1296はⅥ期甕D1a類。口縁部が短く直立して、刺突文が認められる。1297はⅦ期甕脚部。1298はⅥ期～Ⅶ期鉢B類

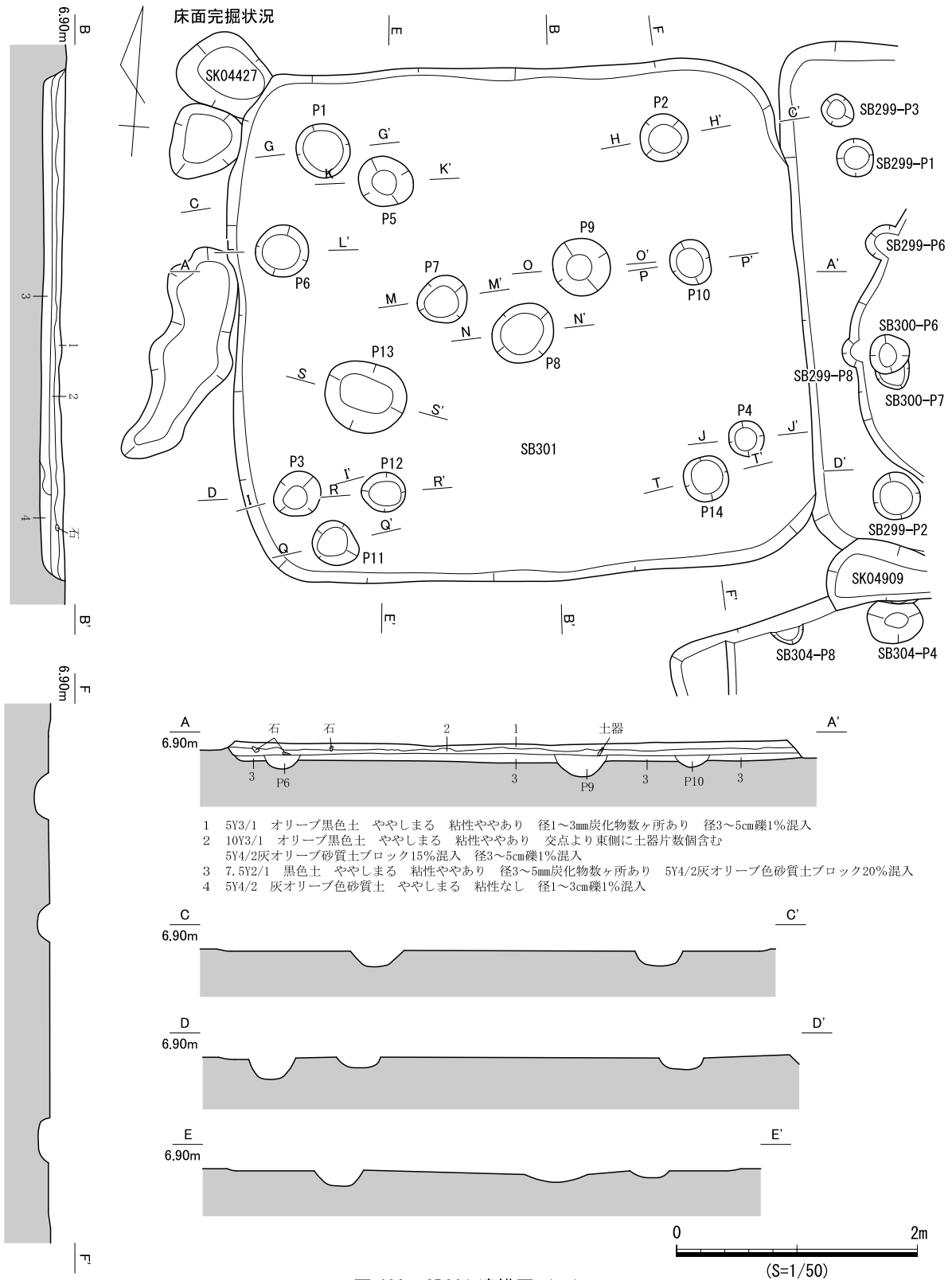


図 488 SB301 遺構図 (1)

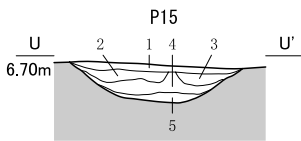
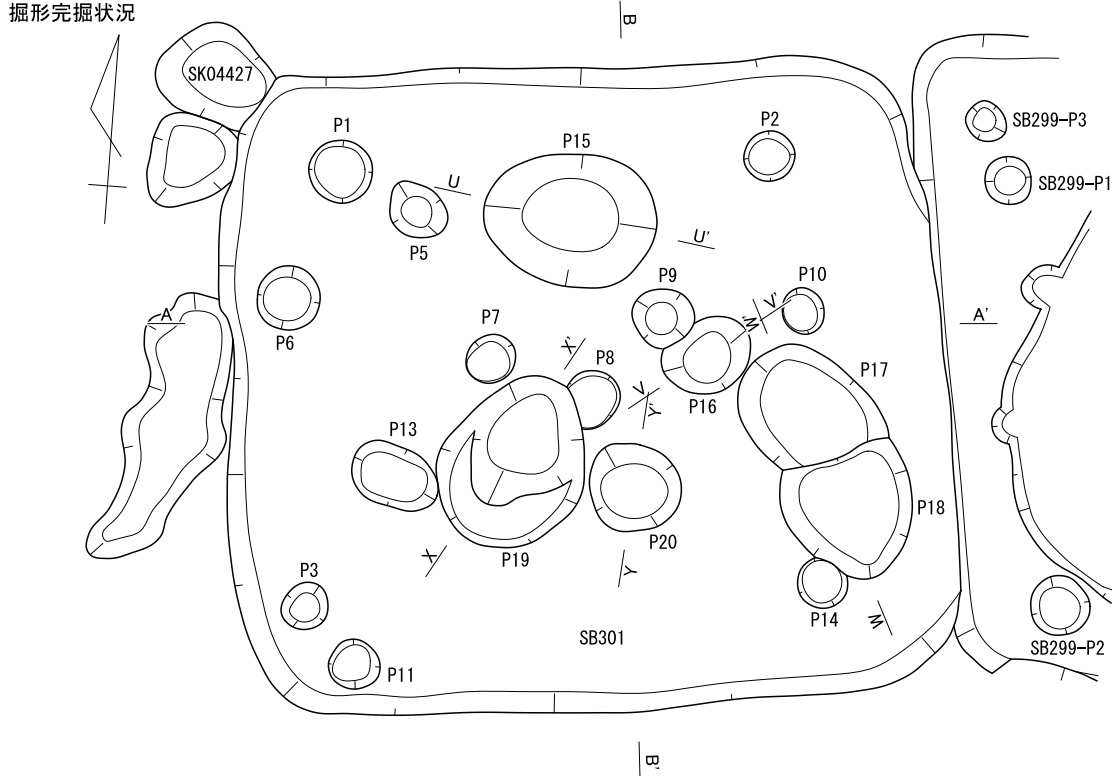
底部。1299はVI期～VII期鉢G類底部。1301はVII期高坏C類脚部。1300、1302はVII期高坏G3類。1302は脚部で精緻な文様が認められる。少条の多条沈線間に対向するよう刺突文が施文される。

時期 出土遺物の時期から、VI期～VII期と考えられる。

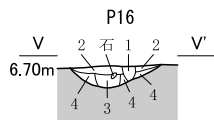


図 489 SB301 遺構図 (2)

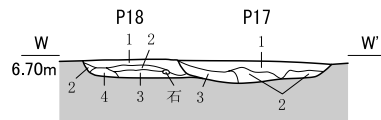
掘形完掘状況



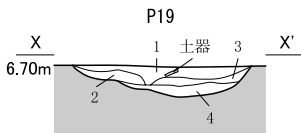
- 1 2.5Y3/1 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり 径1~3cm礫2%混入 鉄分沈着あり
- 2 5Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり 10Y2/1黒土ブロック5%含む 径1~2cm礫1%混入 鉄分沈着あり
- 3 5Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径1~3cm礫数個あり 鉄分沈着あり
- 4 5GY2/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径3~5mm炭化物塊数ヶ所あり
- 5 7.5GY3/1 暗緑灰色土 ややしまる 粘性ややあり 径1~2cm礫数個あり



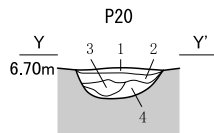
- 1 7.5Y2/1 黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径5mm炭化物塊2ヶ所あり 径1~2cm礫数個あり
- 2 10Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径1~3cm礫1%混入 鉄分沈着あり
- 3 5Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり 10GY4/1灰土ブロック20%混入 径7cmの礫1つあり
- 4 10GY4/1 灰色砂質土 ややしまる 粘性なし 径2~5mm炭化物塊数ヶ所あり



- P17
- 1 7.5GY2/1 緑黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径3~5mm炭化物塊数ヶ所あり 径1~5cm礫1%混入 鉄分沈着あり
 - 2 7.5Y4/1 灰色砂質土 ややしまる 粘性なし 5Y2/1黒土ブロック1%混入 鉄分沈着あり
 - 3 10Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり 7.5Y4/1灰砂質土ブロック5%混入 鉄分沈着あり
- P18
- 1 10Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径1~2mm炭化物数ヶ所あり 鉄分沈着あり
 - 2 2.5Y3/1 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり 径1~2mm炭化物数ヶ所あり 鉄分沈着あり 小土器片1つ含む
 - 3 10Y4/1 灰色土 ややしまる 粘性ややあり 2.5Y黒土ブロック5%混入 径5~7cm礫数個あり
 - 4 5Y3/2 オリーブ黒色砂質土 ややしまる 粘性なし 混入物特になし 鉄分沈着あり



- 1 2.5Y3/1 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり 中央部に大土器片あり 7.5Y4/1灰砂質土ブロック3%混入 径1~3mm炭化物数ヶ所あり
- 2 5Y4/2 灰オリーブ色砂質土 ややしまる 粘性なし 2.5Y3/1黒土ブロック2%混入 鉄分沈着あり
- 3 10Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり 7.5Y4/1灰砂質土ブロック10%混入 鉄分沈着あり
- 4 2.5GY3/1 暗オリーブ灰色砂質土 ややしまる 粘性なし 7.5Y3/1オリーブ黒土ブロック10%混入 径3~5mm炭化物数ヶ所あり



- 1 5Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径1~2mm炭化物数ヶ所あり 径1~3cm礫1%混入
- 2 10Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径1~2mm炭化物数ヶ所あり 5Y4/1灰砂質土ブロック3%混入 鉄分沈着あり
- 3 7.5GY2/1 緑黒色土 ややしまる 粘性あり 径2~5mm炭化物数ヶ所あり 鉄分沈着あり
- 4 10Y4/1 灰色砂質土 ややしまる 粘性なし 5Y2/1黒色土ブロック1%混入 混入物特になし

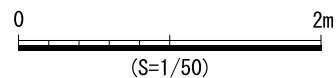


図 490 SB301 遺構図 (3)

SB302 (遺構：図491・492、遺物：図493)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。北東側をSB301に切られ、南側をSB306、SK04427に切られる。平面形はやや不明瞭だったが、東辺は明瞭であった。

形状 北東側を大きくSB301に切られるため、全形は不明である。確認できた範囲から隅丸方形と考

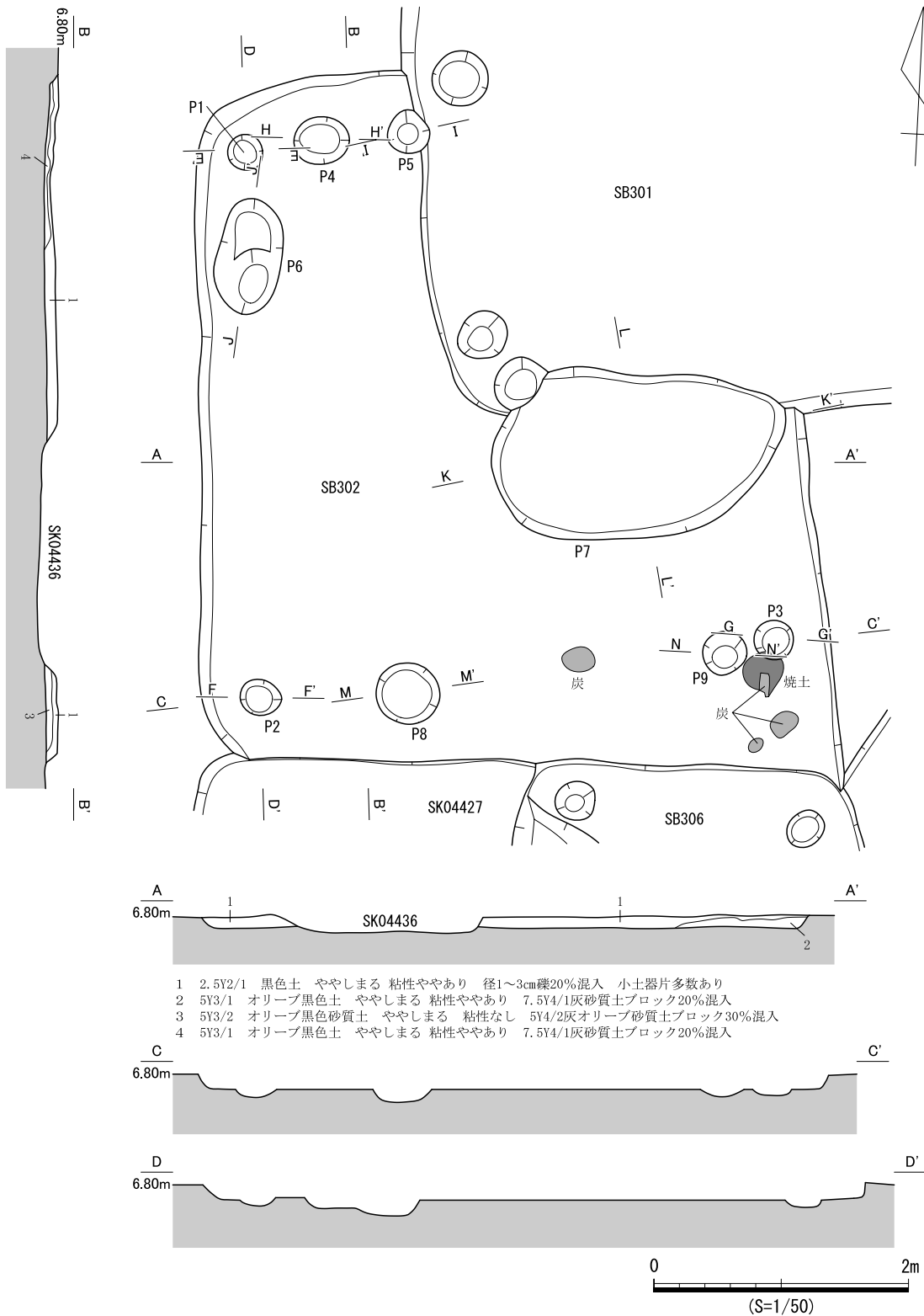


図491 SB302 遺構図(1)

えられる。東西両辺とも直線的であるが、東辺は南に向かうほど東側に開く。東西長約5.0m、深さ約0.1mで、壁面傾斜は急である。

埋土 4層に分層し、全体的に小礫、土器片が混入する。ブロック土の混入が顕著であり、人為堆積と考えられる。

床面 ほぼ平坦であるが、貼床は確認できなかった。床面上にて9基の小穴を検出し、P3では柱痕跡を確認した。また、P6とP7はやや規模が大きいものの、その性格は不明である。平面的な位置関係からP1～P3の3基を柱穴と考えた。なお、SB301掘形底面では、本遺構の北東隅に該当する位置に小穴は確認できなかった。住居南東側では焼土域と炭化物の広がりを確認したが、その性格は不明である。壁溝は確認できなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器1,258点、小穴から土器242点が出土した。土器の多くはⅦ期に属する。

出土遺物 1303、1304はⅦ期甕D2b類。口縁部が短く屈曲する。1304の胴部は肩部が強く張る。1305はⅤ期～Ⅵ期甕。胴部上方に刺突文を施す。1306はⅥ期～Ⅶ期壺底部。1307は胎土、調整からⅦ期前後と考えられる底部片だが、器種が不明である。突出した底部で、内面が大きく窪む。1308はⅤ期高坏B2b類。外面に波状文が施される。1309はⅦ期高坏C4類脚部。

時期 出土遺物の時期から、Ⅶ期と考えられる。

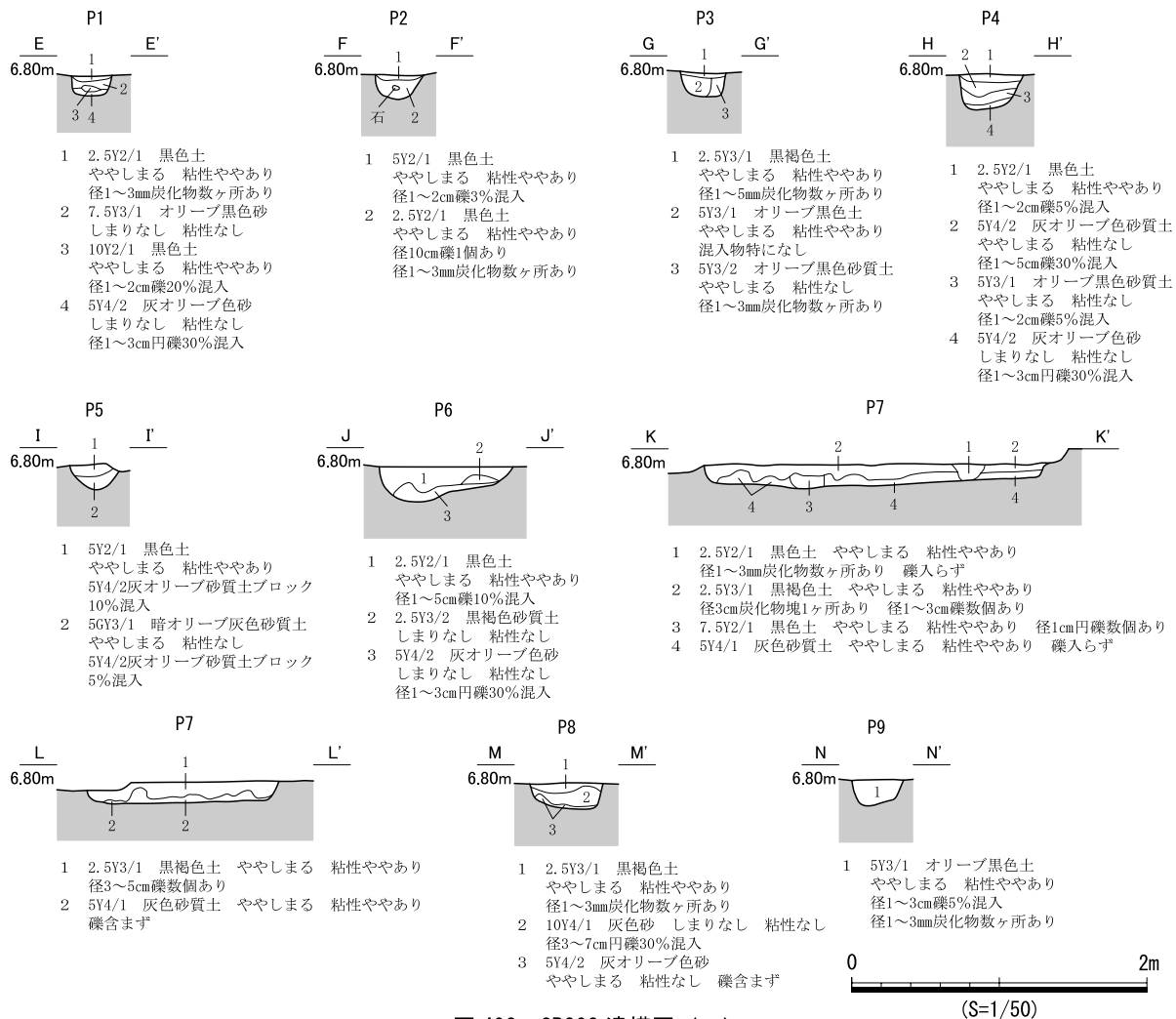


図 492 SB301 遺構図 (2)

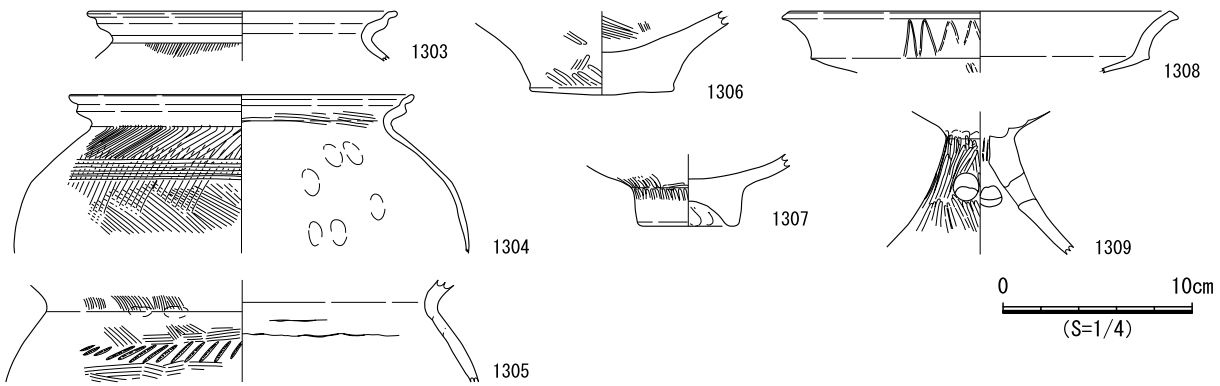


図 493 SB302 遺物実測図

SB303 (遺構：図 494、遺物：図 495)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、北側をSB299に切られる。平面形は比較的明瞭で、特に南辺は明瞭であった。

形状 東側が調査区外に及ぶため全形は不明だが、確認できた範囲から隅丸方形と考えられる。北辺と南辺は直線的だが、西辺はやや蛇行している。南北長約4.8m、深さ約0.1mで、壁面の傾斜は急である。

埋土 2層に分層した。ほぼ水平堆積であり、埋土中に微細な炭化物が混入する。

床面 ほぼ平坦だが、貼床は確認できない。床面上にてP1～P10の11基の小穴を検出したが、いずれも柱痕跡は確認できなかった。埋土の多くは2層に分層でき、特に掘形が深いものや直径が大きいものは確認できない。平面的な位置関係からP1とP2の2基が柱穴と考えた。本遺構埋土上面から掘り込むSK04458の底面で焼土を検出し、本遺構の床面上にて幅約0.5mの広がりであることを確認した。焼土の堆積は極めて薄く、掘り込みは確認できなかった。なお、壁溝は確認できなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器1,860点、石器類1点、小穴から土器287点、石器類1点が出土した。また、西壁沿いの床面上にてP9検出時に甕(1317)が口縁部を北に向けて、潰れたような状態で出土した。

出土遺物 1310はⅦ期壺H3b類。口縁部上半の多条沈線間に、振幅の小さい山形文と対向する刺突文を施文する。刺突文は精緻な工具による施文である。1311はⅦ期壺A3類。口縁部が頸部内面で強く屈曲する。内外面に赤彩が認められる。1312はⅦ期甕B2類。口縁部が外反し、端部に刺突文が認められる。1313はⅥ期～Ⅶ期壺胴部。丁寧なミガキが認められ、球形を呈する。1314～1317はⅦ期甕D2b類。口縁部が短く外反気味に屈曲して立ち上がる。胴部は肩部が強く張り、倒卵形を呈する。1318、1319はⅦ期甕D2類脚部。1318の裾部には打ち欠きが認められる。1320はⅦ期鉢B2類。口縁部が内湾しながら立ち上がる。外面にはケズリの痕跡が顕著に残る。1321はⅦ期鉢G類。丁寧なミガキが認められる。1322はⅦ期高坏D2類。端部に内傾面を形成し、多条沈線を施文する。1323、1326はⅦ期高坏D類脚部。1323は裾部が強く外反する。1324は高坏を模したⅦ期手捏ねE類。やや粗いミガキが認められる。1325はⅦ期高坏G類。口縁部が小さな坏底部から内湾しながら立ち上がる。脚部は付根から円錐形に外反しながら開く。透孔が付根ちかくに位置する。1327はⅦ期土製品。上端に穿孔が認められ、下端は欠損する。

時期 出土遺物の時期から、Ⅶ期と考えられる。

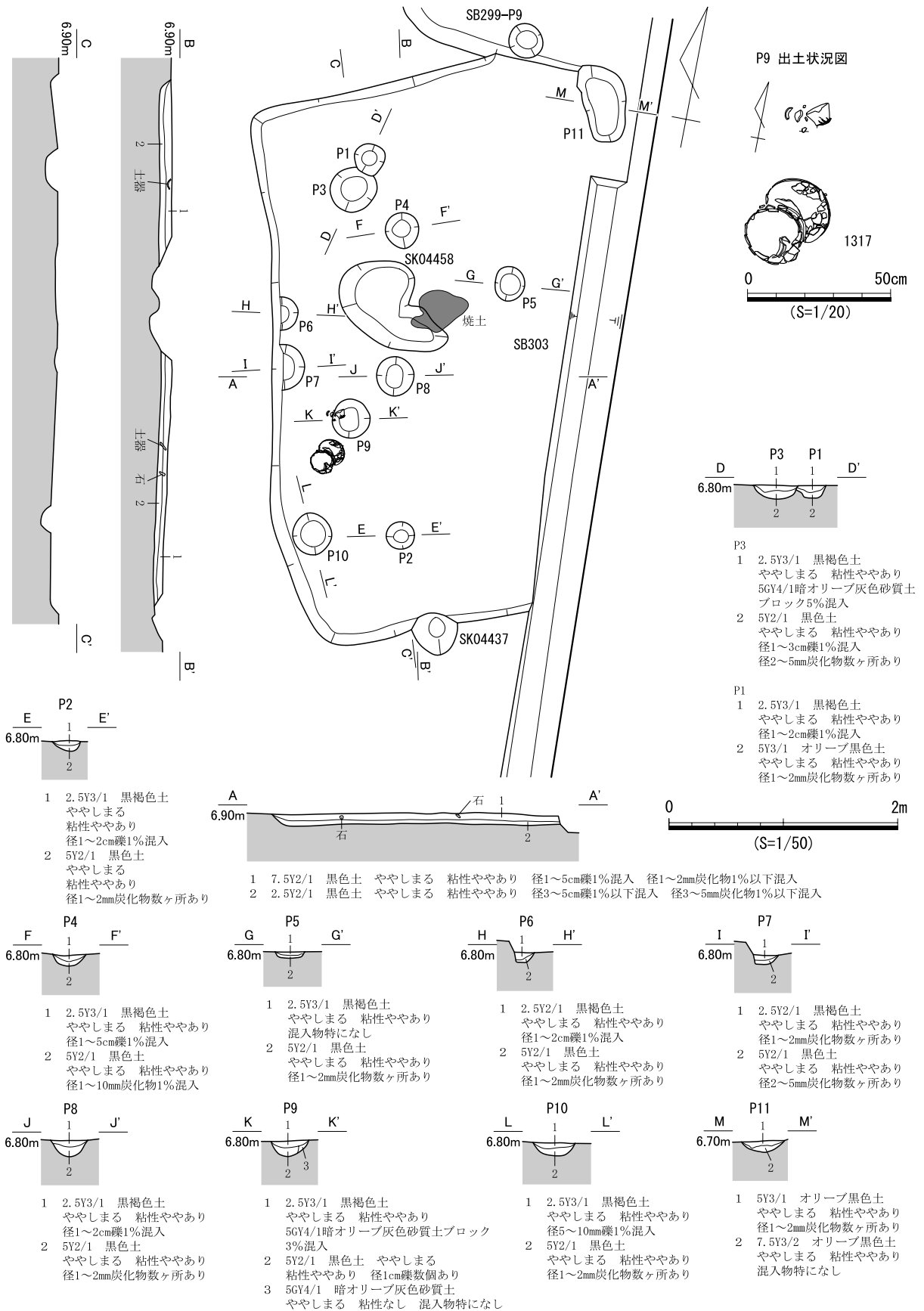


図 494 SB303 遺構図

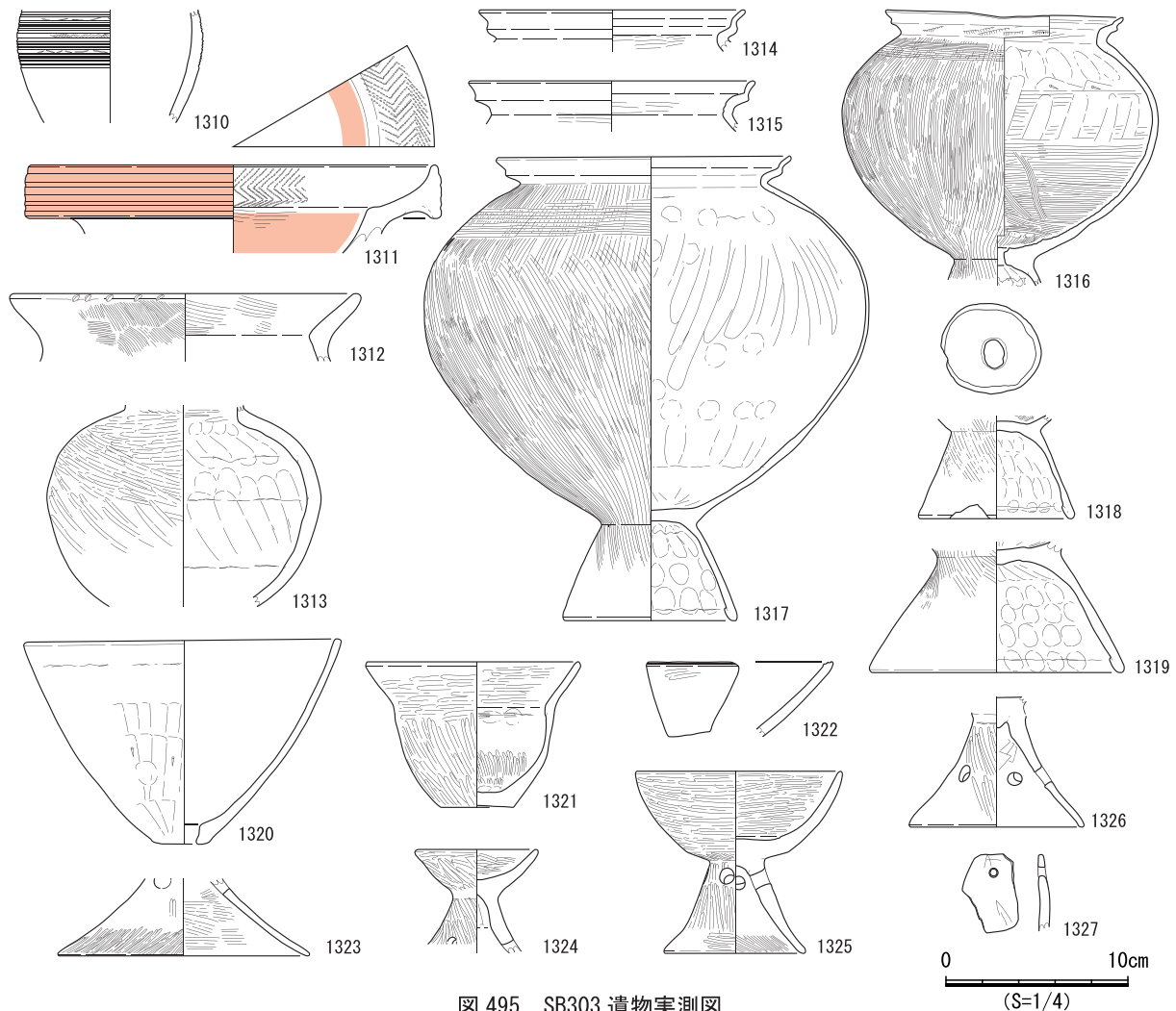


図 495 SB303 遺物実測図

SB304 (遺構：図 496、遺物：図 497)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB303底面にて検出し、その平面形は比較的明瞭であった。

形状 東側が調査区外に及ぶため全形は不明だが、確認できた範囲から隅丸方形と考えられる。南辺、西辺はそれぞれ直線的だが、南西隅部は鈍角気味にやや開く。深さは約0.1mで、壁面の傾斜は急である。

埋土 2層に分層した。埋土全体に微細な炭化物が混入する。ほぼ水平な堆積であるが、層界に凹凸があることや下層にブロック土が混入することから、人為堆積と考えられる。

床面 ほぼ平坦で、貼床は確認できなかった。床面上で9基の小穴を検出したが、いずれも柱痕跡は認められず、掘形は浅い。また、本遺構の全形が不明であるため、柱穴を推定するのは困難である。壁溝と炉跡は確認できなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器690点、小穴から土器69点が出土した。土器はV期～VII期に属し、特にVII期のものが多い。

出土遺物 1328はVII期壺A3類。小型の壺で、口縁端部が外反する。1329はVII期高坏D類。1330はV

期高坏I類脚部。上半に刺突文と直線文が認められ、下半には赤彩が認められる。1331はVI期～VII期手捏ねC類。1332はVII期甕C2類。口縁端部が内側に突出する。1333はVII期高坏G3類。

時期 出土遺物の時期と、V期～VII期のSB303に切られることから、VII期と考えられる。

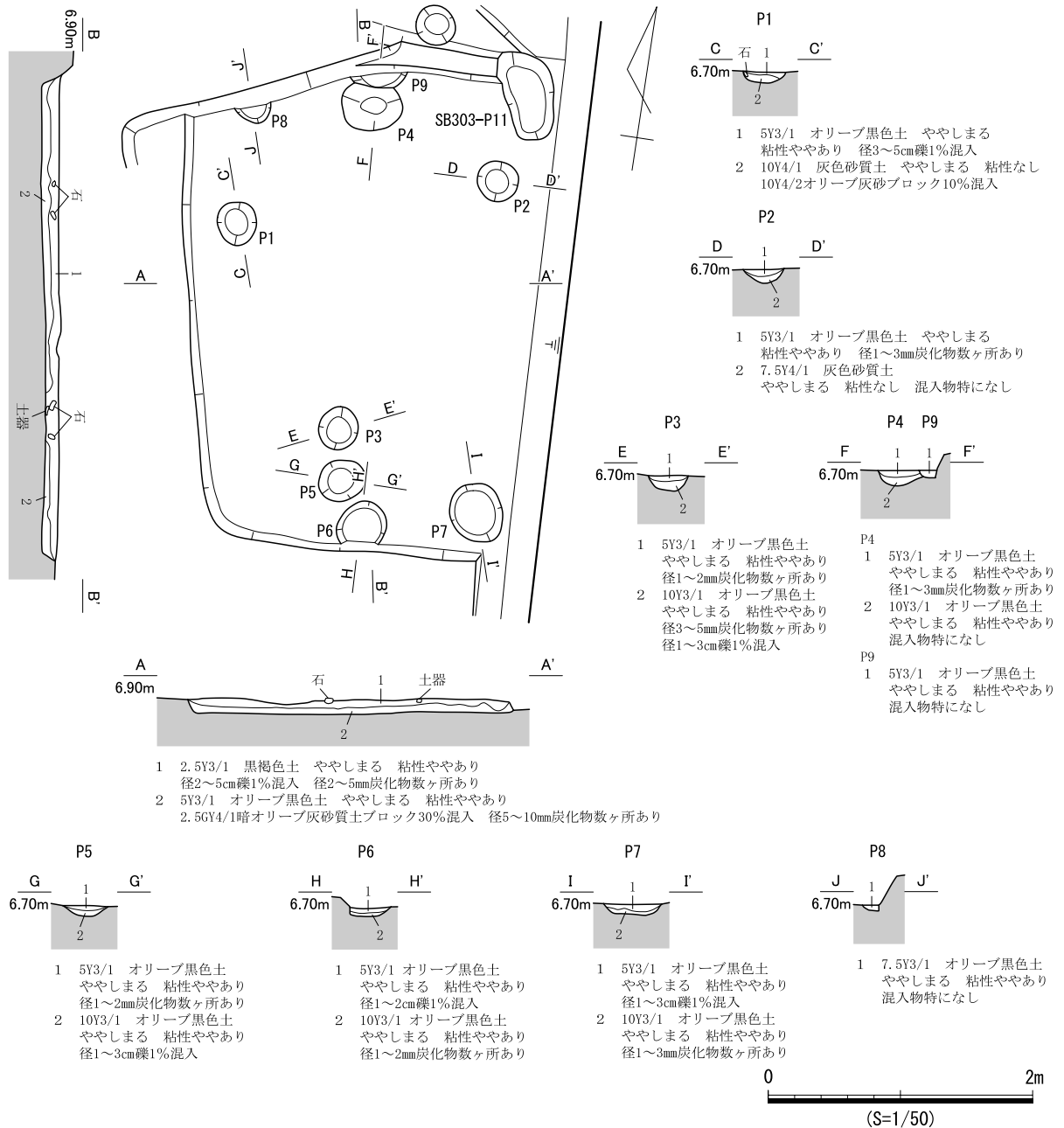


図 496 SB304 遺構図

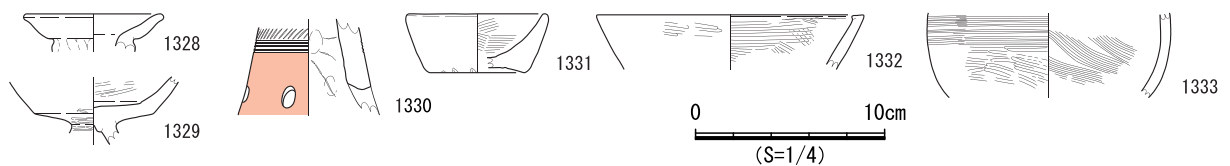


図 497 SB304 遺物実測図

SB305 (遺構：図499、遺物：図498)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。北側をSB303とSK04438に、西側をSB306に切られる。平面形は比較的明瞭であった。

形状 北側と西側が他の遺構によって切られるために全形は不明だが、確認できた範囲から、やや南北に長い隅丸長方形と考えられる。各辺とも直線的であり、深さは約0.1mで、壁面傾斜は急である。

埋土 2層に分層した。埋土全体に微細な炭化物が混入するが、その成因は不明である。

床面 床面はほぼ平坦で、貼床は確認できなかった。床面上にてP1～P9の9基の小穴を検出し、そのうちP1・P3・P4・P6・P7で、柱痕跡と考えられる堆積を確認した。しかし、掘形は全体的に浅い。平面的な位置関係からP1が柱穴の可能性のあるものの、住居の全体形が不明であるため確認はない。住居南側では炭化物の広がりを確認したが、狭い範囲に限られているため、その性格は不明である。なお、壁溝と炉跡は確認できなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器657点、石器類3点、小穴から土器46点が出土した。土器片の多くはVI期～VII期に属する。

出土遺物 1334はVII期壺A3類。口縁部内面には羽状文が認められる。1335はVI期甕D1b類。口縁部が短く屈折し、刺突文が認められる。1336はVI期～VII期甕D類脚部。1337は幅広の多条沈線のあるVII期高坏C4c類。1338は口縁端部が内傾し、多条沈線を施文するVII期高坏D2類。1339～1341は砥石。いずれも断面方形の細長い石材を使用し、砥面は2～4面が観察でき、敲打痕が残る。特に1339は側面が敲打により大きく窪む。

時期 出土遺物の時期と、VII期のSB303に切られることから、VII期と考えられる。

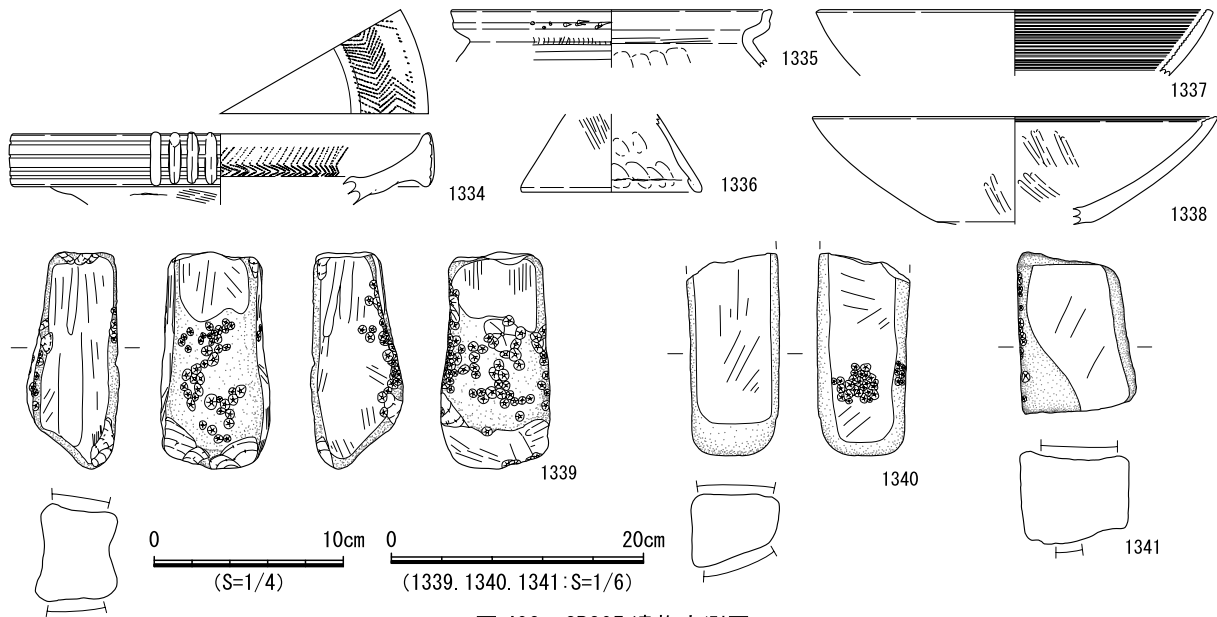


図498 SB305 遺物実測図

SB306 (遺構：図500・501、遺物：図502)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。東側でSB305、南側でSB308、南西側でSB307を切る。平面形は比較的明瞭であった。

形状 南北長約3.6m、東西長約2.9mであり、南北に長い隅丸長方形を呈する。北辺と南辺は直線

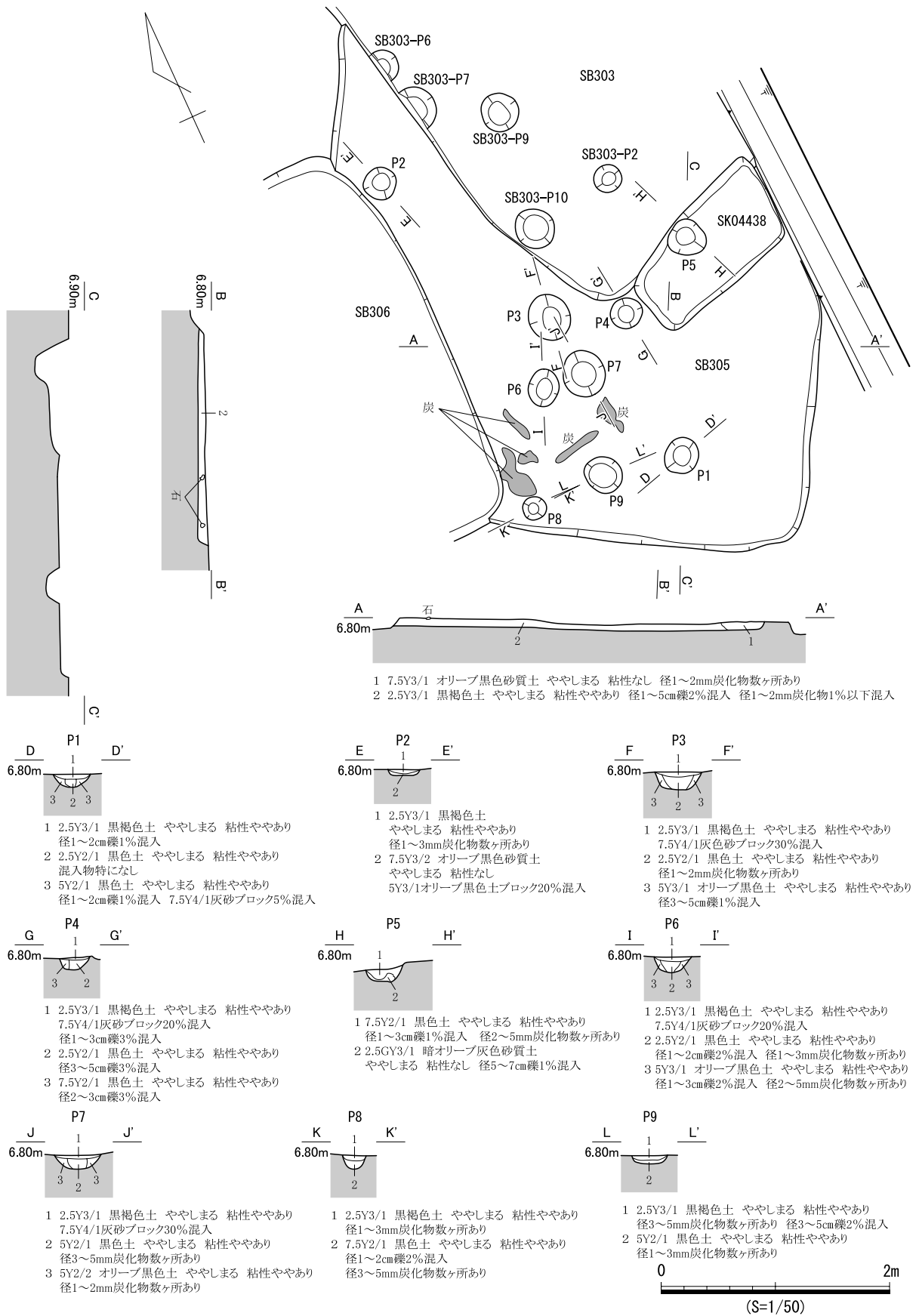


図 499 SB305 遺構図

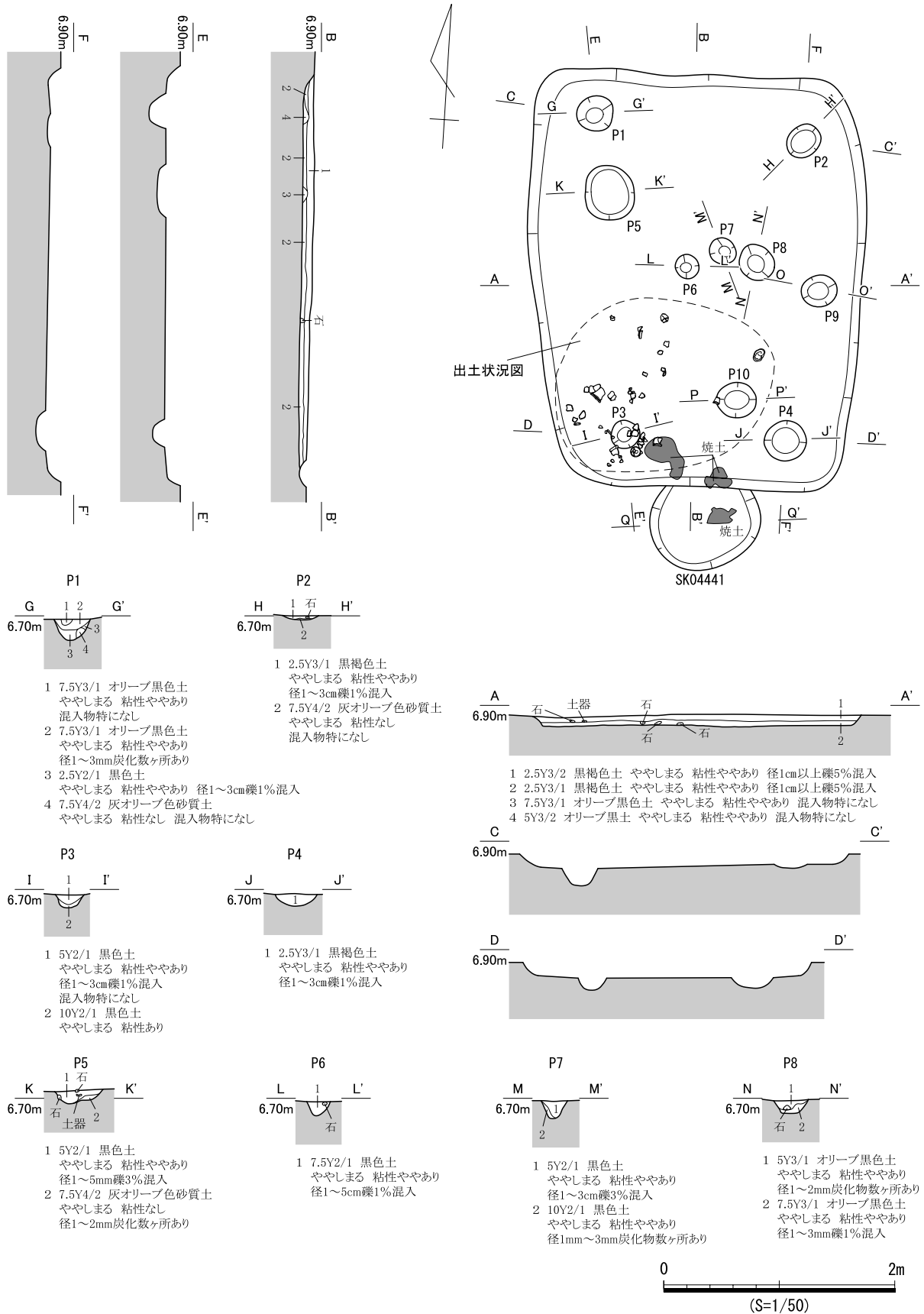


図 500 SB306 遺構図 (1)

的だが、西辺と東辺はやや外側に膨らみ、東西幅が南に向かって狭くなっている。深さは約0.1mで、壁面の傾斜は緩やかである。

埋土 4層に分層した。ほぼ水平な堆積であるが、3・4層がブロック状に入り込む。

床面 床面はほぼ平坦で、貼床は確認できなかった。床面上にてP1～P10の10基の小穴を検出し、そのうちP1とP7で柱痕跡と柱抜き取り痕を確認した。平面的な位置関係からP1～P4の4基が柱穴と考えられる。南西側では、床面直上で土器片がまとまって出土し、南壁沿いで焼土の広がりを確認した。なお、本遺構に切られるSK04441底面でも焼土を確認したが、その性格は不明である。

遺物出土状況 埋土中から1,193点、小穴から土器65点が出土した。小穴のうち、P1からは21点の土器が出土しており、床面上の南西側では土器が散在して出土した。

出土遺物 1342はVI期甕A2b類。口縁部が短く屈曲する。1343は口縁部が短く直立するVI期甕D2b類。1344はVII期甕E5類。口縁部が短く内湾し、胴部が頸部からなだらかに膨らむ。外面に粗いハケが認められる。1345はVII期鉢B類底部。1346はVII期高坏G3c類脚部。多条沈線と山形文を交互に施文する。1347はVI期～VII期手捏ねC類。

時期 出土遺物の時期から、VI期～VII期と考えられる。

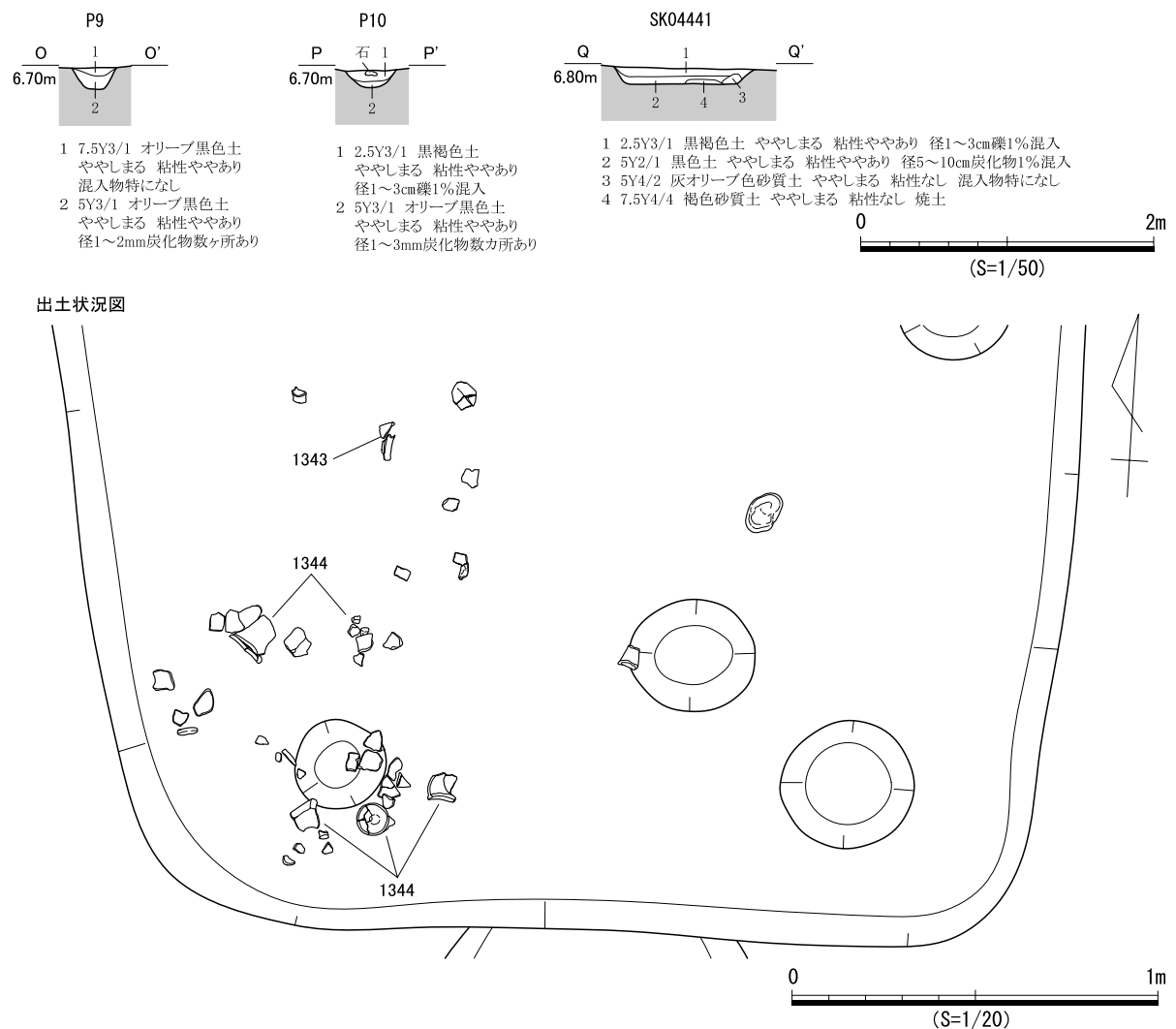


図 501 SB306 遺構図 (2)

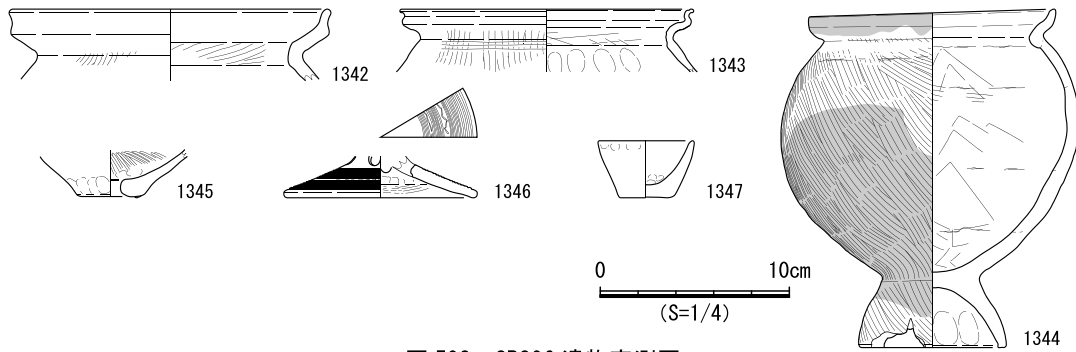


図 502 SB306 遺物実測図

SB307 (遺構：図 504、遺物：図 503)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。北東側をSB306に切られ、西側でSB308、南側でSB310、南西側でSB313を切る。平面形は比較的明瞭であった。

形状 北東側をSB306に切られるが、確認できた範囲から隅丸方形と考えられる。南北長約4.3m、東西長約4.5mである。西辺は南側が外側に膨らむが、他の辺は直線的である。深さは約0.1mで、壁面の傾斜は比較的急である。

埋土 2層に分層した。微小な炭化物や小礫が混入する。ブロック土が混入し、層界に凹凸が認められることから、人為堆積と考えられる。

床面 ほぼ平坦で、貼床は確認できなかった。床面から7基の小穴を検出したが、いずれも柱痕跡は確認できず、P7以外は掘形が浅い。平面的な位置関係からP1とP2は柱穴の可能性のあるものの、壁際に寄り過ぎていたり、東側に対応する穴が確認できていないことなどの問題も残る。壁溝は、南辺を除いて確認した。幅約0.1m～0.2m、深さ約0.05mで、壁面の傾斜は比較的急である。なお、炉跡は確認できなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器2,160点、石器類1点、小穴から土器82点、石器類1点、壁溝から土器88点が出土した。P7から器台(1352)と砥石(1355)が出土し、砥石は西壁沿いに縦位で、器台は坏部を下にして出土した。

出土遺物 1348はV期～VI期壺胴部。直線文と山形文が認められる。1349はVI期甕A3類。口縁端部がわずかに屈曲する。1350はV期高坏B2c類。口縁部が短く外反する。1351はV期高坏I類脚部。脚部が外反して開き、3帯の直線文が認められる。1352、1353はV期器台A類。1352は完形品で、口縁

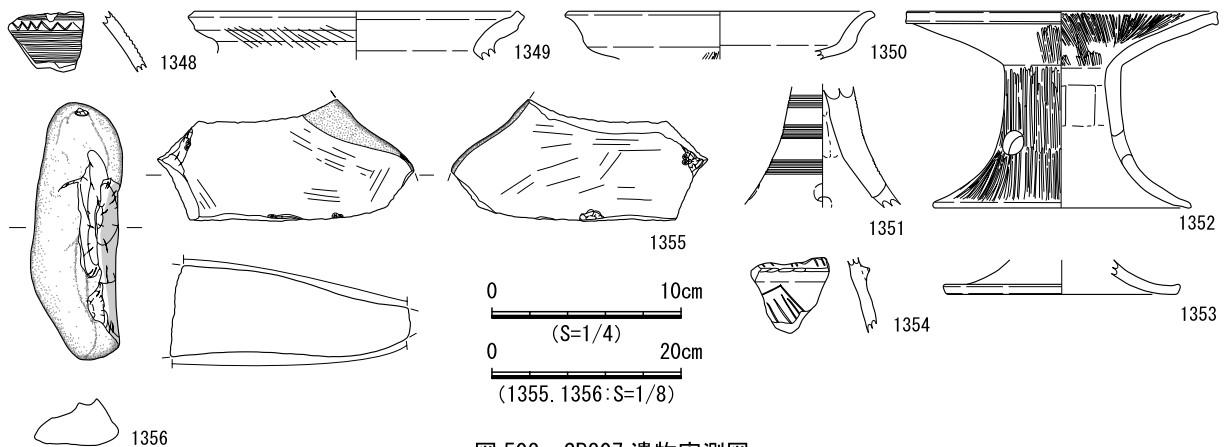


図 503 SB307 遺物実測図

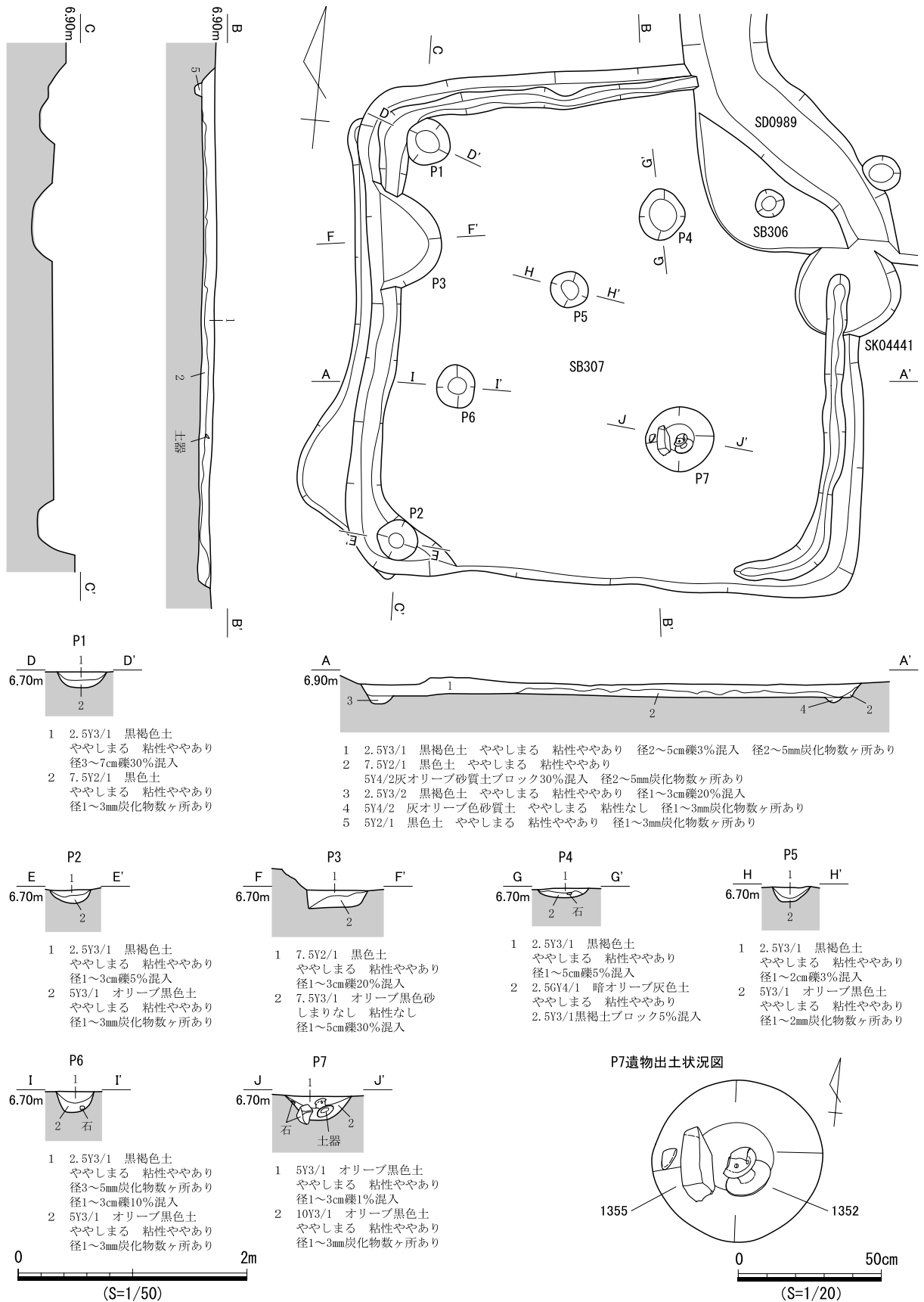


図 504 SB307 遺構図

部が直線的に開く。基部がやや太く柱状気味で、裾部が強く外反する。1353は脚部で端部が平坦である。1354は小片で器種が不明。貼付突帯の下位に鋸歯文が認められる。V期の土器と考えられる。1355は砥石。素材は扁平な円礫で、その表裏面を砥面として使用している。1356は叩石。下端に敲打痕が観察でき、右側面から下端にかけて煤が付着している。

時期 出土遺物の時期から、V期～VI期と考えられる。

SB308 (遺構：図506、遺物：図505)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。北側をSB305、SB306、西側をSB307に切られ、南東側でSB309、南西側でSB310を切る。平面形は比較的明瞭であった。

形状 遺構の重複が著しいため全形は不明であるが、確認できた範囲から方形と考えられる。東辺と南辺は直線的であり、深さは約0.1mで、壁面の傾斜は緩やかである。

埋土 4層に分層し、埋土全体に微細な炭化物や小礫が混入する。遺構の重複が著しく、その時期が近似するため、人為堆積の可能性が高い。

床面 ほぼ平坦で、貼床は確認できなかった。床面上にてP1～P3の3基の小穴を確認し、P1では柱抜き痕の可能性のある堆積を確認した。しかし、住居の全形が不明であるため、平面的な位置関係から柱穴を推定するのは困難である。炉跡は確認できなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器523点、小穴から土器95点、石器類4点が出土した。その多くはVII期の土器片であり、P1では高杯(1360)が、P3では上層にて壺(1357)と砥石(1363)が、それぞれ出土した。

出土遺物 1357はVII期壺A3類。口縁部が大きく外反し、端部下端を拡張する。内面に羽状文が認められる。1358はVII期壺B2a類。口縁部が短く頸部で屈折して、外反する。端部は平坦で、外面には一部にケズリの痕跡が認められる。胴部は球形で丁寧なミガキが認められる。1359はVII期壺H2b類。口縁部が強く内湾し、上半に精緻な文様が認められる。上半の上部1/2程度に多条沈線を施文し、それより下半には少条の多条沈線と精緻な山形文、刺突文を施文する。上下端に山形文を配し、その間に刺突文を対向するよう配し、刺突文が羽状文状にみえる。1360はVII期高杯D類脚部。裾部が強く内湾する。1361はVII期甕E類脚部。1362はI期壺頸部。太い沈線2条が認められる。1363は砥石。長楕円礫の表裏面を砥面として使用している。

時期 出土遺物の時期から、VII期と考えられる。

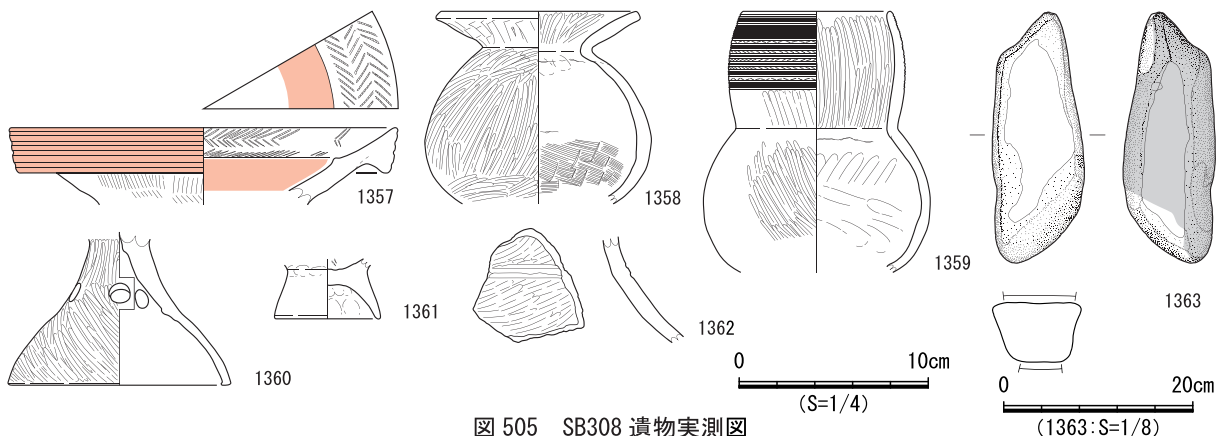


図505 SB308 遺物実測図

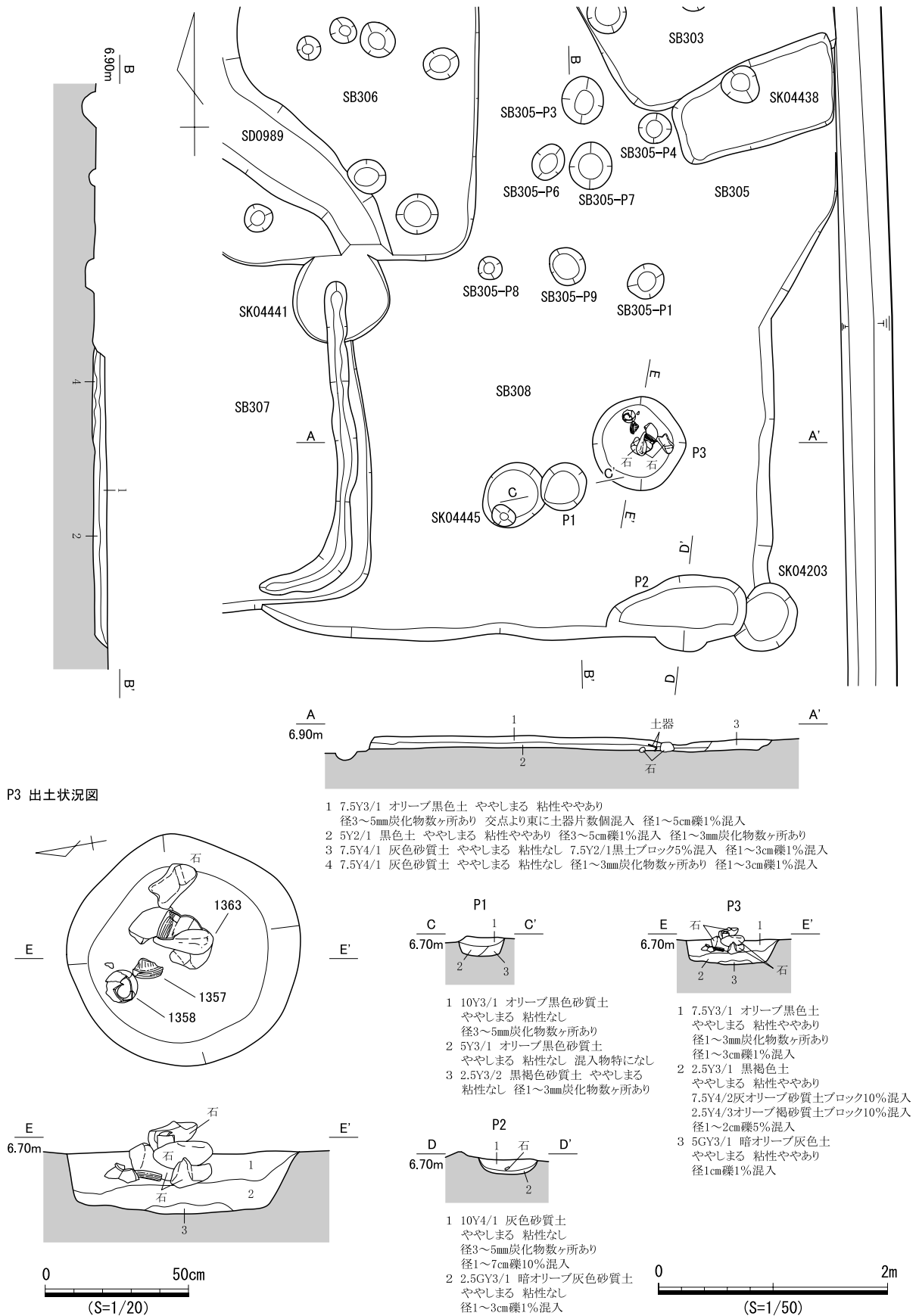


図 506 SB308 遺構図

SB309 (遺構：図507)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。東側は調査区外に及び、南側は攪乱によって滅失している。また、北西側をSB308に切れ、平面形はやや不明瞭であった。

形状 全形は不明であるが、確認できた範囲から方形と考えられる。確認できた各辺はいずれも直線的であり、深さは約0.1mで、壁面の傾斜は比較的急である。

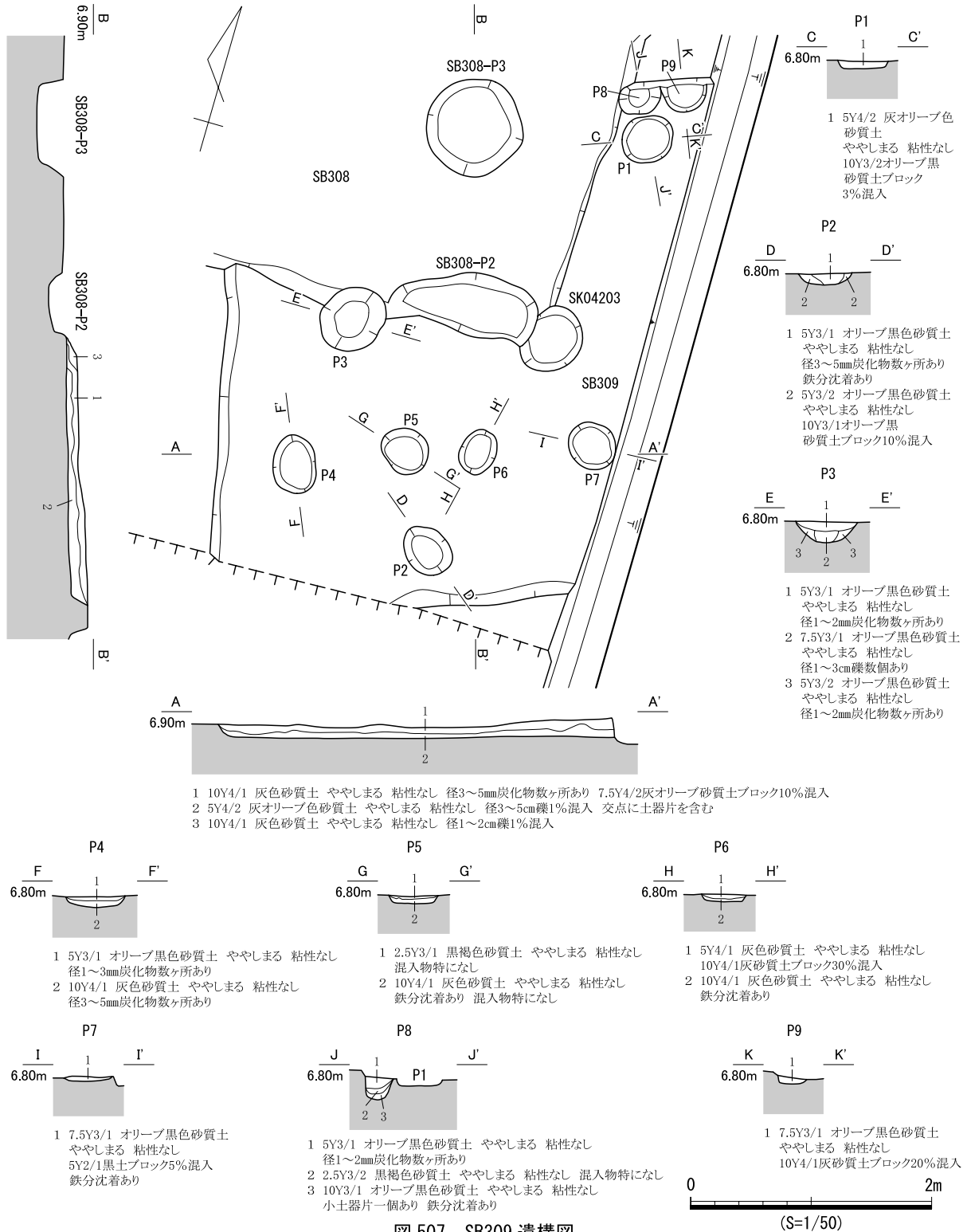


図507 SB309 遺構図

埋土 3層に分層した。ブロック土の混入があり、層界に凹凸がみられることから、人為堆積と考えられる。

床面 床面はほぼ平坦で、貼床は確認できなかった。床面上にてP1～P9の9基の小穴を検出し、P2とP3で柱痕跡を確認した。それ以外の小穴はいずれも小規模で、掘形も浅い。SB308床面の小穴を含めて検討したが、柱穴の位置を推定するのは困難であった。なお、壁溝と炉跡は確認できなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器468点、小穴から土器54点が出土した。しかし、いずれも小片であり図示しなかった。

時期 出土遺物の時期とⅦ期のSB308に切られることから、Ⅵ期～Ⅶ期と考えられる。

SB310 (遺構：図508・509、遺物：図510)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。北側をSB307とSB308に切れ、南西側でSB313を切る。平面形は、比較的不明瞭であった。

形状 全形は不明だが、確認できた範囲から隅丸方形と考えられる。東西長約4.5m、深さは約0.1mで、壁面傾斜は急となる。

埋土 2層に分層し、埋土全体に微細な炭化物、小礫が混入する。ブロック土の混入があり、層界に凹凸がみられることから、人為堆積と考えられる。

床面 床面はほぼ平坦で、貼床は確認できなかった。床面上にてP1～P4の4基の小穴を確認し、P1

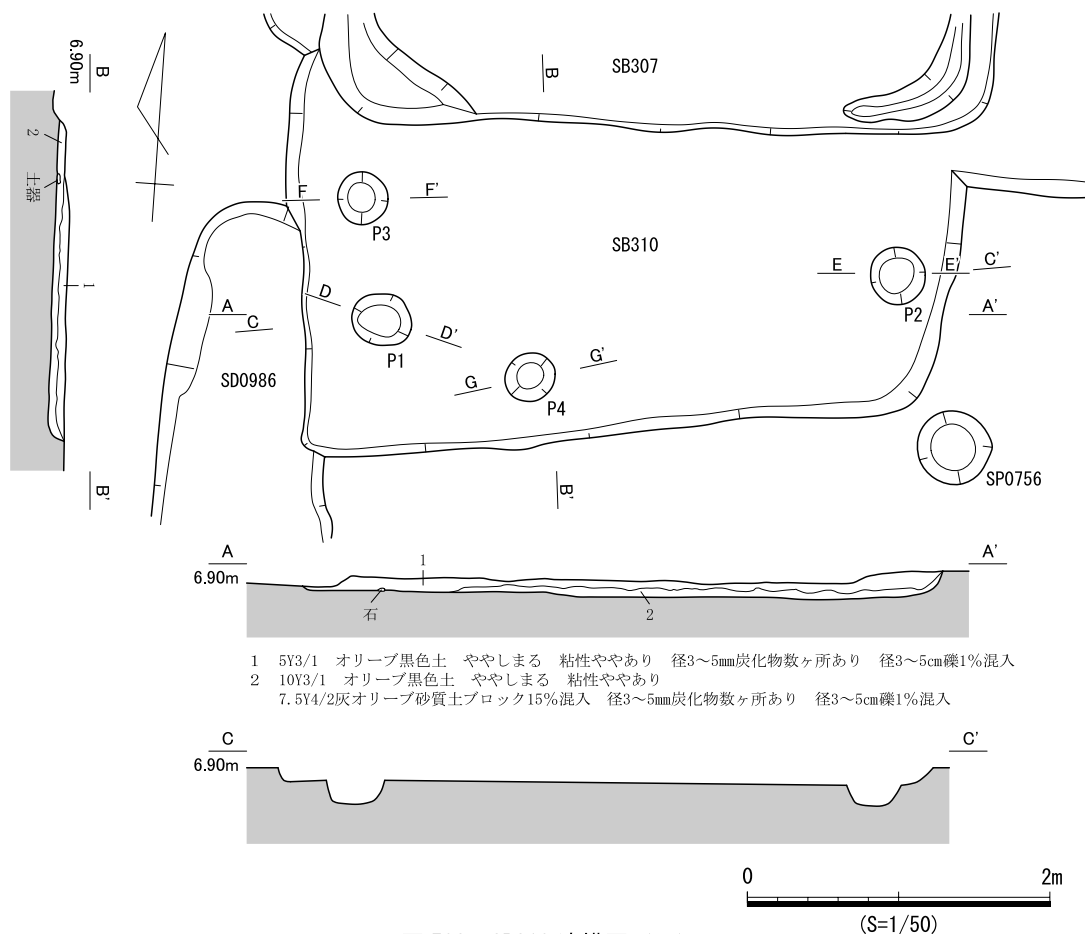


図508 SB310遺構図(1)

とP4で柱痕跡を確認した。平面的な位置関係からP1～P2の2基が柱穴と考えられるが、北側のSB307床面では対応する小穴を確認できなかった。なお、壁溝と炉跡は確認できなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器380点、石器類1点、小穴から土器53点が出土した。土器はVI期～VII期に属する破片が多いが、VII期の遺物は混入の可能性がある。

出土遺物 1364はVI期甕A3類。口縁部がわずかに屈曲する。1365はVI期～VII期甕脚部。脚部が短く開き、裾部に打ち欠きが認められる。1366はVII期高坏D類脚部。付根が細身で、裾部が内湾する。

時期 V期～VI期のSB307に切られることと出土遺物の時期から、VI期と考えられる。

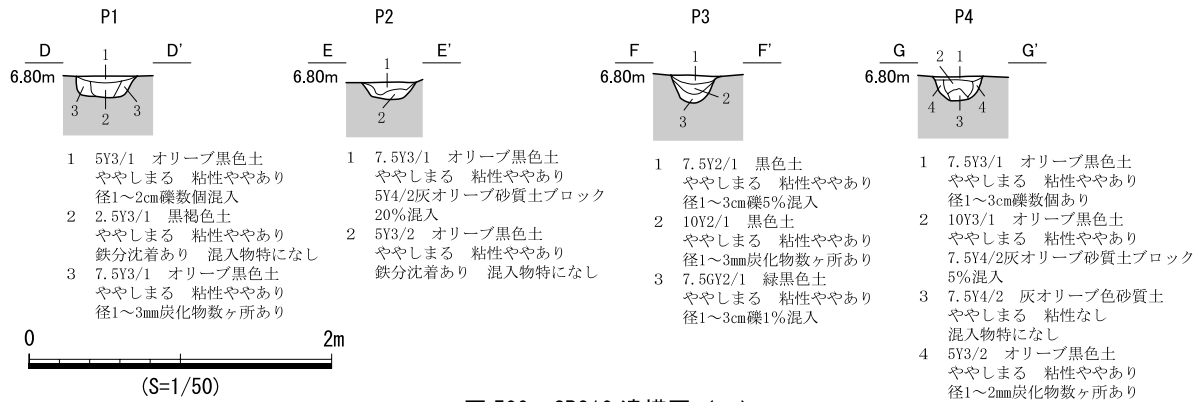


図 509 SB310 遺構図 (2)

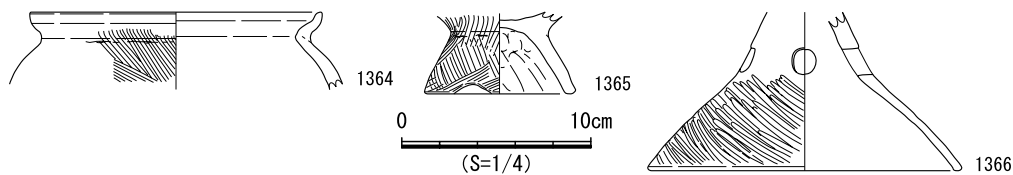


図 510 SB310 遺物実測図

SB311 (遺構：図 511・512、遺物：図 513)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。幅約1.6mの攪乱によって、北西隅部から南東隅部までを滅失している。北側でSB312、SB313、SK04412を切り、南側でSB314、SB315、SK04456を切る。平面形は比較的明瞭であった。

形状 確認できた範囲から平面形は隅丸方形と考えられる。南隅部と北隅部が鋭角気味となり、全体的には平行四辺形を呈する。南北長約4.5m、東西長約4.2mで、南西辺と南東辺はやや外側に膨らむ。深さは約0.1mで、壁面傾斜は急である。

埋土 7層に分層した。埋土全体に小礫が混入する。土層の層界に凹凸がみられることから、人為堆積と考えられる。

床面 ほぼ平坦だが、貼床は確認できない。床面上にて10基の小穴を検出したが、いずれも柱痕跡は確認できず、小規模で浅いものが大半を占める。平面的な位置関係からP1～P3の3基が柱穴の可能性があるが、北西隅部に相当する小穴は攪乱により確認できなかった。P9検出面では、VII期の甕(1368)が口縁部を北に向けて横位で出土した。なお、炉跡と壁溝は確認できなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器1,398点、小穴から土器197点が出土した。遺物の多くはV期～VII期の土器片である。

出土遺物 1367はVII期甕B3類。口縁端部に強い平坦面を形成する。1368はVII期甕D2類。ほぼ完存

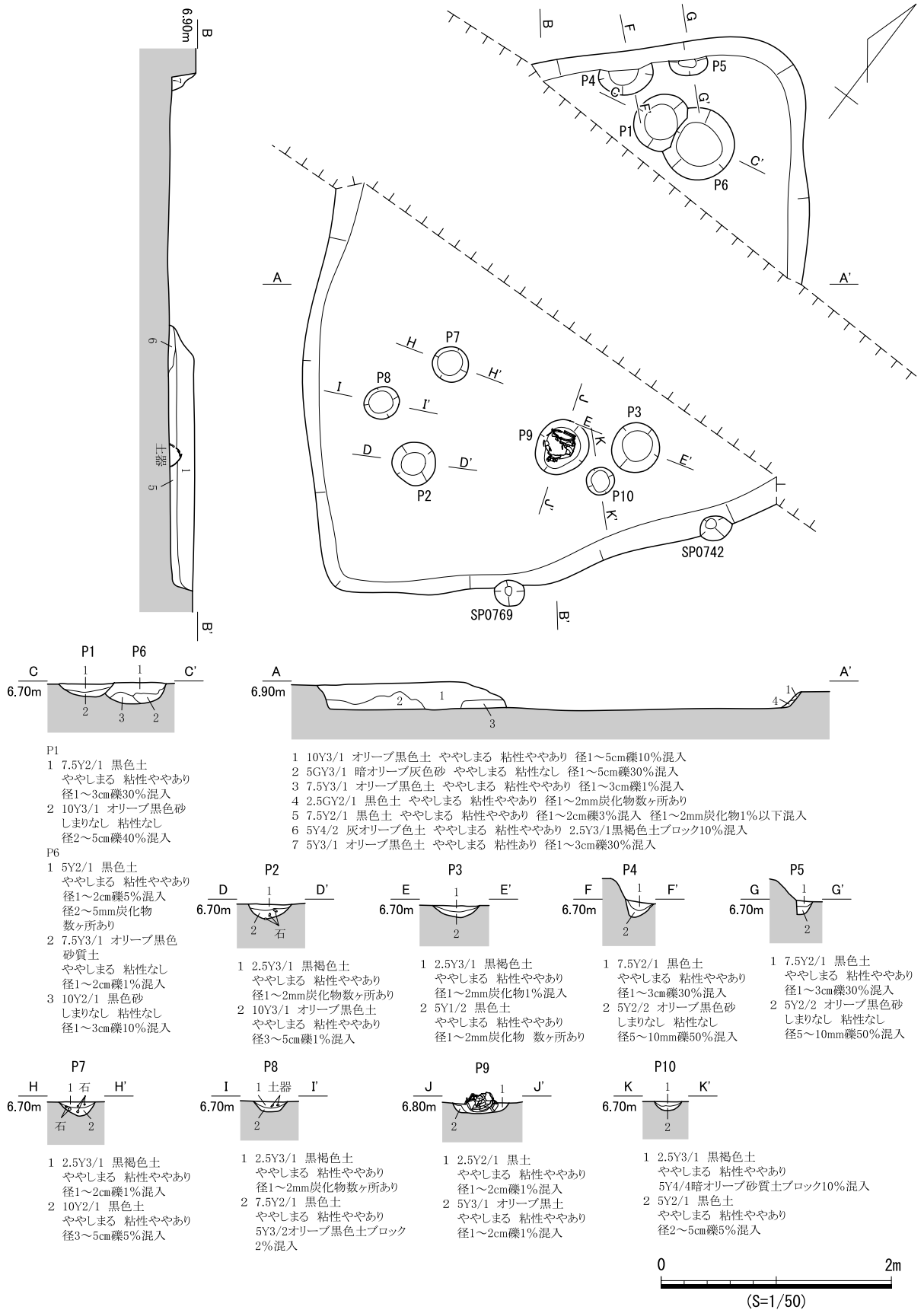


図 511 SB311 遺構図 (1)

する。口縁部が短く外方へ屈曲して、端部がわずかに肥厚する。胴部が強く膨らみ、最大径が胴部中程やや上位に位置する。ヨコハケが胴部上半に認められる。1369はVI期～VII期高坏B4類。口縁部が外反し、端部を丸くおさめる。1370はVI期～VII期高坏C・D類脚部。1371はV期～VI期高坏I類脚部。裾部が強く外反する。1372はVI期器台B類脚部。

時期 出土遺物の時期から、VII期と考えられる。

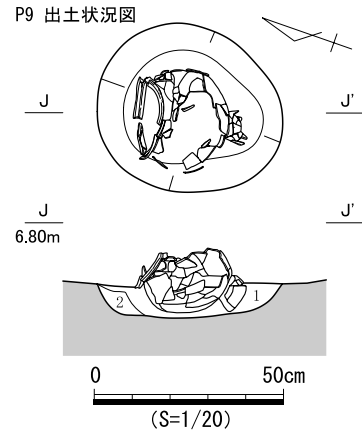


図 512 SB311 遺構図 (2)

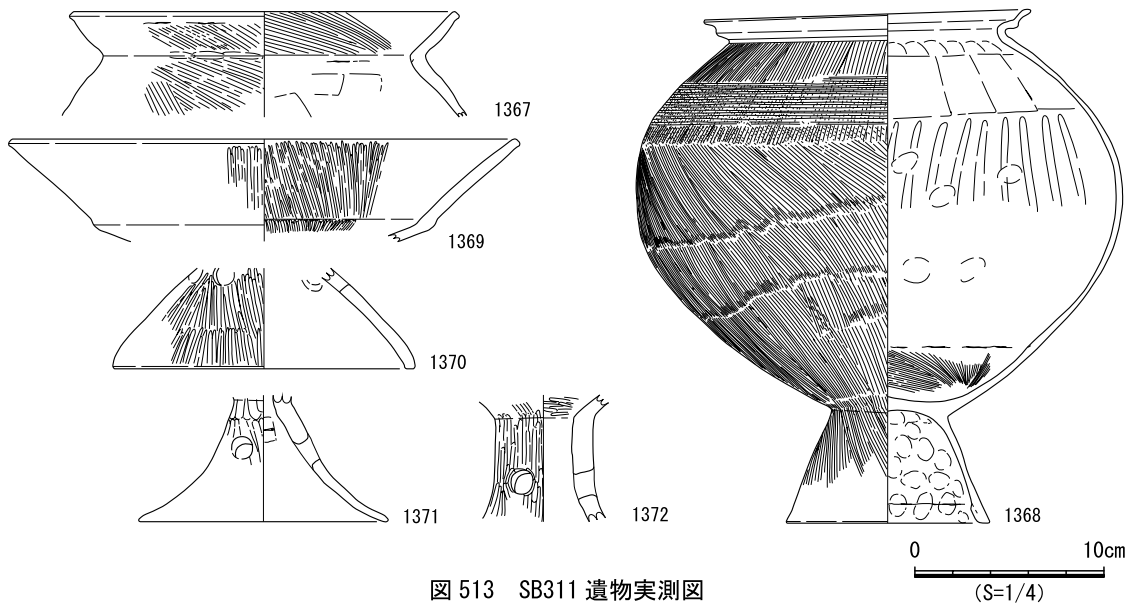


図 513 SB311 遺物実測図

SB312 (遺構：図 514・515、遺物：図 516)

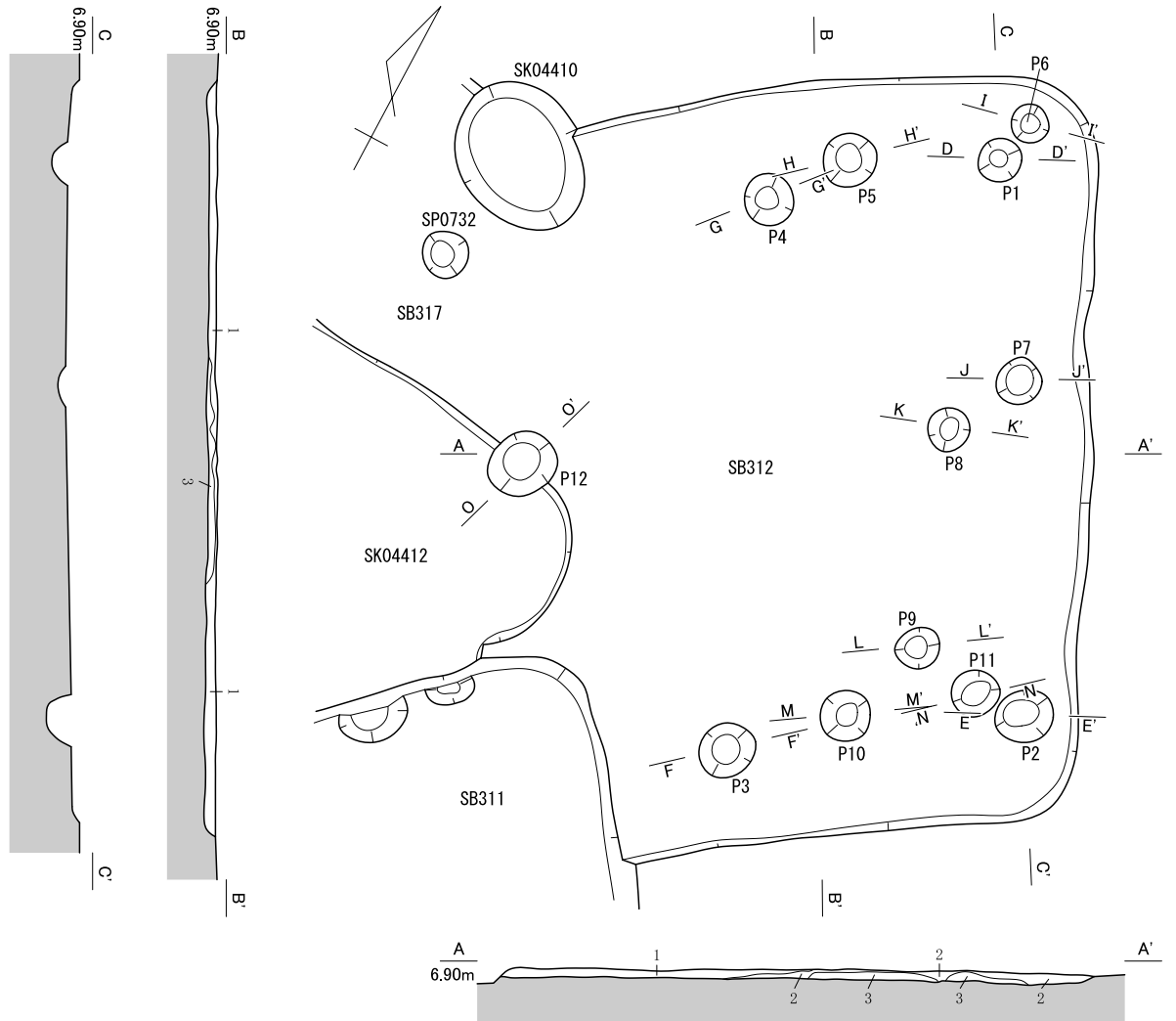
検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。南側をSB311に、南西側をSB317、SK04412に切られ、東側でSB313を切る。平面形はやや不明瞭であった。

形状 南西側を他の遺構に切られるが、確認できた範囲から隅丸方形と考えられ、北西-南東長約5.1mを測る。北東辺と南東辺は直線的だが、北西辺は外側にやや膨らむ。深さは約0.1mで、壁面傾斜は急である。

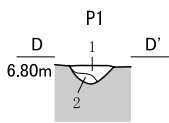
埋土 3層に分層し、埋土全体に小礫や土器片が混入する。層界の凹凸が顕著であるため、人為堆積と考えられる。

床面 平坦で、貼床は確認できず、床面上にて12基の小穴を検出した。いずれの小穴でも柱痕跡は確認できなかったが、P1、P4、P5の3基で柱抜き取り痕の可能性のある土層を確認した。また、P2、P10、P12はやや掘形が深くなるものの、それ以外は小規模で浅いものが大半を占める。平面的な位置関係からP1とP11が柱穴の可能性のあるものの、西側の対応する小穴は確認できなかった。また、壁溝と炉跡も確認できなかった。

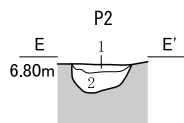
遺物出土状況 埋土中から土器264点、石器類3点、小穴から土器17点が出土した。



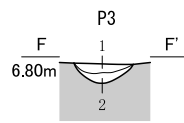
- 1 10Y2/1 黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径3~5mm炭化物数ヶ所あり 径1~2cm礫5%混入 小土器片数個あり
- 2 5Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径1~2cm礫10%混入 小土器片数個あり
- 3 2.5Y3/1 黒褐色砂 しまりなし 粘性なし 径1~2cm礫30%混入



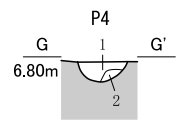
- 1 10Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径1~3cm礫5%混入
- 2 5Y3/1 オリーブ黒色砂質土 ややしまる 粘性なし 混入物特になし



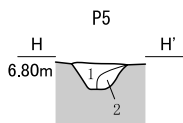
- 1 2.5Y3/1 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり 径3~5cm礫20%混入
- 2 5Y2/1 黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径1~3cm礫5%混入



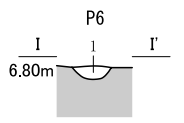
- 1 2.5Y2/1 黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径1~5cm礫30%混入
- 2 5Y3/2 オリーブ黒色砂 しまりなし 粘性なし 径1~3cm礫5%混入



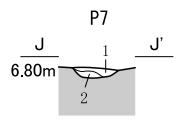
- 1 2.5Y2/1 黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径1~3mm炭化物数ヶ所あり
- 2 5Y3/2 オリーブ黒色砂 しまりなし 粘性なし 径1~2cm礫30%混入



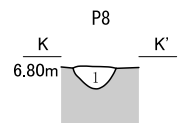
- 1 2.5Y2/1 黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径1~3cm炭化物塊数ヶ所あり 径1~5cm礫20%混入
- 2 5Y3/2 オリーブ黒色砂 しまりなし 粘性なし 径1~2cm礫30%混入



- 1 5Y3/1 オリーブ黒色砂質土 ややしまる 粘性なし 径1~3cm礫10%混入



- 1 2.5Y3/1 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり 径1~3cm礫10%混入
- 2 5Y4/2 灰オリーブ色砂 しまりなし 粘性なし 径1~2cm礫20%混入



- 1 7.5Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径1~5cm礫30%混入

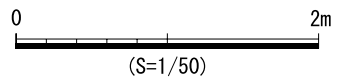


図 514 SB312 遺構図 (1)

出土遺物 1373はⅦ期甕A4類。口縁部が短く外反し、平坦な端部に円形刺突文を施文する。端部は尖り気味である。1374はⅤ期～Ⅵ期高坏Ⅰ類脚部。1375は打製石斧。横長剥片を素材とし、右側辺縁に細かい剥離が観察できる。1376は磨石。扁平な円礫の一面に擦痕が観察できる。

時期 出土遺物の時期から、Ⅶ期と考えられる。

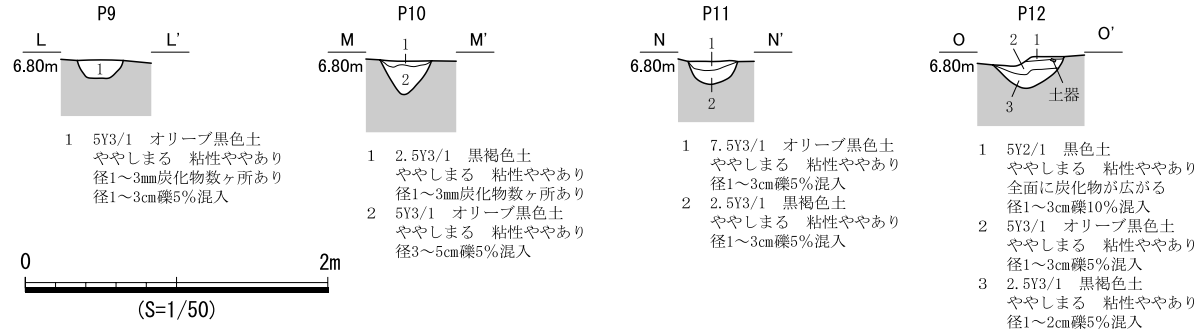


図 515 SB312 遺構図 (2)

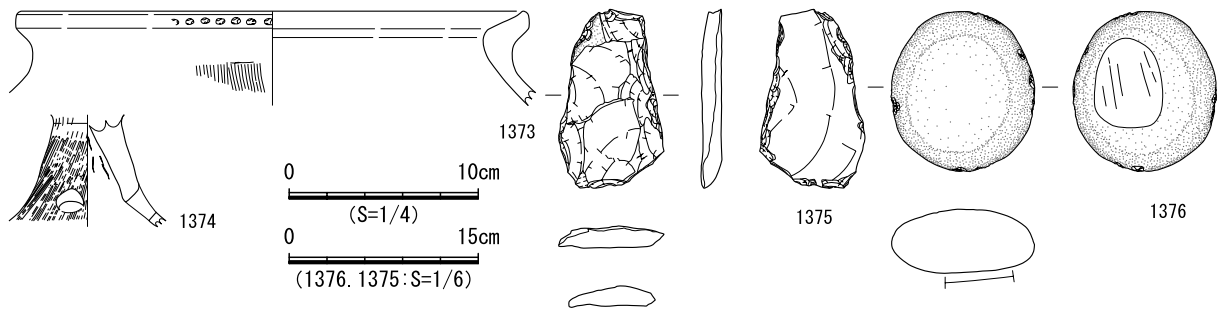


図 516 SB312 遺物実測図

SB313 (遺構：図 518、遺物：図 517)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。北西側をSB312、北東側をSB307、SB310 南西側をSB311に切られ、南側を攪乱溝により滅失している。

形状 他遺構との重複が著しいが、確認できた範囲から隅丸長方形と考えられる。北西-南東長約4.4 mで、確認した各辺は直線的である。北西と北東隅部は鈍角気味にやや開き、丸みを帯びる。深さは約0.1 mで、壁面傾斜は比較的緩やかである。

埋土 8層に分層し、埋土中には小礫が多く混入する。ブロック土が混入し、層界の凹凸がみられることから、人為堆積と考えられる。

床面 ほぼ平坦で、貼床は確認できなかった。床面上にて4基の小穴を検出したが、いずれも柱痕跡は確認できず、柱穴の推定は困難である。東壁際では焼土を検出した。焼土は床面上に薄く堆積しており、それに伴う掘り込みはない。なお、壁溝は確認できなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器554点、小穴から土器22点が出土した。

出土遺物 1377はⅤ期高坏B3a類。口縁部が短く外反する。1378はⅥ期鉢A2類。口縁部がわずかに直立し、端部は内傾する平坦面を有する。1379はⅤ期～

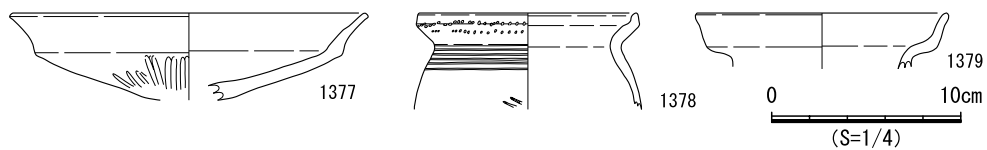


図 517 SB313 遺物実測図

VI期甕F類。口縁部が、頸部で強く屈曲して直立する。

時期 出土遺物の時期から、V期～VI期と考えられる。

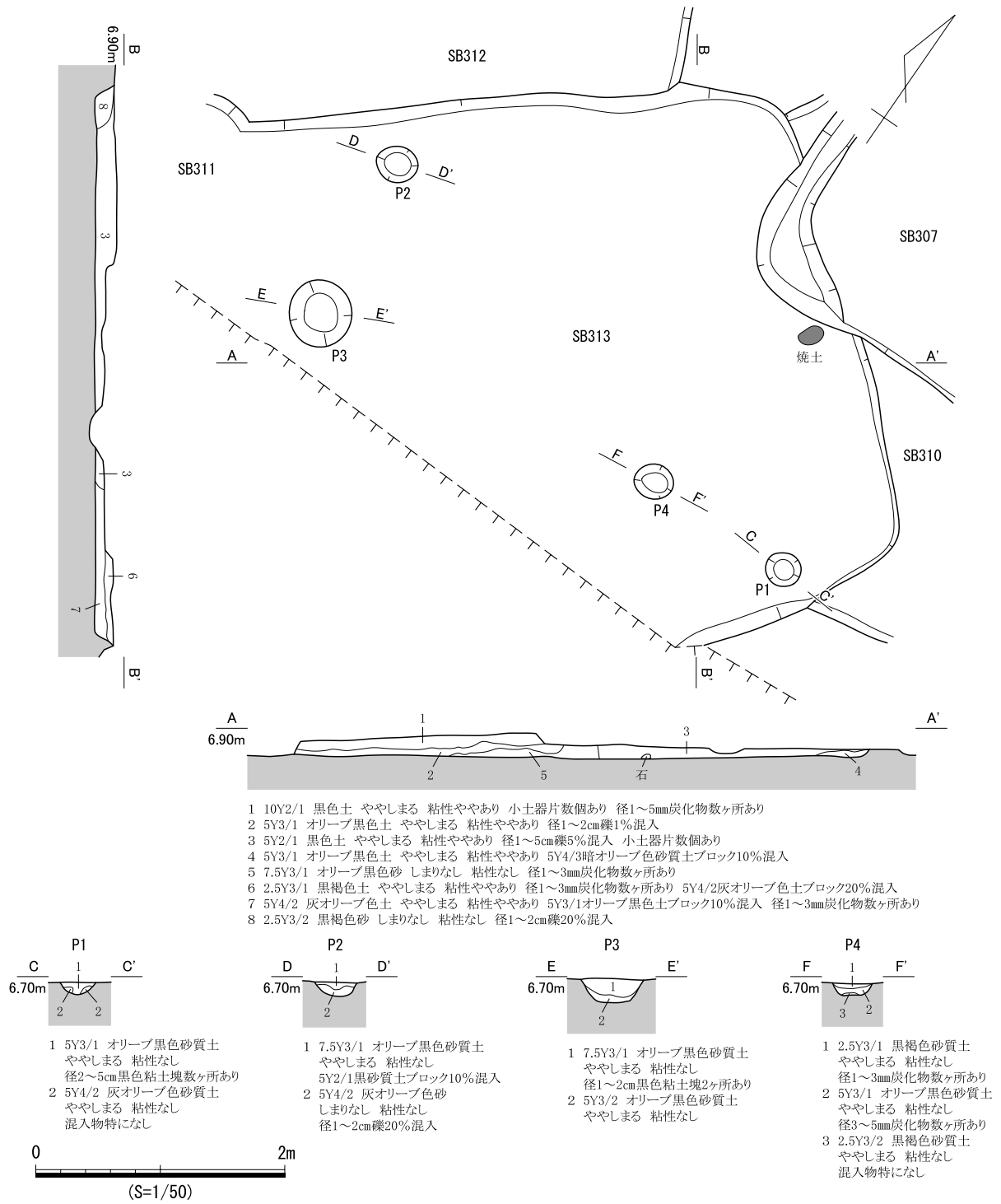


図 518 SB313 遺構図

SB314 (遺構：図 520、遺物：図 519)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。北西側をSB311、東側をSD0990に切られ、SB315の北東側を切る。北側は東西に走る攪乱溝によって滅失している。平面形は比較的明瞭であった。

形状 遺構の重複や攪乱があるため、全形は不明である。南西隅部は鈍角に開き、丸みを帯びる。深さは約0.2mで、壁面の傾斜は急である。

埋土 3層に分層し、埋土全体に微細な炭化物が混入する。遺構の重複が著しく、その時期が近似するため、人為堆積の可能性が高い。

床面 ほぼ平坦だが、貼床は確認できなかった。床面上のP3周辺では炭化物の広がりを確認した。また、床面上にて5基の小穴を検出した。いずれも柱痕跡は認められなかったが、直径や掘形の形状が類似する。SB311床面で検出した小穴も含めて柱穴を検討したが、住居の全形が不明であるため、柱穴を推定するのは困難である。なお、壁溝と炉跡は確認できなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器558点、小穴から土器35点が出土した。土器片の多くはⅥ期～Ⅶ期に属する。

出土遺物 1380はⅦ期高坏G3c類。刺突文、多条沈線、山形文が認められる。1381はⅦ期高坏D類脚部。裾部が強く内湾する。

時期 出土遺物の時期と、Ⅶ期のSB311より先行することから、Ⅶ期と考えられる。

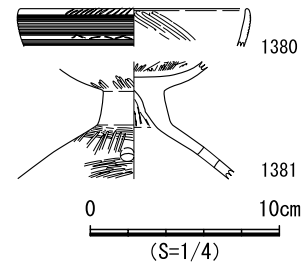


図 519 SB314 遺物実測図

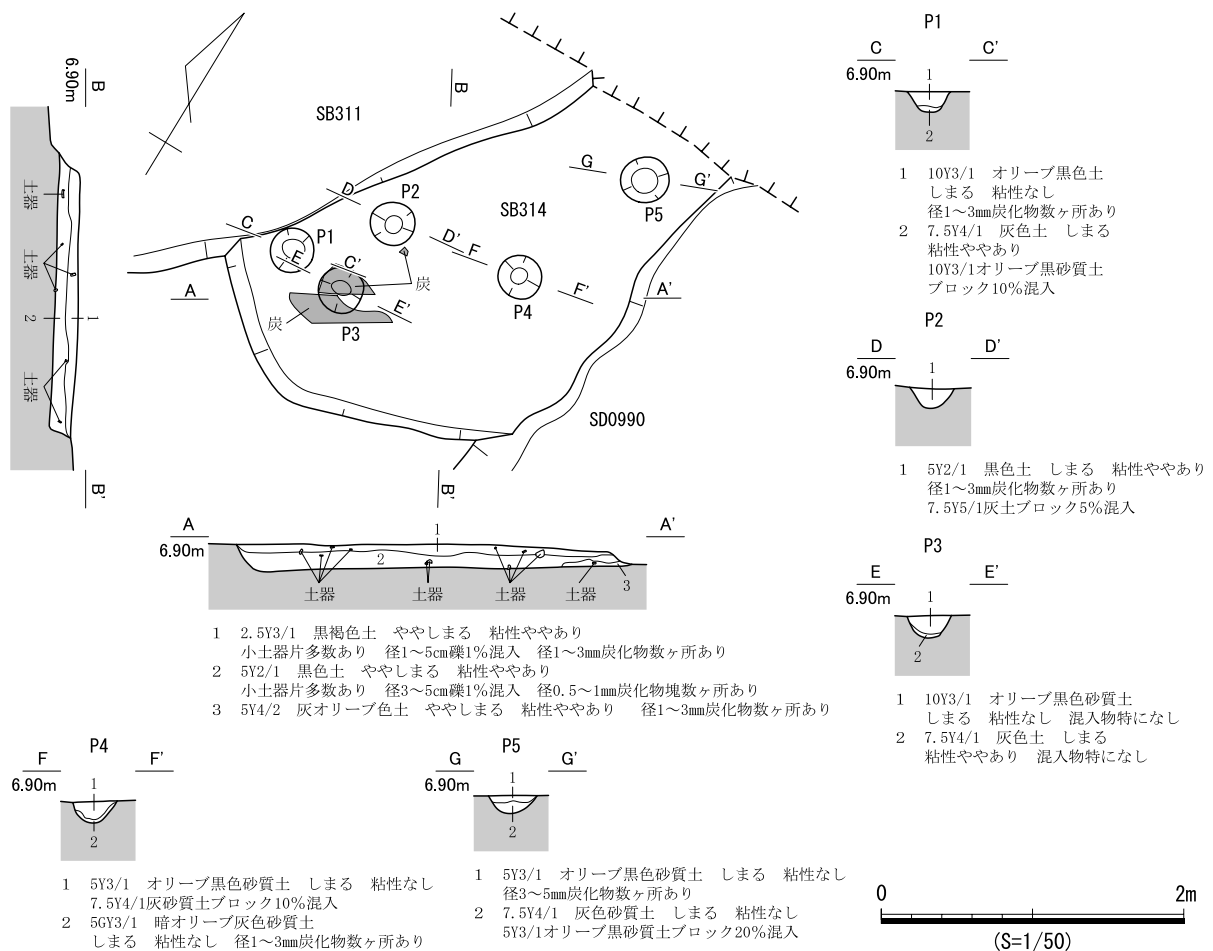


図 520 SB314 遺構図

SB315 (遺構：図 521・522、遺物：図 523)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。北側をSB311、SB314に切られる。平面形は比較的明瞭であり、特に東辺は明瞭であった。

形状 平面形は正方形に近い形状で、南北長約4.3m、東西長約4.4mを測る。各辺とも直線的であり、北西隅部だけは丸みを帯びるが、それ以外の隅部は鋭く直角をなす。深さは約0.1mで、壁面の傾斜は比較的緩やかである。

埋土 10層に分層した。西側部分は壁面崩落土が流入したような痕跡がみられ、自然に埋没した可能性がある。埋土掘削時にやや掘り下げすぎ、土層観察時に6・7層は貼床（整地土）と判断した。

床面 整地土の6・7層の上面が本来の床面であり、小穴を検出した面は本来の床面よりやや下位で

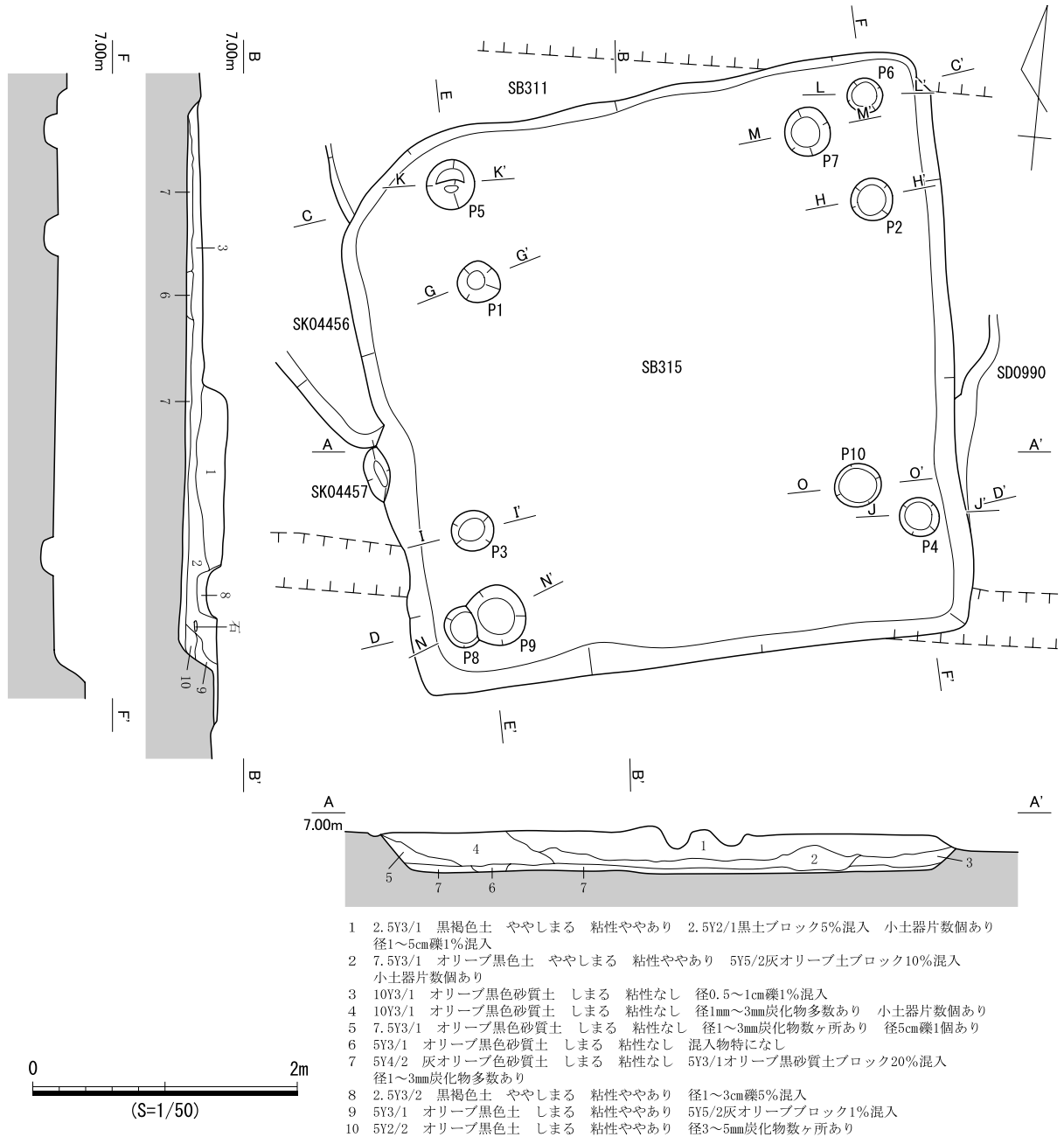


図 521 SB315 遺構図 (1)

ある。この面で10基の小穴を検出し、そのうちP1、P2で柱痕跡を、P3、P4、P6、P8で柱抜き取り痕跡の可能性ある堆積を確認した。平面的な位置関係からP1、P2、P4、P9の4基と、P3、P5、P7、P10の4基の組み合わせが柱穴であった可能性があり、最低1回の建て替えが行われたと考えられる。なお、壁溝と炉跡は確認できなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器1,650点、石器類1点、小穴から土器28点が出土した。土器の多くはV期～VII期に属する。

出土遺物 1382はVII期甕D2類。口縁部が短く直立し、頸部直下にヨコハケが認められる。1383、1384はVII期甕D類脚部。いずれも裾部に打ち欠きが認められる。1385はV期鉢A1類。口縁部が短く直立し、端部は内傾面を形成する。頸部はやや直立気味で、直下に直線文と刺突文が認められる。1386はVII期高坏D5類。多条沈線と連弧文が認められる。1387はVI期～VII期の手捏ねC類。胴部が直線的にのびる。1388はI期壺胴部。摩耗が進行しているが、木葉文の一部が認められる。

時期 出土遺物の時期と、VII期のSB311より先行することから、V期～VII期と考えられる。

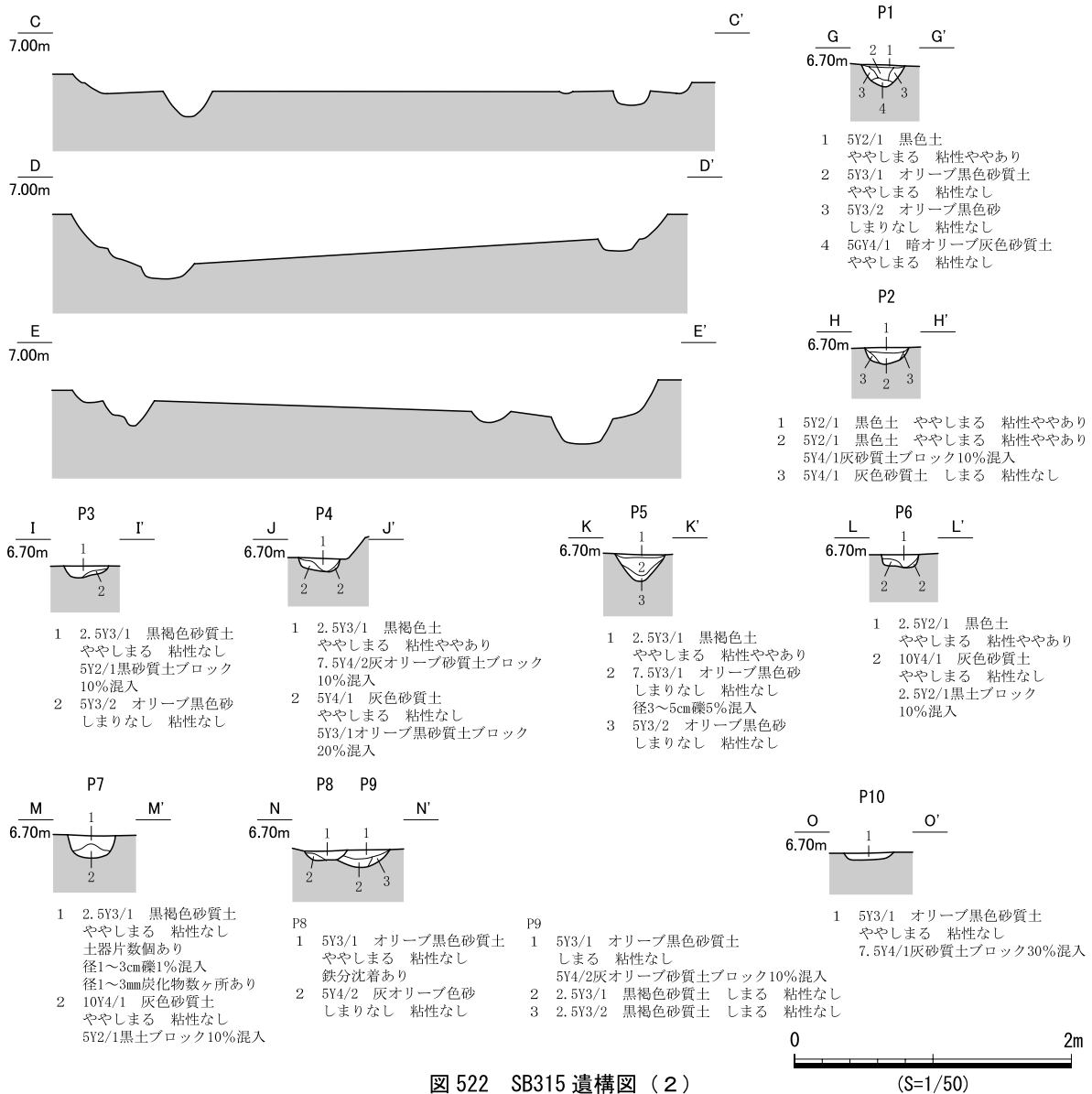


図 522 SB315 遺構図 (2)

(S=1/50)

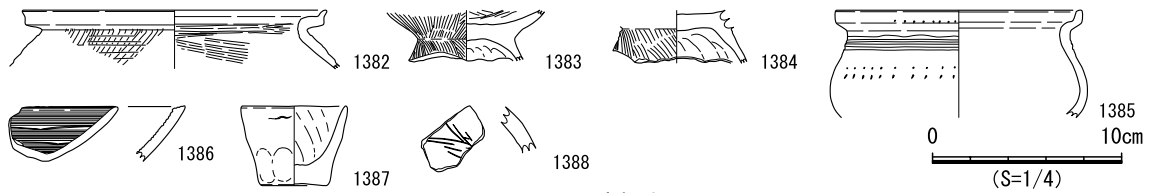


図 523 SB315 遺物実測図

SB316 (遺構：図 525、遺物：図 524)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。西側をSD0990に切られ、北側は攪乱溝により滅失する。平面形は比較的明瞭であった。

形状 全形は不明であるが、確認できた範囲から平面形は隅丸方形と考えられる。検出した各辺は直線的であり、北東-南西長約4.2mを測る。

埋土 2層に分層した。埋土全体にわたってブロック土の混入が認められ、層界に凹凸がみられることから、人為堆積と考えられる。

床面 ほぼ平坦だが、貼床は確認できなかった。床面上にて9基の小穴を検出したが、いずれも小規模で底面が丸く、掘形が類似しているものが多い。平面的な位置関係からP1～P2の2基を柱穴と考えた。壁溝と炉跡は確認できなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器493点、小穴から土器15点が出土した。下層からV期の壺(1389)、甕(1390～1392)、鉢(1393・1394)、高坏(1395)が出土し、VI期以降の遺物は確認できなかった。

出土遺物 1389はV期壺A1b類。口縁部が強く外反し、端部がやや外傾する。内面には羽状文が認められる。1390はV期甕B1b類。口縁部が頸部で短く屈折してくの字形である。端部には刺突文、胴部内面にはケズリが認められる。1391、1392はV期甕E類。平底甕で、口縁部が短く外反する。胴部は最大径が胴部中程より上位に位置する。1393、1394はV期鉢A類。1393は口縁部が短く屈曲する。端部に刺突文、頸部直下に直線文2帯、波状文を施文する。1394は頸部直下に直線文、刺突文、波状文が認められる。1395はV期高坏B3b類。

時期 出土遺物の時期から、V期と考えられる。

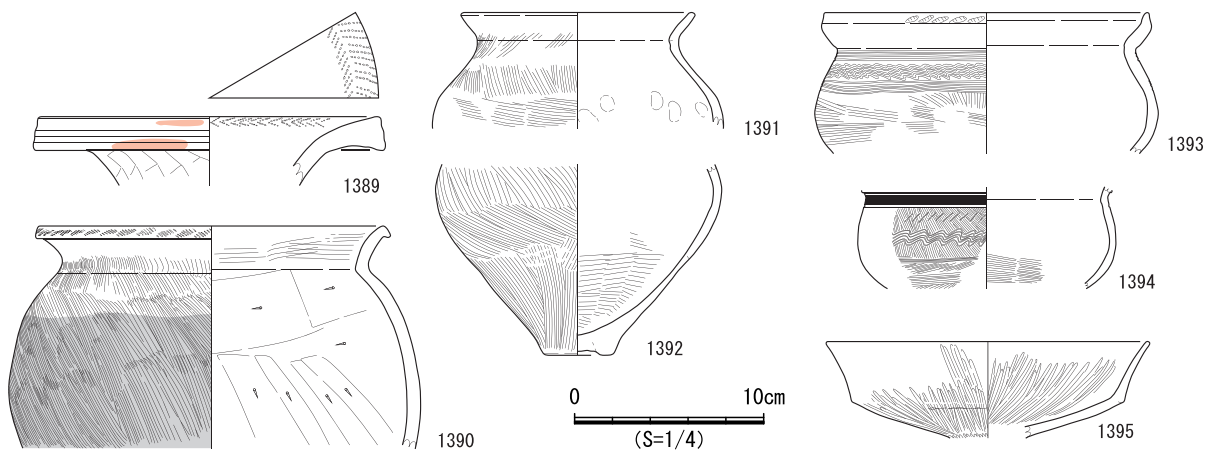
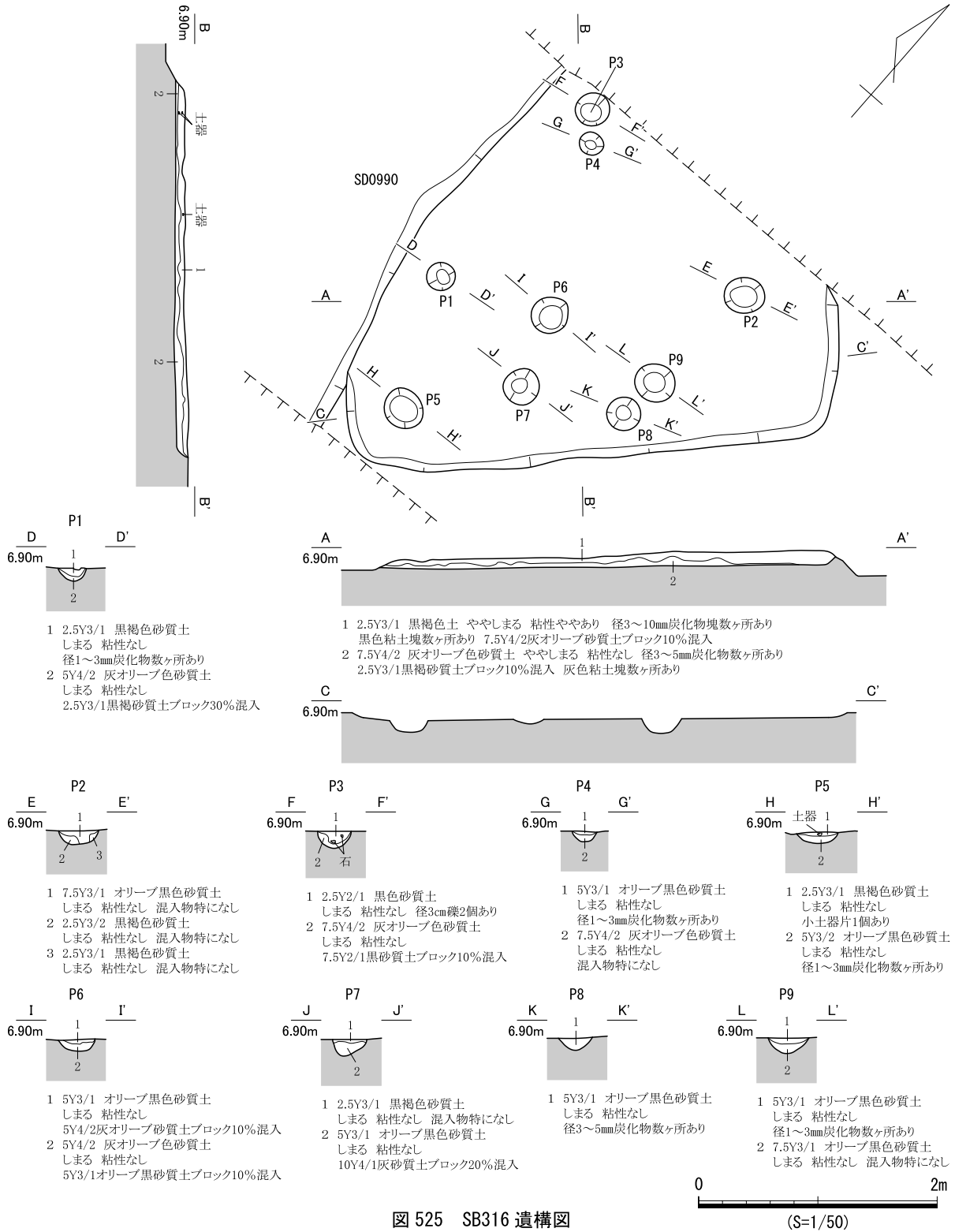


図 524 SB316 遺物実測図



SB317 (遺構：図 526、遺物：図 527)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。南側をSB318、SK04412に切られ、西側でSB312を切る。

形状 遺構の重複があるため全形は不明であるが、確認できた範囲から隅丸方形と考えられる。東西

長約4.1mであり、確認した各辺は直線的だが、北西隅部はやや丸みを帯びる。深さは約0.1mで、壁面傾斜は急である。

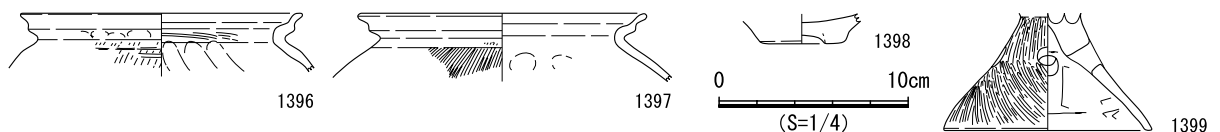
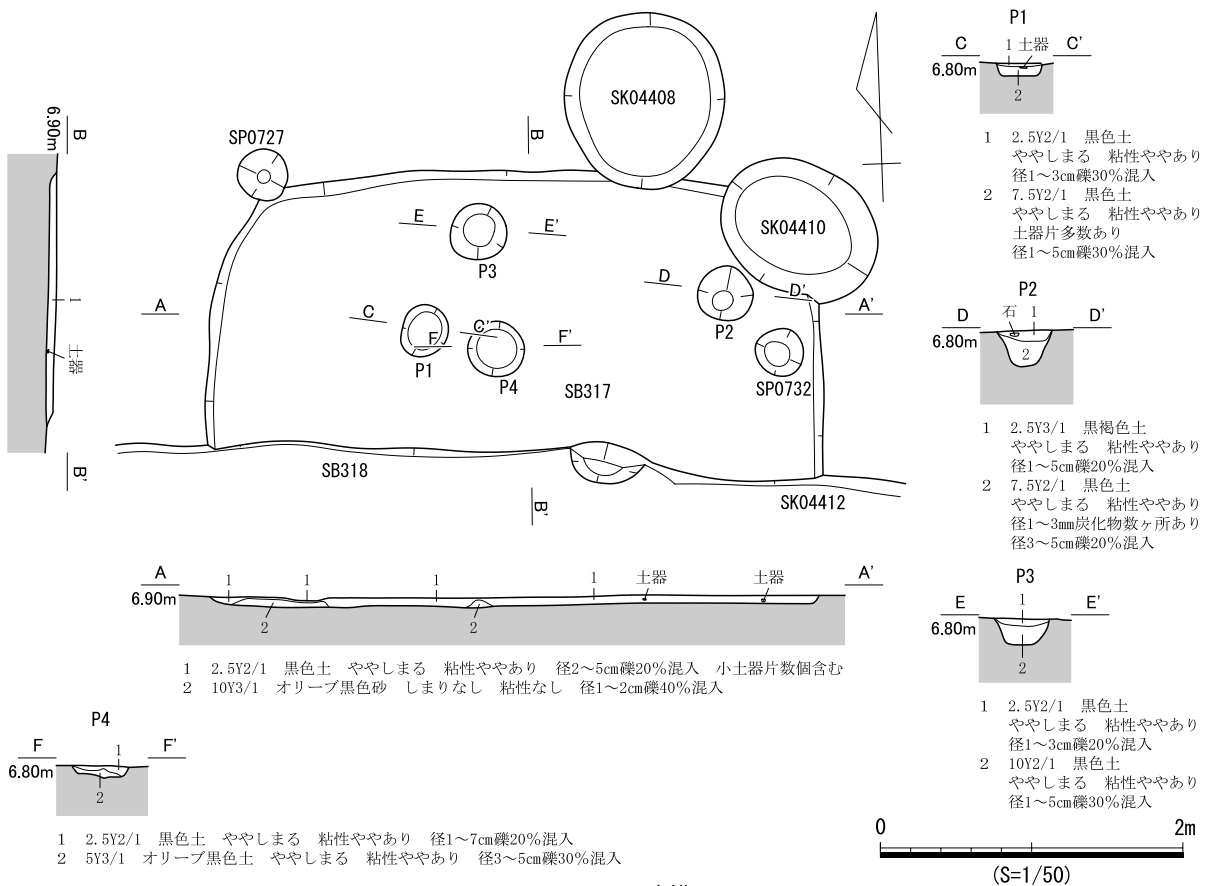
埋土 2層に分層し、埋土全体に小礫や土器小片が混入する。2層がブロック状に入り込むことから、人為堆積と考えられる。

床面 ほぼ平坦だが、貼床は確認できなかった。床面から4基の小穴を検出したが、いずれも柱痕跡は確認できなかった。P2、P3は底面が平坦で、掘形がやや深い。平面的な位置関係からP2は柱穴の可能性のあるものの、それに対応する各隅部の小穴をSB318やSK04412底面を含めて検討したが、推定できなかった。なお、壁溝と炉跡は確認できなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器398点、小穴から土器42点が出土した。土器の多くはV期～VII期に属し、P1からV～VI期の甕(1398)とVII期の高坏(1399)が出土した。

出土遺物 1396はVII期甕D2b類。口縁部が短く屈曲する。1397はVIII期甕D3類。口縁部が外上方に屈曲して、端部がわずかに肥厚する。1398はV期～VI期甕A類底部。1399はVII期高坏D類。脚部が内湾する。

時期 出土遺物の時期から、VII期と考えられる。



SB318 (遺構：図528、遺物：図529)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。南側をSB319に切られ、北側でSB317を切る。また、南側の一部は攪乱溝によって滅失している。

形状 遺構の重複があるため全形は不明だが、確認できた範囲から隅丸方形と考えられる。東西長約4.8mで、北辺と西辺は直線のだが、東辺は弧状に外側へ膨らむ。深さは約0.1mで、壁面傾斜は比較的緩やかである。

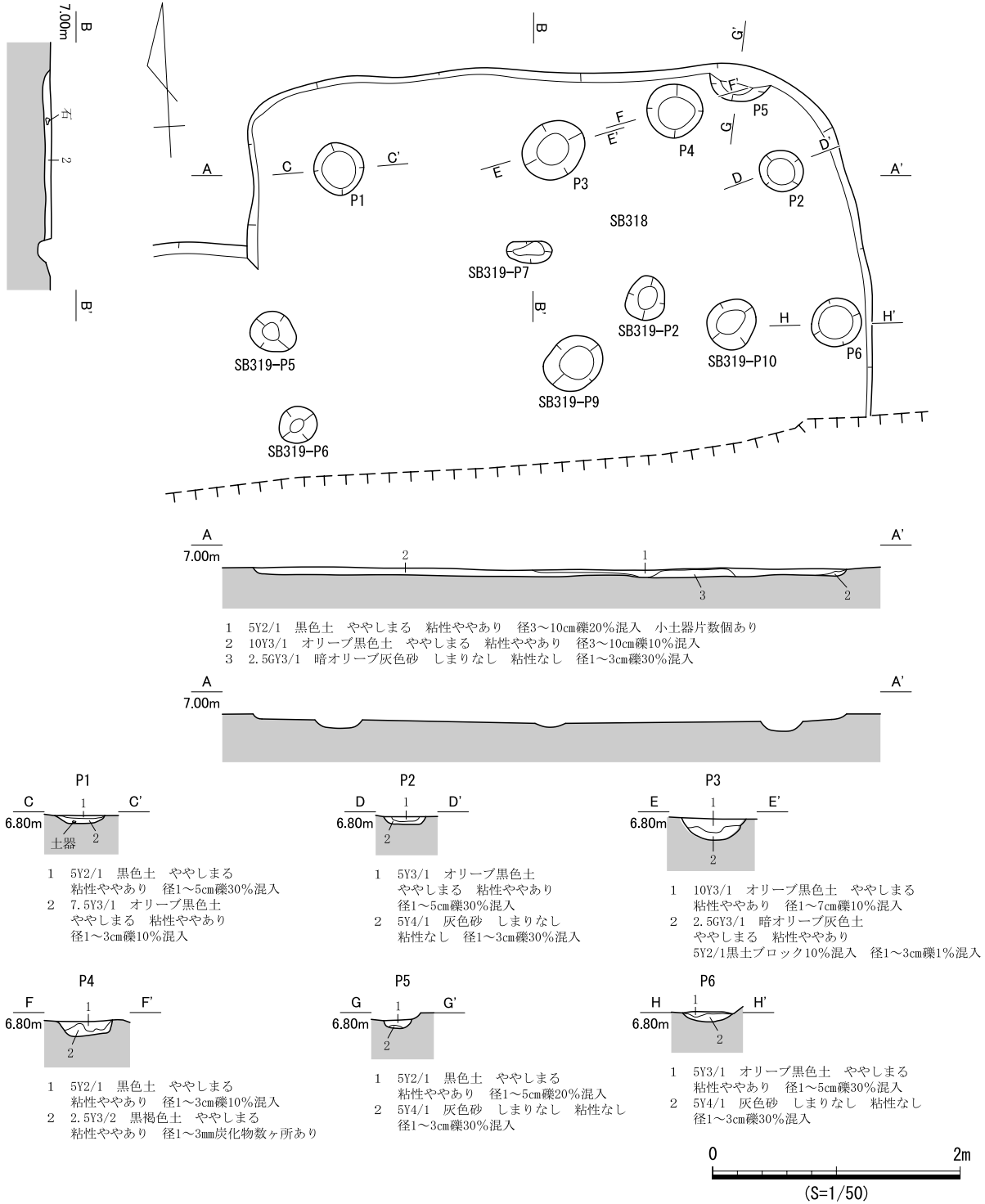


図528 SB318 遺構図

埋土 3層に分層し、埋土全体に小礫が含まれる。3層がブロック状に入り込むことや、重複する遺構の時期が近似することから、人為堆積の可能性が高い。

床面 平坦であり、床面上にて6基の小穴を検出した。いずれも柱痕跡は確認できなかったが、P3以外は浅くて小規模である。平面的な位置関係からP1とP2の2基が柱穴の可能性はある。なお、壁溝と炉跡は確認できなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器273点、小穴から土器22点が出土した。Ⅵ期～Ⅶ期の土器片が多く、P5から甕(1400)が出土した。

出土遺物 1400はⅤ期～Ⅵ期甕胴部。頸部直下に直線文と波状文が認められる。

時期 出土遺物の時期と遺構の重複関係から、Ⅶ期と考えられる。

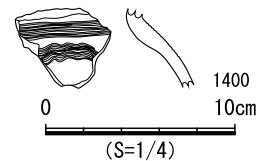


図 529 SB318 遺物実測図

SB319 (遺構：図 531・532、遺物：図 530)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。北側でSB318、南側でSB320、南西側でSB322を切る。東西方向に走る攪乱溝によって、中央部を大きく滅失する。

形状 南北長約5.8m、東西長約6.9mであり、隅丸長方形を呈する。各辺はいずれも直線的で、隅部は東側よりも西側の方が丸みを帯びている。深さは約0.1mで、壁面傾斜は緩やかである。

埋土 2層に分層し、埋土全体に小礫が混入する。2層がブロック状に入り込むことから、人為堆積と考えられる。

床面 ほぼ平坦で、貼床は確認できなかった。床面から18基の小穴を検出し、そのうちP2、P3、P13、P18においては柱痕跡を確認した。また、全体的に底面が平坦になるものが多く、平面的な位置関係からP1～P4の4基を柱穴と考えた。なお、壁溝と炉跡は確認できなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器1,323点、石器類1点、小穴から土器147点が出土した。土器はおおよそⅤ期～Ⅶ期に属する。

出土遺物 1401はⅦ期壺A5類。口縁端部が直立気味である。1402はⅦ期高坏D3類。口縁部が大きく開き、多条沈線が認められる。1403はⅦ期高坏C4c類。多条沈線間に山形文と対向山形文を施文する。1404はⅤ期蓋。口縁部が直立し、羽状文を施文する。天井部に赤彩が認められる。

時期 出土遺物の時期から、Ⅶ期と考えられる。

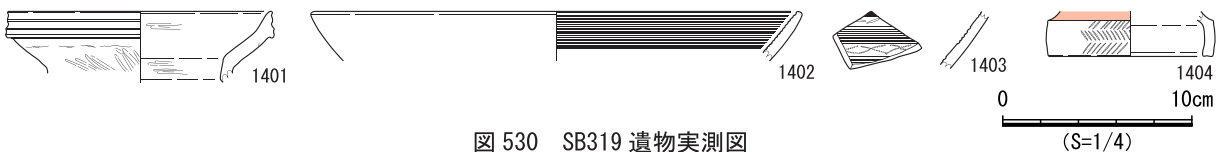


図 530 SB319 遺物実測図

SB320 (遺構：図 533・534、遺物：図 535)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。北側をSB319に切られ、南側でSB321、西側でSB323を切る。平面形は比較的明瞭であり、特にSB319の床面では明瞭であった。

形状 北東隅部が一部攪乱に切られるが、確認できた範囲から隅丸長方形と考えられる。北西-南東長約2.6m、北東-南西長約3.1mである。各辺ともにほぼ直線的であり、深さは約0.3mで、壁面傾斜は比較的緩やかである。

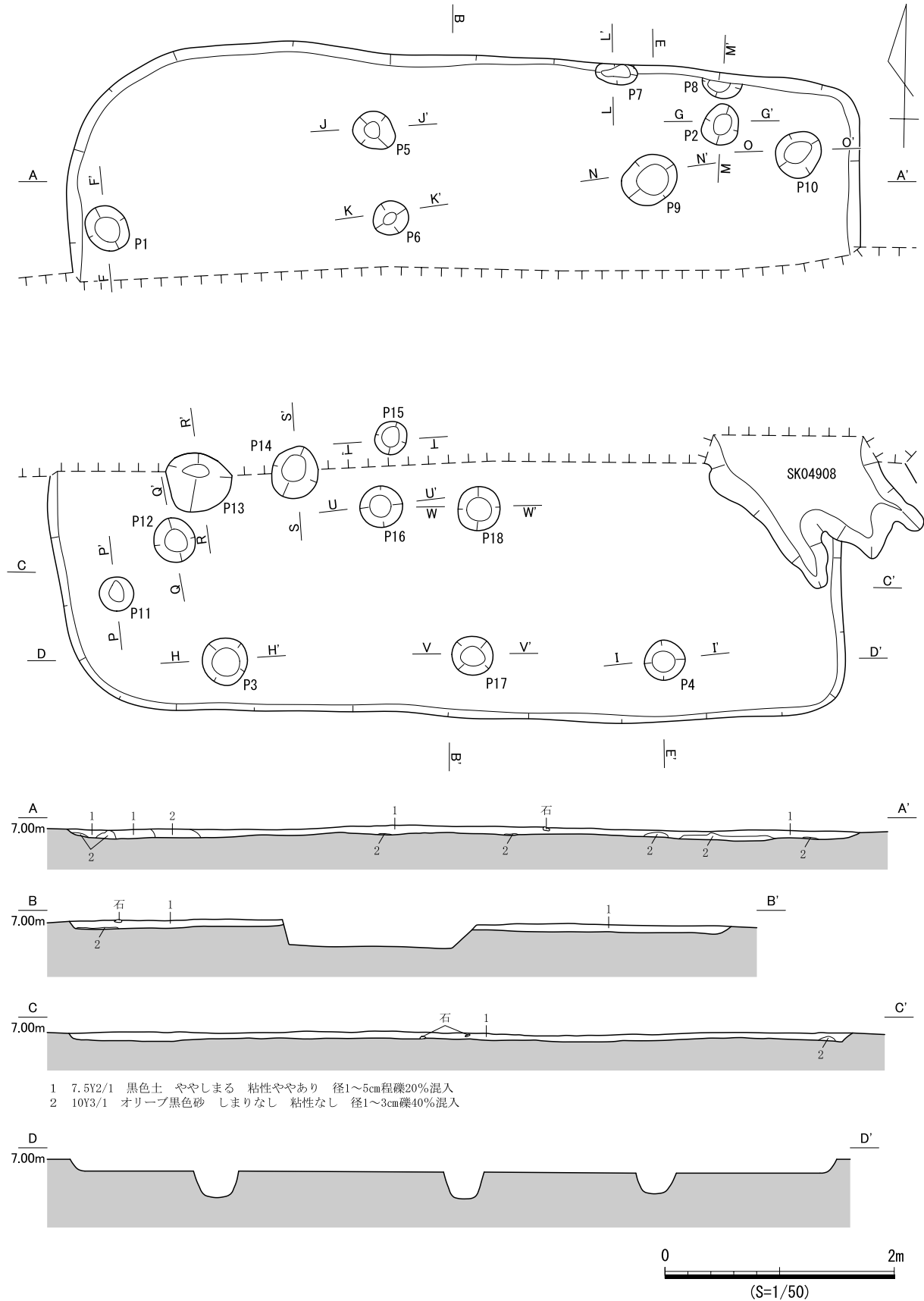


図 531 SB319 遺構図 (1)

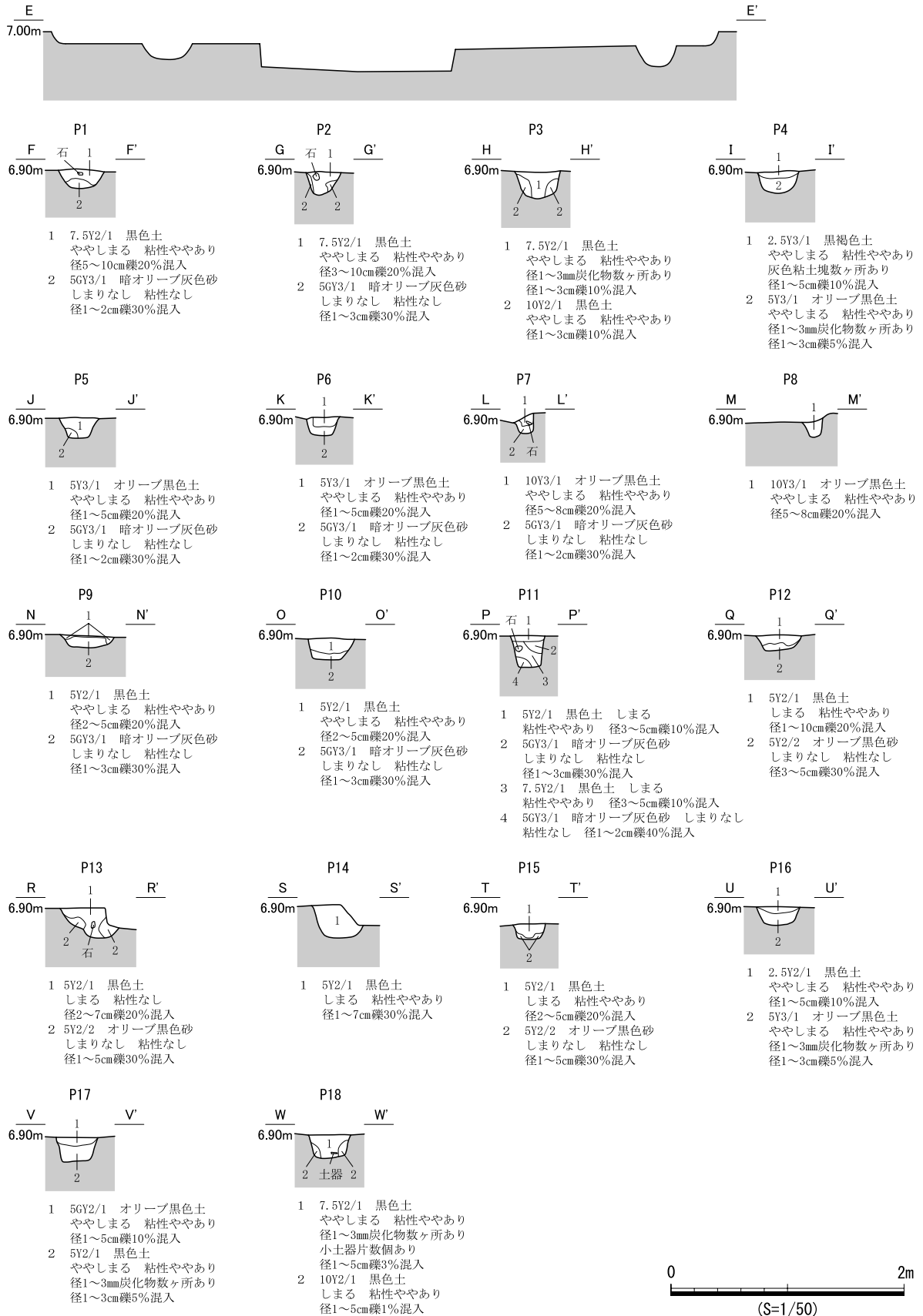


図 532 SB319 遺構図 (2)

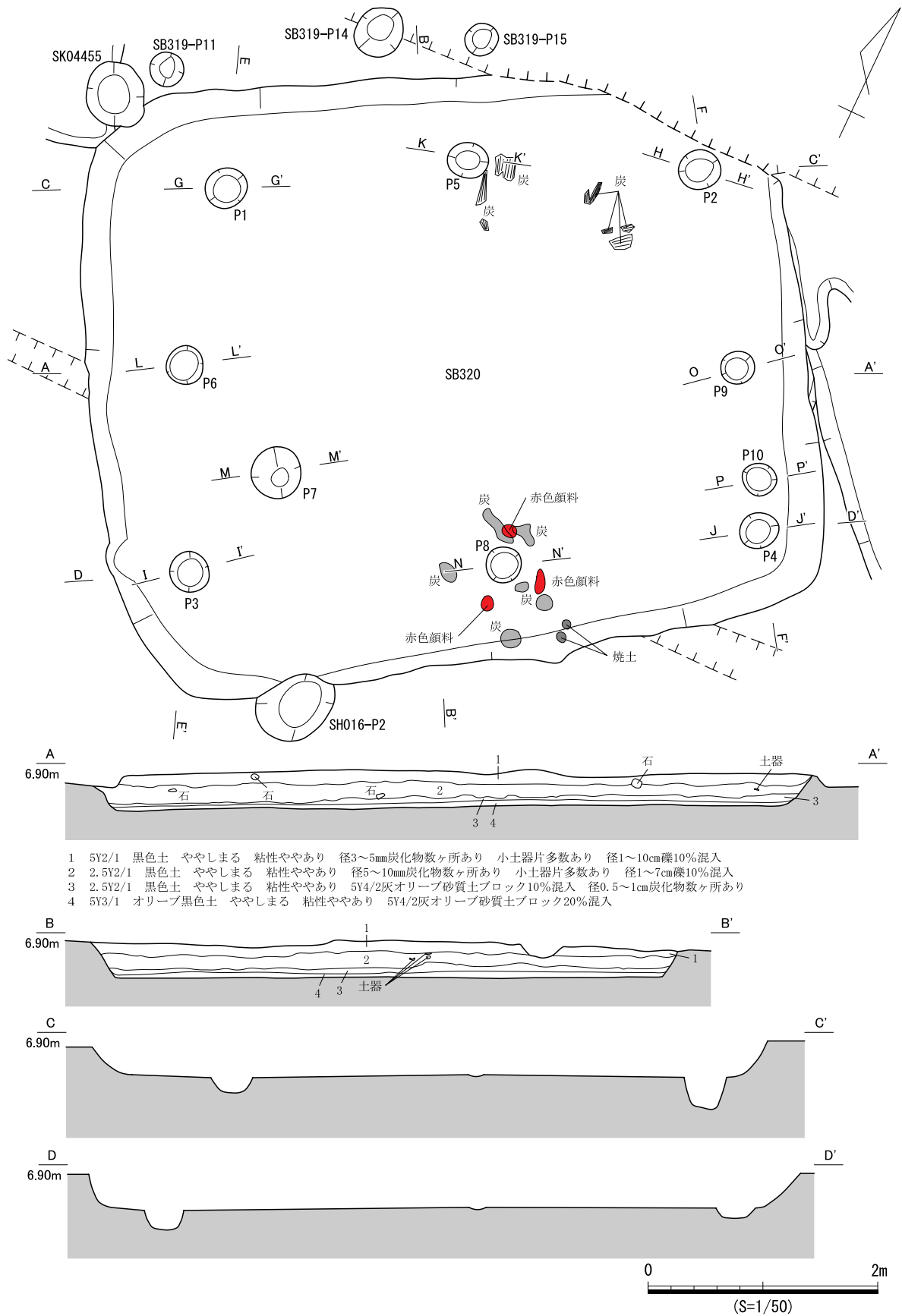


図 533 SB320 遺構図 (1)

埋土 1～3層が床面までの埋土、4層は貼床（整地土）である。1～3層の埋土全体には炭化物片、小礫、土器片が含まれる。また、層界の凹凸がみられることや重複する遺構の時期が近似することから、人為堆積の可能性が高い。

床面 ほぼ平坦である。埋土4層上面で炭化物や焼土の広がり、小穴等を検出したので、床面と判断した。床面上にて10基の小穴を検出した。P7以外で柱痕跡は確認できなかったが、P1～P3、P5が比較的深く、平面的な位置関係からP1～P4の4基を柱穴と考えた。また、P8周辺の床面直上において、焼土、炭化物、赤色顔料などが散在して確認できた。炭化物には繊維の方向が識別できる材もあり、同様なものは住居北側でも出土したことから、焼失家屋である可能性が高い。なお、赤色顔料は炭化材除去後に検出しており、3箇所にとまっていた。炉跡と壁溝は確認できなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器6,599点、石器類13点、小穴から土器41点が出土した。土器の大半はⅤ～Ⅶ期に属し、床面までの埋土全体から散在して出土した。なお、わずかにⅧ期の土器が含まれ

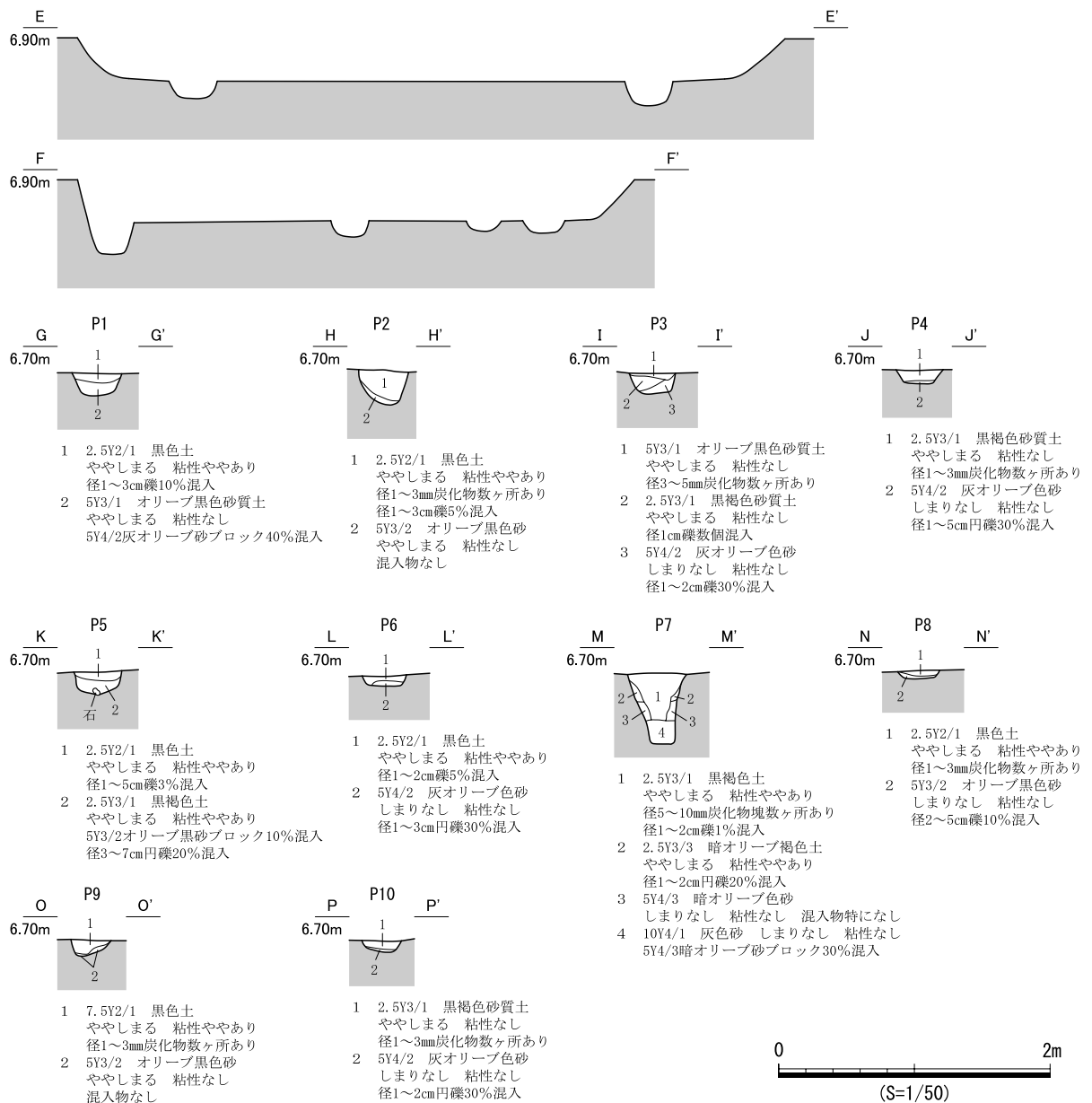


図 534 SB320 遺構図 (2)

るが、これらはSB321からの混入と考えられる。

出土遺物 1405はV期～VI期壺B1類。口縁部が短く外反し、端部は平坦である。1406はV期壺K類胴部。幅広の貼付突帯が認められる。1407はV期壺A4類。口縁端部を大きく拡張し、端部が外傾する。1408はVIII期壺。内外面に羽状文が施される。1409はVI期～VII期壺胴部。弧状の線刻が認められる。1410はVI期鉢A3類。口縁部が内湾気味に立ち上がり、端部がわずかに直立する。胴部の膨らみが弱く、刺突文が認められる。1411～1414はVI期甕A類。1411は口縁部の屈曲が弱く、1412、1414は端部がわずかにつまみ上げられる。1413は口縁部が直立して、端部は平坦である。1415、1416はV期～VI期甕B類。口縁部が短くくの字に立ち上がる。1415は端部に刺突文を施文する。1416は頸部下に刺突文を施文する。1417はVII期甕B4類。口縁部が弱く外反する。1418はVI期～VII期甕脚部、細身の付根から脚部がハの字に開く。1419、1420はVII期甕D2類。1419は小型品で、口縁部内面の屈曲が弱い。胴部は肩部が強く張る。胴部最大径やや上位にヨコハケが認められる。1420は口縁部が外上方に屈曲し、肩部が強く張る。1421はV期鉢A1類。口縁部が直立し、刺突文が認められる。頸部直下には直線文、刺突文を施文する。1422はV期～VI期鉢B2類底部。1423はV期高坏B3a類。口縁部が強く外反する。1424はVII期高坏C4d類。1425はV期～VI期高坏B4類。口縁部が弱く外反し、端部が尖り気味である。1426はVII期高坏D類。1427はVII期器台B類。内面に羽状文のある少数例。1428、1429はVI期器台B1類。1428は脚部が外反して開く。1429は口縁部が強く外反する。1430は赤彩があり、V期蓋と考えられる。1431は小片のため器形は不明だが、円形刺突文と刺突文が認められる。V期の土器と考えられる。1432～1435は砥石。1432の砥面上面の左端には幅約6mmの溝状の窪みがある。1433と1434は楕円礫を素材とする。1436は泥岩の縦長剥片。

時期 出土遺物の時期から、VI期～VII期と考えられる。

SB321 (遺構：図536、遺物：図537)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、北側をSB320に切られる。平面形は、比較的明瞭であった。

形状 東西長約4.7mで、平面形は方形と考えられる。各辺は直線的であり、深さは約0.3mで、壁面傾斜は急である。

埋土 4層に分層した。3層は東西方向からの流入である。埋土中にブロック土の混入が認められることから、人為堆積と考えられる。

床面 ほぼ水平であり、床面上にて7基の小穴を検出した。そのうちP1、P3では柱痕跡を確認したが、それ以外的小穴はいずれも単層で浅い。平面的な位置関係からP1とP2の2基を柱穴と考えた。南辺で壁溝を確認し、幅0.3m、深さ0.22mであった。炉跡は確認できなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器2,213点、小穴から土器65点、石器類1点が出土した。土器は、V期～VIII期のものが出土している。

出土遺物 1437はV期～VI期の壺B1類。口縁部が短く外反する。1438はVII期壺B2b類。口縁部が直立気味の頸部から屈折して開く。1439はVI期～VII期壺H2a類。口縁部が内湾する。1440はVII期壺G2b類。口縁部に少条の多条沈線が認められる。1441、1442はVIII期の二重口縁壺。1441は口縁部下端に円形浮文が認められる。1442は波状文が認められる。1443はVIII期二重口縁壺。1444はV期甕B1類。口縁部

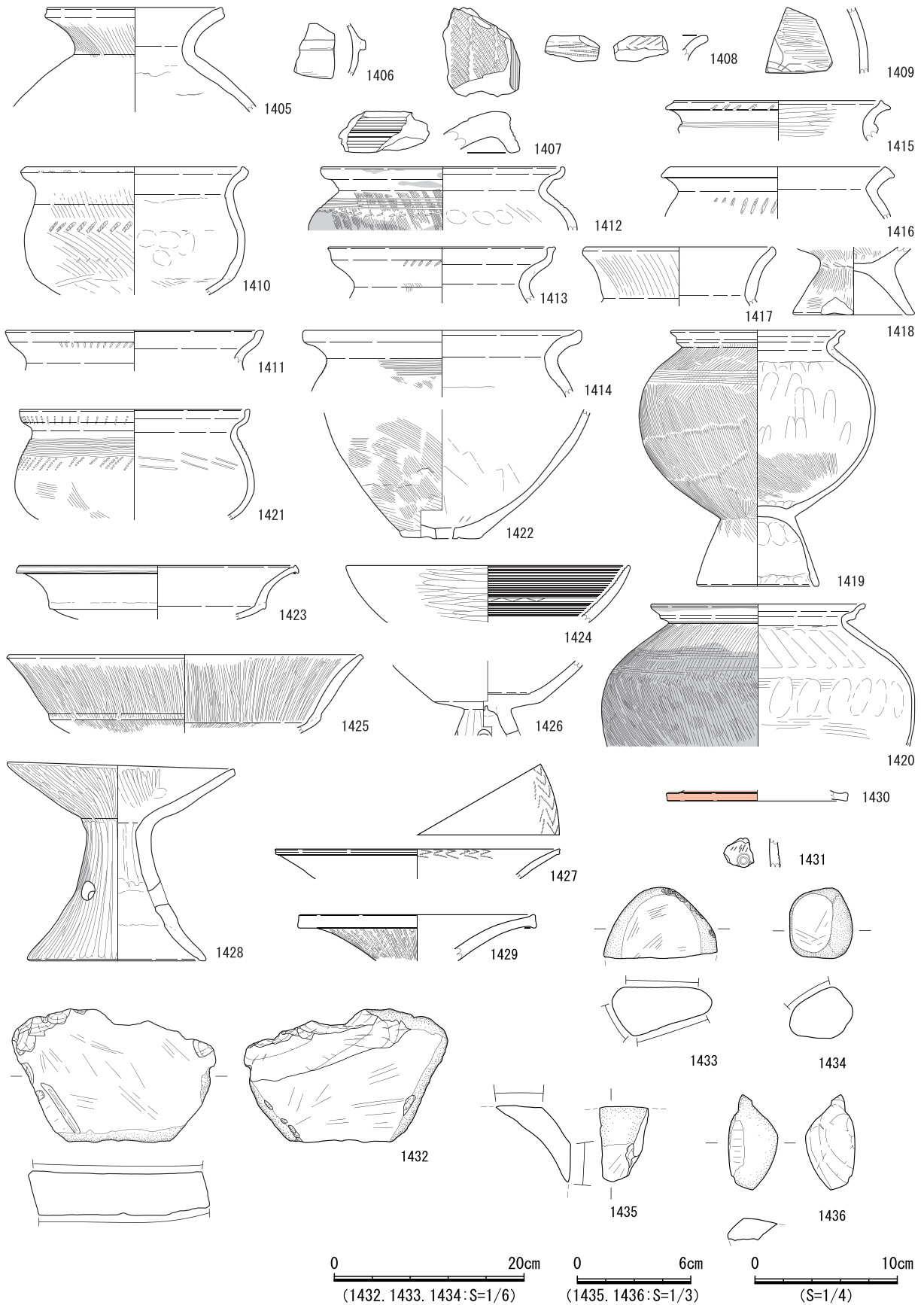


図 535 SB320 遺物実測図

が短く屈折して、端部に強い凹面を形成する。1445はⅦ期甕E3類。口縁部がくの字に屈折し、胴部は肩部がなだらかである。内外面ともにハケが認められる。1446はⅧ期甕D類胴部。肩部が強く膨らむ。1447はⅥ期～Ⅶ期壺底部。1448、1449はⅥ期高坏C2類。1448は幅広の多条沈線が認められる。1450はⅠ期深鉢。1451は砥石。石材は閃緑岩で、砥面の擦痕はやや不明瞭である。

時期 出土遺物の時期から、Ⅷ期と考えられる。しかし、本遺構を切るSB320はⅦ期と考えられ、出土遺物から推定できる時期と遺構の新旧関係とが矛盾しており、遺構検出時の先後関係を誤認した可能性がある。

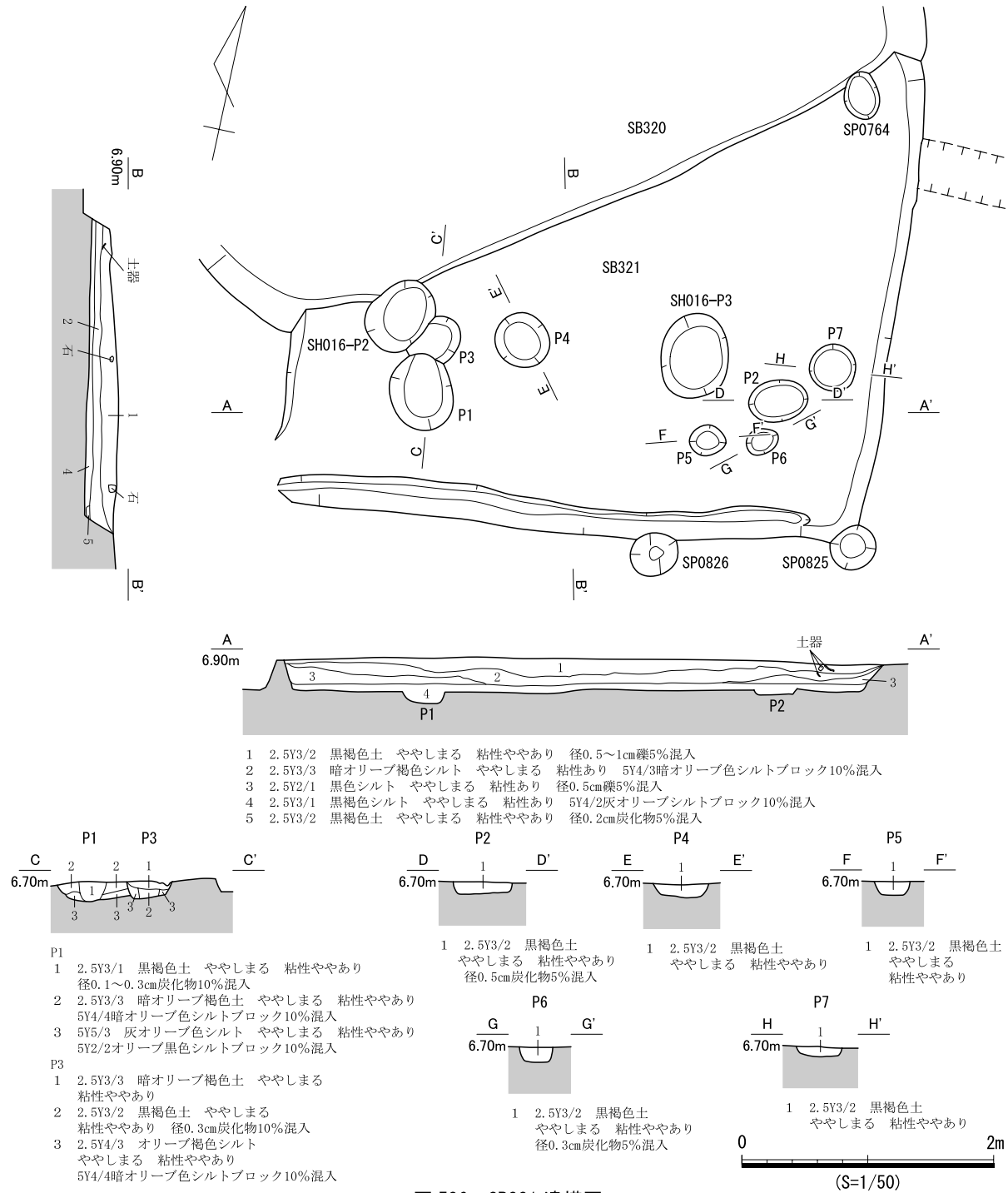


図 536 SB321 遺構図

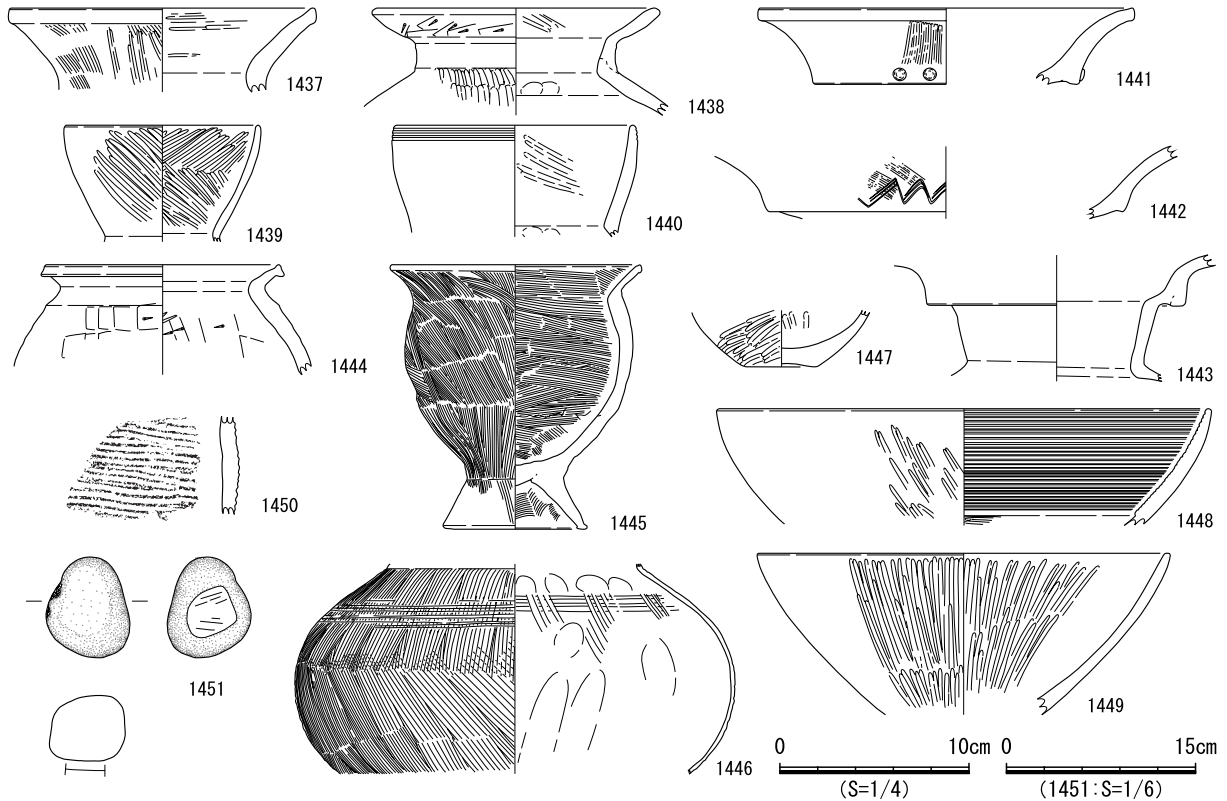


図 537 SB321 遺物実測図

SB322 (遺構：図 538、遺物：図 539)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。東側をSB319に切られ、北側の大半を攪乱溝によって滅失している。また、南側でSB323を切る。平面形は比較的明瞭であったが、SB319との境界部分は不明瞭であった。

形状 遺構の重複や攪乱があるため全形は不明であるが、確認できた範囲から隅丸方形を呈すると考えられる。南西隅部は丸みを帯び、南辺は弧状を呈する。深さは約0.1mで、壁面傾斜は比較的急である。

埋土 黒色土が単層で堆積し、小礫の混入が顕著である。遺構の重複が著しく、その時期が近似するため、人為堆積の可能性が高い。

床面 平坦だが、西側に向かってわずかに下がる。貼床は確認できなかった。床面上にて7基の小穴を検出したが、いずれも柱痕跡は確認できなかった。また、P1からP4の掘形が逆三角形を呈するのに対して、P5からP7は逆台形状を呈する。住居の全形が不明であるため、柱穴の推定は困難である。なお、壁溝と炉跡は確認できなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器813点、石器類2点、小穴から土器175点、石器類1点が出土した。多くがVI～VII期のものである。

出土遺物 1452はVIII期甕D3類。口縁部が外上方へ屈曲し、端部がわずかに肥厚する。1453はVI期甕D1類。口縁部が短く直立気味に屈曲する。1454～1456はVII期高坏D類。1455は幅広の多条沈線が認められる。1456は幅広の多条沈線3帯の狭い間に、振幅の小さい山形文を施文する。

時期 出土遺物の時期とVII期のSB319に切られることから、VI期～VII期と考えられる。なお、VIII期の

遺物が少量出土しているが、混入と考えられる。

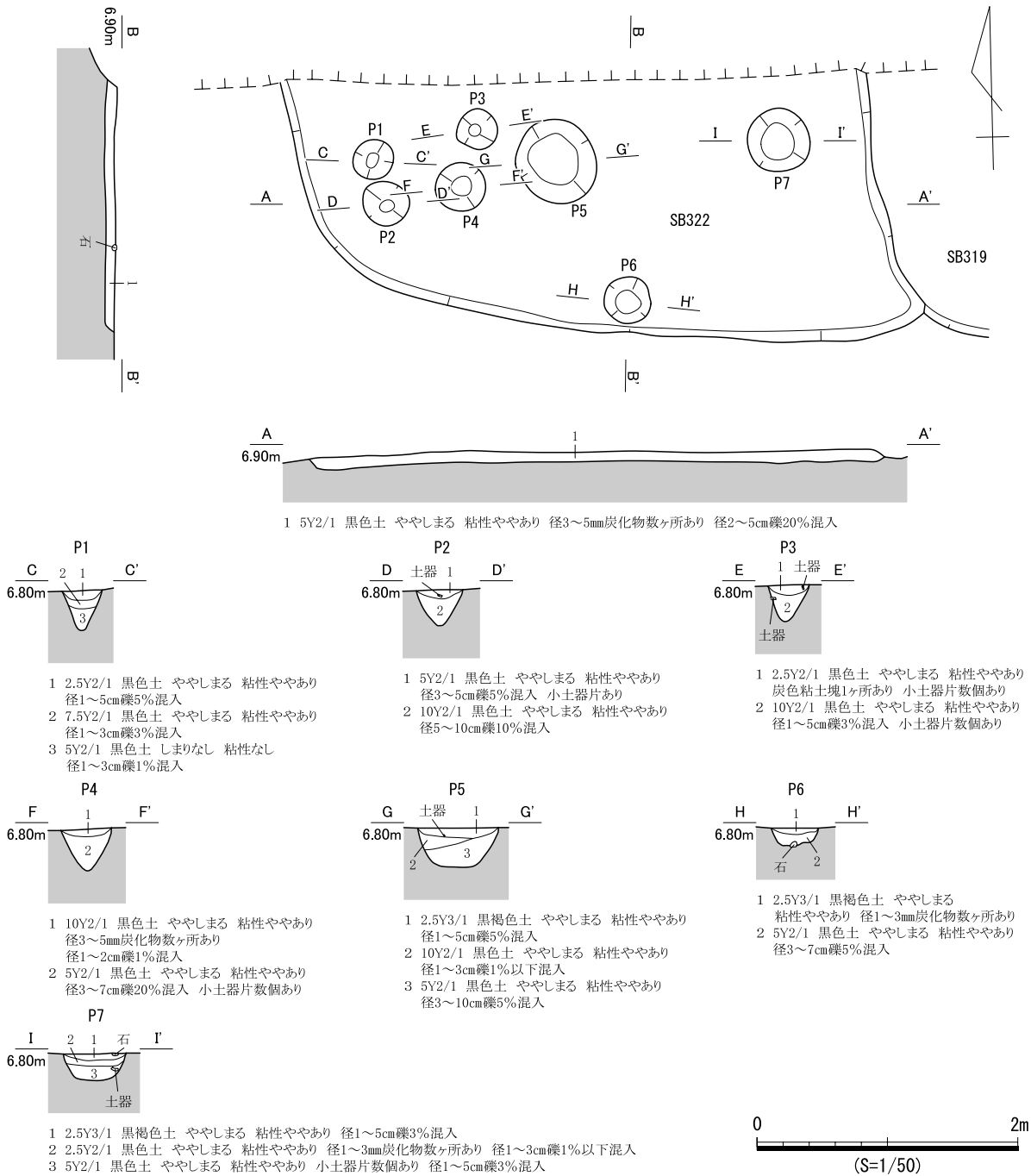


図 538 SB322 遺構図

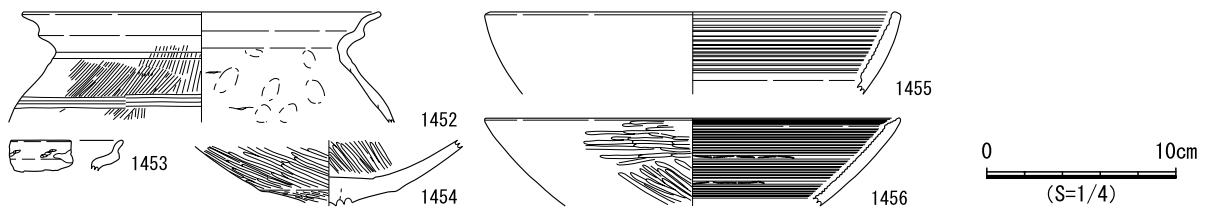


図 539 SB322 遺物実測図

SB323 (遺構：図540～542、遺物：図543)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。北側をSB322、東側をSB320、北東側をSB319に切られる。南西隅部はSB324の一部を切る。平面形はやや不明瞭であった。

形状 北側を攪乱、東側をSB320に切られるので全形は不明だが、確認できた範囲から平面形は隅丸方形と考えられる。南辺と西辺は直線的であり、深さは約0.2mで、壁面傾斜は急である。

床面完掘状況

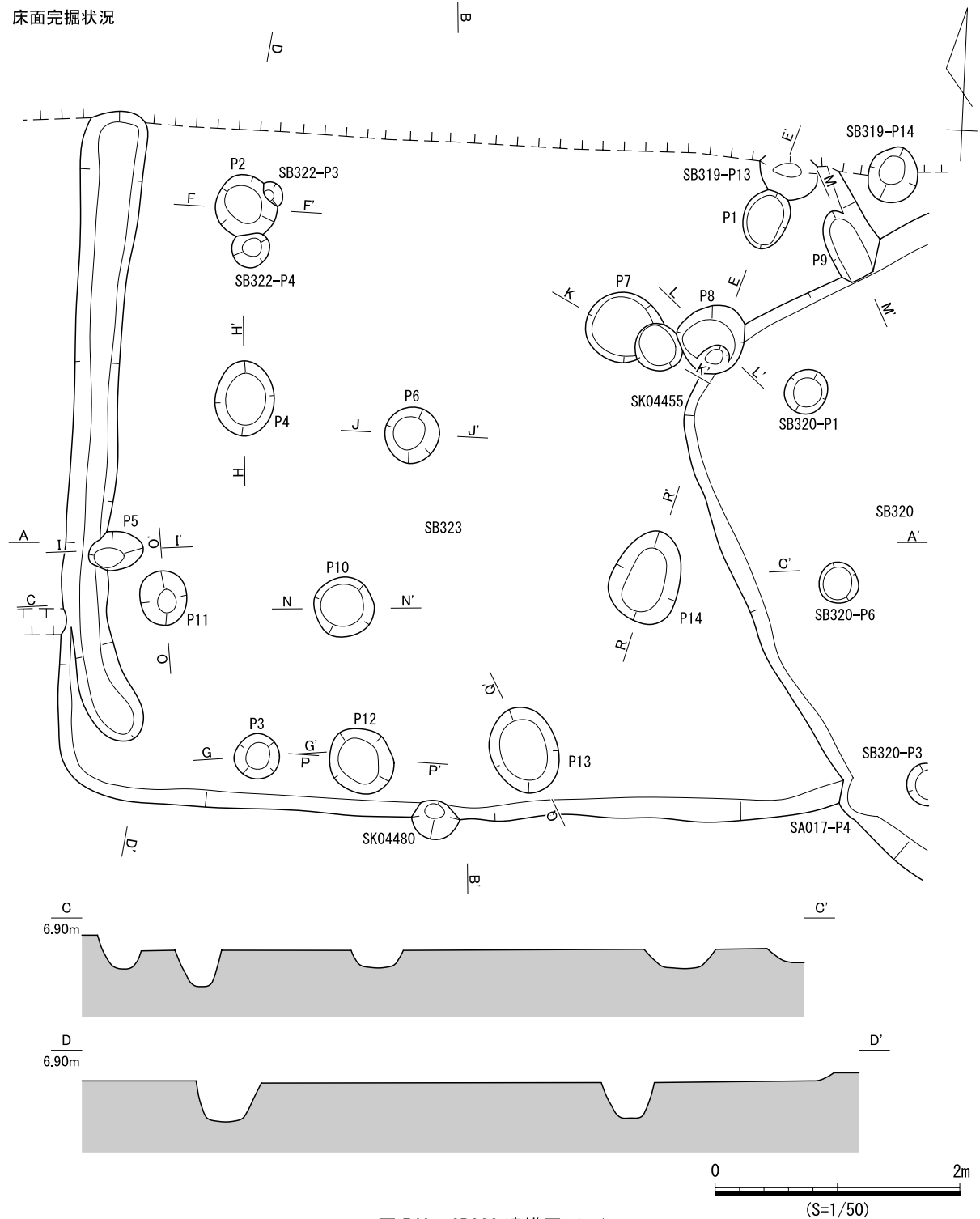


図540 SB323 遺構図(1)

埋土 5層に分層した。1・2層が住居埋土、3～5層が掘形埋土であり、3層上面が床面である。住居埋土には礫の混入が目立ち、層界の凹凸がみられることから、人為堆積と考えられる。

床面 ほぼ平坦であり、貼床（整地土）がある。床面上にて14基の小穴を検出したが、埋土はほとんど単層で、いずれも柱痕跡は確認できなかった。P2、P3、P5、P8、P11は掘形がやや深いため柱穴の可能性のあるものの、住居の全形が不明であるため支柱穴を想定することは難しい。西辺に沿って

掘形完掘状況

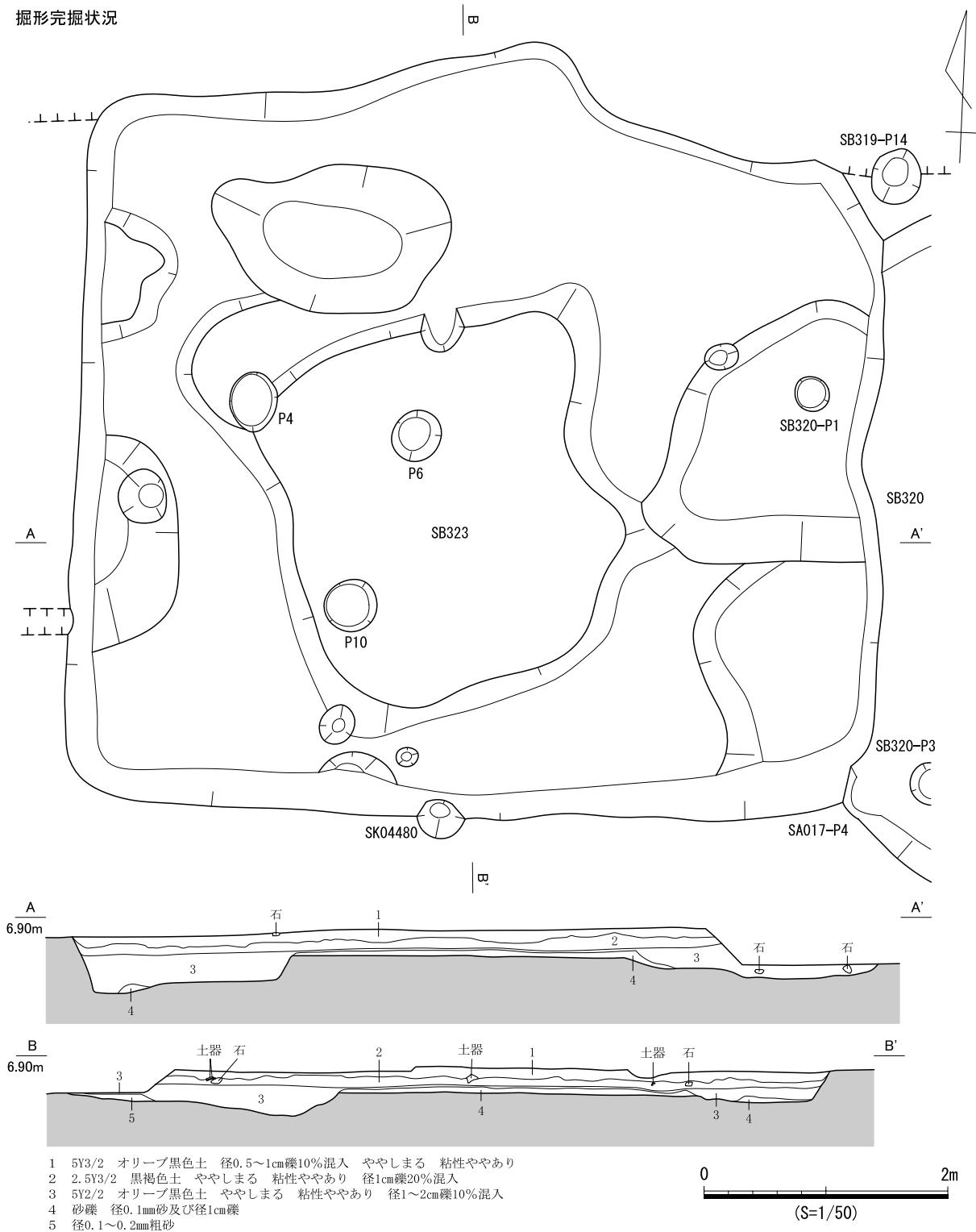


図 541 SB323 遺構図 (2)

幅約0.4m、深さ0.1mの壁溝を確認した。なお、炉跡は確認できなかった。

掘形 住居周縁に幅約1.5m～2.5mの溝状の凹みを有する掘形である。凹みは東側が最も深く、中央付近は基盤層が一辺約3.0mに方形に掘り残されている。埋土は中央と周縁部に砂礫を配し、その上に礫混じりのオリブ黒色土を充填し、床面を形成している。掘形埋土からも、土器片が多数出土した。

遺物出土状況 埋土中から土器4,442点、石器類3点、小穴から土器151点が出土した。Ⅴ期～Ⅶ期の土器片が大半で、中でもⅦ期の土器片が多い。小穴から出土した土器片には縄文土器も混じる。

出土遺物 1457はⅦ期壺C類。口縁部が直立気味に立ち上がる。1458はⅤ期壺D2類。刺突文が認められる。1459はⅦ期壺H2b類。口縁部が内湾して、上半に多条沈線が認められる。1460、1461はⅤ期壺K類。1460は肩部が強く屈曲して、その上部に、円形刺突文を施文する。1461は胴部に貼付突帯が認められる。1462はⅦ期鉢C類。口縁部が内湾し、高坏D類の形状と類似する。内外面ともに丁寧なミガキが認められる。1463はⅦ期鉢D類。短くハの字に開く脚台があり、口縁部は内湾しながら立ち上がる。外面には粗いミガキが認められる。1464はⅦ期甕B4類。口縁部が短く外反し、胴部が強く膨らむ。1465はⅦ期甕D2a類。1466はⅧ期甕D3類。1467はⅦ期甕脚部。裾部に打ち欠きが認められる。1468はⅥ期高坏C2b類。1469～1474はⅦ期高坏D類。1469、1470は多条沈線間に山形文、1471は多条沈線間に連弧文を施文する。1472、1474は口縁端部が内傾して、多条沈線が認められる。1475はⅦ期高坏G3c類。多条沈線間に振幅の小さい山形文を施文する。1476はⅥ期高坏C類脚部。1477、1478

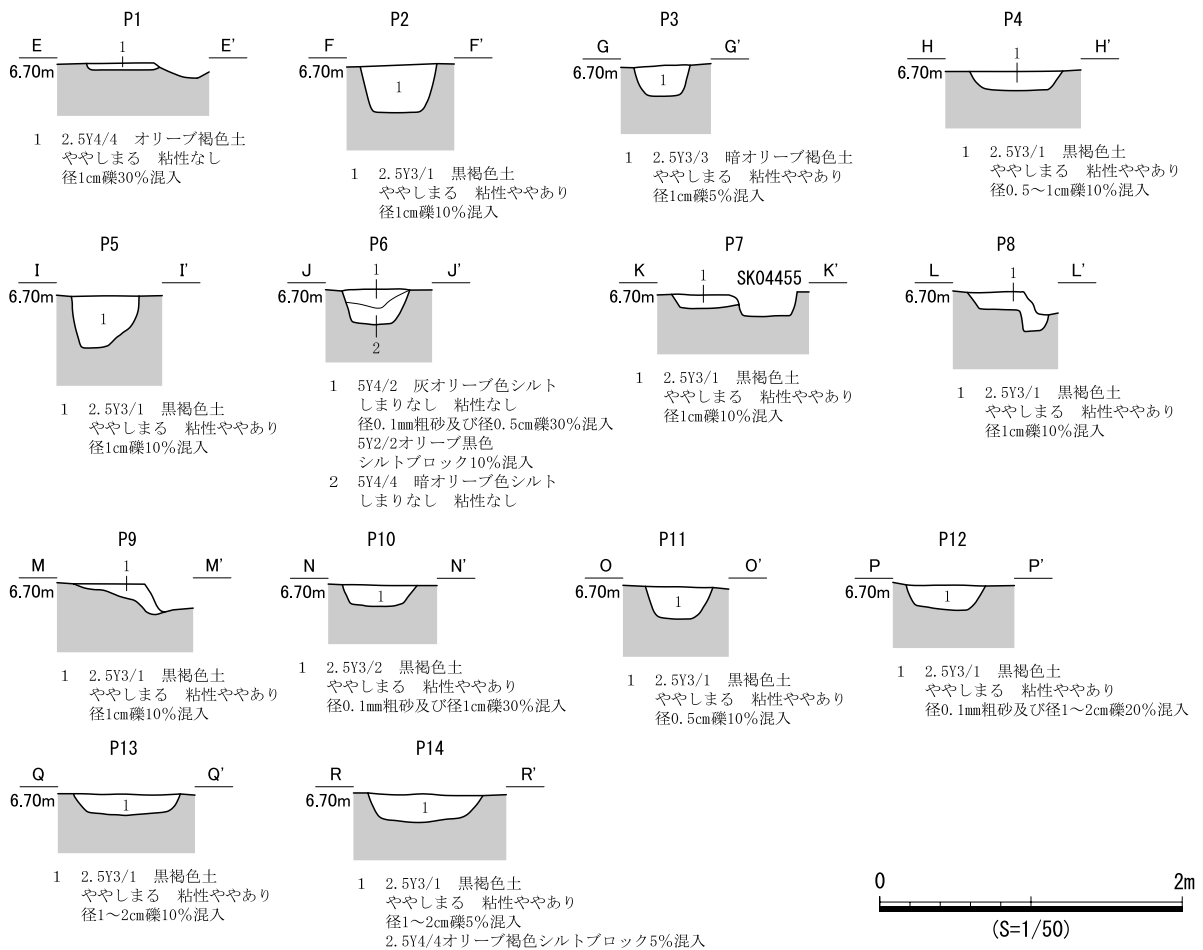


図 542 SB323 遺構図 (3)

はⅦ期高坏G3類脚部。1478は多条沈線の下に刺突文を加える。1479は縄文時代晩期末の深鉢。口縁部が緩やかに外反して、端部が外上方に肥厚する。輪積みの凹凸がそのまま器面に残る。胴部はわずかに膨らみ、右下がりの条痕が認められる。1480は砥石。垂角礫を素材としている。1481は叩石。上端に敲打痕が残り、煤が帯状に付着している。

時期 出土遺物の時期から、Ⅶ期と考えられる。

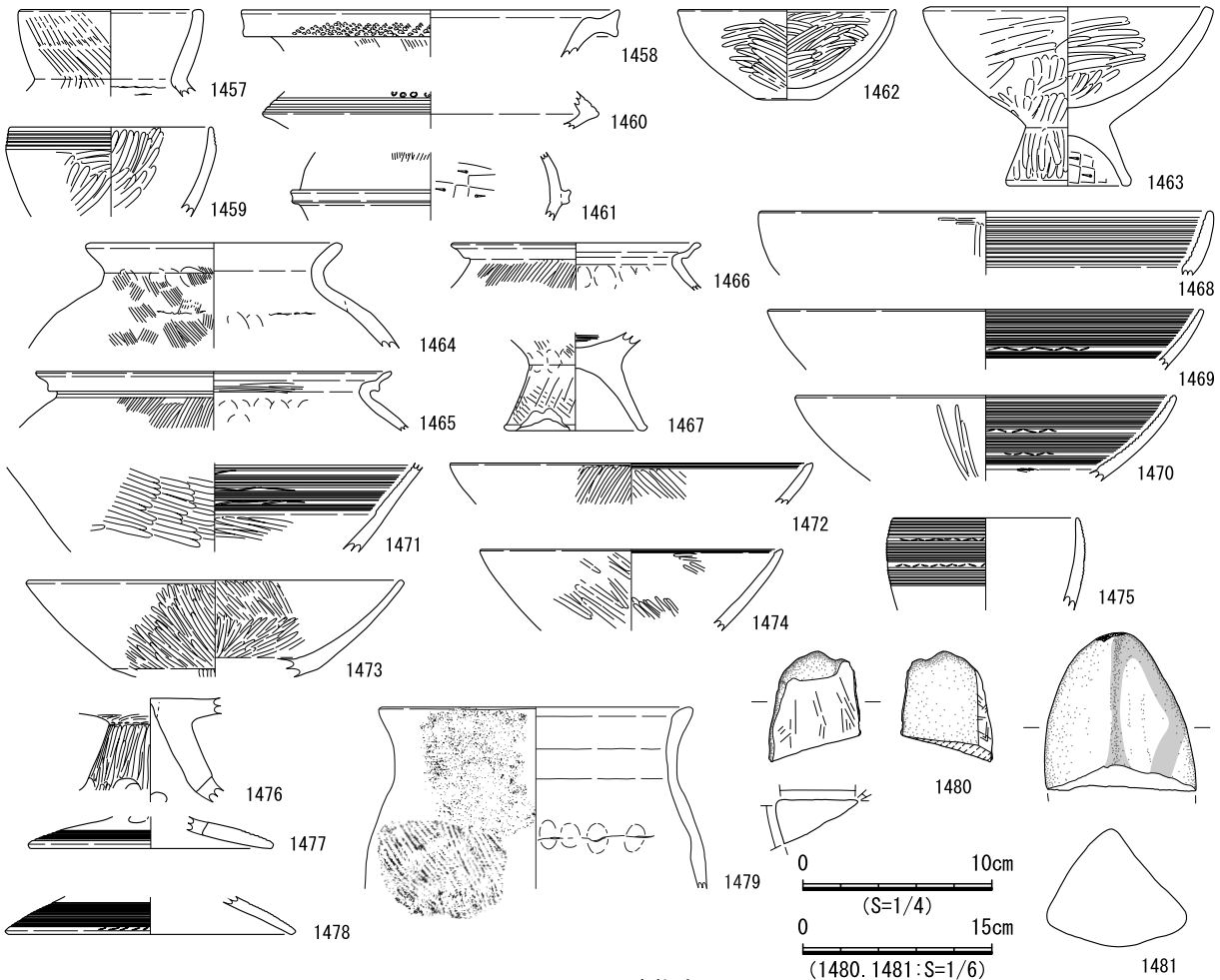


図 543 SB323 遺物実測図

SB324 (遺構：図 544、遺物：図 545)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、西側を平成20年度に、東側を平成22年度に調査した。複数の遺構と重複し平面形は不明瞭であったが、周辺で完掘した遺構の壁面を観察しながら平面形を確定した。なお、SB323、SB329、SB331、SB334に切られ、SB325を切る。

形状 南北長約5.2mの、東西にやや長い長方形を呈する。北辺と南辺が直線的に伸び、西辺はやや丸みを帯びている。深さは約0.2mで、壁面傾斜はやや緩やかである。

埋土 4層に分層した。1～3層が住居埋土、4層は掘形埋土であり、3層下が床面である。上層は礫の混入が目立ち、2層と3層から多量の炭化物と赤色顔料を検出した。基本的に炭化物の方が上位にあり、赤色顔料は3層上面に位置する。

床面 赤色顔料と炭化物の広がる面を床面と考えた。床面は凹凸があり、炭化物は中央付近に馬蹄形

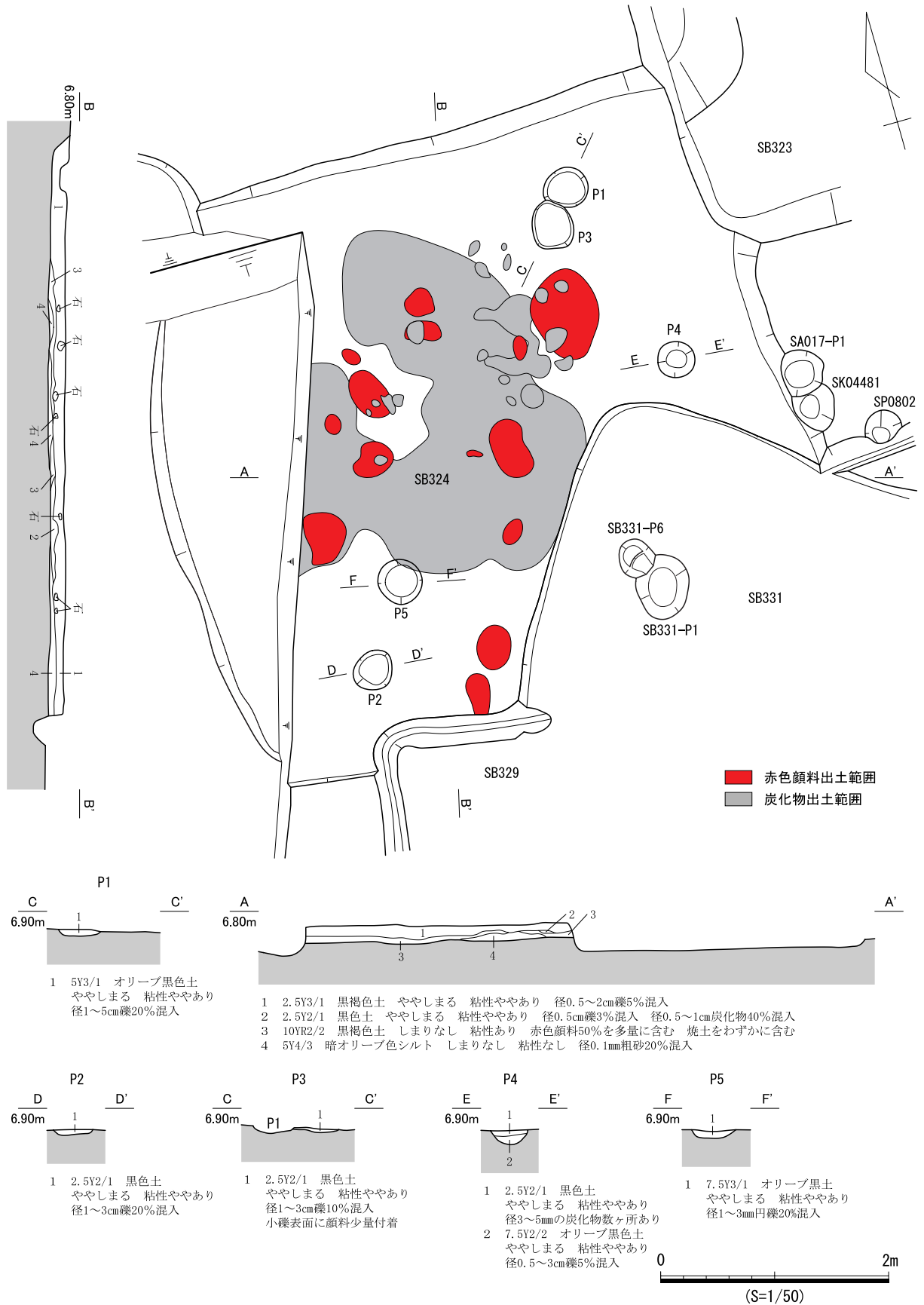


図 544 SB324 遺構図

状に広がり、赤色顔料は散在している。床面上で5基の小穴を検出し、その位置はいずれも炭化物や赤色顔料の範囲外にある。柱穴は掘形が浅いものの、P2（もしくはP5）、P3、SB331-P6の3基で、北西隅は調査区域外にあると考えた。

遺物出土状況 埋土中から土器1,102点、石器類5点、小穴から土器2点が出土した。埋土中からIV期～VII期の土器片が出土した。

出土遺物 1482はIV期甕D類。口縁端部を上下に拡張する。1483はIV期壺B類胴部。1484はV期高坏B3b類。口縁部が短く外反する。1485はV期器台A1類。口縁部、裾部とも強く外反する。1486はVI期～VII期手捏ねB類。1487は砥石。楕円礫を素材とし、複数の平坦面を砥面として使用している。1488は叩石。長楕円礫を素材とし、下端に敲打痕が観察できる。

時期 出土遺物の時期と、VII期のSB323に切られVII期のSB325を切ることから、VII期と考えられる。

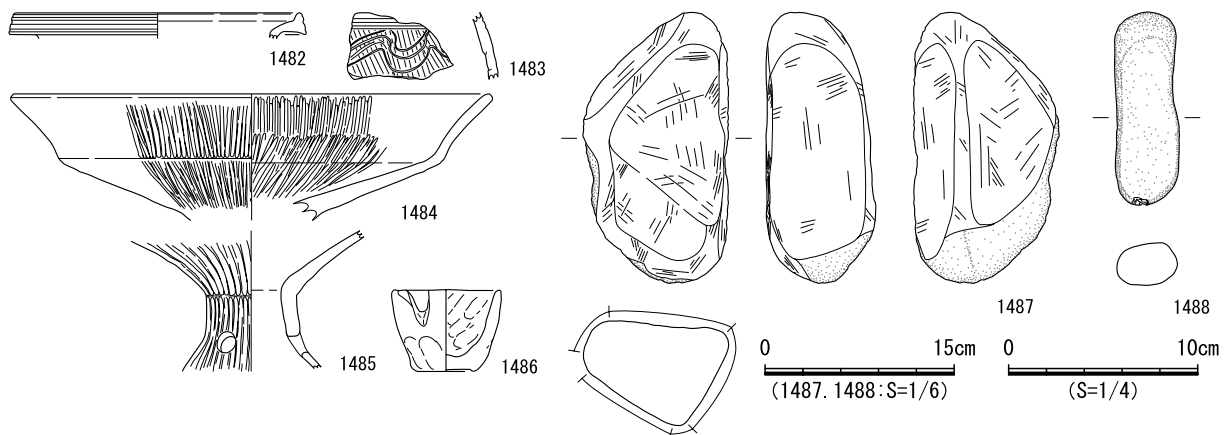


図 545 SB324 遺物実測図

SB325 (遺構：図 546、遺物：図 547)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。南側をSB324、SK04454に切られる。本遺構完掘後の底面でSH015-P3を検出しているため、SH015より後出する。

形状 遺構の重複があるために全形は不明だが、確認できた範囲から東西長約5.1mの隅丸方形と考えられる。北辺は直線的であり、深さは約0.1mで、壁面傾斜は急である。

埋土 黒色土が単層で堆積し、小礫、微細な炭化物が認められる。重複する遺構が著しく、その時期が近似するため、人為堆積の可能性が高い。西側の埋土中に少量ながら赤色顔料を確認した。

床面 床面は平坦だが、西側に向かってわずかに下がる傾斜である。床面上にて4基の小穴を確認したが、いずれも柱痕跡は確認できなかった。掘形がいずれも深いために柱穴の可能性のあるものの、平面的な位置関係からP1とP2の2基が柱穴の可能性はある。また、SB324床面では、それらの柱穴に対応する小穴は検出していない。なお、炉跡は確認できなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器352点、小穴から土器62点が出土した。VI～VII期の土器片が主体で、VII期のものがやや目立つ。

出土遺物 1489はIV期壺A1類。3条の凹線文が認められる。1490はVII期壺A1b類。口縁端部下端をわずかに拡張し、羽状文を施文する。1491はV期～VI期甕A3類。口縁部が頸部から緩やかに外反

して、端部が直立する。端部、頸部に大ぶりの刺突文を施文する。1492はⅦ期甕D2b類。1493はⅥ期～Ⅶ期甕D類脚部。

時期 出土遺物の時期から、Ⅶ期と考えられる。

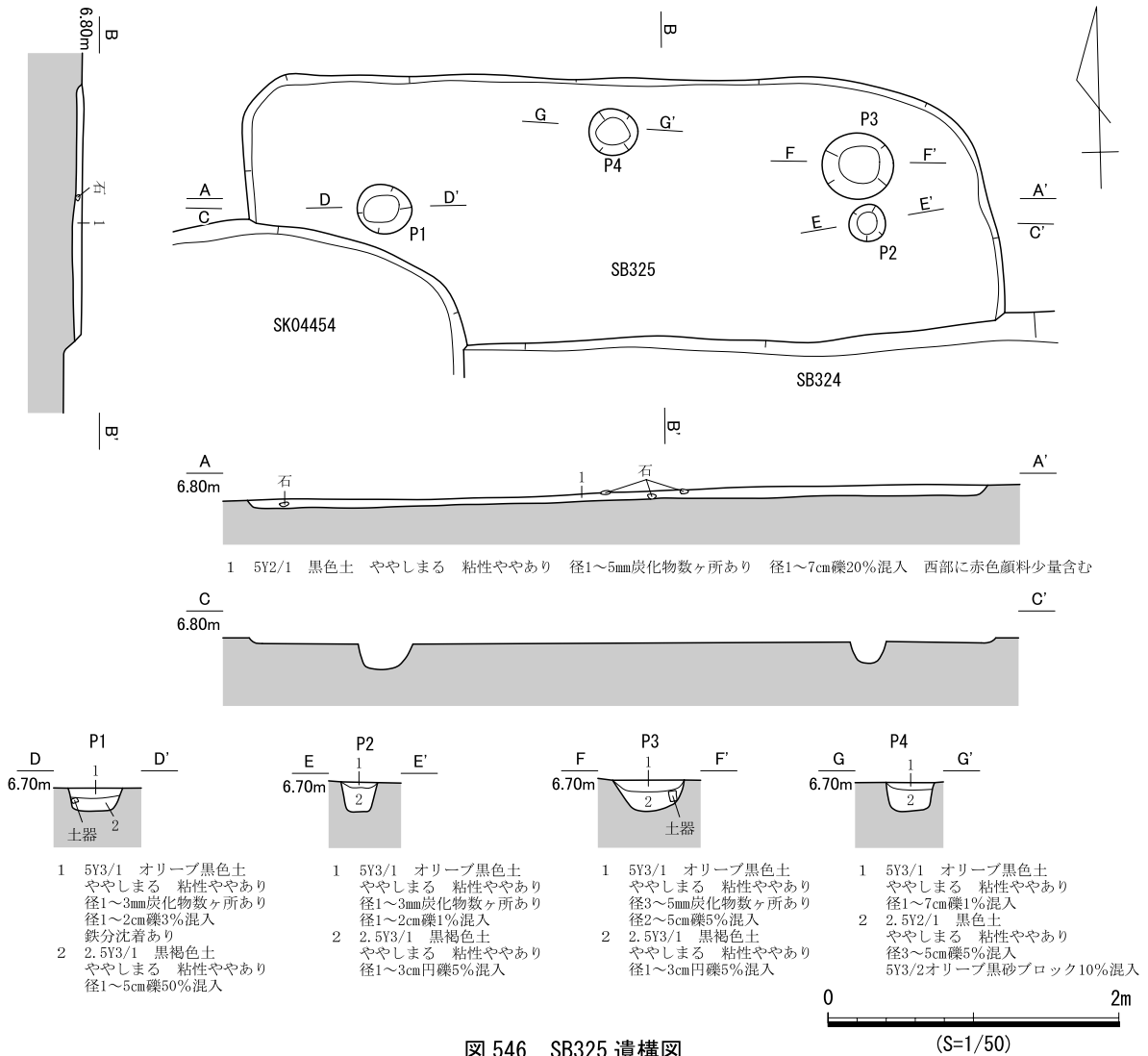


図 546 SB325 遺構図

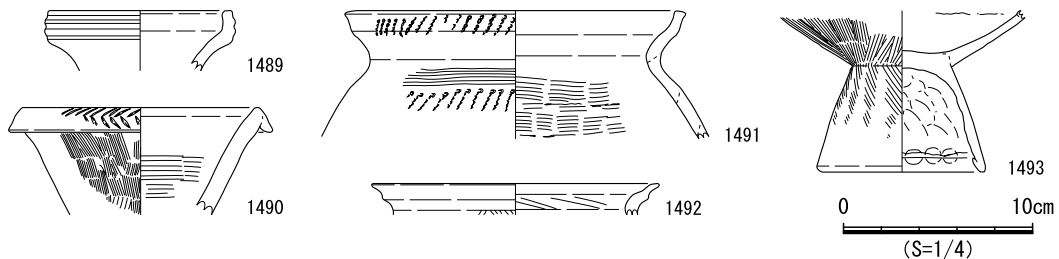


図 547 SB325 遺物実測図

SB326 (遺構：図 548、遺物：図 549)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。東側が調査区外にあり、南側をSB364、SB373に切られ、西側でSB327を切る。平面形は比較的明瞭であった。

形状 全形は不明であるが、確認できた範囲から平面形は隅丸方形と考えられる。検出した各辺は若

干蛇行し、西隅部は丸みを帯びて開き気味となる。深さは約0.2mで、壁面傾斜はやや緩やかである。

埋土 2層に分層した。ブロック土は確認できず、層界には凹凸がみられる。遺構の重複が激しく、その時期が近似するため、人為堆積の可能性が高い。

床面 床面上にて4基の小穴を検出したが、いずれも柱痕跡は確認できなかった。P4は直径がやや大きい、それ以外の3基はいずれも小規模で底面が丸い掘形である。住居の全形が不明であるため、柱穴を推定するのは難しい。なお、壁溝と炉跡は確認できなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器849点、小穴から土器18点が出土した。多くがVI期～VII期の土器片で、P4からVII期の壺(1495)が出土した。

出土遺物 1494はVI期～VII期壺A類頸部。頸部の貼付突帯上に刺突文が認められる。1495はVII期壺A類胴部。直線文、山形文を交互に施文し、文様帯最下段に刺突文を施文する。1496はVI期～VII期甕脚部。裾部が強く内湾し、打ち欠きが認められる。1497はVI期鉢A1類。口縁部が短く屈曲して、直立する。胴部はあまり膨らまず、胴部径が口縁部径を大きく下回る。底部はケズリによって丸底気味に整形される。頸部直下に少条の直線文が位置し、やや間隔おいて下部に刺突文が施文される。1498はVI期～VII期高坏H1類。坏部が椀状で、内外面にミガキが認められる。1499はVII期高坏C4b類。多条沈線間に2重の山形文を施文する。1500、1501は裾部に多条沈線のあるVII期高坏G3b類脚部。1502は脚部

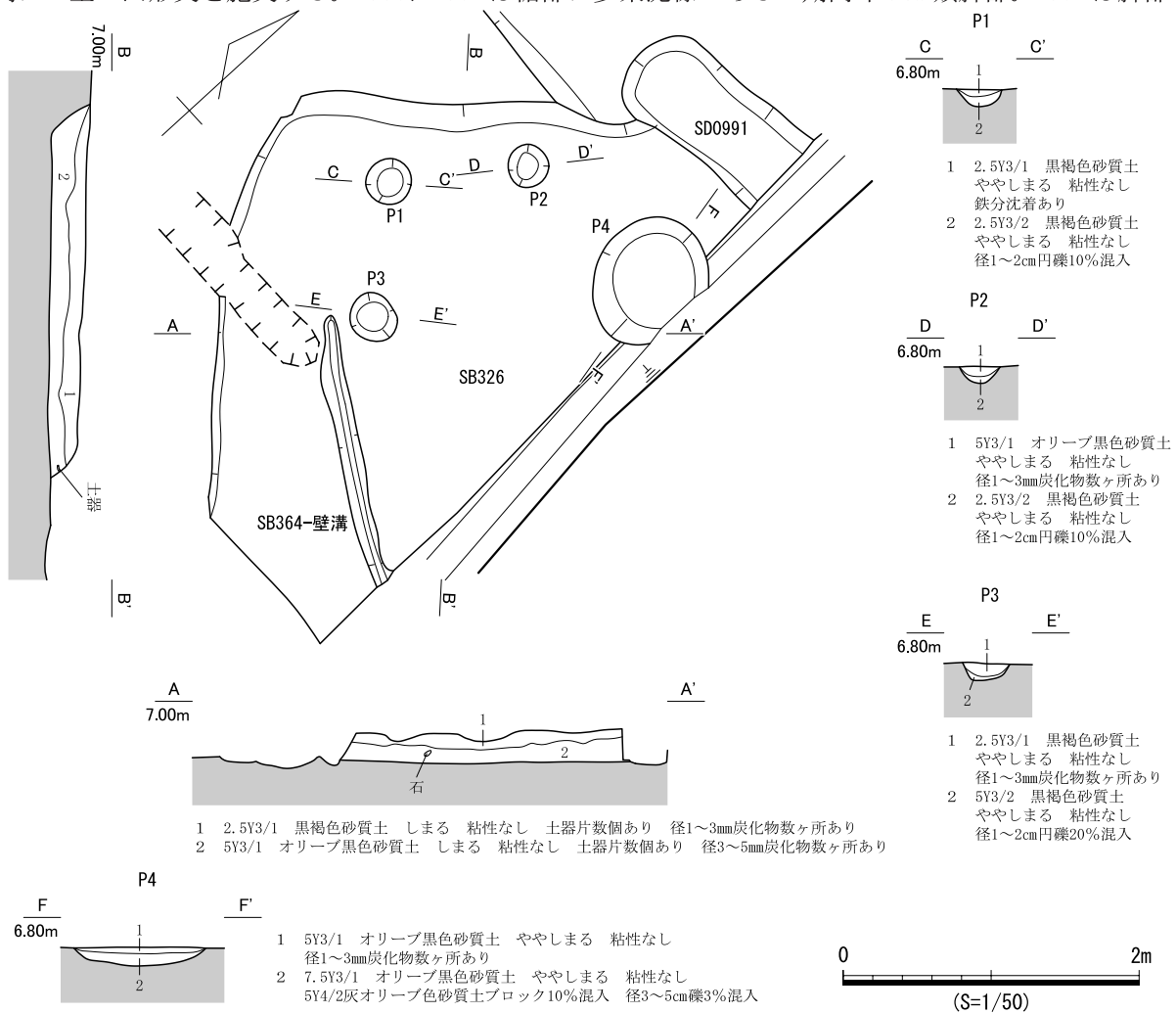


図 548 SB326 遺構図

が内湾するⅦ期高坏C類。裾部に煤が付着する。1503はⅥ期～Ⅶ期の断面形が算盤玉状の土製品。中央に穿孔が認められる。

時期 出土遺物の時期から、Ⅶ期と考えられる。

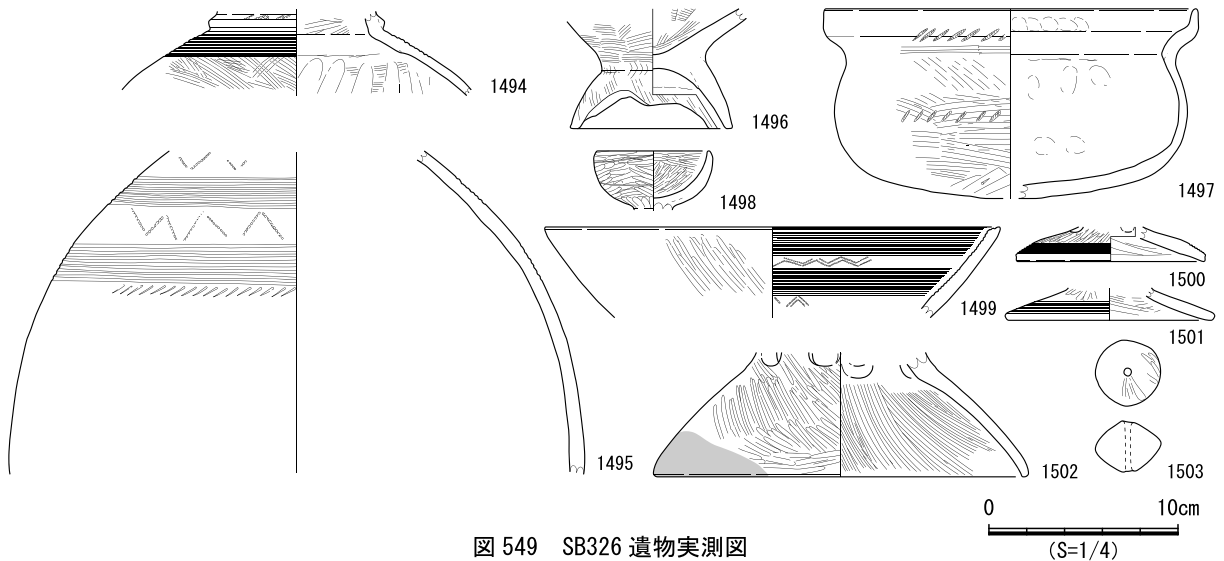


図 549 SB326 遺物実測図

SB327 (遺構：図 551、遺物：図 550)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。南西側をSB365、南東側をSB364、SB373、東側をSB326に切られ、北西隅部周辺のみを検出した。なお、平面形は明瞭であった。

形状 遺構の重複が著しいため全形は不明だが、確認できた範囲から平面形は隅丸方形と考えられる。北辺と西辺は直線的であり、深さは約0.2mで、壁面の傾斜は比較的急である。

埋土 3層に分層した。1層は再掘削後の埋土である。3層は厚く、その上に炭化物を含む1層がほぼ水平に堆積している。

床面 床面上にて4基の小穴を検出した。いずれも単層で掘形は浅く、底面は平坦である。住居の全形が不明であるため、柱穴の推定は困難である。なお、壁溝と炉跡は確認できなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器297点、小穴から土器3点が出土した。埋土上層からⅦ期の遺物がまともに出ており、壺(1504)は口縁部を上にして出土した。

出土遺物 1504はⅦ期壺A1b類。口縁部が直立気味の頸部から屈折して開く。1505はⅦ期壺底部。1506はⅦ期甕E3類。口縁部が短くくの字に立ち上がり、底部は平底である。1507はⅦ期高坏G類。1508はⅦ期高坏G3c類脚部。多条沈線と刺突文を交互に施文する。

時期 出土遺物の時期から、Ⅶ期と考えられる。

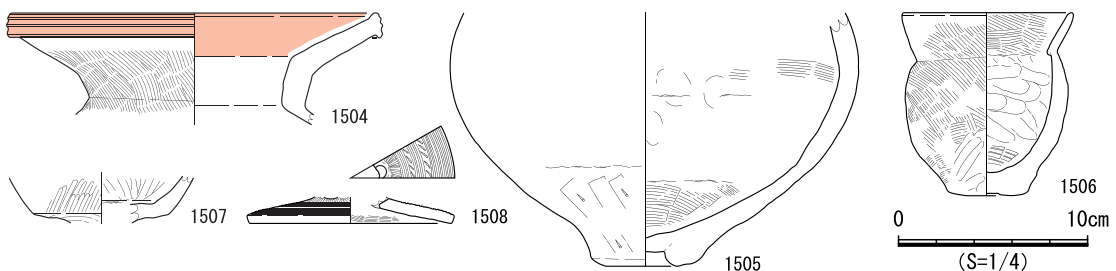


図 550 SB327 遺物実測図

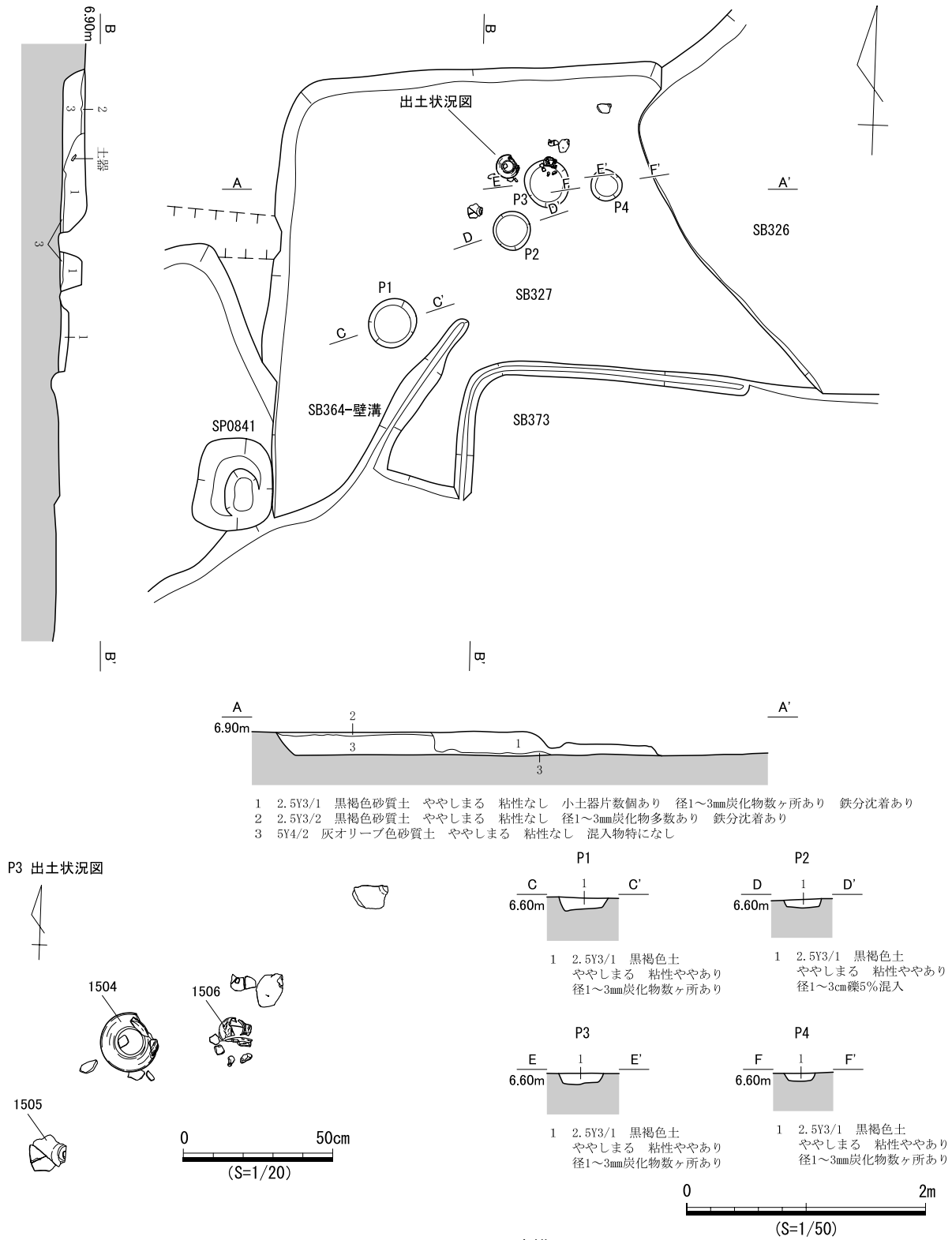


図 551 SB327 遺構図

SB328 (遺構：図 552・553、遺物：図 554)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。北西隅部は隣接する2008年度の調査地点にあたるが、2008年度調査では確認できなかった。SB329～SB332を切り、重複する竪穴住居跡の中では最も後出する。

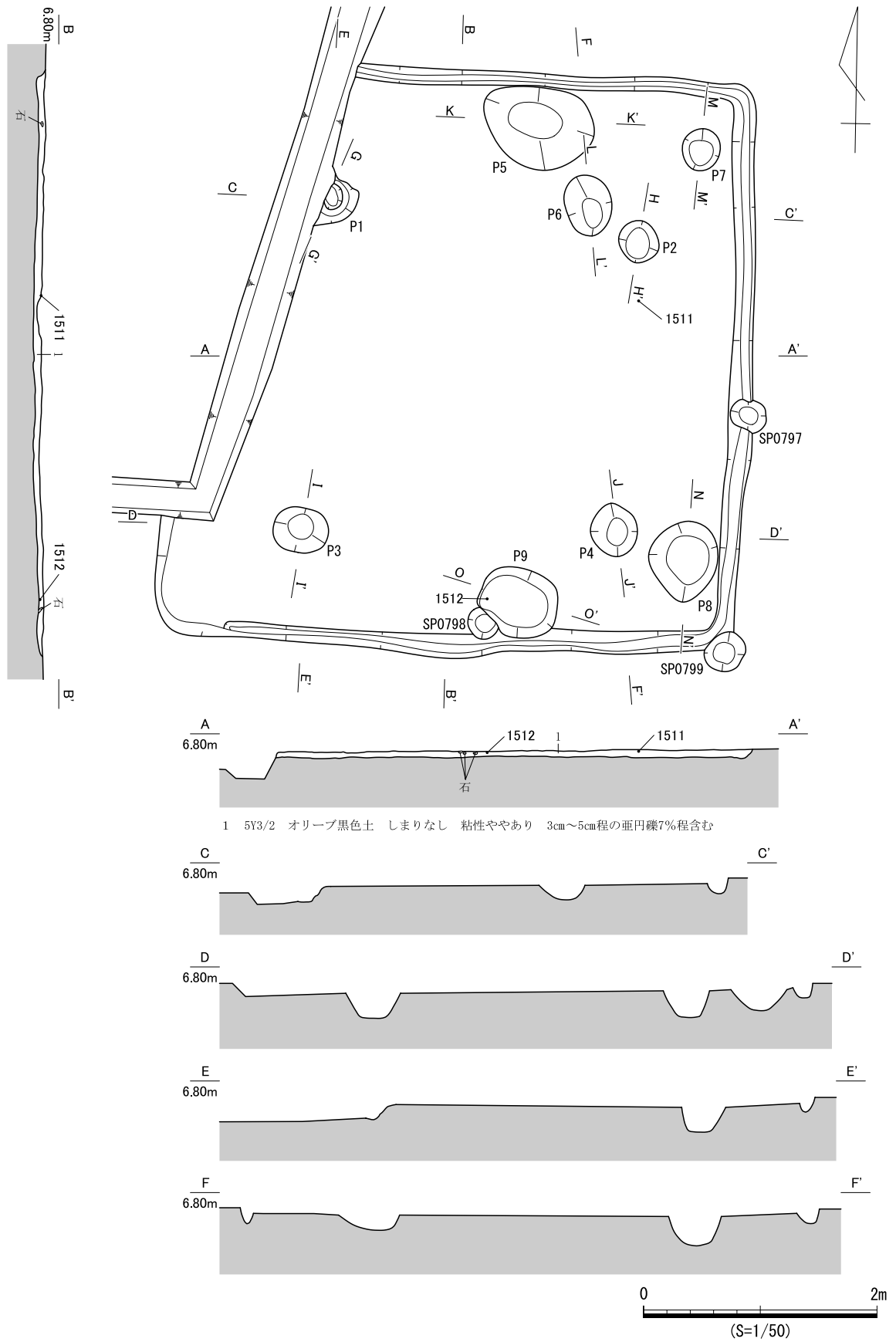


図 552 SB328 遺構図 (1)

形状 南北長約5.0m、東西長約4.7mで、平面形はほぼ正方形である。壁面の残存はわずかで、0.1mに満たない。

埋土 オリーブ黒色土が単層で堆積する。礫をわずかに含むが、その成因は不明である。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。北壁、東壁、南壁に沿って、幅約0.1mの壁溝が認められる。床面上から小穴9基を確認した。平面的位置関係からP1～P4の4基が柱穴と考えられる。いずれの小穴からも柱痕跡と考えられる埋土が認められた。P5、P9の規模が他の小穴より大きく、P5は径1.0mを越える。P9は深さが約0.5mあり、上層に炭化物を含む。

遺物出土状況 埋土中から土器1,246点、小穴から土器96点が出土した。その多くはVI期～VII期の土器片である。なお、P5からVI期高坏(1509)、P9からIX期の高坏(1512)が出土した。

出土遺物 1509はVI期高坏C1類。口縁部が坏底部から直線的に立ち上がる。1510、1512はIX期高坏。口縁部が直線的に外傾する。1512は脚部で、柱状の脚部から裾部が強く外反する。1511はV期～VI期の高坏B類脚部。

時期 VIII期のSB331を切ることでP9出土遺物の時期から、IX期と考えられる。

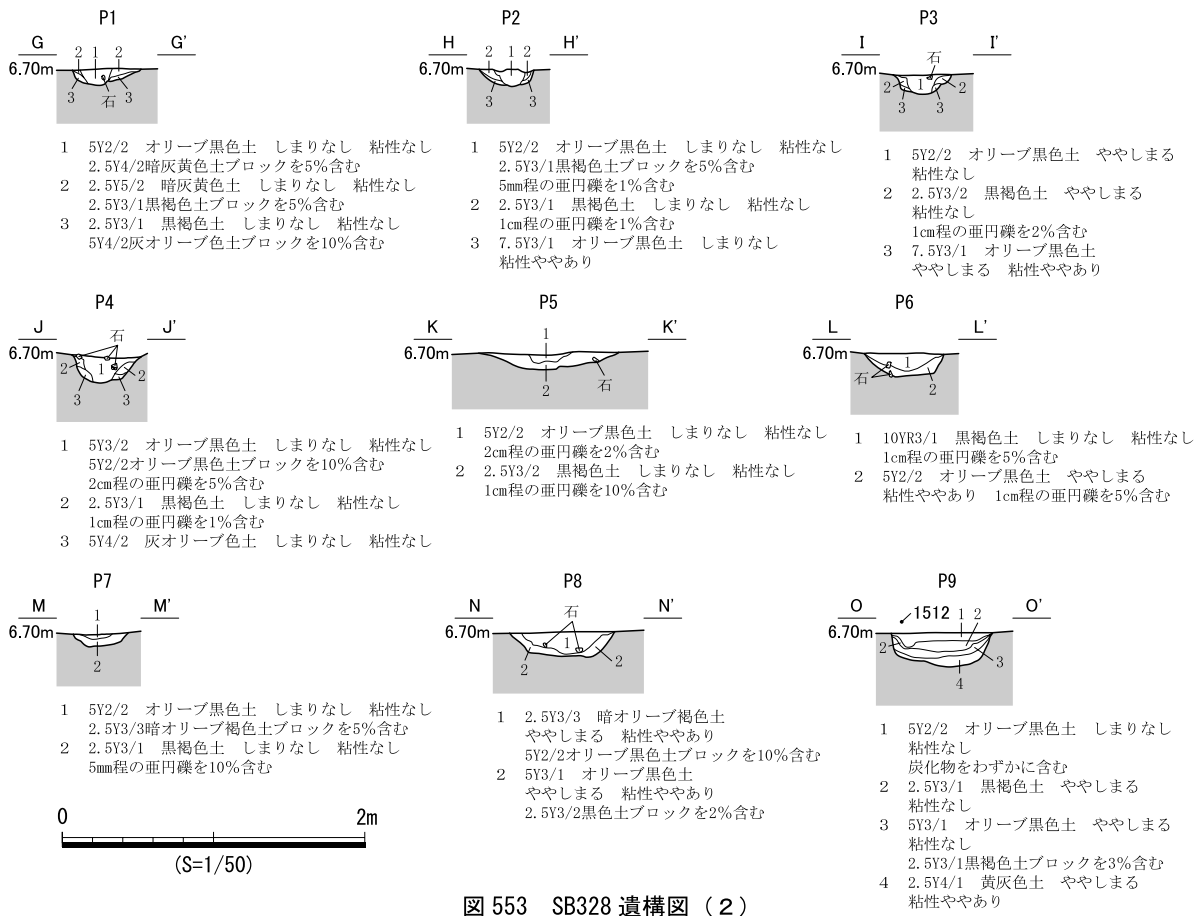


図 553 SB328 遺構図 (2)

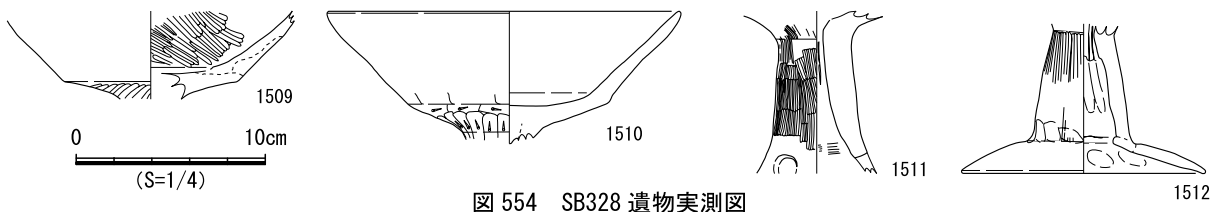


図 554 SB328 遺物実測図

SB329 (遺構：図 555、遺物：図 556)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SB328、SB333、SB334に切られ、SB330～SB332、SB336、SB337を切る。

形状 南北長約4.0m、東西長約4.5mで、平面形は長方形である。壁面の残存はわずかで、残りのよ

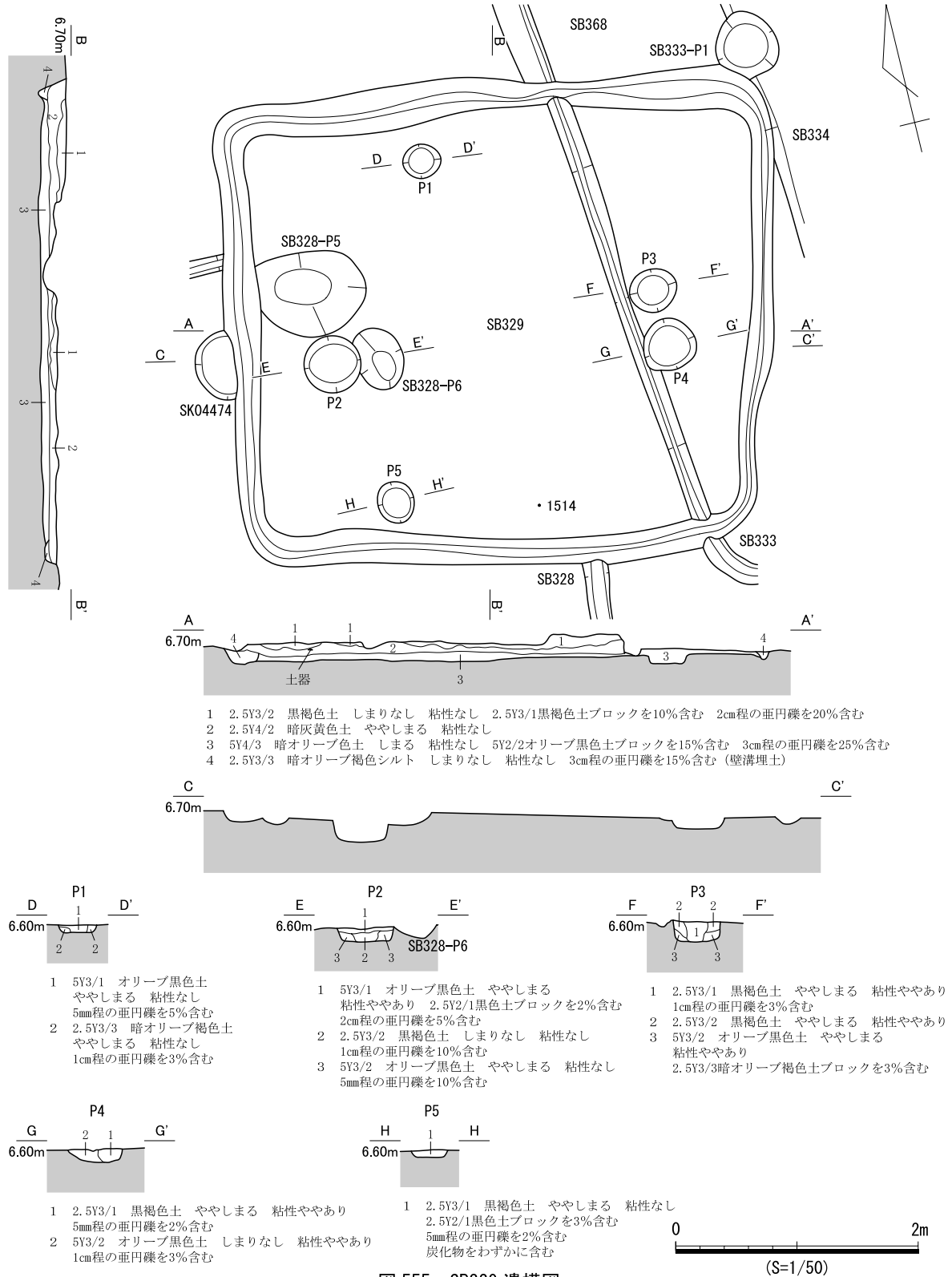


図 555 SB329 遺構図

い北壁の高さでも0.15mである。

埋土 3層に分層した。1・2層が住居埋土、3層が掘形埋土である。住居埋土はブロック土が混入し、層界の凹凸が顕著であるため、人為堆積と考えられる。

床面 平坦であり、貼床（整地土）がある。炉跡は認められなかった。壁面に沿って、幅0.1mの壁溝が全周する。床面上から小穴5基を確認した。柱痕跡と考えられる埋土がP1、P2、P3で認められたが、平面的な位置関係に規則性は認められない。

掘形 単層でブロック土の混入が目立つ。底面は西側がやや低い。

遺物出土状況 埋土中から土器929点、石器類2点、小穴から土器18点、壁溝から土器14点が出土した。土器の多くはV期～VII期の小片である。

出土遺物 1513、1514はVI期甕A2b類。口縁端部が直立して平坦面を形成する。1513は口縁部に刺突文が認められる。1514は胴部がやや強く膨らみ、頸部直下に直線文と刺突文を施文する。1515はV期～VI期の高坏J類。坏底部と口縁部との境に刺突文が認められ、直上には沈線がめぐる。

時期 V期～VI期の残りのよい遺物が出土しているものの、VII期のSB330とSB336を切ることと出土遺物にVII期が含まれることから、VII期と考えられる。

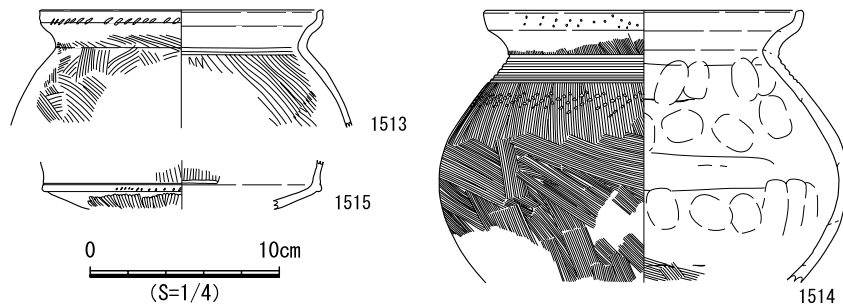


図 556 SB329 遺物実測図

SB330（遺構：図 558、遺物：図 557）

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。西側を2008年度、東側を2010年度の調査で確認した。SB328とSB329に切られ、SB332とSB336を切る。

形状 南北長約3.6m、東西長約4.1mを測る。壁面はほぼ垂直で、深さは約0.1mと浅い。各辺ともわずかに外側へ膨らみ、隅部は丸みをもつ。

埋土 2層の堆積が認められる。上層には炭化物が混じる。

床面 ほぼ平坦であり、貼床や硬化面、炉跡は認められなかった。南西隅部にて壁溝を確認し、床面で小穴19基を検出した。P1、P2、P19が直径約0.5mとやや大きく、他の小穴は直径0.3m以下と小規模である。いずれも明瞭な柱痕跡を確認できず、P4とP5が位置関係からみて柱穴の可能性もあるが、対応する北東、南東側の小穴は確認できなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器416点が出土した。その多くはVI期～VII期の小片である。

出土遺物 1516と1517は同一個体でVII期甕B4類。口縁部が強く外反して、端部を丸くおさめる。脚部は短くハの字に開く。端部には打ち欠きが認められる。

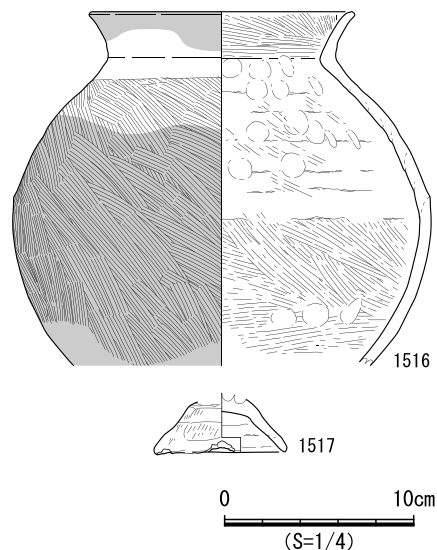


図 557 SB330 遺物実測図

時期 出土遺物の時期と、VI期のSB336、VII期以前のSB332より後出し、VII期のSB329より先行することから、VII期と考えられる。

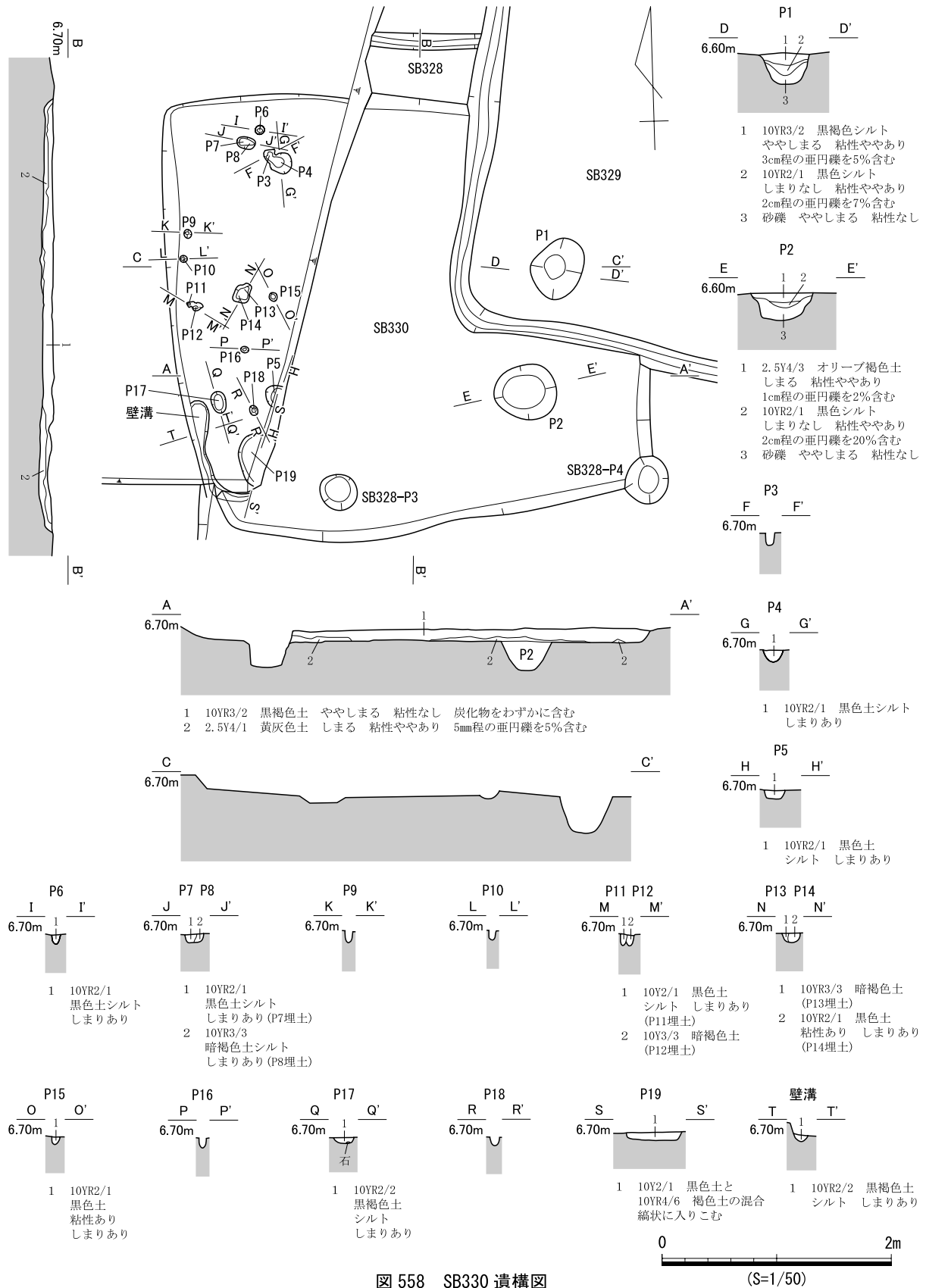


図 558 SB330 遺構図

SB331 (遺構：図559・560、遺物：図561)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB328、SB329、SB333、SB334に切られ、

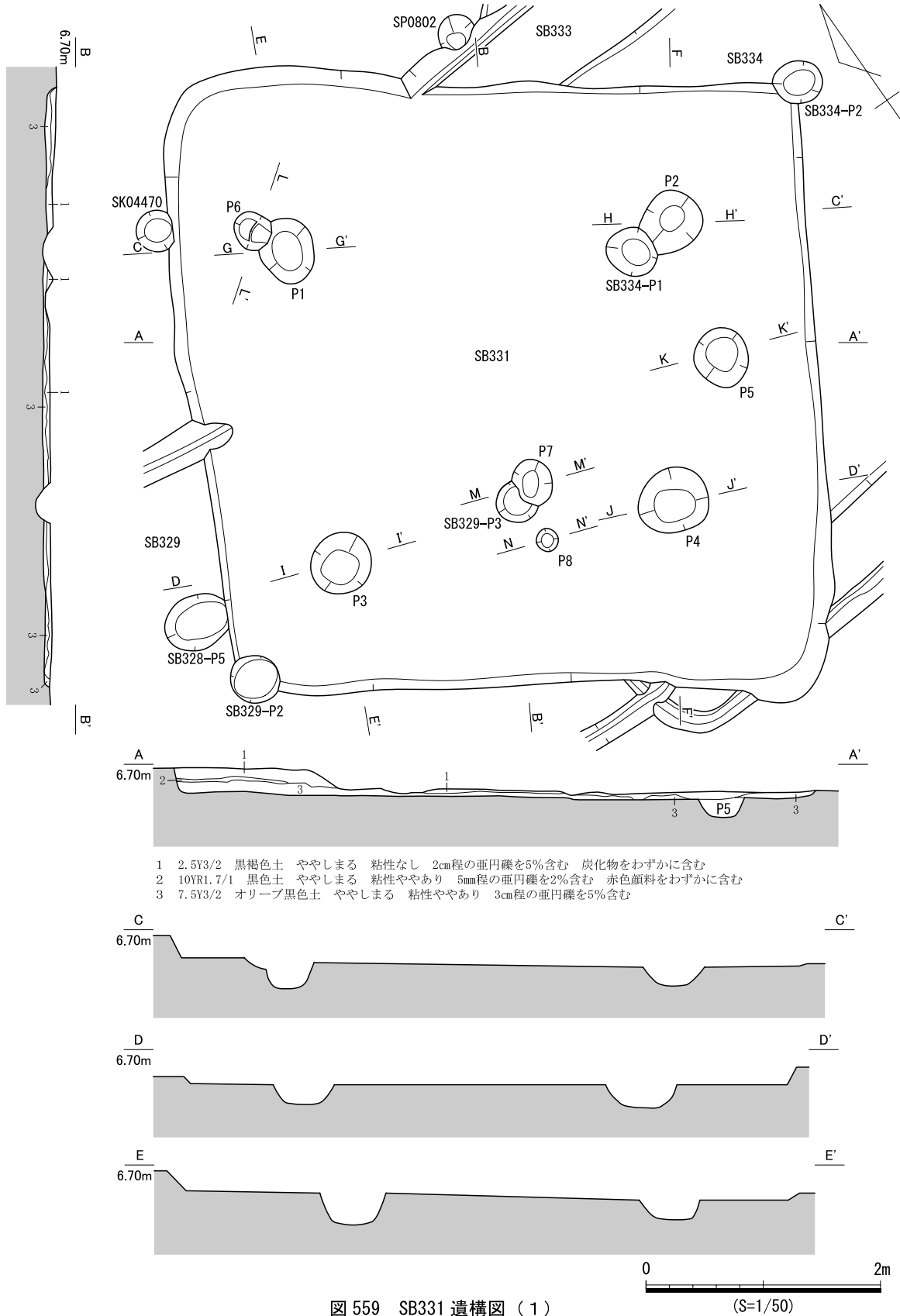


図559 SB331 遺構図(1)

SB332、SB336、SB338を切る。

形状 平面形は南北長約5.2m、東西長約5.5mであり、ほぼ正方形である。壁面は周辺遺構との重複により削平が進み、北壁を除いて数cm程度のみが残る。なお、壁面はほぼ垂直である。

埋土 3層に分層した。2層は西側だけに堆積し、わずかに赤色顔料を含む。埋土はほぼ水平堆積であるが、層界の凹凸が顕著であるため、人為堆積と考えられる。

床面 ほぼ平坦であり、貼床や硬化面、炉跡は認められなかった。床面で小穴8基を検出し、その埋土は2～3層に分層できるが、柱痕跡は確認できなかった。しかし、平面的な位置関係からP1～P4が柱穴と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器1,027点、石器類1点、小穴から土器100点が出土した。V～Ⅷ期の土器片が出土し、その多くがⅦ～Ⅷ期と考えられる。P2からはⅦ期後半の壺A2類(1518)、Ⅷ期の器台C類(1523)が出土した。

出土遺物 1518はⅦ期後半壺A2類で口縁部が短く外反する。1519～1521はⅧ期甕D3類。1519は口縁部で端部の屈曲が弱く、頸部に沈線が認められる。1520、1521は脚部。脚部には打ち欠きが認め

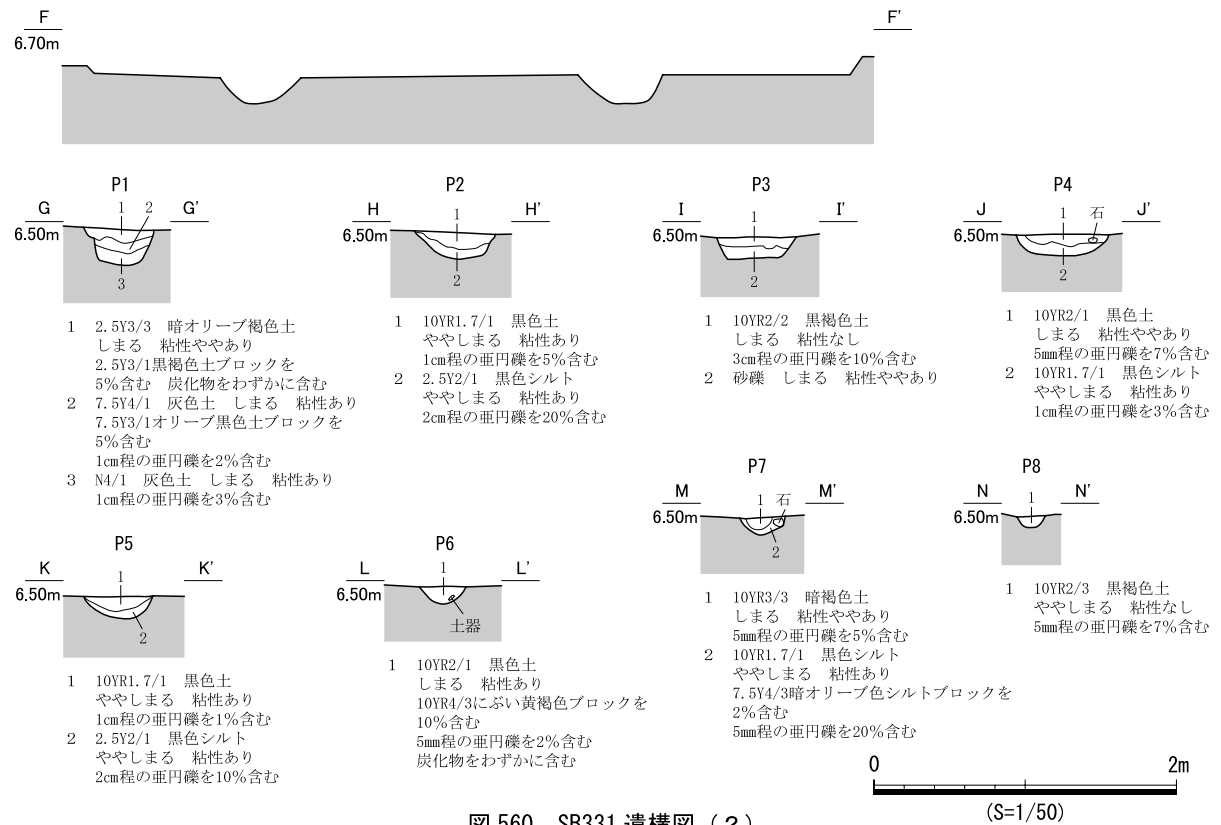


図 560 SB331 遺構図 (2)

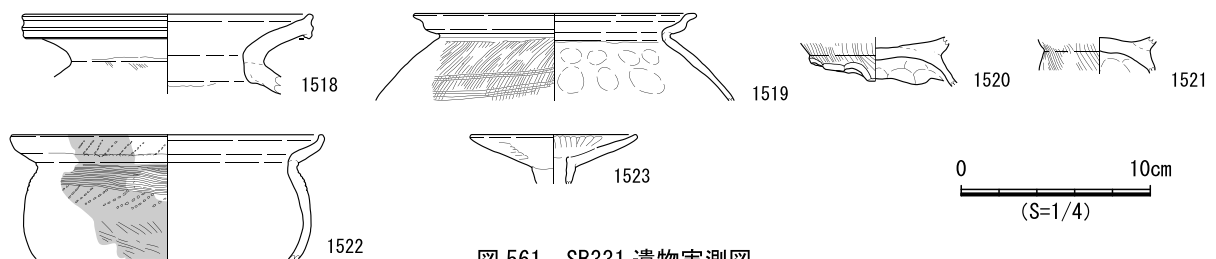


図 561 SB331 遺物実測図

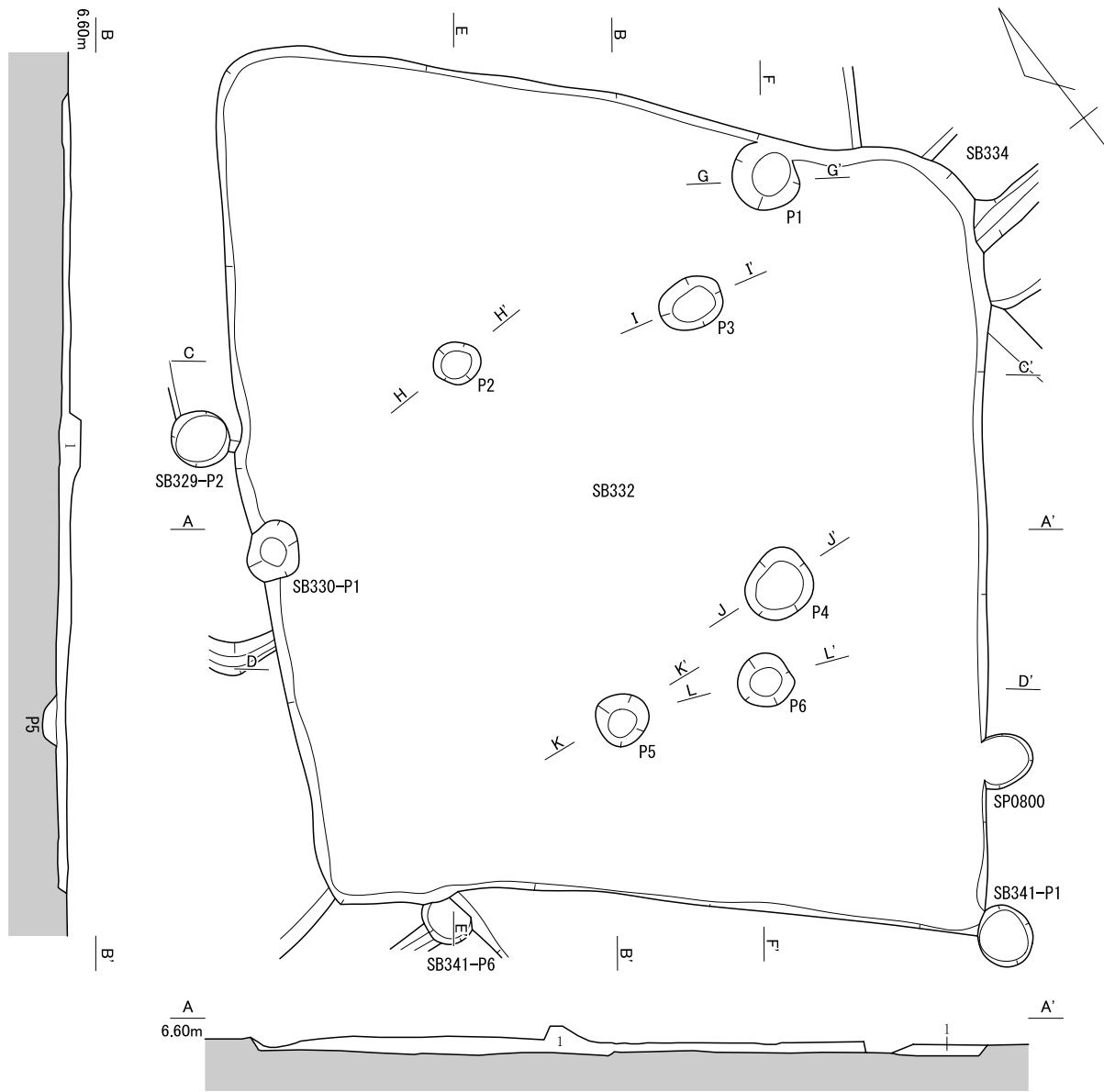
られる。1522はⅥ期鉢A2類。口縁部が弱く屈曲して、刺突文が口縁端部と頸部、直線文が頸部に施文される。1523は口縁部がわずかに内湾するⅧ期器台C3類の口縁部。

時期 出土遺物の時期から、Ⅷ期と考えられる。

SB332 (遺構：図562・564、遺物：図563)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。周囲の竪穴住居跡との重複関係が著しく、SB328～SB331、SB333～SB336、SB341に切られ、SB337を切る。

形状 南北長約5.7m、東西長約5.4mで、平面形は長方形である。壁面の残存はわずかで、0.1mに満たない。南東隅部はその角度がほぼ直角であるが、その他の隅部は丸みを帯び、北辺と西辺が南辺と東辺に比べて長い。



1 2.5Y2/1 黒色砂質土 ややしまる 粘性ややあり 3～5cmの垂円礫を20%含む

0 2m (S=1/50)

図562 SB332 遺構図(1)

埋土 黒色砂質土が単層で堆積する。その成因は不明であるが、後出する竪穴住居跡との時期が近似することから、人為堆積の可能性が高い。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上から小穴6基を確認した。そのうち、柱痕跡と考えられる埋土はP1のみに認められたが、柱穴の推定は困難である。

遺物出土状況 埋土中から土器177点、小穴から土器13点が出土した。P1からはV期高坏（1524）が出土した。

出土遺物 1524はV期高坏I類脚部。直線文が2帯認められる。内外面、破断面に帯状となる煤が付着する。

時期 先行するSB337がVI期、後出するSB335、SB331がVII期であるため、VI期～VII期と考えられる。

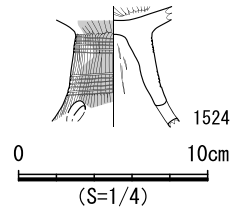


図 563 SB332 遺物実測図

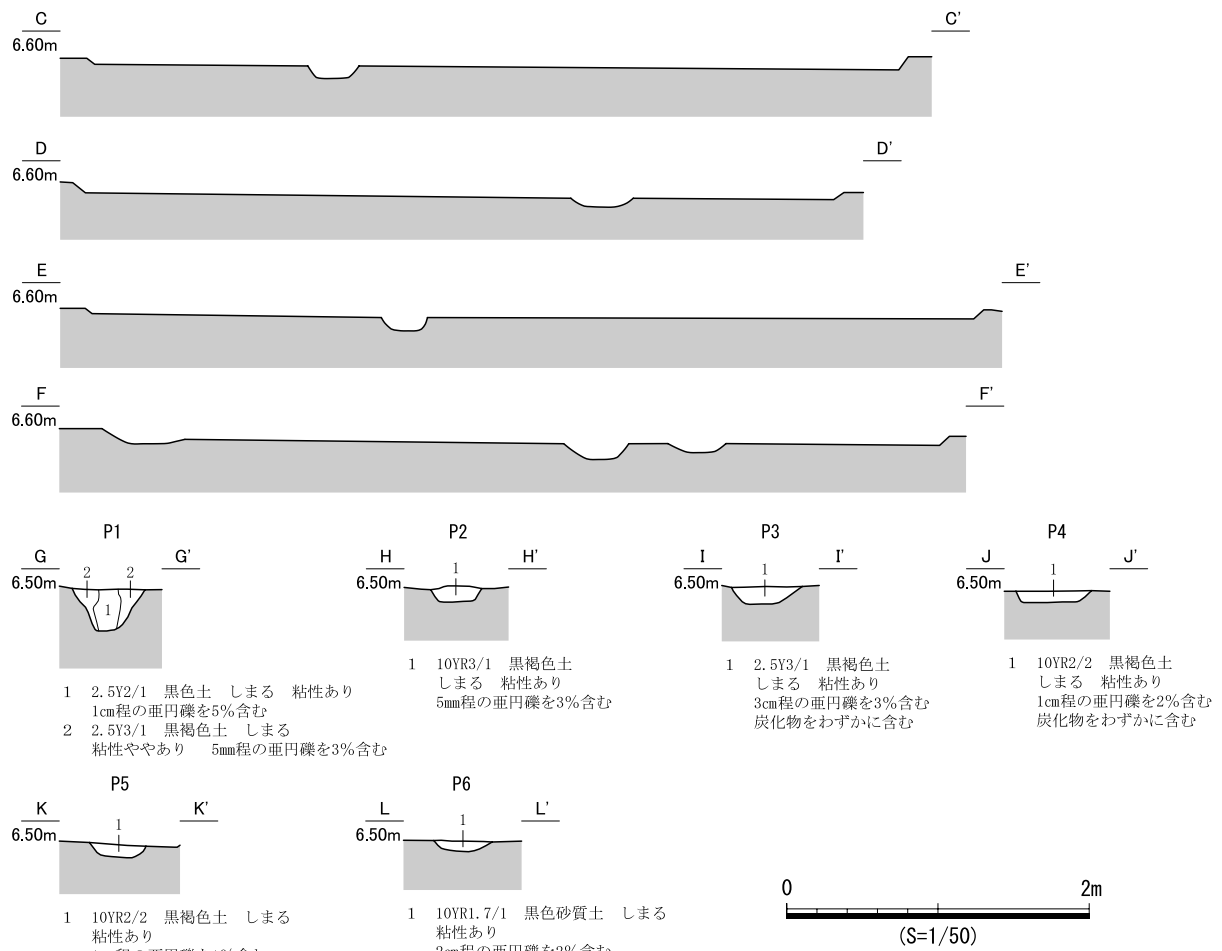


図 564 SB332 遺構図 (2)

SB333 (遺構：図 565～567、遺物：図 568)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB331、SB336、SB337、SB342を切り、重複する竪穴住居跡のなかで最も後出する。

形状 東西長約6.6m、南北長約5.9mを測り、平面形は隅丸長方形である。壁面は高さ0.2mが残り、その傾斜は急である。各辺とも直線的である。

埋土 4層に分層した。1～3層が住居埋土、4層が掘形埋土である。住居埋土は層界に凹凸が認め

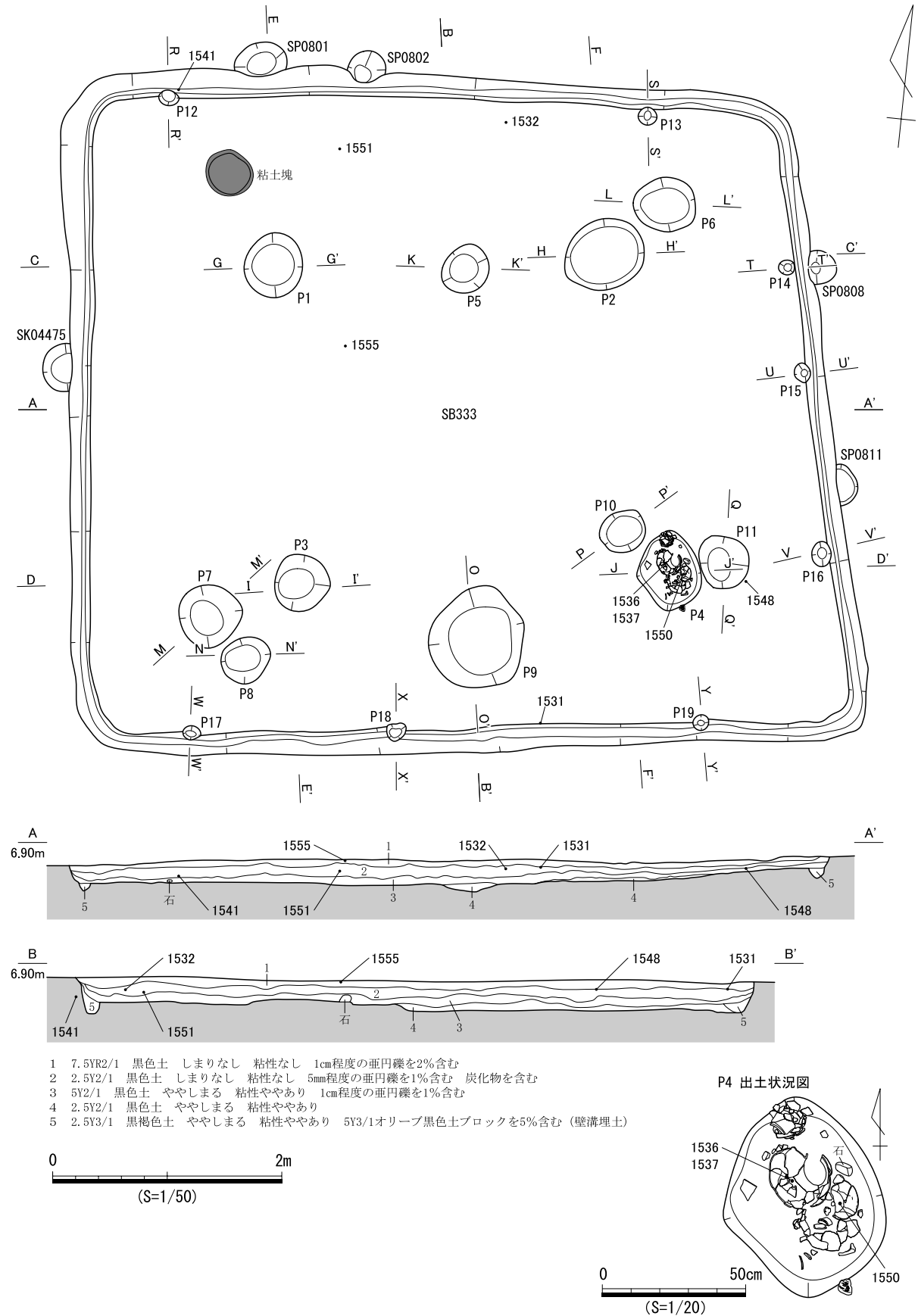


図 565 SB333 遺構図 (1)

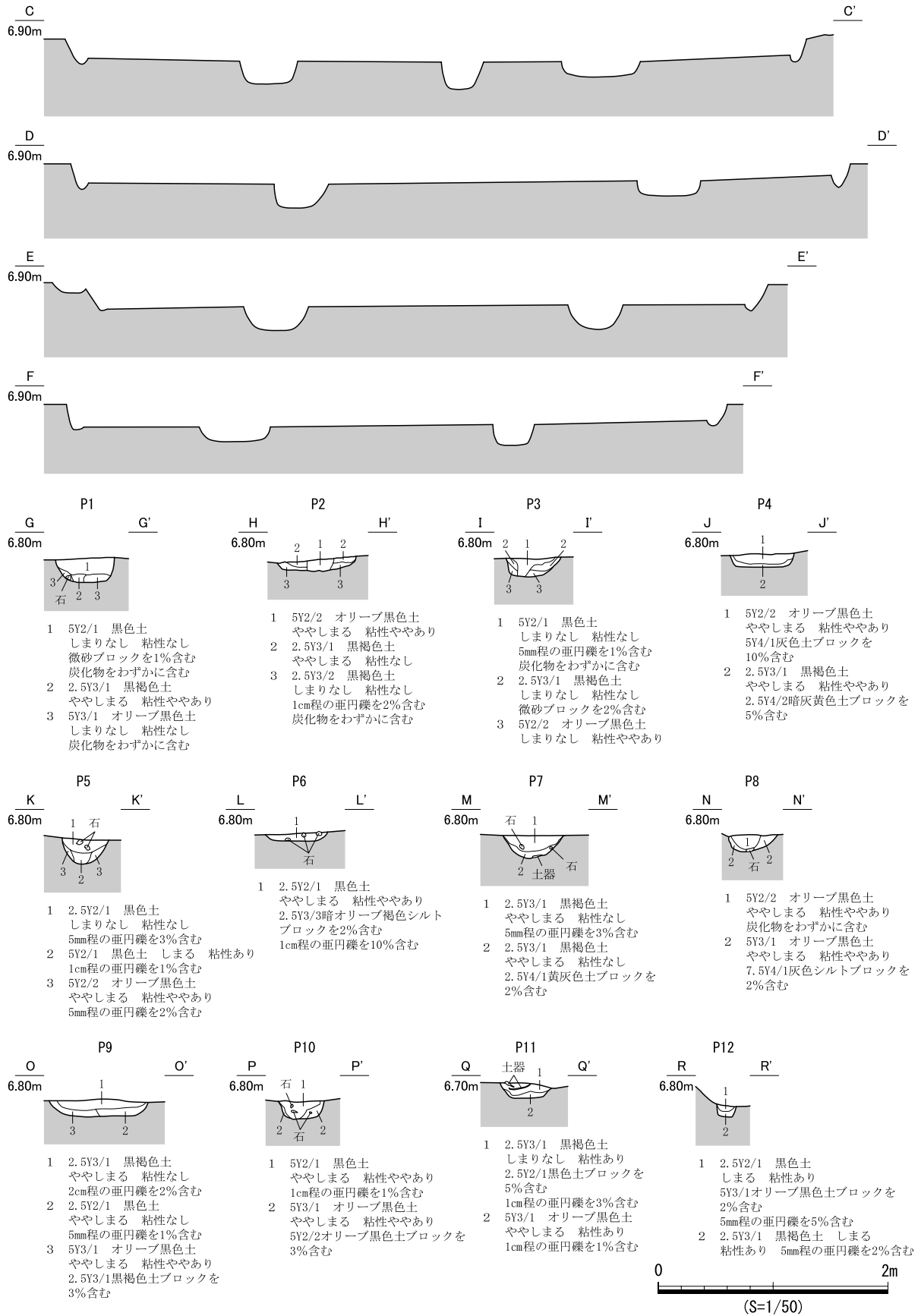


図 566 SB333 遺構図 (2)

られるため、人為堆積の可能性が高い。

床面 ほぼ平坦だが、東側がわずかに高くなる。硬化面や炉跡は認められなかった。壁面に沿って幅約0.1mの壁溝が全周し、壁溝に隣接して直径約0.1m～0.2mの小穴8基を検出した（P12～P19）。壁材を留める機能が想定できる。また、壁溝に隣接する以外に、床面上で直径約0.5m～1.0mの小穴を11基検出した。平面的な位置関係からP1～P4が柱穴と考えられる。そのうち、P2、P3では柱痕跡を確認した。また、P5にも柱痕跡が認められた。P9は直径約1.0mと大きい、その性格は不明である。なお、北西隅部で粘土塊を検出した。

遺物出土状況 埋土中から土器10,518点、石器類2点、小穴から土器715点、壁溝から土器120点が出土した。土器の多くはⅥ期～Ⅶ期に属し、少量の縄文土器やⅤ期、Ⅷ期～Ⅸ期の土器も出土した。P4からはⅨ期の甕（1536、1537）、高坏（1550）がまとまって出土した。また、P6からはⅦ期の高坏（1554）、Ⅶ期の甕D2a類（1553）が、壁溝からはⅤ期高坏（1543）、Ⅷ期高坏（1552）、Ⅷ期甕D3類（1534）がそれぞれ出土した。

出土遺物 1525はⅤ期～Ⅶ期の壺胴部片で、線刻状の文様が認められる。1526、1529はⅨ期の小型丸底壺の口縁部片で同一個体の可能性がある。1529には打ち欠きが認められ、内面には暗文状のミガキが認められる。1527はⅧ期～Ⅸ期の手捏ねE類。壺胴部を模倣したように見えるが、端部が欠損しているため、全形の判断が難しい。底部が突出していることから、Ⅷ期～Ⅸ期の壺を模倣したと判断した。胴部にやや粗雑な細い沈線が認められる。1528はⅧ期～Ⅸ期の壺口縁部。外面は二重口縁状に屈曲するが、口縁部内面には屈曲する部位はなく、強く外反するのみである。1530～1532はⅨ期の小型の壺でほぼ完存する。1530は口縁部が短く立ち上がり、端部はつまみ上げ状のナデのためか、凹凸がある。胴部は膨らみが弱く、底部はわずかな平底を呈する。1531は口縁部が短く直線的に立ち上がり、打ち欠きが認められる。胴部の膨らみが弱く、底部は丸底である。1532は口縁部が直線的に立ち上がり、胴部の膨らみが強い。底部はわずかな平底である。胴部中央に煤が付着する。1533はⅦ期甕D2a類の小型品。口縁端部が短く直立気味に直立して、頸部直下にヨコハケが認められる。1534、1538は

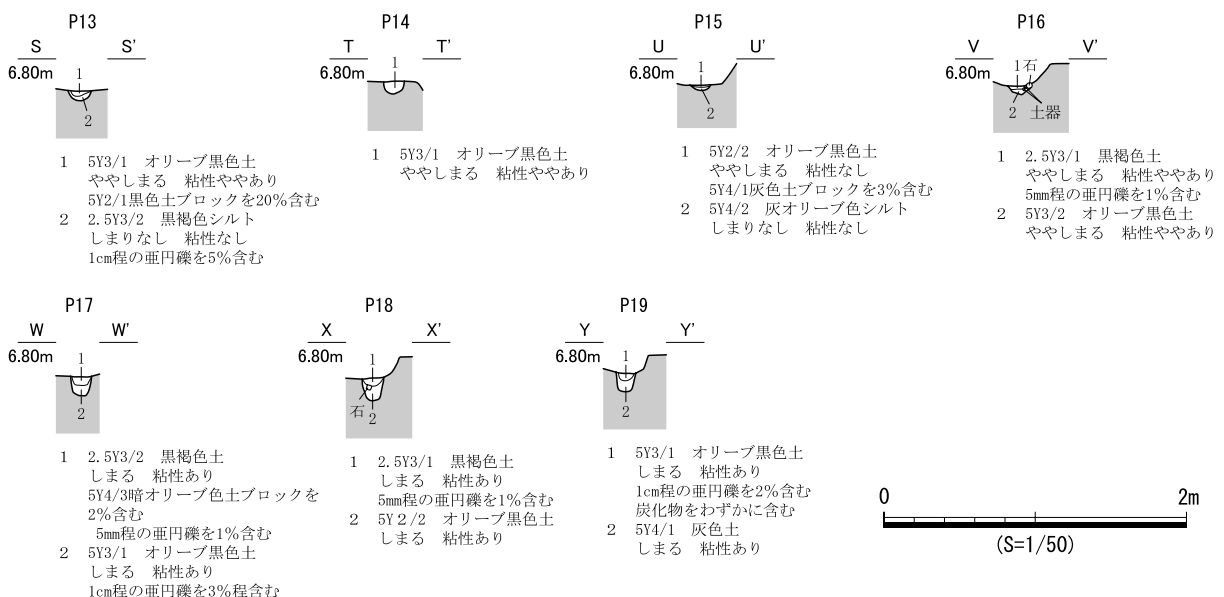


図 567 SB333 遺構図（3）

Ⅷ期甕D3類の口縁部。1534は口縁部の屈曲が弱くなり、頸部に沈線が認められる。1535はⅨ期甕D類の口縁部。外面にわずかな屈曲をもつが、内面の屈曲はほとんど認められない。頸部に沈線が認められる。1536、1537はP4から出土したⅨ期甕D類。1536は口縁部外面が屈曲するが、内面の屈曲は痕跡的となり、端部が肥厚して、顕著な面をもつ。胴部は肩部が強く膨らむ。1537は口縁部が弱く屈曲して、先端がやや肥厚してわずかに面をもつ。頸部に沈線が認められ、胴部のヨコハケは認められない。内面にはケズリが認められる。1539はⅦ期甕D類の脚部。打ち欠きが認められる。1540、1541はⅨ期甕D類脚部。端部の折り返しの幅が広く、その断面が厚い。1542はⅨ期の甕口縁部。直線的に外傾する口縁部で、頸部に断面三角形の突帯が貼付される。1543はⅤ期高坏B3b類。口縁部が

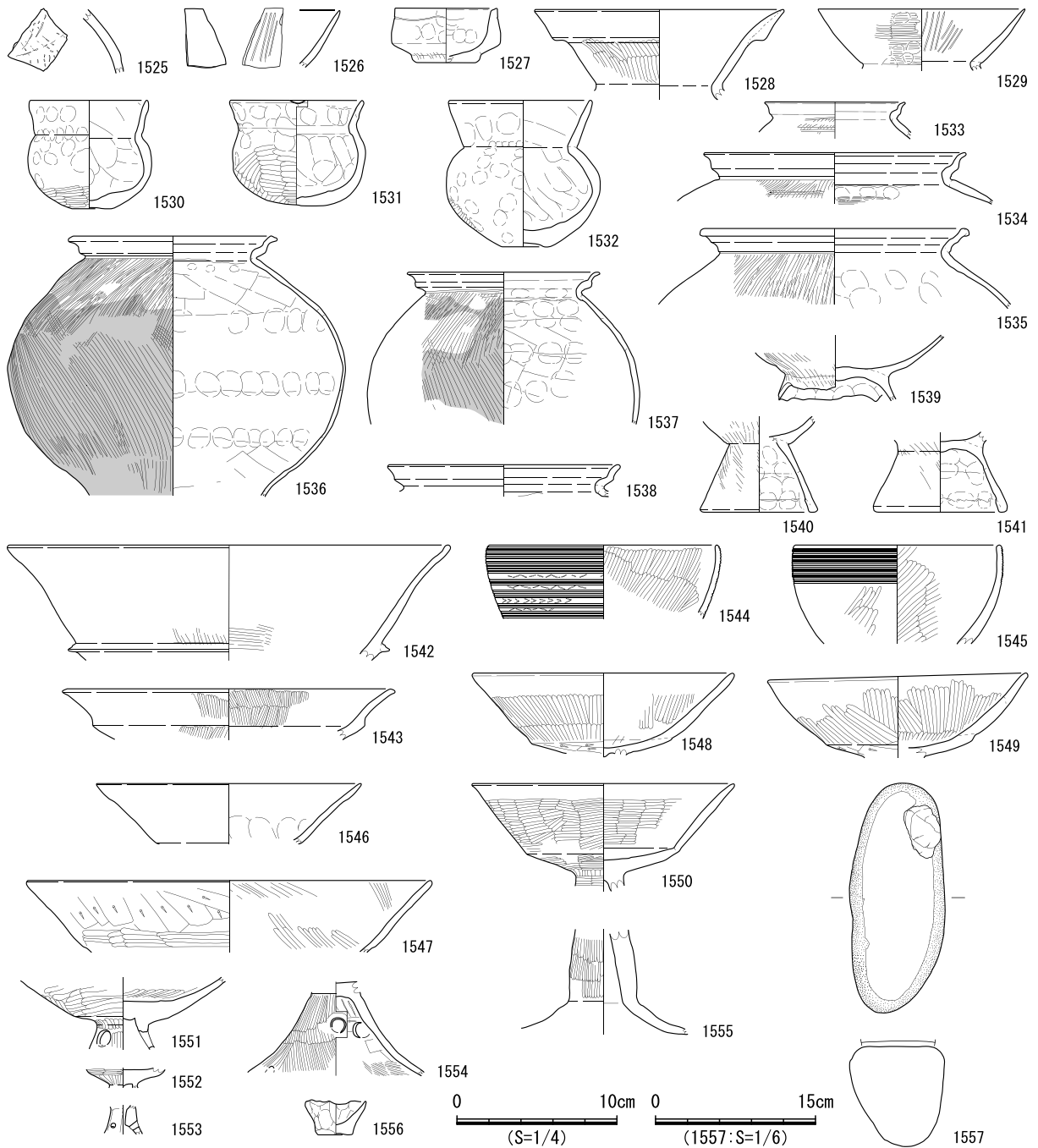


図 568 SB333 遺物実測図

坏底部から強く外反するが、内面の屈曲は弱い。1544はⅦ期高坏G3c類。外面には繊細な加飾が認められる。多条沈線の中に、振幅の小さな山形文と羽状文を施文する。1545はⅦ期高坏G3b類。口縁部が内湾し、上半に多条沈線が認められる。1546～1548、1555はⅨ期高坏。1546、1547の口縁端部はあまり外反しない。1547の外面には煤が顕著に付着する。1548は口縁部が直線的に外傾し、端部でわずかに外反する。1555は脚部で、裾部が強く外反する。1550はP4出土のⅨ期高坏。坏部がほぼ完存する。口縁部がわずかに内湾しながら立ち上がり、端部がわずかに外反して、やや尖り気味である。1551、1552はⅧ期の高坏E類。1551は口縁部が坏底部から大きく開く。内面の段がわずかに認められるが、その径は小さい。1552は坏底部。外面に煤が顕著に付着する。破損断面にも煤が付着する。1553はⅧ期手捏ねE類は穿孔のある高坏を模倣していることから、Ⅷ期とした。1554はⅦ期高坏D類の脚部。脚部が強く外反する。1556はⅨ期手捏ねB類。胴部は直線的で、胎土がⅨ期に類似するので、Ⅸ期とした。1557は砥石。長楕円礫の一面を砥面に使用している。

時期 出土遺物の時期から、Ⅸ期と考えられる。

SB334 (遺構：図569、遺物：図570)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SB333に切られ、SB331とSB337を切る。

形状 南北長約4.3m、東西長約4.0mで、平面形は隅丸方形である。壁面の残存はわずかで、0.1mにも満たない。

埋土 黒色土が単層で堆積するが、その成因は不明である。

床面 やや凹凸があり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にて小穴5基を確認した。P1～P4は直径約0.4mで、平面的な位置からみて柱穴と考えられる。深さが0.2m～0.3mで、いずれも柱痕跡を断面で確認した。

遺物出土状況 埋土中から土器1,025点、小穴から土器72点が出土した。その多くはⅥ期～Ⅷ期の土器片で、P1からⅧ期甕(1561)とⅧ期高坏(1567、1568)が出土した。

出土遺物 1558はⅧ期の柳ヶ坪型壺。内外面に羽状文を施文する。1559はⅦ期～Ⅷ期の二重口縁壺。口縁部が頸部で強く屈曲して外反するが、内面の屈曲はほとんど認められない。屈曲部に円形浮文、端部に棒状浮文が認められる。1560はⅧ期壺底部。底部がやや突出気味である。1561はⅧ期甕D3類。口縁部が屈曲して端部が肥厚して、平坦面を形成する。頸部には沈線が認められ、胴部が強く膨らむ。1562はⅧ期の山陰系の甕。口縁部が直線的に立ち上がる。1563、1564は打ち欠きのあるⅧ期甕D3類脚部。1563は破断面が被熱する。1565はⅦ期～Ⅷ期の高坏D・E類脚部。脚部が強く外反する。1566はⅦ期高坏G3c類脚部。外面に多条沈線と山形文によって加飾される。山形文は振幅が小さく、連弧文状である。端部には刺突文がみられる。1567、1568はⅧ期高坏。口縁部が大きく開く。坏底部との段がわずかに認められるが、その径は小さい。1568は脚部が付根から円錐形に大きく広がり、透孔が縦方向2段、千鳥状に配置される。1569はⅦ期～Ⅷ期の北陸系の器台。受部から口縁部が直立し、その境界が突出する。1570はⅦ期～Ⅷ期の器台C2類。受部が内湾して、端部がわずかに直立する。脚部の透孔は縦方向2段が認められ、それぞれ千鳥に配置される。

時期 出土遺物の時期から、Ⅷ期と考えられる。

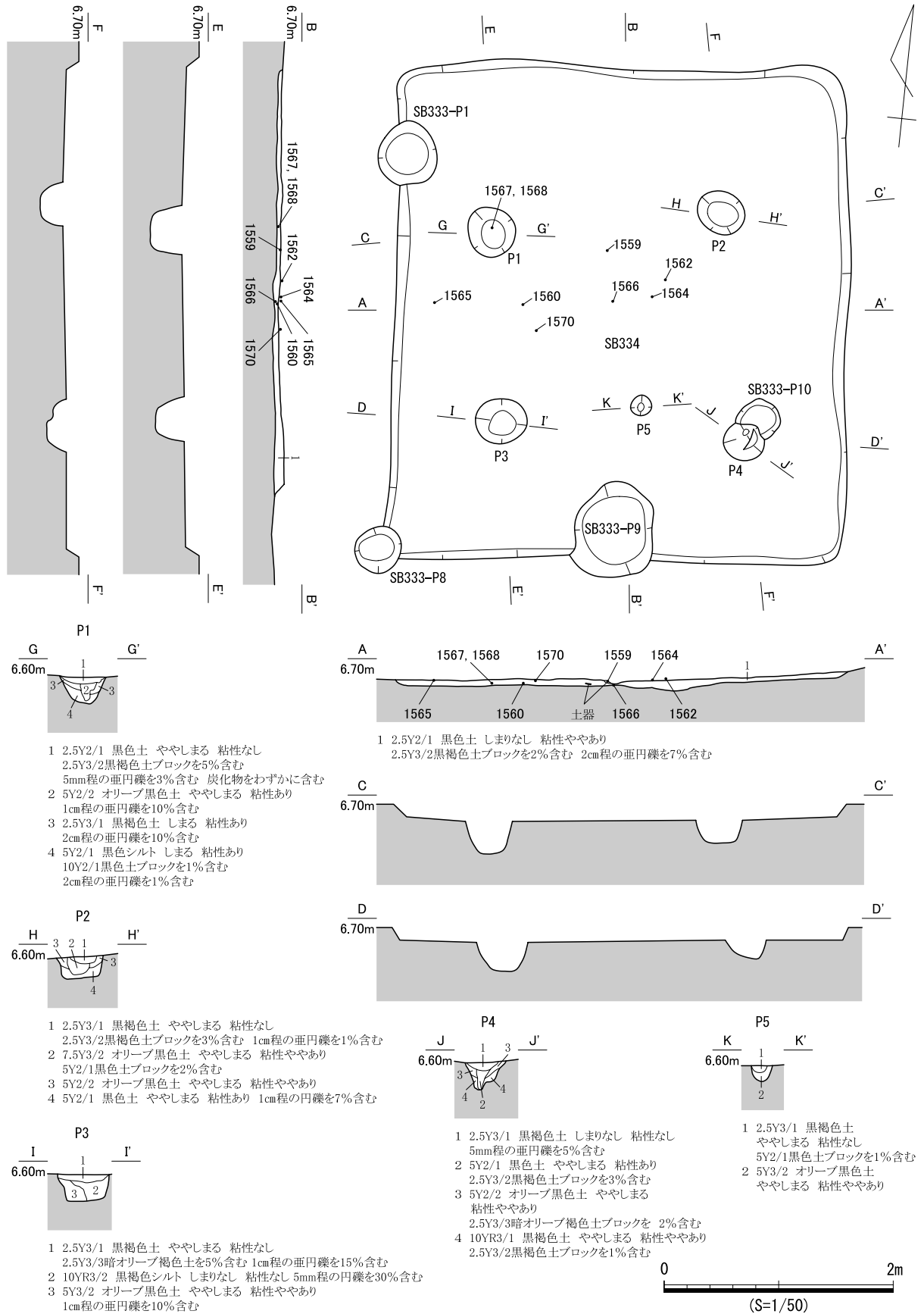


図 569 SB334 遺構図

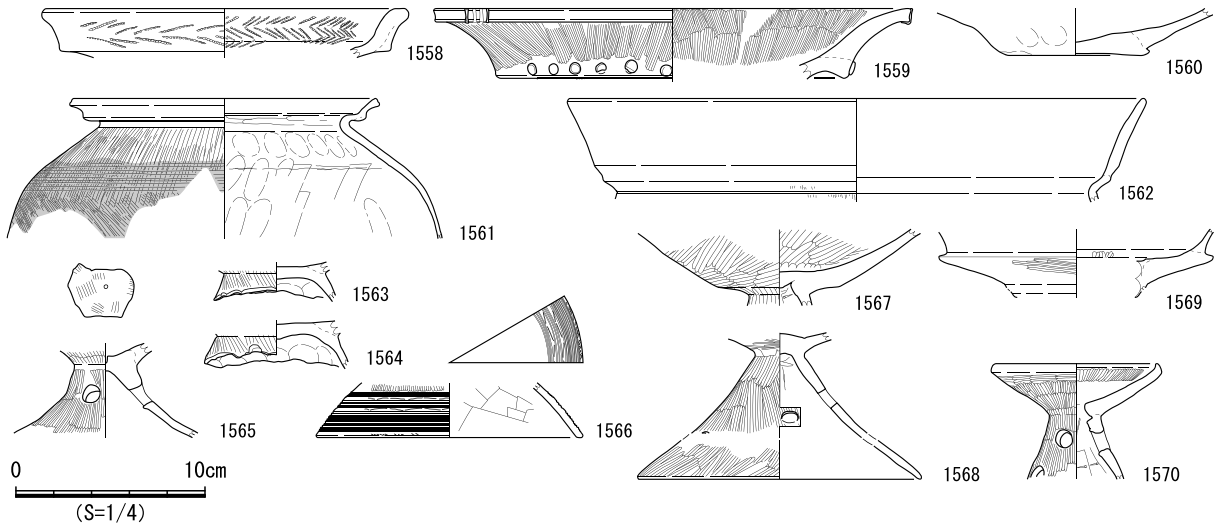


図 570 SB334 遺物実測図

SB335 (遺構：図 572・573、遺物：図 571)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域端に位置する。SB333に切られ、SB332、SB336、SB337、SB342を切る。重複する竪穴住居跡によって北西部の大半が失われており、埋土は残っておらず、検出時にはすでに壁溝がみえていた。

形状 南北長約5.4m、東西長約5.5mであり、残存している範囲から平面形はほぼ正方形と考えられる。南辺は直線的だが、東辺はやや蛇行する。壁面の残存はわずかで、0.1mに満たない。壁面が遺存する部位には幅0.1mの壁溝がめぐる。

床面 平坦であり、貼床(整地土)がある。硬化面や炉跡は認められなかった。床面上にて小穴5基を確認したが、いずれも柱痕跡は認められなかった。また、柱穴配置はSB333・SB334床面で検出した小穴も含めて検討したが、推定できなかった。

掘形 底面はやや東へ向かって下がり、ブロック土を含むオリーブ褐色土が残存していた。

遺物出土状況 埋土中から土器279点、小穴から土器28点、壁溝から土器112点が出土した。北東隅部の壁溝からは、Ⅶ期壺(1571)が出土した。

出土遺物 1571はⅦ期壺B3類。口縁部が短く外反して、端部は丸くおさめる。胴部は球形にちかい。器面全体が二次的に被熱しているのが認められる。1572、1573はⅦ期高坏G3c類脚部。1572は多条沈線間に刺突文を施文する。1573は多条沈線間に山形文、端部に刺突文を施文する。

時期 出土遺物の時期から、Ⅶ期と考えられる。

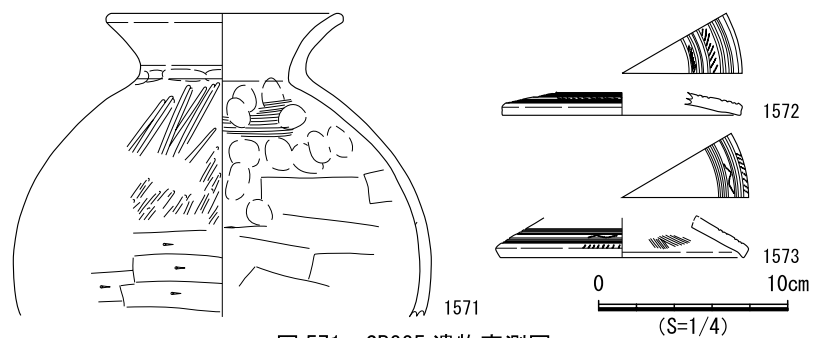


図 571 SB335 遺物実測図

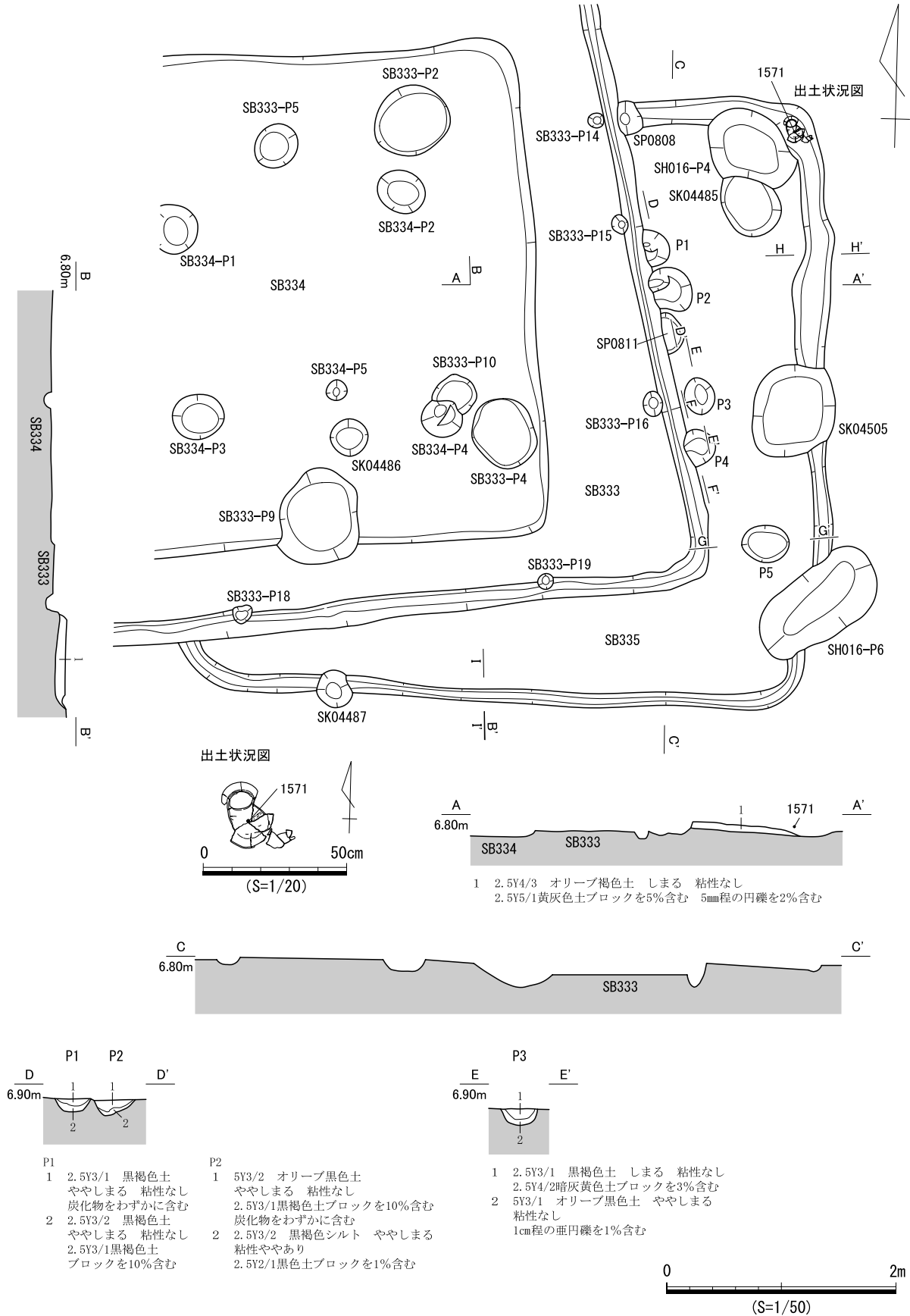


図 572 SB335 遺構図 (1)

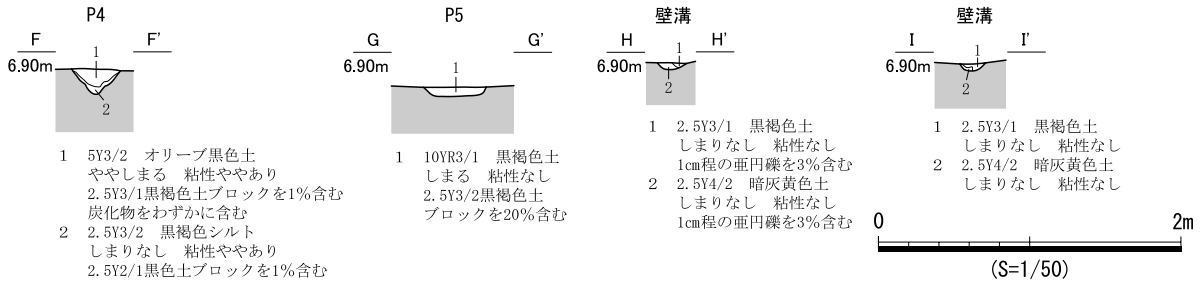


図 573 SB335 遺構図 (2)

SB336 (遺構：図 574～576、遺物：図 577)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB328、SB329、SB333、SB335、SB339、SB341、SB343に切られ、SB332、SB337、SB338を切る。

形状 南北長約6.5 m、東西長約6.0 mを測り、やや大型の竪穴住居跡である。平面形は隅丸方形を

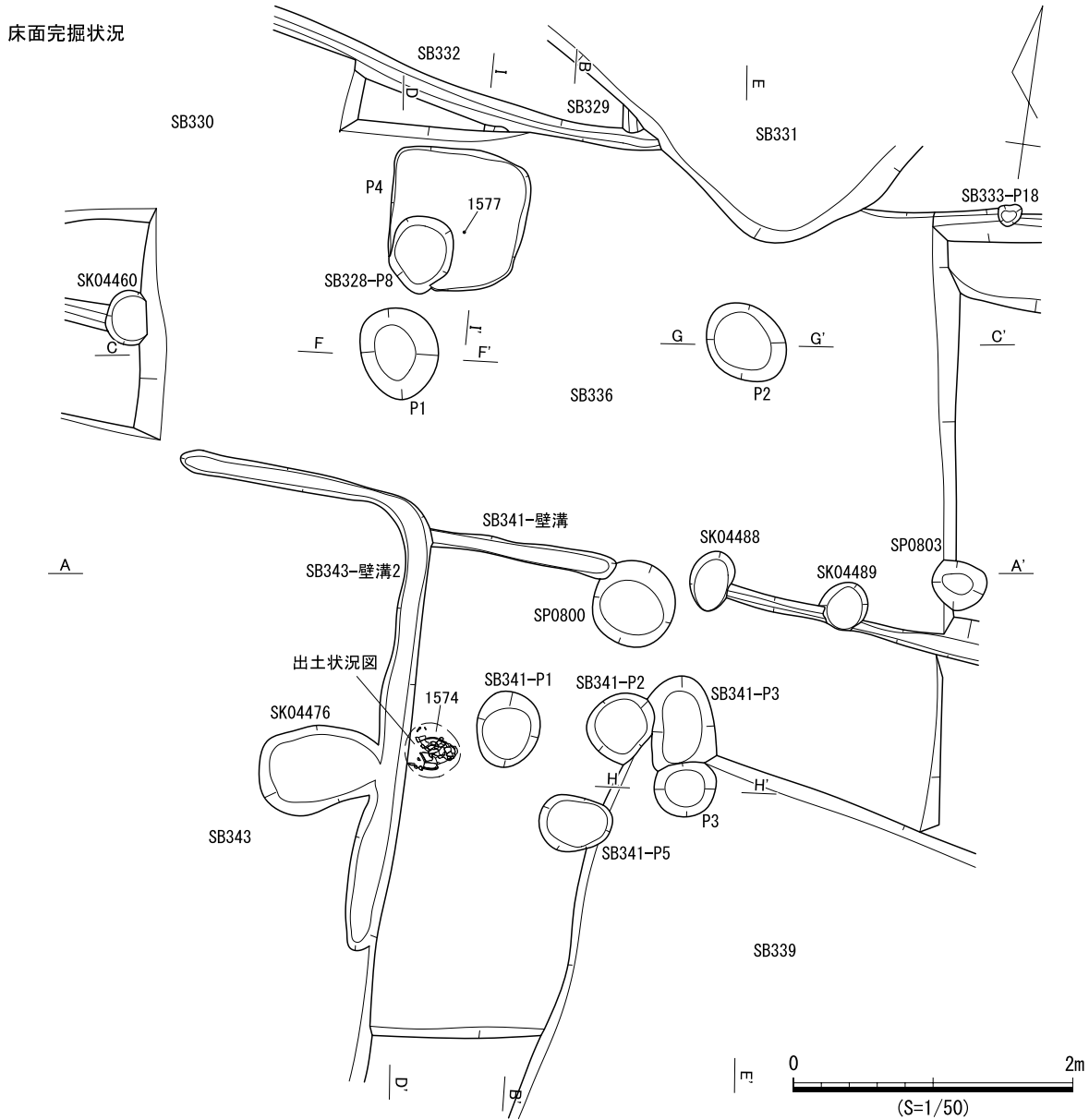


図 574 SB336 遺構図 (1)

呈し、各辺は直線的である。

埋土 床面までは3層に分層した。ほぼ水平に堆積し、すべての層に炭化物が混入する。ブロック土の存在や層界に凹凸がみられることから、人為堆積と考えられる。4層は貼床（整地土）である。

床面 平坦であり、硬化面や炉跡は認められなかった。床面上にて4基の小穴を確認し、P2では土

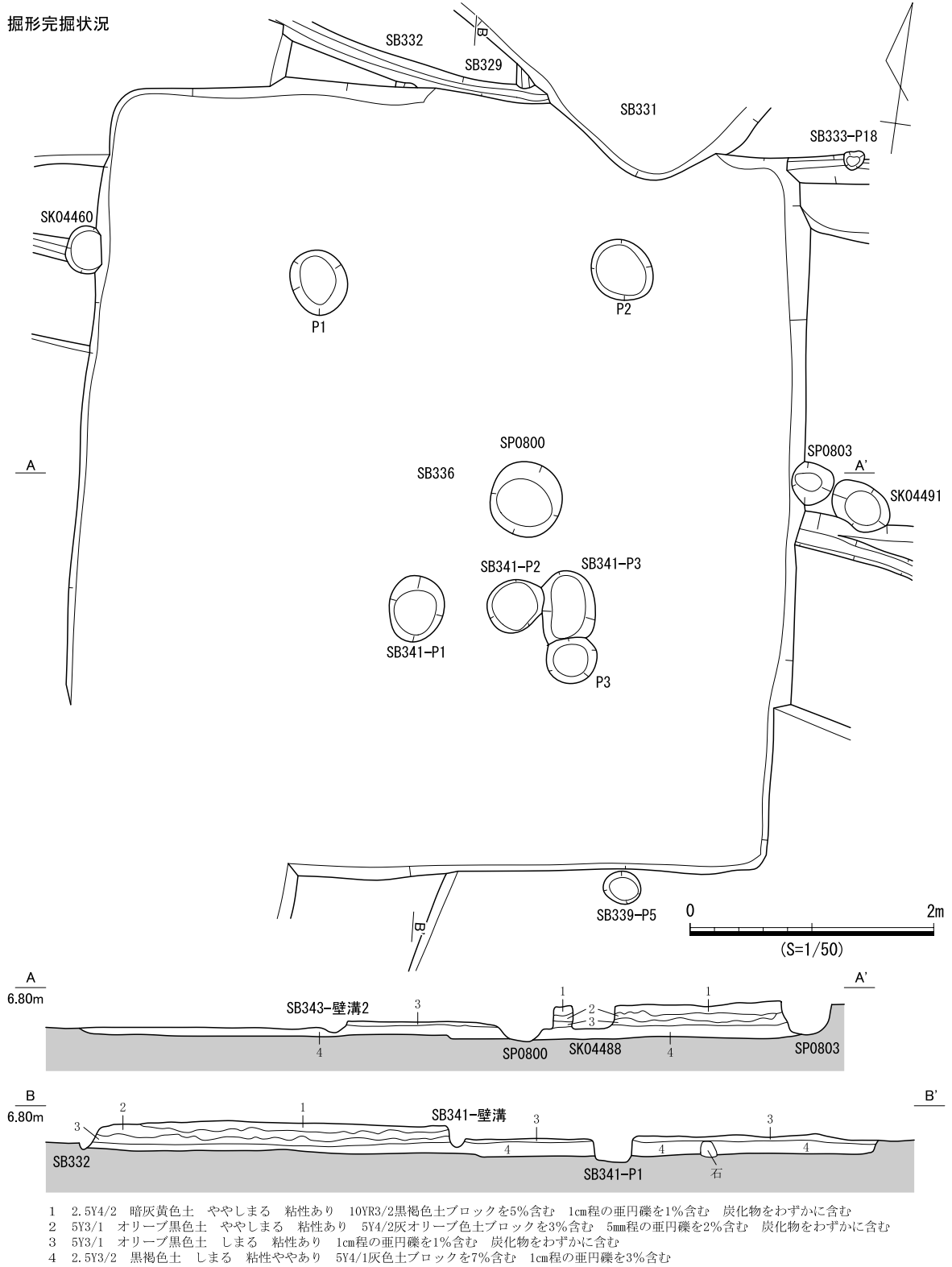


図 575 SB336 遺構図 (2)

層断面で柱痕跡を確認した。P4は南北長約1.0mの方形を呈し、深さは0.1mにも満たない浅い小穴である。なお、検出面にてベンガラが出土した。

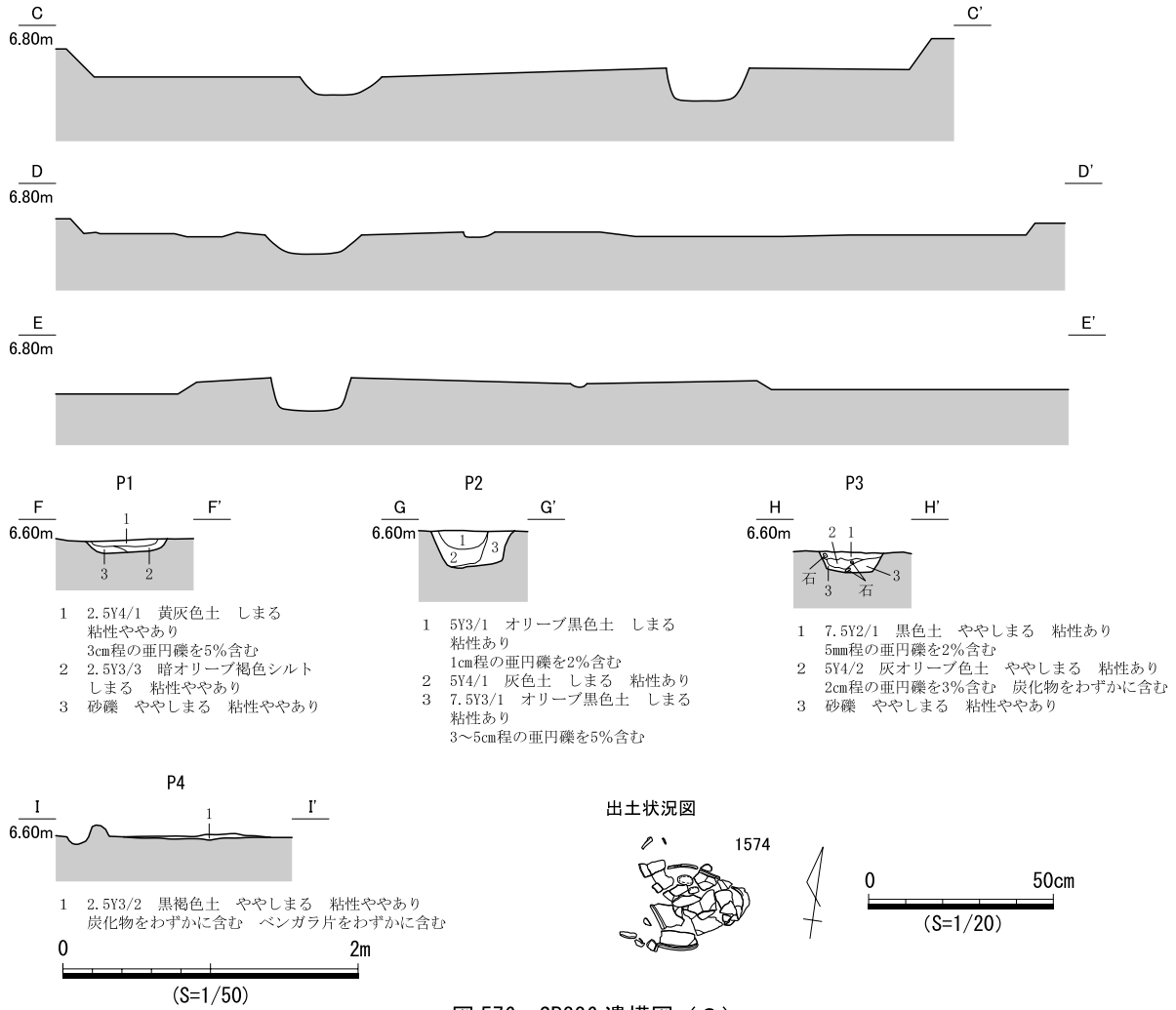


図 576 SB336 遺構図 (3)

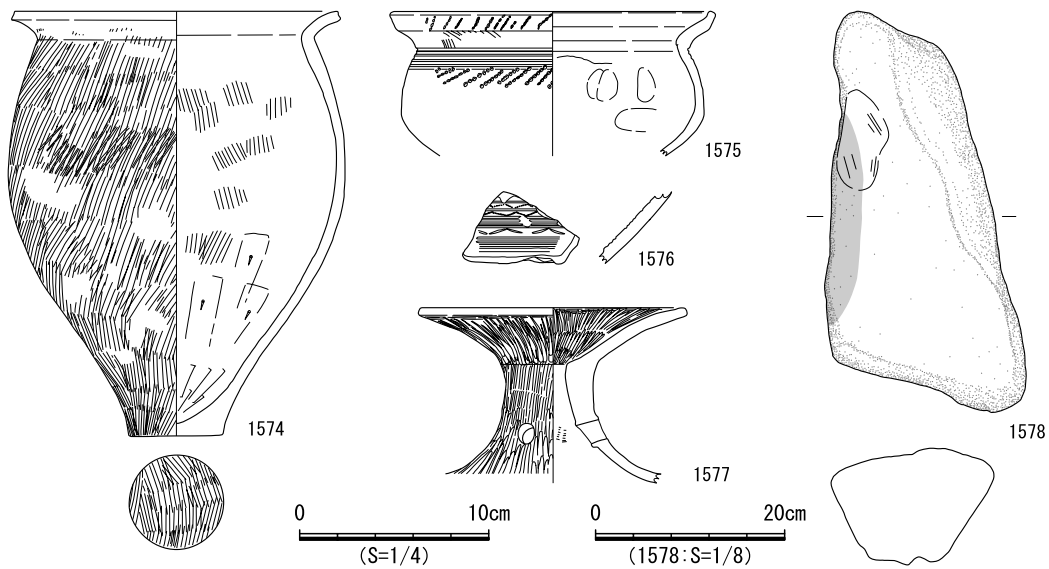


図 577 SB336 遺物実測図

遺物出土状況 埋土中から土器1,413点、石器類3点、小穴から土器28点が出土した。土器はIV期～VII期に属し、多くはVI期の土器片である。P4からはV期の器台(1577)が出土した。

出土遺物 1574はIV期甕A1類。口縁部が短くくの字に屈曲して、端部は強い平坦面を形成する。磨耗が著しいためか、胴部外面にハケ目が認められるが、タタキは認められない。底部外面にはハケ目が認められる。1575はVI期鉢A1類。口縁部が直立し、端部に刺突文、頸部直下に直線文、刺突文が認められる。1576はVII期高坏C4d類。内面には多条沈線、山形文、対向山形文で加飾する。対向山形文は1本の沈線の両側にあり、山形文のヘラとは異なり、クシによって施文される。1577はV期器台A1b類。口縁部が強く外反し、脚部が短く直立気味となる。1578は長さ42.5cmの砥石。砥面はわずかに確認できるのみで、左側面が炭化している。

時期 出土遺物の時期と、VI期～VII期のSB332より後出し、VII期SB335・SB330・SB343より先行することから、VII期と考えられる。

SB337 (遺構：図579・580、遺物：図578)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。周囲の竪穴住居跡と重複関係が著しく、SB329、SB331～SB336に切られ、SB338を切る。

形状 北西－南東長約5.1m、北東－南西長約4.7mで、平面形は隅丸長方形である。北西辺と南東辺が直線的なのに対して、北東辺と南西辺はわずかに外側に膨らむ。壁面は南西壁が最も遺存状況がよく、その高さは0.3m前後である。その傾斜は比較的急である。

埋土 7層に分層した。南東壁際には壁面崩落土が堆積する。全体的に水平に堆積しており、炭化物の混入が目立つ。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にては計7基の小穴を確認したが、いずれも明瞭な柱痕跡は確認できなかった。平面的な位置関係からP1、P6、P7が柱穴の可能性があり、北側の柱穴は本遺構を切るSB333床面検出遺構も含めて検討したが、確認できなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器459点、石器類1点、小穴から土器28点が出土した。土器はI期、IV期、VI期～VII期に属し、多くはVI期である。

出土遺物 1579、1580はI期壺口縁部。1579は口縁部が短く外反し、1本の沈線が認められる。1580は口頸部の境界に削り出しの段が認められる。1581はI期壺胴部。頸胴部の境界に削り出しの段があり、その下位に沈線が認められる。1582はIV期甕A2類。口縁部が短くくの字に屈曲して、

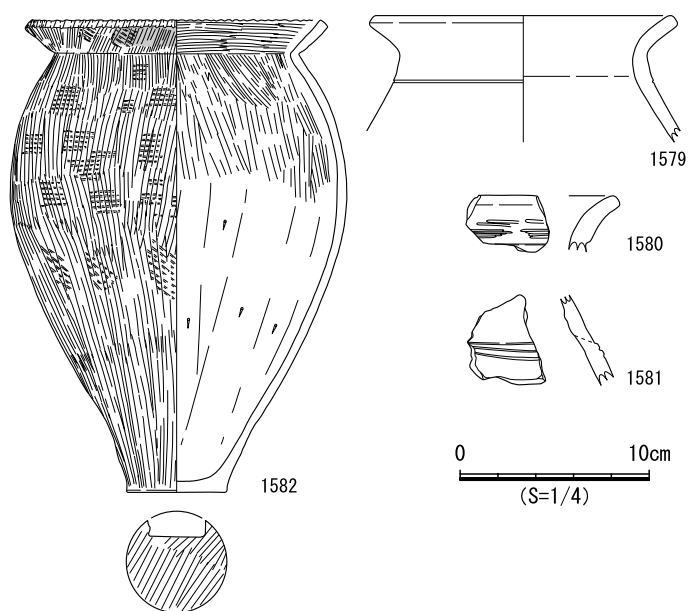


図 578 SB337 遺物実測図

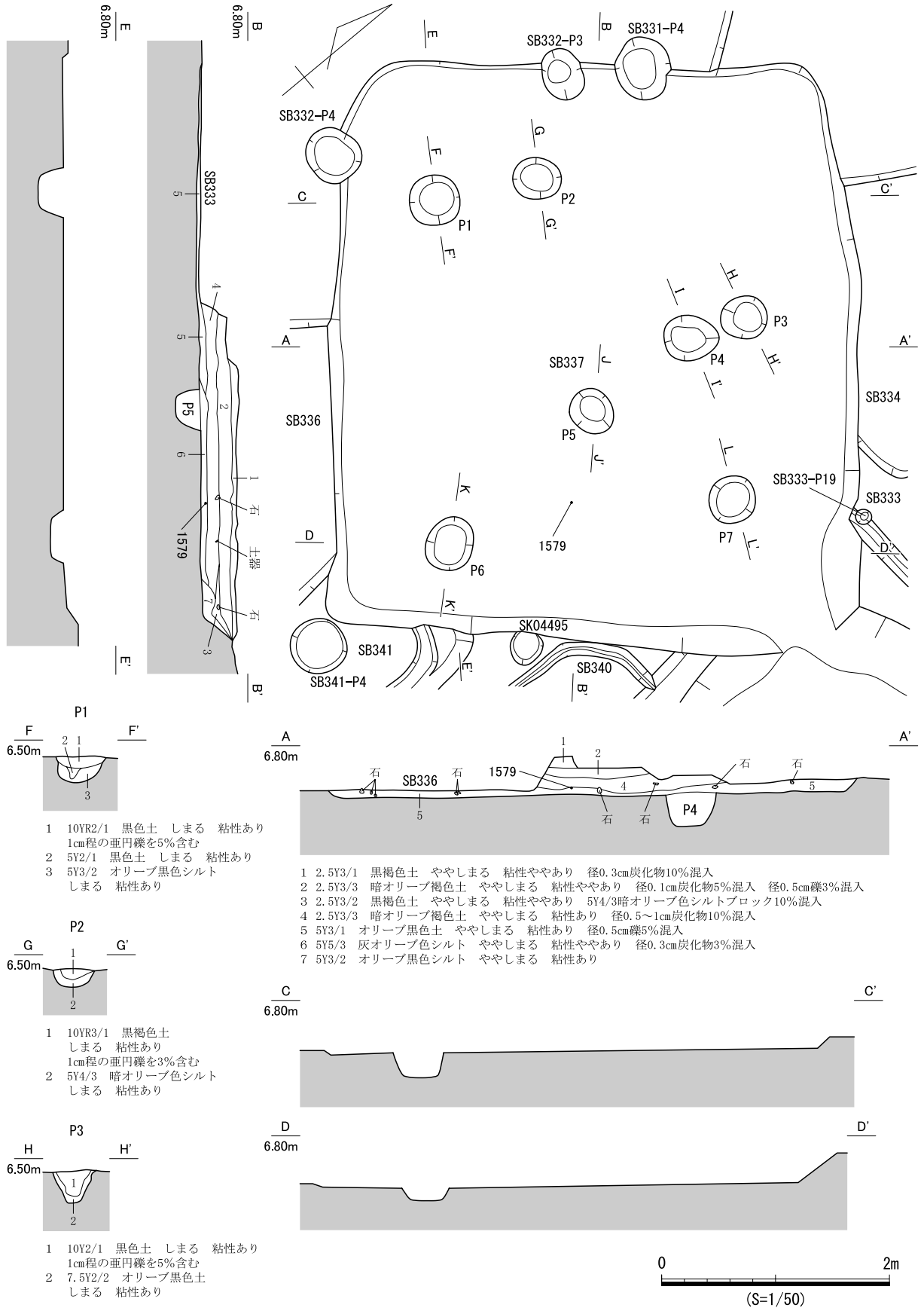
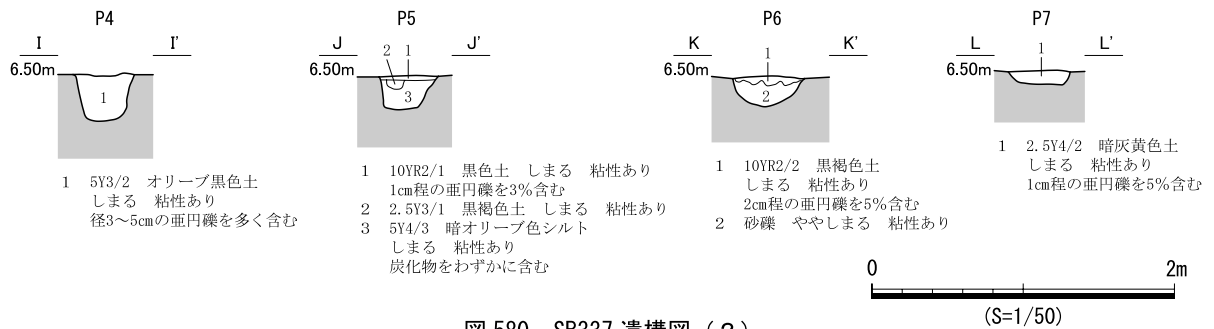


図 579 SB337 遺構図 (1)

端部にタタキが認められる。胴部は頸部からなだらかに膨らみ、タタキ調整がタテハケ以前に施される。

時期 出土遺物の時期と、VI期のSB338より後出し、VII期のSB331、SB335、SB336より先行することから、VI期～VII期と考えられる。



SB338 (遺構：図 581)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB337、SB339～SB341、SB344に切られ、重複する竪穴住居跡なかでは最も先行する。そのため、各辺とも失われている。

埋土 2層に分層した。ブロック土を含み、層界の凹凸が顕著であるため、人為堆積と考えられる。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にて1基の小穴を検出したが、埋土は単層であり、その性格は不明である。

遺物出土状況 埋土中から土器78点、小穴から土器8点が出土した。土器はVI期前後のものが多く、わずかにIV期のものが含まれている。しかし、いずれも小片であり図示しなかった。

時期 出土遺物の時期と、VII期のSB337より先行することから、VI期～VII期と考えられる。

SB339 (遺構：図 582～584、遺物：図 585)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。周囲の竪穴住居跡と重複関係が著しく、SB340に切られ、SB336、SB341、SB344、SB346、SB347を切る。

形状 南北長、東西長ともに5.1mで、平面形は隅丸方形である。西辺の長さが他辺よりやや長く、外側へ膨らむ。

埋土 3層に分層した。1・2層が住居埋土であり、4層が掘形埋土である。住居埋土にはブロック土が含まれることから、人為堆積と考えられる。

床面 平坦であり、貼床(整地土)がある。硬化面や炉跡は認められなかった。床面上にて9基の小穴(P1～P9)を確認した。このうちP2とP4では柱痕跡の可能性が考えられる堆積があり、P8は掘形がやや深い。平面的な位置関係からP1～P3、P8の4基が柱穴と考えられる。

掘形 埋土は単層で、底面はやや凹凸がある。底面にて5基の小穴(P10～P14)を確認した。このうち、P13は床面上で検出したP8に中央が切られており、P13の堆積は南側と北側が同じ堆積である。これは、住居の掘形底面にてP8の掘形であるP13を掘削し、柱を設置した後に住居全体の整地土を充填し、柱部分のみが表出したため、その部分がP8として検出できたと考えた。P14とP1、P12とP3も同様の関係である可能性が高い。

遺物出土状況 埋土中から土器5,413点、石器類1点、小穴から土器157点、壁溝から土器13点が出土した。土器はV期～IX期に属し、VII期とIX期のものが多い。VII期の土器は床面付近と掘形埋土（整地土）からの出土が多い。P1からIX期高坏脚部（1595）が出土した。また、床面直上からもIX期の土器が散在して出土した。

出土遺物 1583は口縁部が短く外傾するIX期の壺。外面には煤が付着し、1584と同一個体である。1584は胴部が球形にちかいIX期の壺。外面に煤が付着する。1585はIX期の有段口縁の壺。口縁部が屈折して、外反する。内面には羽状文が認められるが、上段の文様の幅が長く、上下で施文具が異なる。1586はVIII期～IX期壺底部。底部が突出して、胴部が大きく開いて、立ち上がる。外面には煤が付着する。1587はVII期高坏C4c類。口縁部が内湾しながら立ち上がり、内面に口縁部上半3分の2程度に多条沈線を施文する。内面にはわずかな段が認められる。1588はVII期高坏C4d類。内面に精緻な加飾が認められる。上半2分の1程度に多条沈線を施文し、その下に山形文、対向山形文と少条の多条沈線が認められる。対向山形文は1本の沈線を対峙するよう配置され、クシで施文する。その両側に4条の多条沈線と山形文が配され、山形文は離れた位置にあるが、対向するようヘラで施文する。1589、

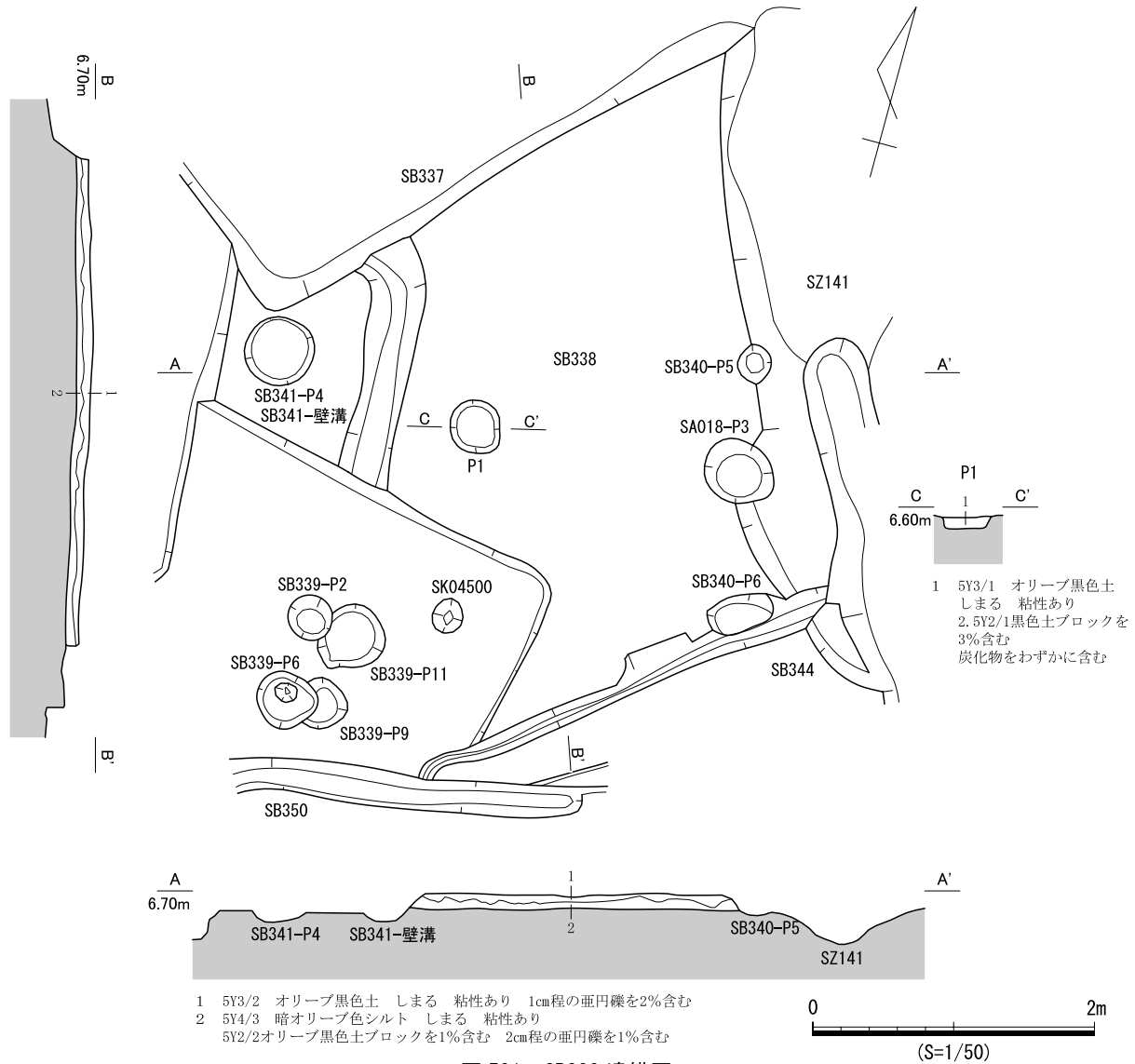


図 581 SB338 遺構図

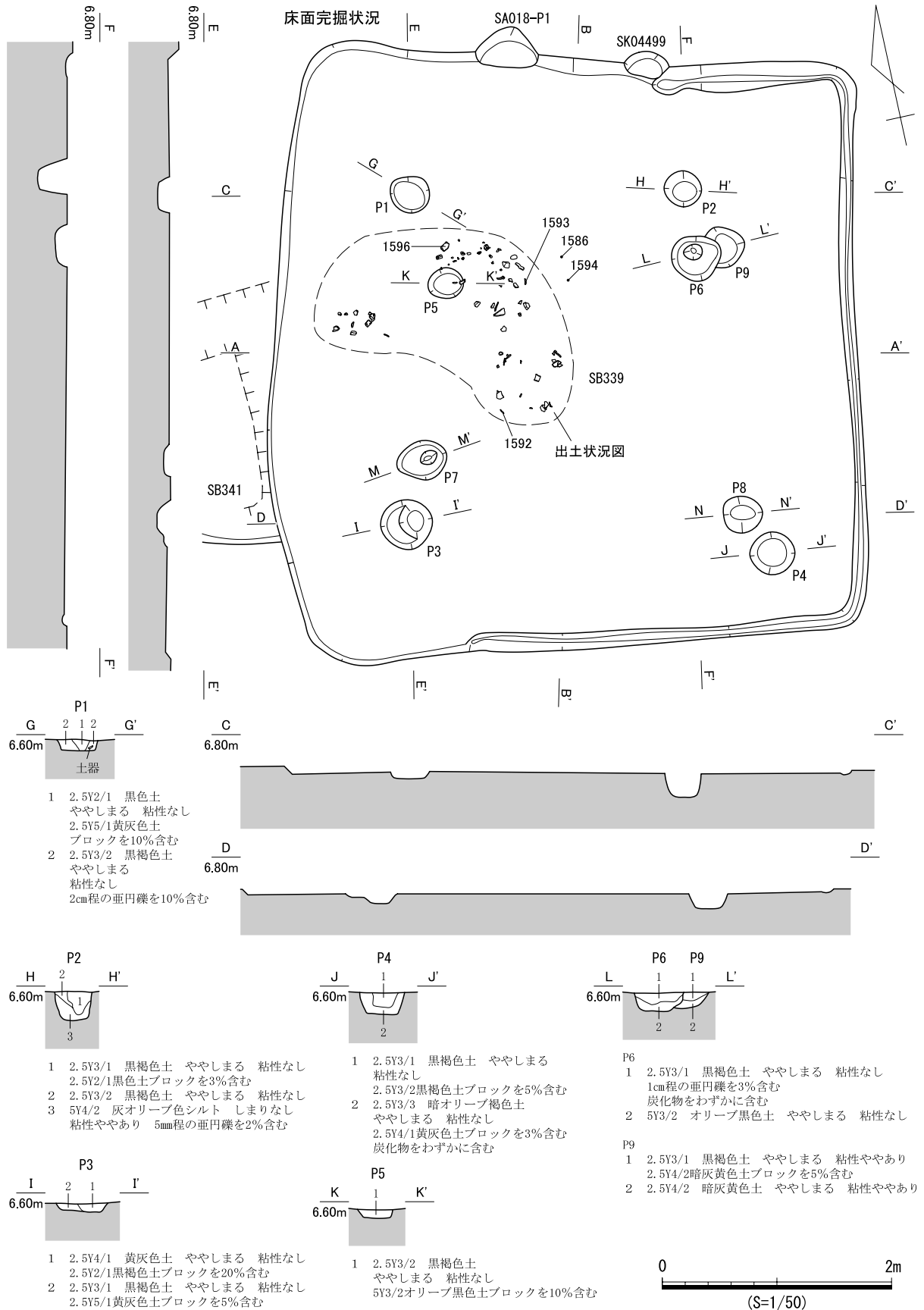


図 582 SB339 遺構図 (1)

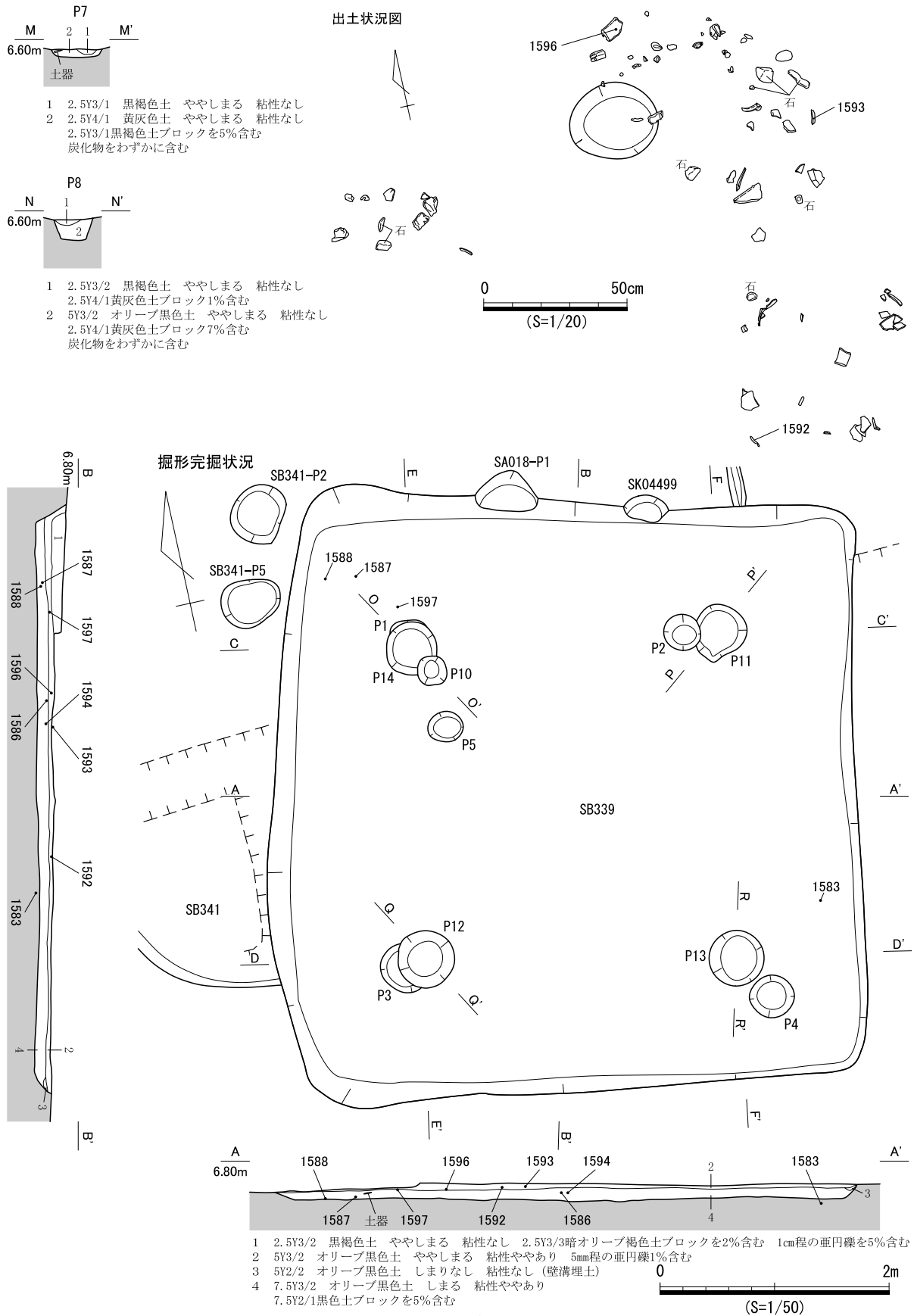


図 583 SB339 遺構図 (2)

1590はⅦ期高坏G3b類。口縁部が坏底部で強く屈曲して、内湾しながら立ち上がる。口縁部上半には多条沈線が認められる。内面には段が認められる。1591～1594はⅨ期高坏。口縁部が直線的に開く。外面に煤が付着する。1595はⅨ期高坏脚部。裾部が強く屈折して、外反する。1596はⅦ期高坏C類

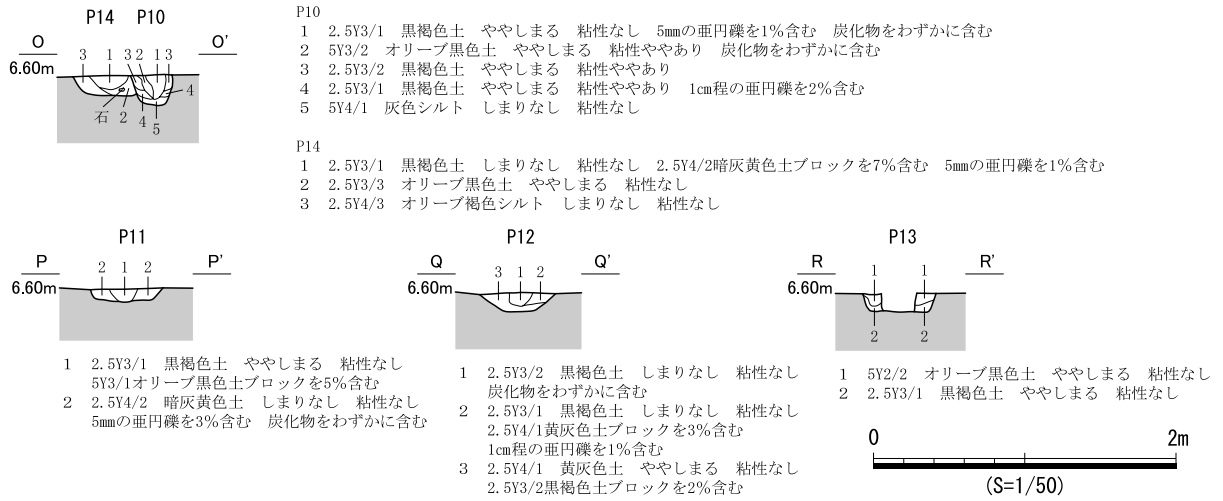


図 584 SB339 遺構図 (3)

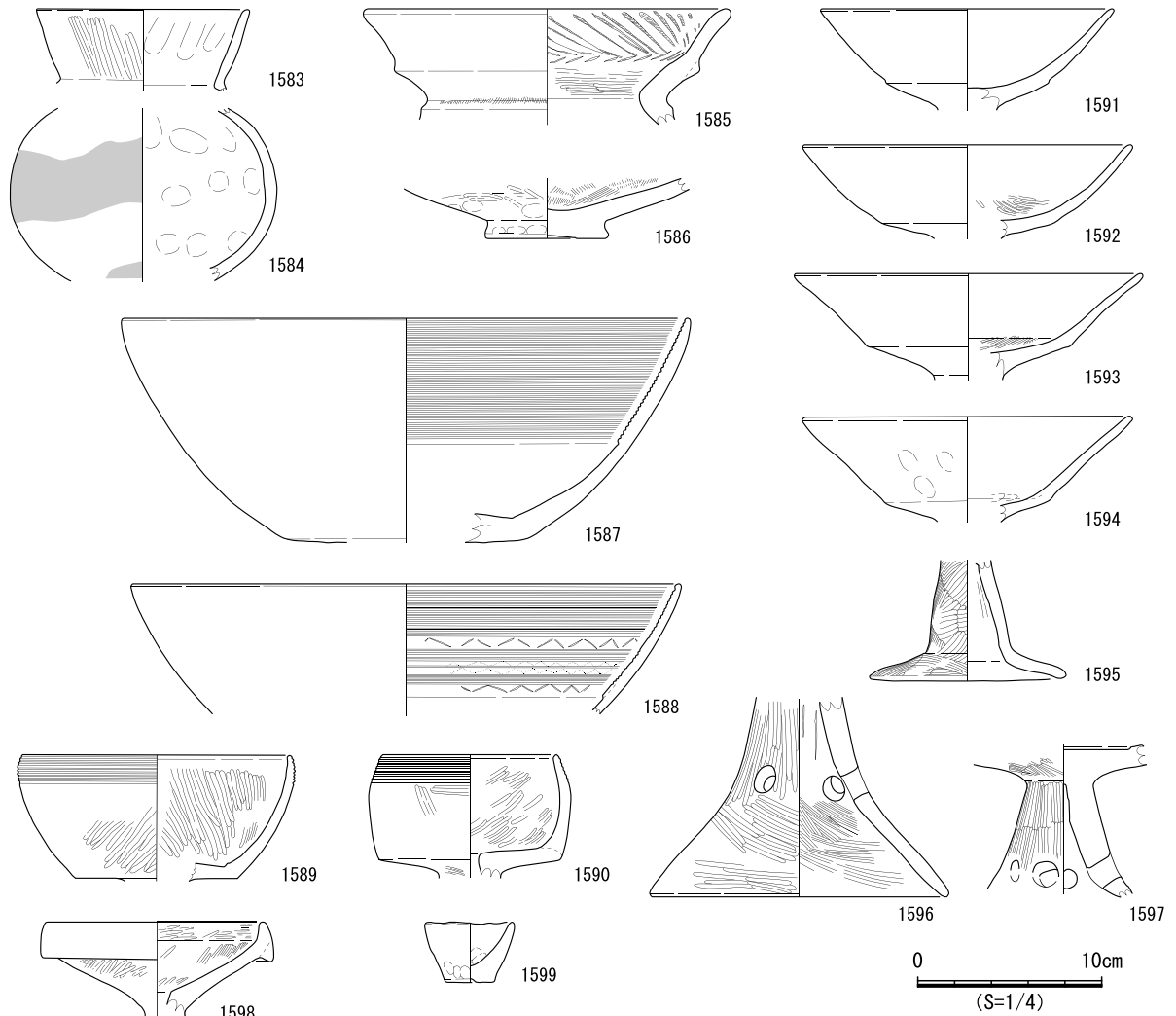


図 585 SB339 遺物実測図

脚部。脚部が付根から円錐形に広がり、裾部でやや内湾する。1597はⅦ期高坏C類脚部。脚部が付根から円錐形に広がり、透孔付近でわずかに内湾する。1598はⅦ期器台B4類。口縁部が強く内湾し、端部を上下に拡張する。外面には多条沈線、山形文らしき文様がわずかに確認できるが、磨耗のため観察が困難である。1599はⅥ期～Ⅶ期の手捏ねB類。

時期 出土遺物の時期からⅨ期と考えられる。

SB340 (遺構：図 587、遺物：図 586)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB338、SB339、SB344を切り、重複する竪穴住居跡のなかでは最も後出する。南側半分が攪乱によって失われ、壁面もほとんど認められない。検出時にはすでに床面がみえており、壁溝はブロック土を含む黒色土上面で確認できたので、掘形埋土があると判断した。

形状 南北長は不明で、東西長約5.0mである。確認できた各辺とも直線的で、北東隅部と北西隅部がやや丸いことから、隅丸方形を呈すると考えられる。

床面 平坦であり、貼床（整地土）がある。硬化面や炉跡は認められなかった。床面上にて6基の小穴を確認した。このうち明瞭な柱痕跡が認められるのはP2とP5であり、P3、P4、P6は底面が平坦である。P1は断面が皿状を呈するが、底面が一段深くなっている箇所がある。P1に明瞭な柱痕跡が認められないが、P2に柱痕跡が伴うことと平面的な位置関係からみて、P1とP2が柱穴の可能性が高い。なお、壁溝が西辺の一部、東辺の一部を除いた壁面際をめぐる。

掘形 埋土は単層であり、ブロック土を含む。掘形底面はほぼ平坦である。

遺物出土状況 埋土中から土器233点、小穴から土器182点、壁溝から土器8点が出土した。土器はⅥ期～Ⅶ期のものが多く、壁溝からはⅥ期末の甕A類が出土した（1602）。また、P6からはⅥ期甕D1類（1601）とⅦ期壺G類（1600）が出土した。

出土遺物 1600はⅦ期壺G2a類。口縁部が短く内湾する。1601はⅥ期甕D1b類。口縁部が短く屈曲し、端部に凹面を形成する。刺突文が認められるが、その屈曲部位の幅が狭く、形状は甕D2b類に類似する。1602はⅥ期甕A4類。口縁部がわずかに屈曲し、端部は平坦である。口縁部、胴部に大ぶりの刺突文が認められる。

時期 遺構出土遺物の時期はⅥ期～Ⅶ期であるが、重複関係ではⅨ期のSB339を切っていることから、出土遺物の年代と重複関係から推定できる時期とに矛盾がある。しかし、時期が推定できる遺物が出土した壁溝やP6はブロック土が含まれることから人為堆積と考えられ、P6の土層は最掘削後の堆積である可能性も考えられることから、出土遺物の時期よりも遺構の重複関係を重視し、本遺構の時期をⅨ期と考える。

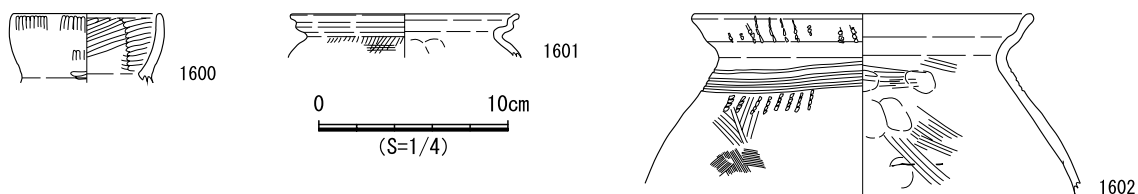


図 586 SB340 遺物実測図

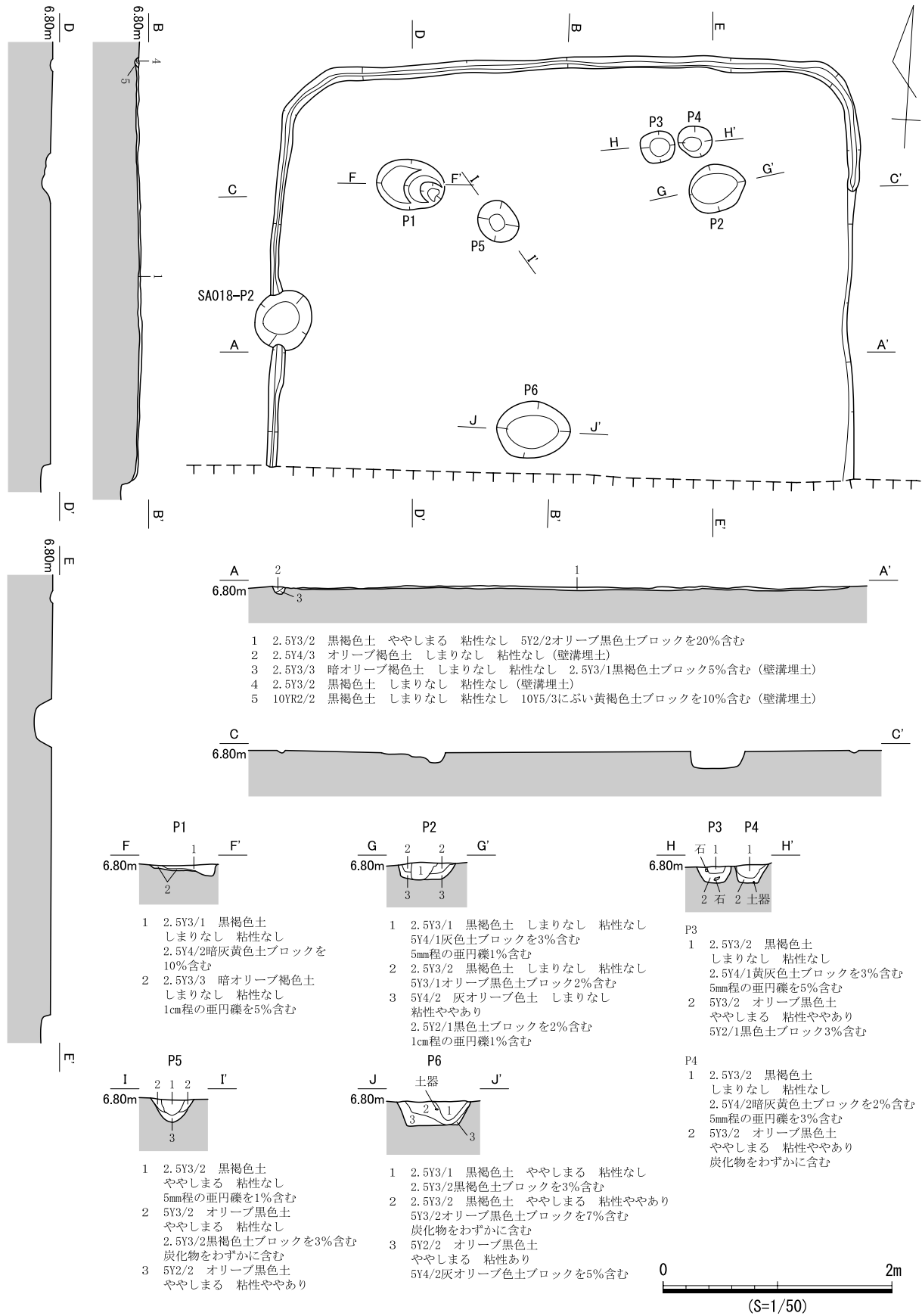


図 587 SB340 遺構図

SB341 (遺構：図 588・589、遺物：図 590)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SB332、SB337、SB338、SB343、SB346、SB350を切り、SB339に切られる。

形状 南北長約5.4m、東西長約5.7mであり、平面形は隅丸方形を呈する。各辺とも直線的だが、南西隅部は他の隅部よりも大きく湾曲する。壁面は約0.1mが残り、その傾斜は緩やかである。

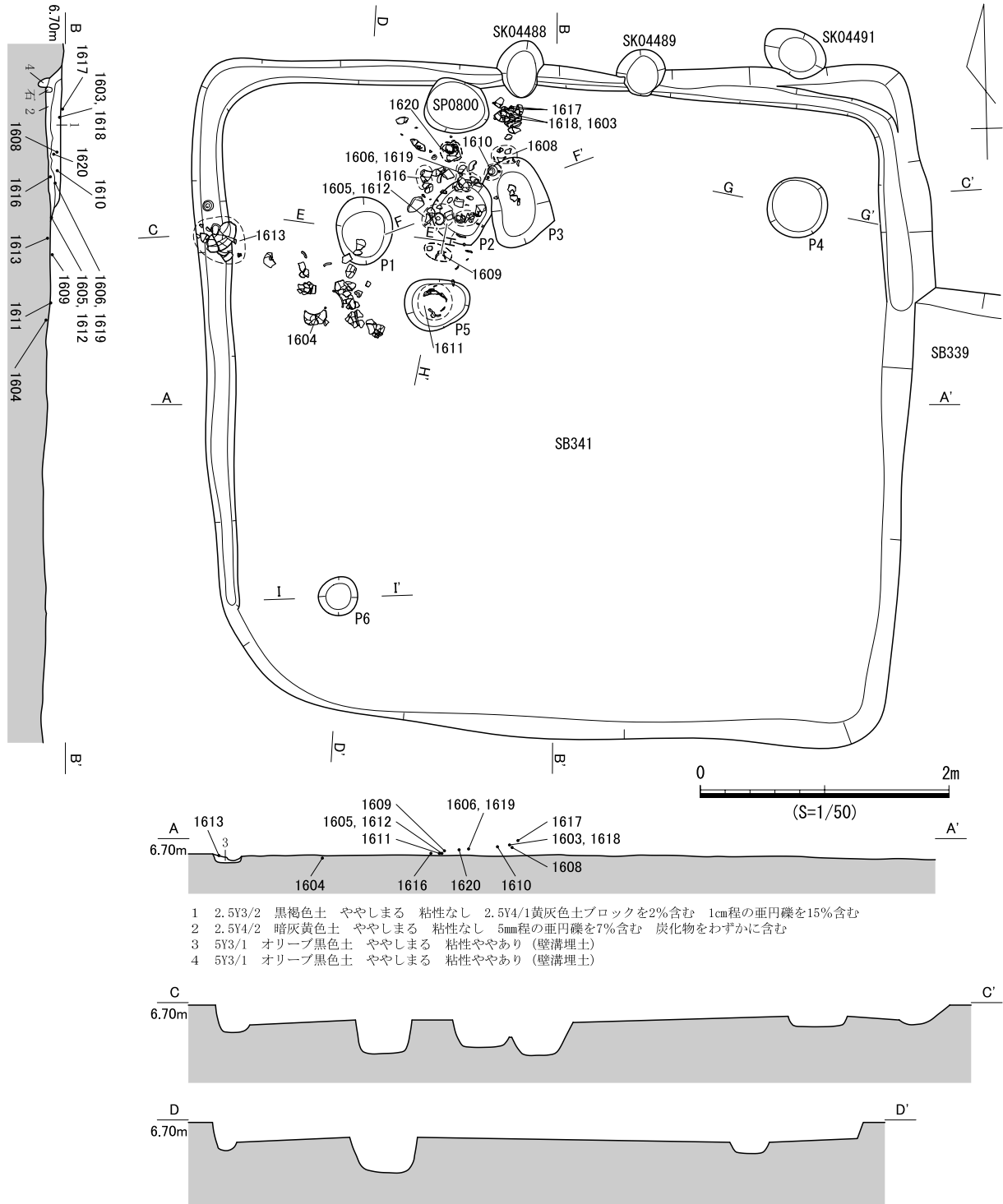
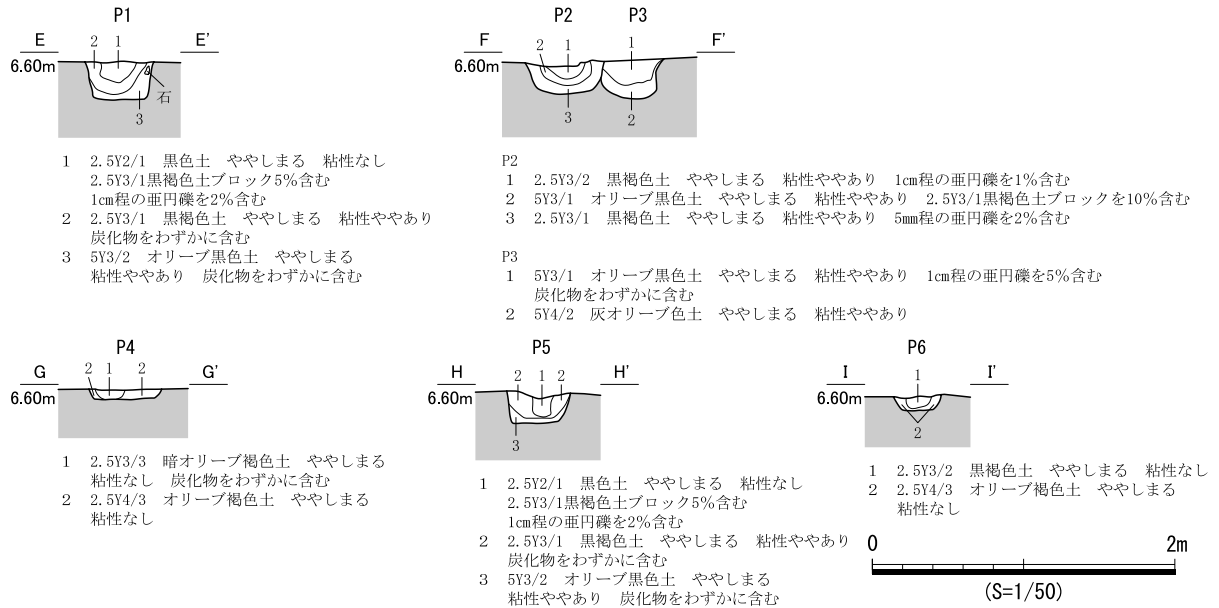


図 588 SB341 遺構図 (1)



出土状況図

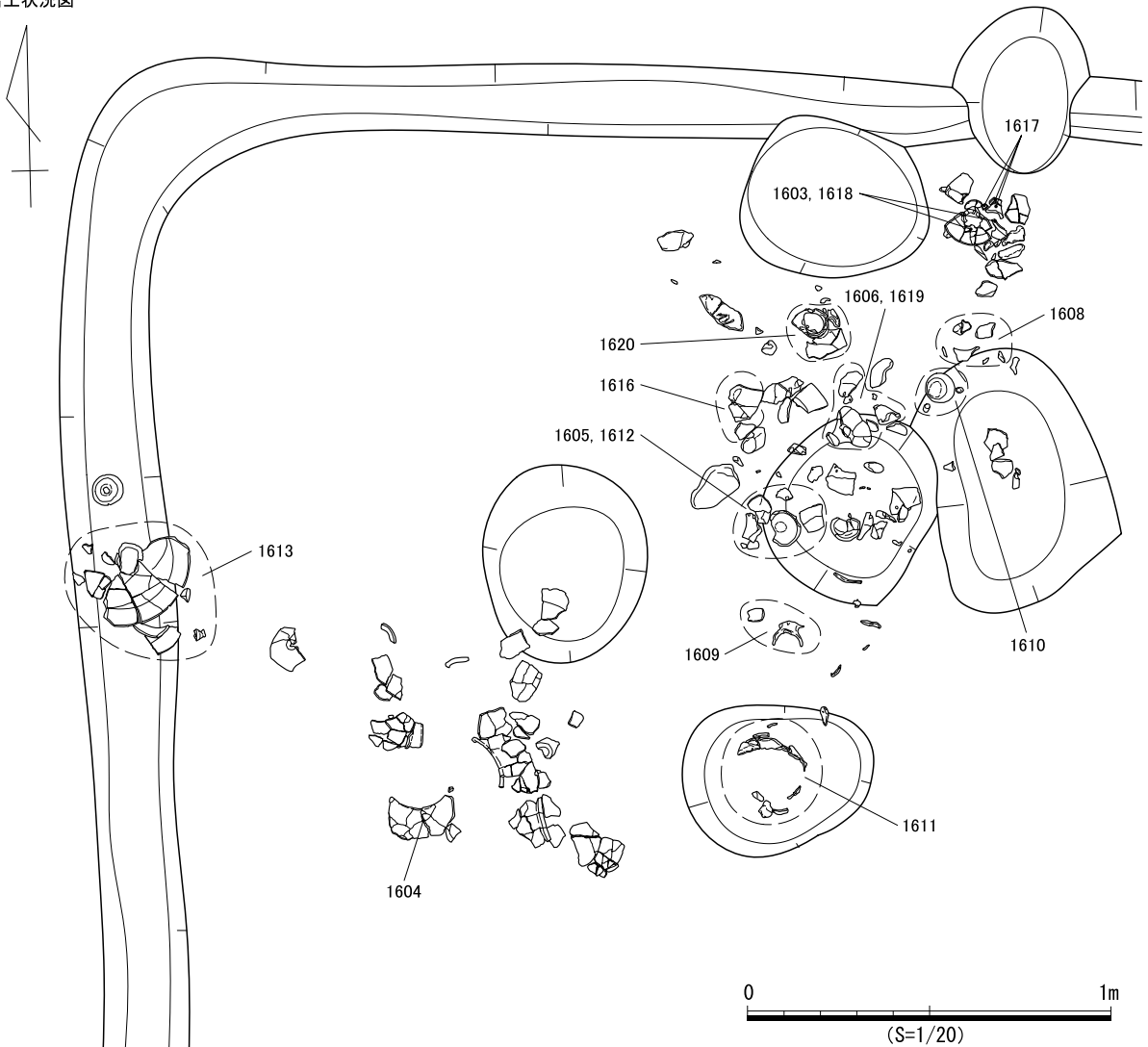


図 589 SB341 遺構図 (2)

埋土 埋土の残存はわずかであったが、2層に分層した。ブロック土を含み、層界の凹凸がみられることから、人為堆積の可能性が高い。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にては6基の小穴を確認した。その埋土は2層～3層に分層でき、底面が平坦なものが多い。平面的な位置関係から、P1、P4、P6が柱穴と考えられる。なお、東辺の北側から北辺、さらに西辺の壁面に沿って壁溝を検出した。

遺物出土状況 埋土中から土器1,810点、石器類1点、小穴から土器109点、壁溝から土器5点が出土した。遺物の多くはVI期～VII期であり、多くはVII期である。P3の北側から西側にかけての範囲にて、VII期の土器片がまとまって出土した(1603、1605、1606、1608～1610、1612、1616～1620)。また、P5西側からVI期甕(1604)、P5上面からVI期鉢(1611)、P5埋土からVII期高坏(1614)が、それぞれ出土した。

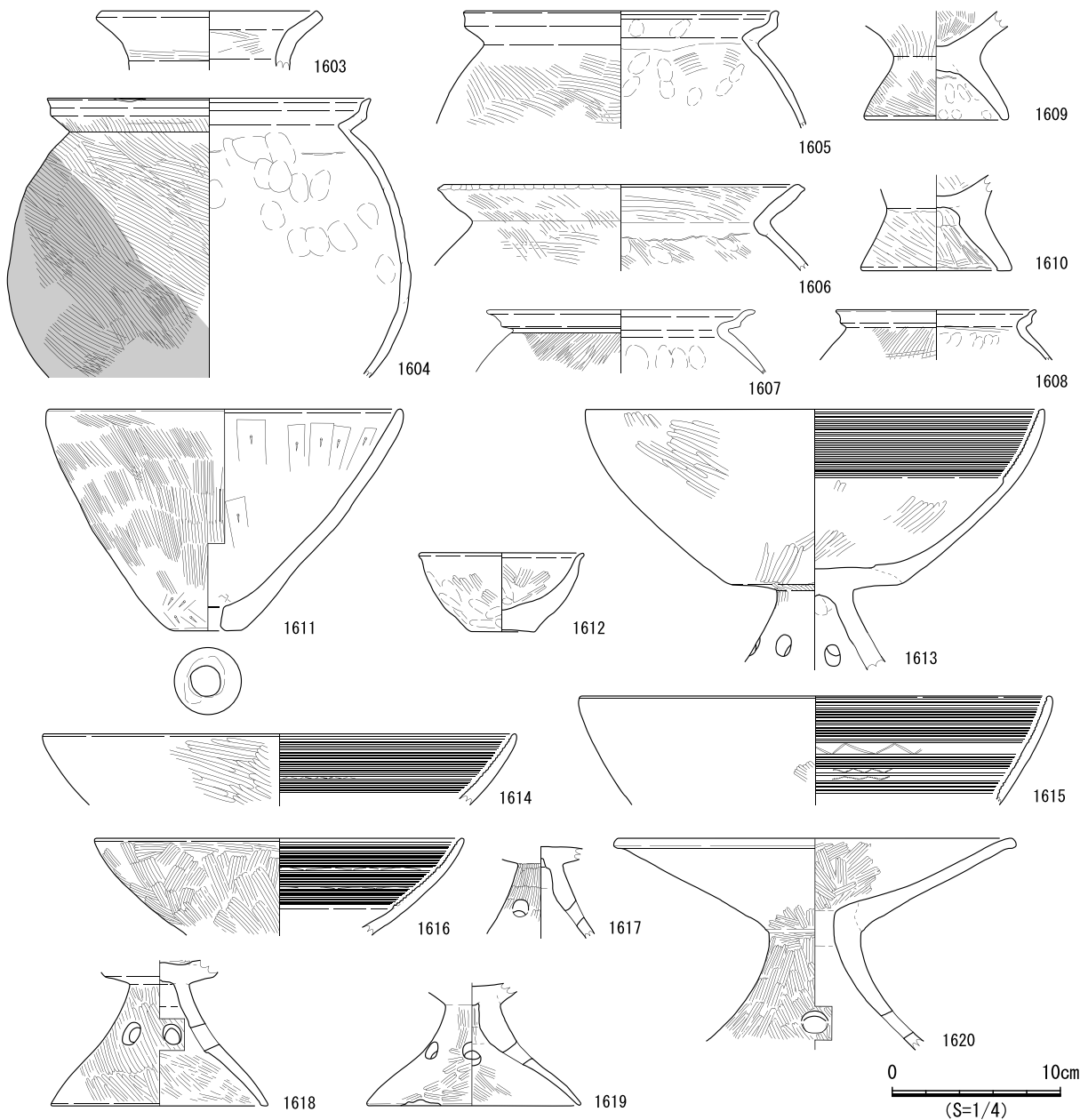


図 590 SB341 遺物実測図

出土遺物 1603は口縁部が短く外反するVI期～VII期壺B2b類。1604、1605はVI期甕A3類。口縁部が短く屈曲して、胴部が強く膨らみ、端部には内傾する面が形成される。1604は打ち欠きが認められる。1606はVII期甕B3類。口縁部が頸部で屈折して立ち上がり、端部には断続的な強いナデが認められる。1607、1608はVII期甕D2b類。口縁部上段が屈曲する。1608は端部がわずかに拡張されて、凹面を形成する。1609、1610はVII期甕脚部。1609はわずかに内湾し、1610は脚部が短くハの字に開く。1611はVI期鉢B2類。小さな底部から口縁部がわずかに内湾しながら立ち上がり、粗いハケ目が認められる。1612は口縁部が直線的に開くVI期～VII期の鉢E類。1613はVI期高坏C3b類。口縁部が内湾して立ち上がり、上半1/3程度を肥厚させて、多条沈線を施文する。1614～1616はVII期高坏C4d類。1614の内面には幅広の多条沈線と振幅の小さい山形文が認められる。1615の内面には多条沈線と山形文、対向山形文で施文する。下段の対向山形文は1本の沈線の両側に配置され、ヘラによる山形文とは異なりクシによって施文される。1616は内面に幅広の多条沈線と山形文で施文する。外面に煤が付着する。1617～1619はVII期高坏D類脚部。1618、1619は付根から短く円錐形に広がり、裾部でわずかに内湾する。1619の脚裾部には打ち欠きが認められる。1620はVII期器台B3類。口縁部が大きく直線的に開き、脚部が付根から広がる。

時期 出土遺物の時期から、VII期と考えられる。

SB342（遺構：図591・592、遺物：図593）

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SB333、SB335、SB367に切られる。重複する竪穴住居跡によって、北東隅部及び南辺の一部が失われている。

形状 南北長約5.2m、東西長約5.9mで、平面形は隅丸長方形と考えられる。壁面の残存は約0.3mで他の竪穴住居跡と比べると良好である。壁面の傾斜は急である。

埋土 6層に分層した。基本的に水平堆積であり、壁際の層界が緩やかに上昇する堆積である。2層中に粘土を含み、1・6層中にブロック土が混入する。A-A'の土層では1～3層が4層を切るように堆積していることから、再掘削が行われた可能性がある。なお、層界の凹凸もみられることから、人為堆積と考えられる。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にて小穴5基を検出し、P3とP4では柱痕跡が認められた。平面的な位置関係からP3、P4に加えてP1が柱穴と考えられるものの、北東部に該当する柱穴は認められなかった。P5は長軸1.5mを超える大きな楕円形の土坑であり、北壁からやや離れて壁溝が認められる。

遺物出土状況 埋土中から土器5,527点、石器類2点、小穴から土器38点が出土した。土器はIV期～VIII期までに属し、なかでもVII期の土器片が多い。被熱した土器や甕D類脚部が打ち欠かれたものがあり、P3からVII期壺(1623)が出土した。

出土遺物 1621はVII期壺G3a類。口縁部が短く内湾し、端部が内傾する。1622はVII期壺G3a類。口縁部が短く内湾し、外面には多条沈線が認められる。1623はVII期壺I2類。口縁部が短く内湾する。1624、1625はVII期～VIII期の壺。二重口縁壺の一部で、内外面に円形刺突文が認められる。1626、1627はVII期～VIII期壺A類胴部。胴部は球形にちかく、1626は突帯上に羽状文を施文する。1628は口縁部が直立するIV期甕A3類。1629、1630はVII期甕D2b類。口縁部上端が短く屈曲する。1631はIV期甕D類。口縁

部が短く屈曲し、端部は強く外傾する平坦面を形成する。1632はⅦ期～Ⅷ期甕B類。1633と1634はⅦ期～Ⅷ期甕D類脚部で、1633は打ち欠きが認められる。1634は破断面に被熱が認められる。1635はⅦ期～Ⅷ期鉢F類。底径が大きく、器高の低い例外的な資料。内外面とも丁寧なミガキがあり、口縁

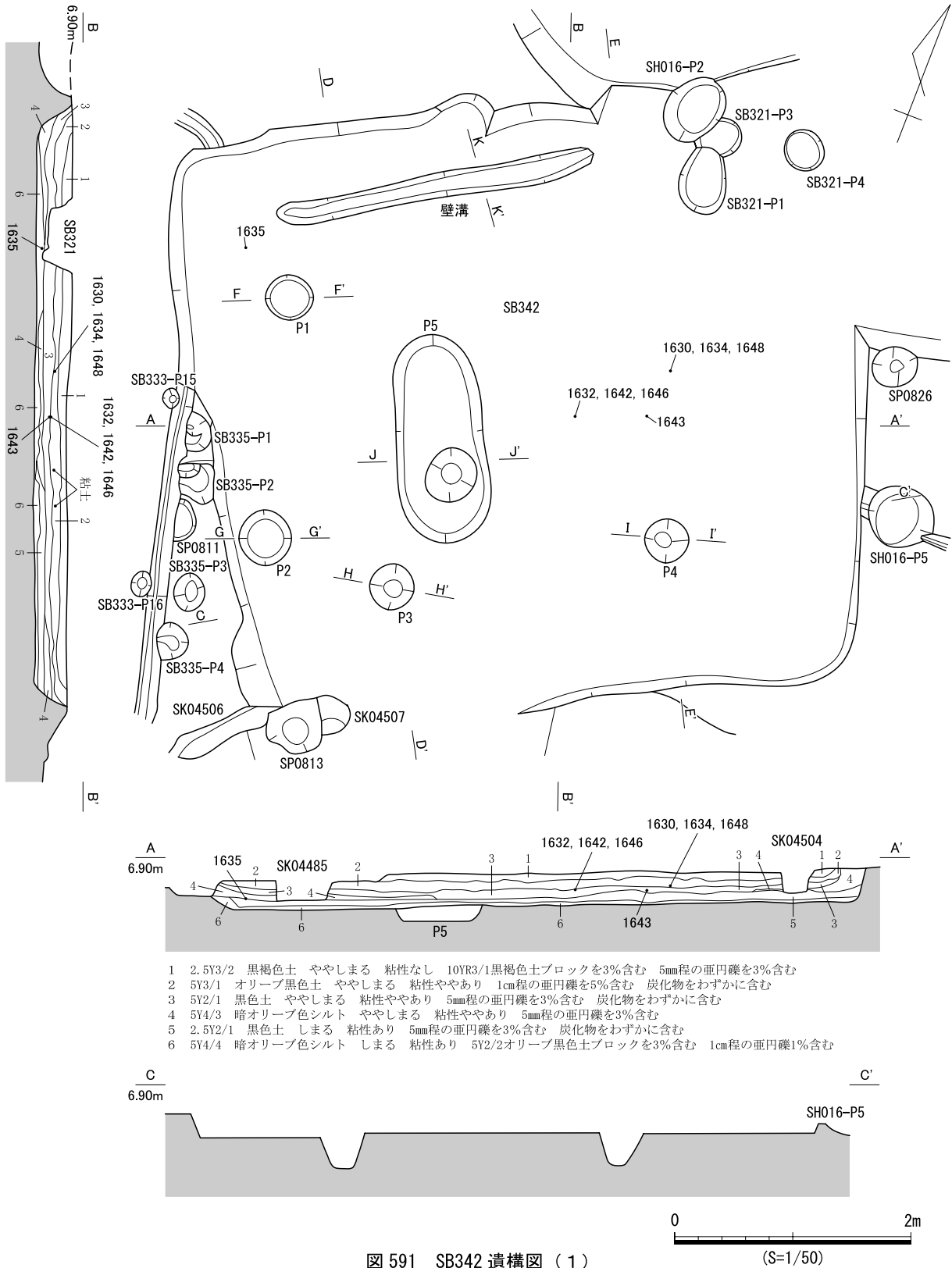


図 591 SB342 遺構図 (1)

(S=1/50)

端部には打ち欠きが認められる。外面には煤が顕著に付着する。1636はⅦ期高坏C4c類。口縁部内面に幅広の多条沈線が施文される。1637～1639はⅦ期高坏C4d類。内面に多条沈線と山形文で施文する。1637の山形文の振幅は小さく、多条沈線はやや幅広である。1640はⅦ期高坏H2類。外面に細かい沈線の多条沈線が認められる。1641はⅦ期高坏D5類。内傾する口縁端部に多条沈線を施文し、さらに下位には多条沈線間に3帯の連弧文を施文する。1642はⅦ期高坏D4類。口縁端部が内傾し、多条沈線が認められる。その下には多条沈線と山形文によって施文する。1643はⅨ期高坏。1644、1645はⅦ期高坏G3c類脚部。1644は多条沈線の間に対向山形文を施文する。1645は多条沈線の直上に連弧文を施文する。1646はⅦ期高坏D類脚部。付根から脚部が円錐形に広がり、内外面、接合する破断面に煤が付着する。1647はⅦ期高坏E類脚部。細身の付根から脚部が円錐形に広がる。外面には煤が付着する。1648はⅦ期高坏G類脚部。脚裾部が屈折して、内湾しながら外反する。坏底部にはわずかな段が認められる。坏底部、脚部内面には煤が付着する。坏底部はやや円環状に付着し、その延長にある破断面にも煤が付着する。1649はⅦ期器台C2類。受部は内湾し、脚部は付根から円錐形に広がり、脚部でわずかに内湾する。1650はⅦ期手捏ねC類。口縁端部の凹凸が著しく、内外面に煤が付着する。

時期 出土遺物の時期は、Ⅶ期及びⅦ期～Ⅷ期のいずれかに該当する。一方、本遺構を切るSB335がⅦ期であることから、本遺構の時期はⅦ期と考える。

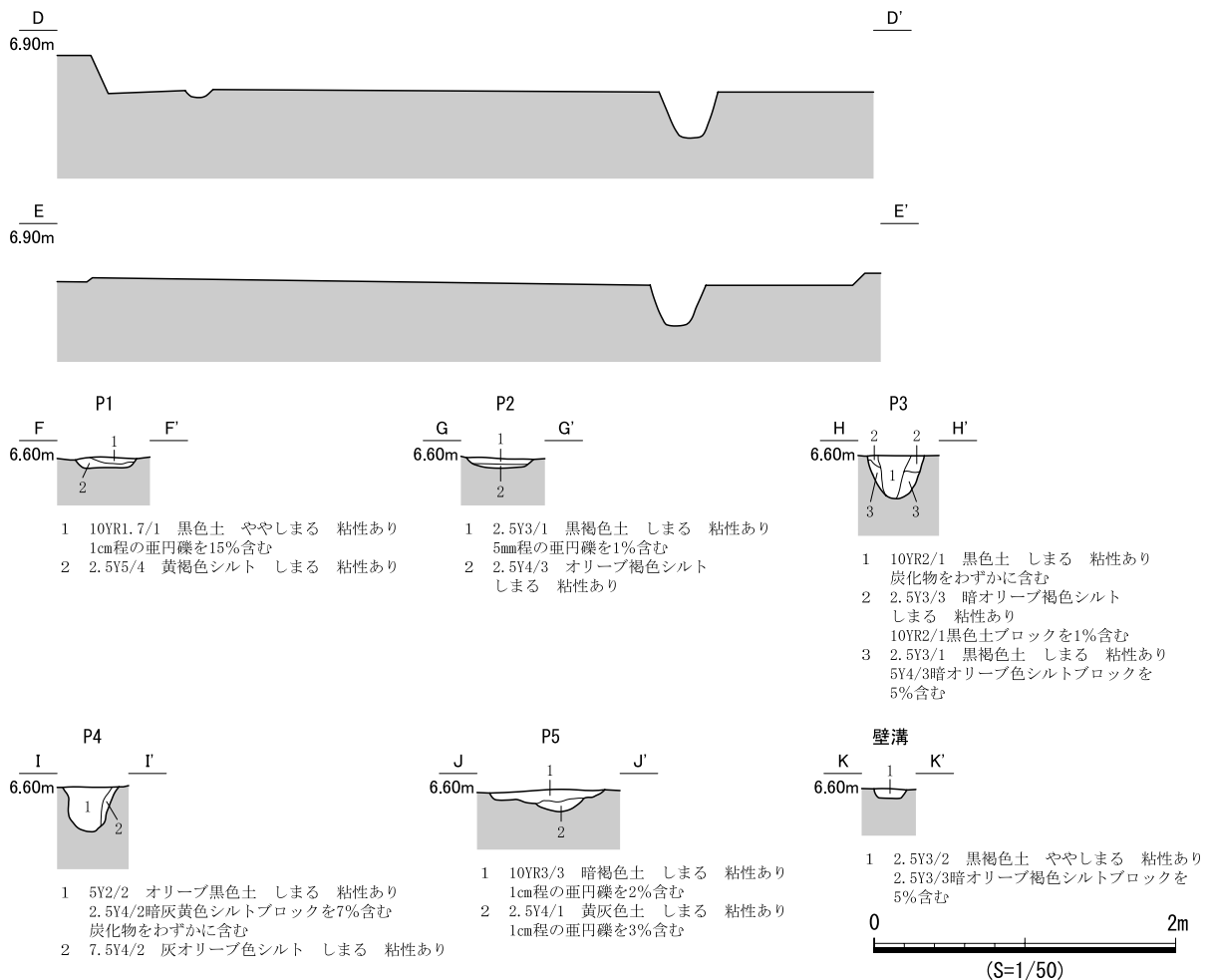


図 592 SB342 遺構図 (2)

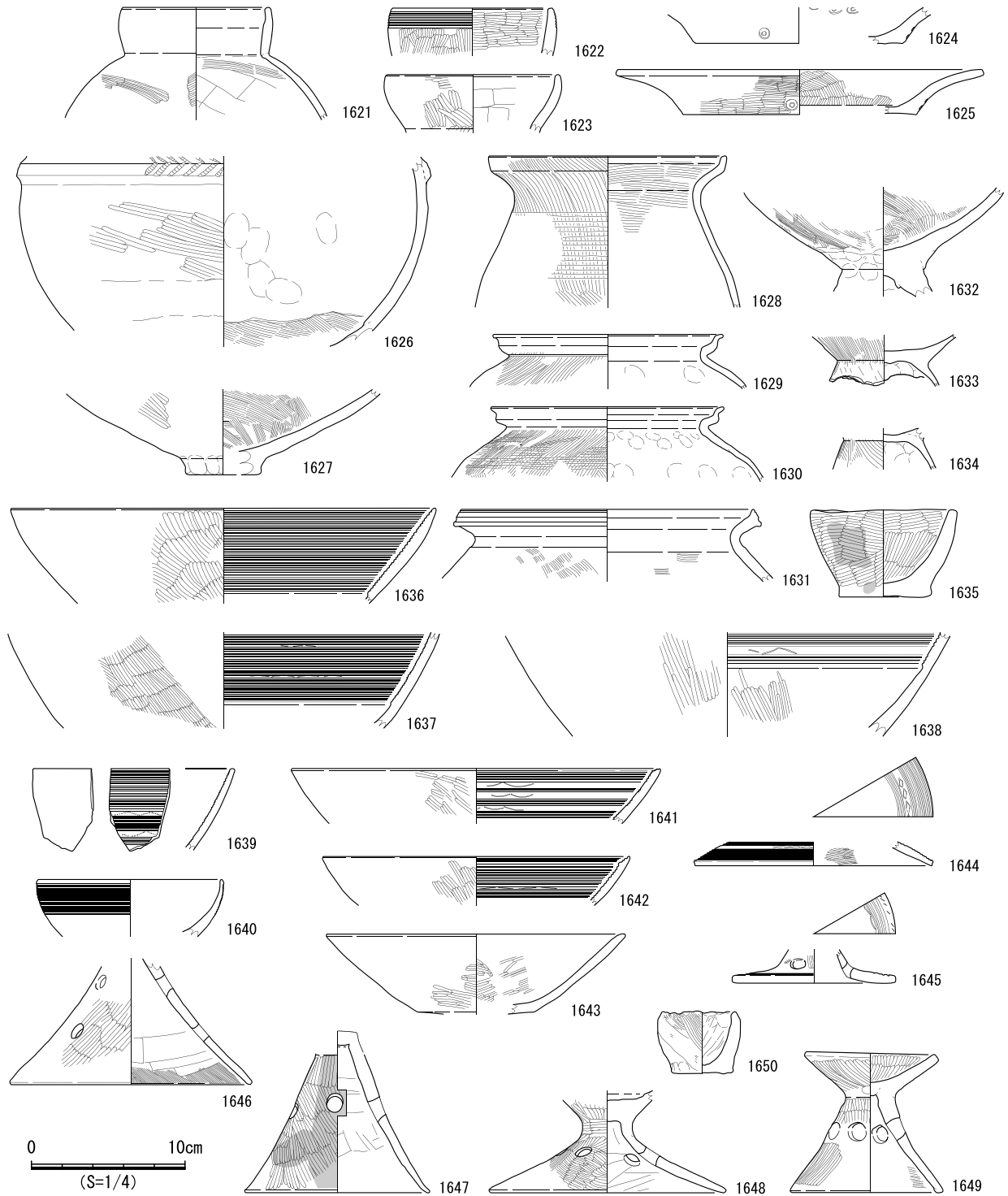


図 593 SB342 遺物実測図

SB343 (遺構：図 594・595、遺物：図 596)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SB332、SB336、SB341 を切る。

形状 南北長、東西長ともに約 5.1 m で、平面形は隅丸方形である。各辺は直線的にて、深さ約 0.15 m の壁面が残る。

埋土 2 層に分層した。ほぼ水平堆積であるが、層界に凹凸があることから人為堆積と考えられる。

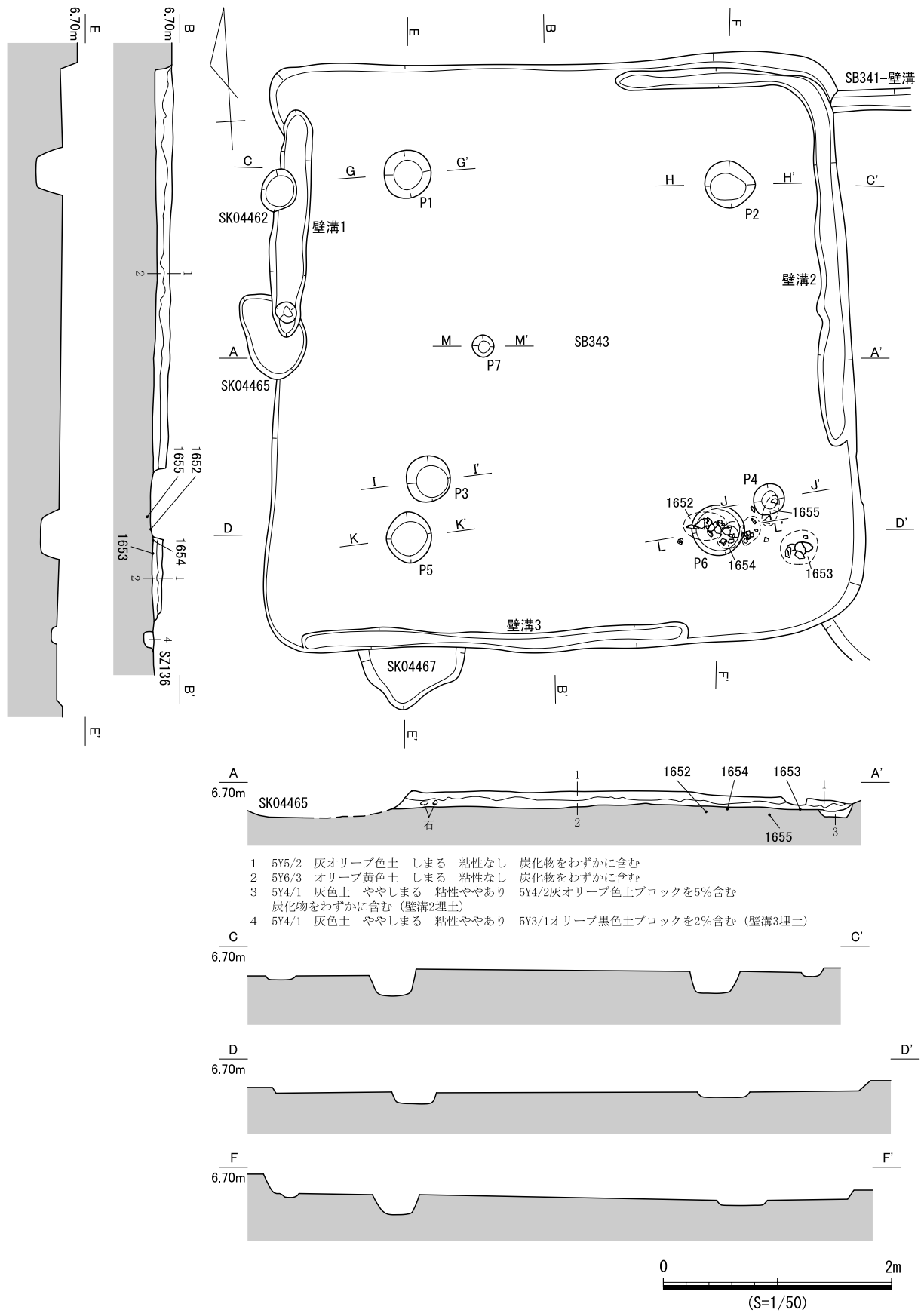


図 594 SB343 遺構図 (1)

なお、上層ではベンガラをわずかに確認した。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にては7基の小穴を確認した。

P1～P3は明瞭な柱痕跡が認められ、平面的な位置関係からみてP1～P4が柱穴と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器830点、石器類1点、小穴から土器13点、壁溝から土器49点が出土した。土器はV期～VII期に属し、多くはVI期～VII期である。P4、P6付近からVI期末の甕(1652、1653)、器台(1654、1655)が出土した。

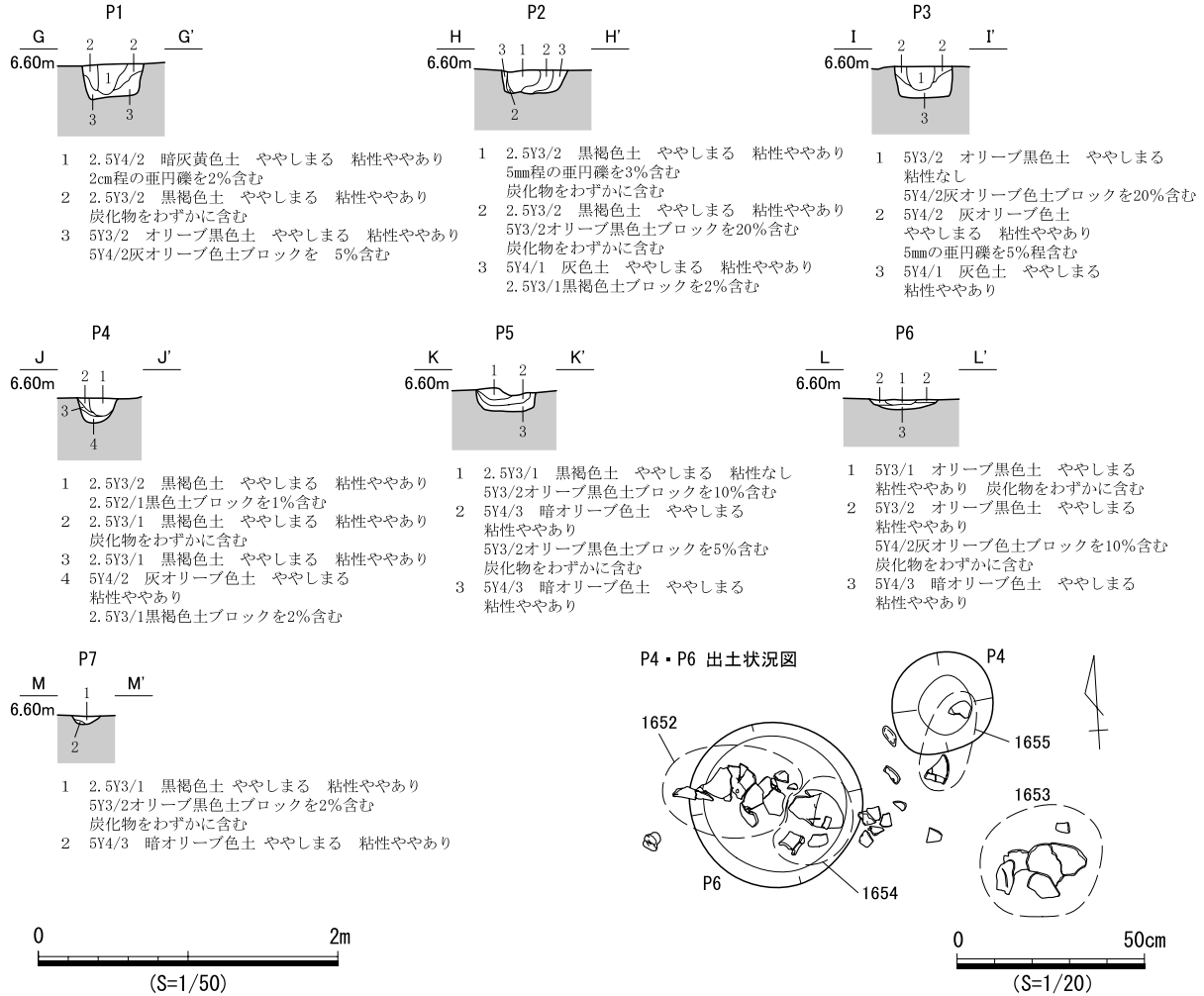


図 595 SB343 遺構図 (2)

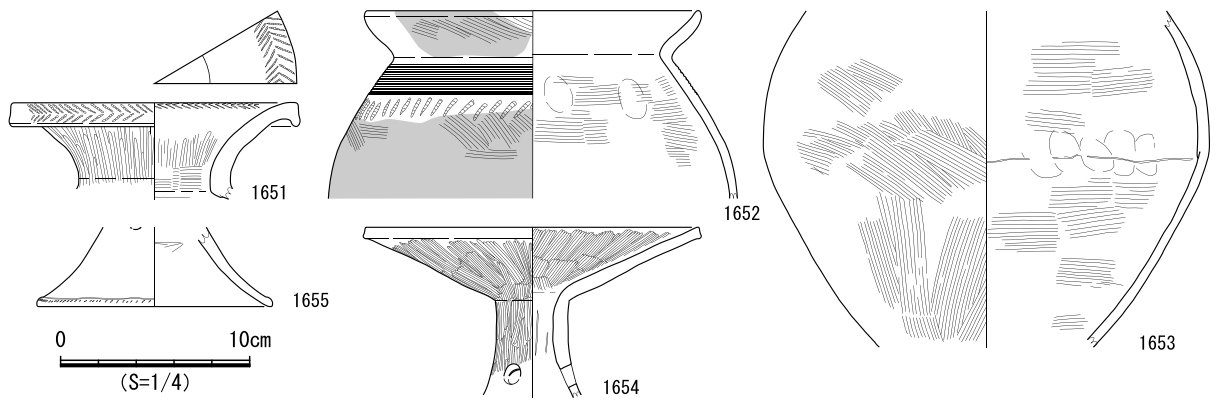


図 596 SB343 遺物実測図

出土遺物 1651はⅦ期壺A1b類。口縁部が外反する。端部下端を拡張して、羽状文を施文する。内面にも羽状文が認められる。1652、1653はⅥ期甕A4類。口縁部が頸部からやや長く外反して、端部がわずかに直立する。1652は頸部直下には直線文と刺突文が認められる。1654はⅥ期器台B2類。口縁部が直線的に伸び、内外面全体に煤が付着する。1655はⅥ期～Ⅶ期器台B類脚部。端部に刺突文が認められる。

時期 出土遺物の時期から、Ⅶ期と考えられる。

SB344 (遺構：図598・599、遺物：図597)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB340に切られ、SB346、SB350、SB358を切る。

形状 北西-南東長及び北東-南西長ともに約5.5mで、平面形は隅丸方形である。各辺とも直線的で、深さは約0.3mと残りが良く、壁面傾斜は急である。

埋土 床面までは4層に分層した。1～3層が住居埋土、4層が掘形埋土である。住居埋土の層界は凹凸がわずかに観察できるが、その成因は不明である。

床面 平坦であり、貼床(整地土)がある。硬化面や炉跡は認められなかった。床面上にて6基の小穴を確認し、いずれの小穴にも柱痕跡もしくは柱抜き痕跡が認められる。平面的な位置関係から、P1～P4が柱穴と考えられる。なお、幅約0.1mの壁溝が壁面にほぼ全周しているが、南東壁中央西寄りの約0.7mの部分のみ途切れている。

遺物出土状況 埋土中から土器4339点、石器類7点、小穴から土器116点、壁溝から土器58点が出土した。土器はⅥ期～Ⅷ期の土器片が多い。

出土遺物 1656～1658はⅧ期甕D3類。口縁部が弱く屈曲し、1656と1657の頸部と胴部の境には沈線が認められる。1656、1658は端部がわずかに肥厚して、外傾する面が認められる。1658の胴部は肩部が強く張り、ヨコハケが認められる。1659はⅧ期甕D3類脚部。付根が細身で、直線的にハの字に開く。1660はⅧ期手捏ね

C類。底部に煤が付着する。1661は叩石。長楕円礫を素材とし、上下端部と側面に敲打痕が残る。1662は砥石。板状であり、厚さ4.0cmである。表裏面に砥面が観察でき、裏面左端にはやや湾曲する溝状の窪みがある。

時期 出土遺物の時期から、Ⅷ期と考えられる。

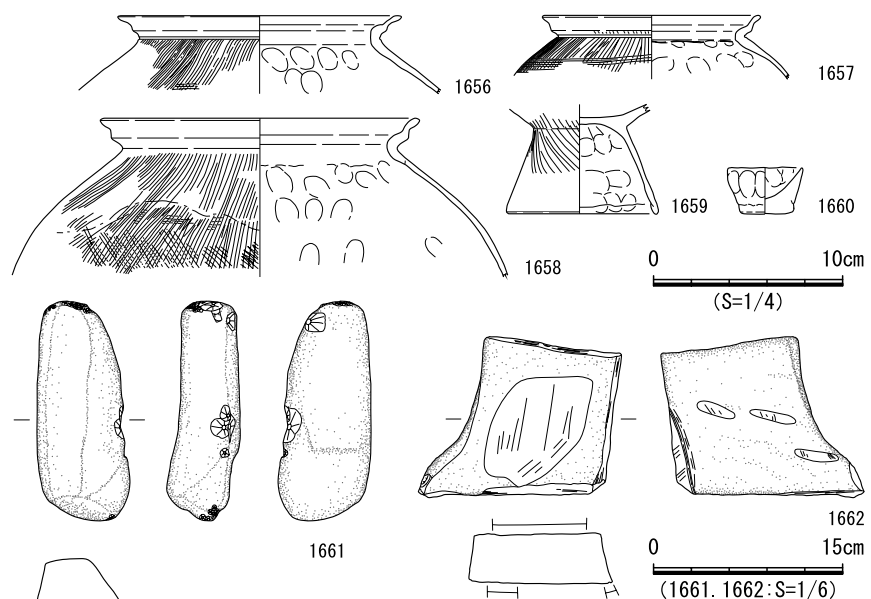


図597 SB344 遺物実測図

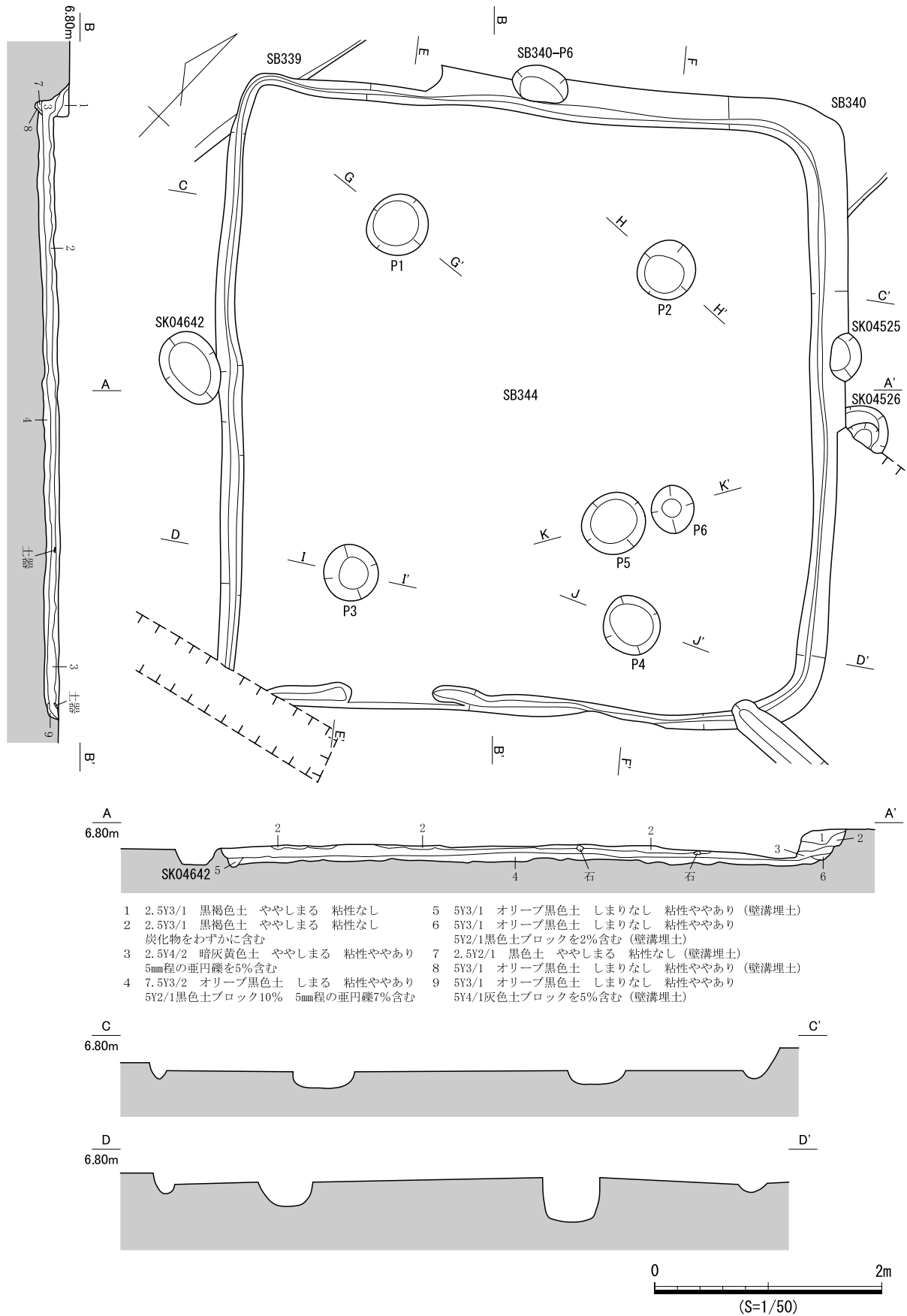


図 598 SB344 遺構図 (1)

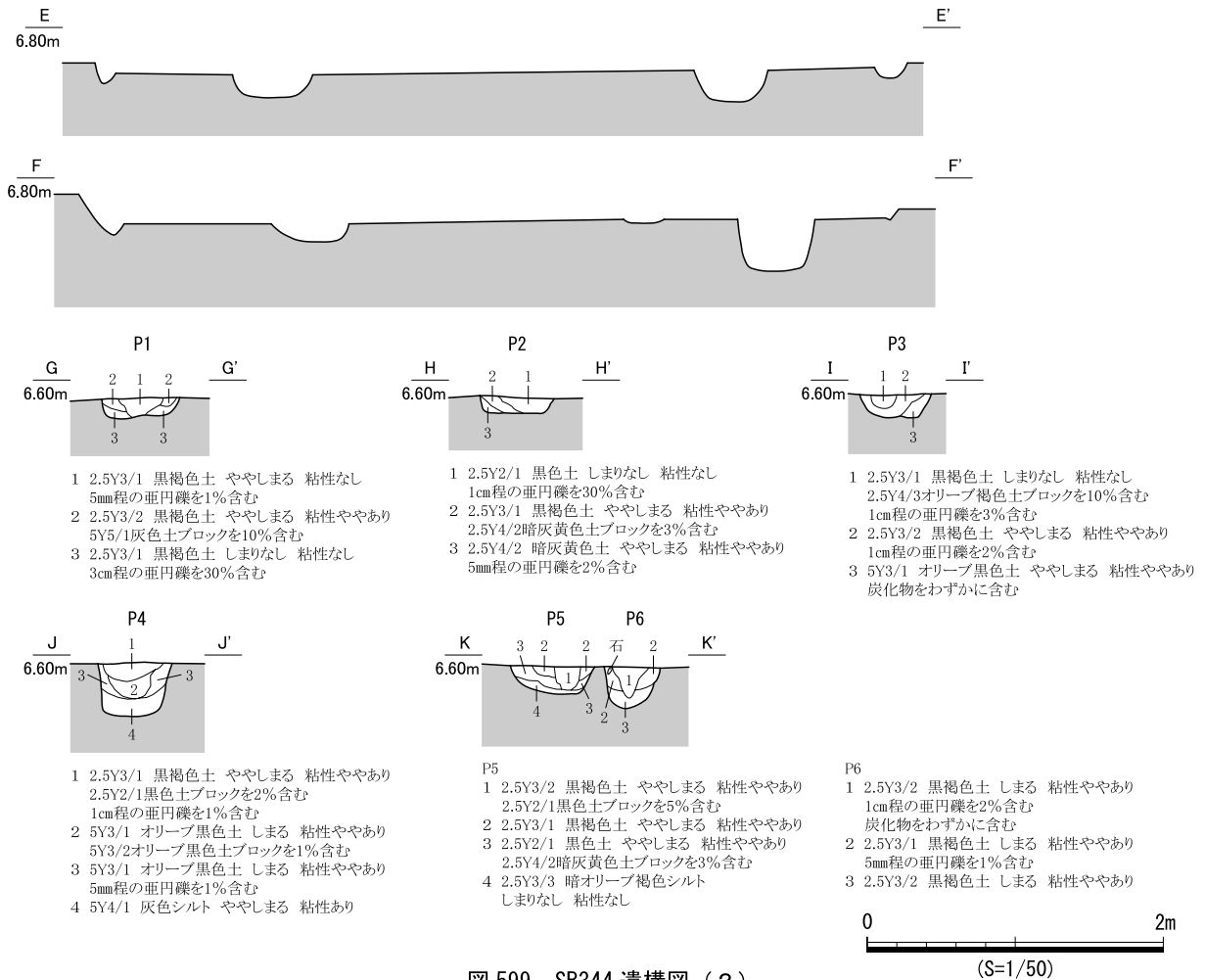


図 599 SB344 遺構図 (2)

SB345 (遺構：図 600、遺物：図 601)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB346～SB350、SB356を切り、重複する竪穴住居跡のなかでは最も後出する。また中央部と北東隅部を攪乱により滅失している。

形状 南北長約4.8m、東西長約4.1mで、平面形は長方形である。各辺は直線的で、深さは0.1mにも満たないほど浅い。

埋土 2層に分層した。いずれも礫が混じるものの、その成因は不明である。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面にて3基の小穴を確認したが、いずれも柱痕跡は確認できず、柱穴の推定は困難である。

遺物出土状況 埋土中から土器1,545点、小穴から土器52点が出土した。土器はV期～VIII期に属し、P1とP3付近に土器片がまとまって出土した。また、P1から甕D類(1666)が出土した。

出土遺物 1663、1664はVII期甕D2b類。1663は口縁部が短く屈曲して、上段が強く外反する。1664は口縁端部を欠損する。胴部が強く膨らみ、頸部からわずかに下がった位置に、ヨコハケが認められる。1665はVII期高坏C4類。器面全体に二次的な被熱が認められる。1666はVII期～VIII期の甕D類。脚部に打ち欠きがあり、破断面に被熱が認められる。

時期 出土遺物の時期と、VIII期のSB349より後出することから、VIII期と考えられる。

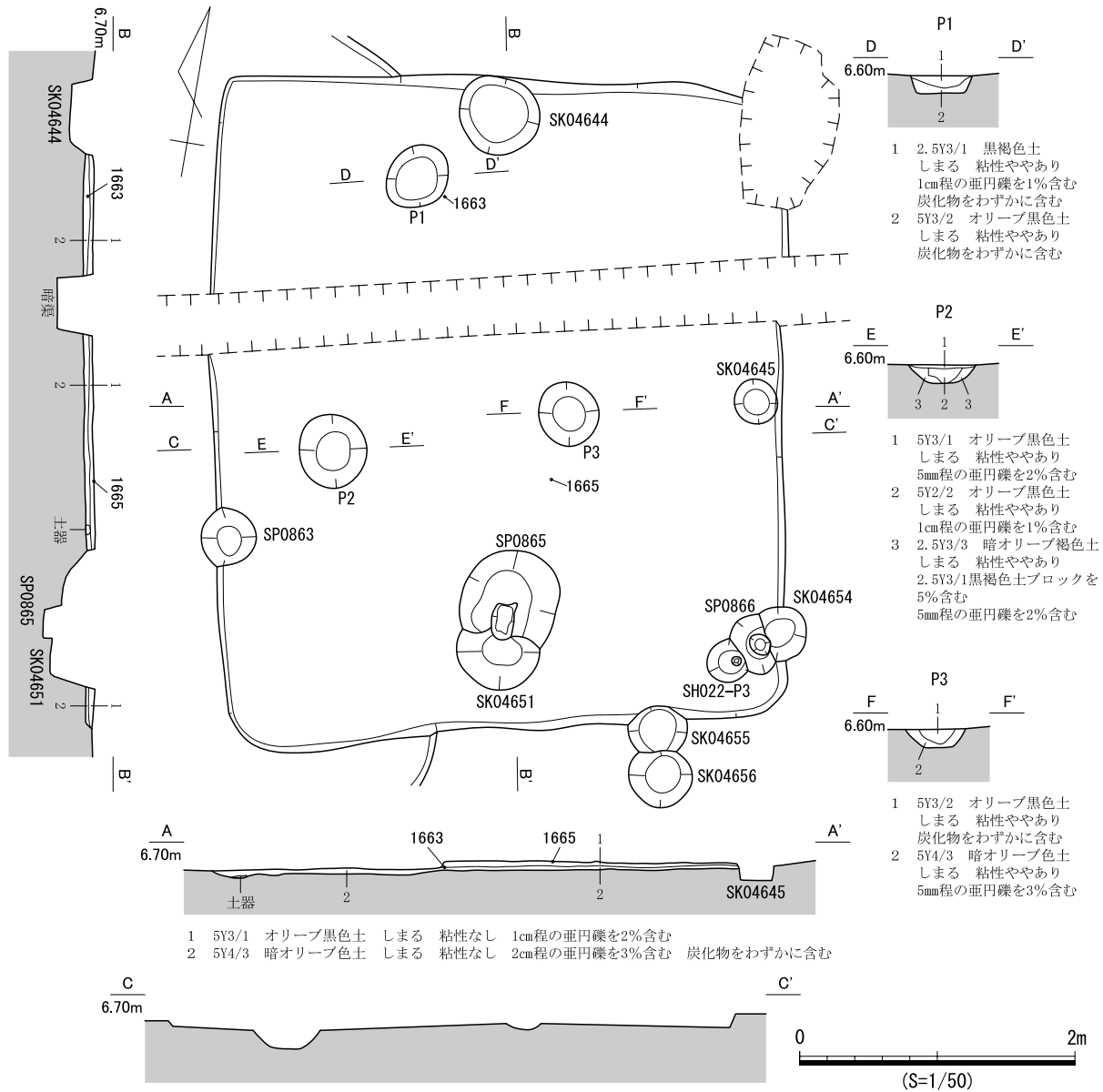


図 600 SB345 遺構図

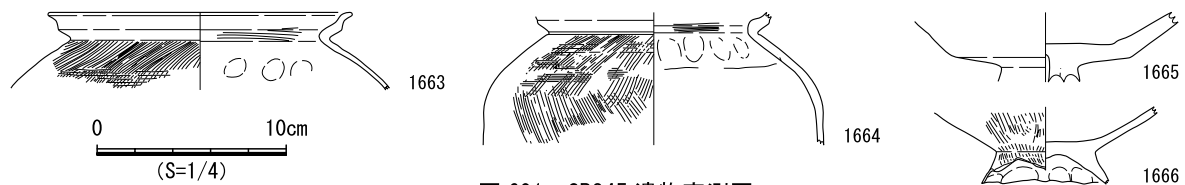


図 601 SB345 遺物実測図

SB346 (遺構：図 602、遺物：図 603)

検出状況 西部東側中央の堅穴住居跡密集域に位置する。周囲の堅穴住居跡との重複関係が著しく、SB339、SB344、SB345、SB358に切られ、SB347、SB350、SB359に切られる。そのため、遺存状況が悪く、北東辺の大半と南東辺は失われている。

形状 北西-南東長は約6.4m残存しており、北東-南西長は約4.6mであるため、平面形は北西-南東方向に長い隅丸長方形と考えられる。確認できた北西辺と南西辺はいずれも直線的である。

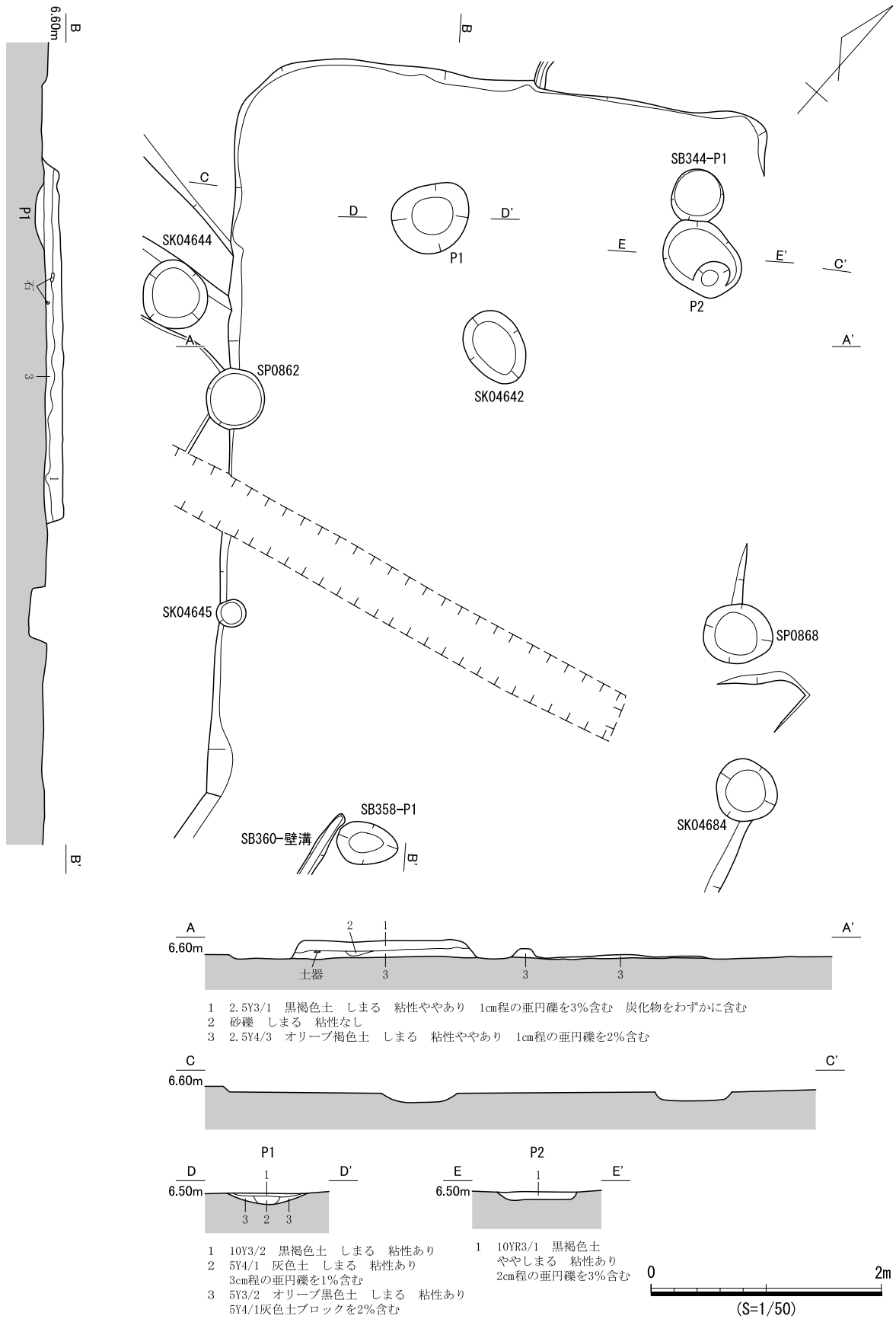


図 602 SB346 遺構図

埋土 埋土は部分的にしか残存していないが、3層に分層した。このうち、2層の砂礫がブロック状に混入することや層界の凹凸がみられることから、人為堆積と考えられる。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にて2基の小穴を確認し、P1では柱痕跡を確認した。P2は浅く、柱痕跡は認められなかったが、底面南端にて柱当たりの可能性がある円形の凹みを確認した。平面的な位置関係からP1とP2は柱穴の可能性のあるものの、P2が北東壁に寄りすぎており、やや疑問も残る。なお、P1とP2に対応する南東側の小穴は、重複する竪穴住居跡の床面でも確認できなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器933点、石器類2点、小穴から土器5点が出土した。土器はVI期～VII期のものであり、わずかにI期の土器片も出土した。

出土遺物 1667はVI期鉢A類胴部。頸部直下に直線文、刺突文が認められる。1668は砥石。表裏面に砥面が観察でき、他の面は割れている。

時期 出土遺物の時期と、VII期のSB356に先行し、VII期のSB347、SB359より後出するので、VII期である。

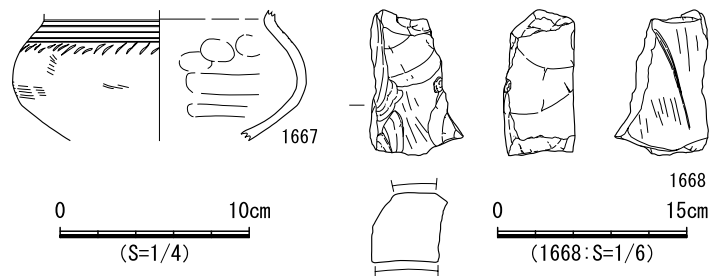


図 603 SB346 遺物実測図

SB347 (遺構：図 604・605、遺物：図 606)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。周囲の竪穴住居跡との重複関係が著しく、SB339、SB345、SB346、SB348、SB349に切られ、SB350、SB359を切る。東辺の一部を攪乱に、南西隅部はSK04617によって失われている。

形状 南北長約5.2m、東西長約5.6mであり、平面形は隅丸長方形である。各辺とも直線的であり、壁面は約0.1mが残るのみで、壁面傾斜は緩やかである。

埋土 3層に分層した。ほぼ水平堆積であり、上下層に炭化物が混入している。2層は住居全域で確認でき、ブロック土を含むことから人為堆積の可能性はある。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にて直径約0.2m～1.1mの小穴10基を確認した。埋土はいずれも単層から2層に分層でき、P7の堆積のみ柱痕跡を示す可能性がある。平面的な位置関係から、P1～P3が柱穴の可能性が高い。また、P10は平面形が楕円形で、深さは0.15mである。埋土からI期の小型壺(1669、1671)、甕(1673)、深鉢(1672)が出土したので、竪穴住居跡より先行するI期の遺構の可能性はある。

遺物出土状況 埋土中から土器284点、小穴から土器60点が出土した。時期が判別できる土器はI期とVII期に属し、V期とVI期のものは認められなかった。

出土遺物 1669～1671はI期の壺。1669は小型品で削り出しの段の下に有軸木葉文が認められる。1670は胴部で沈線によって縦位に区画された中に、有軸木葉文が認められる。木葉文の残存部位がわずかのため判然としないが、無軸の可能性はある。1671は小型品の胴部。上端に円形刺突文があり、その下を2本の沈線間を縦位の短沈線で充填する。さらに下には、有軸木葉文が認められる。1672はI期の深鉢。1673はI期甕底部。1674はI期の甕蓋。断面形は笠形にちかく、内面口縁部に煤が

付着する。

時期 出土遺物にⅦ期の土器が含まれること、Ⅶ期のSB359より後出し、Ⅶ期のSB346より先行することから、Ⅶ期と考えられる。

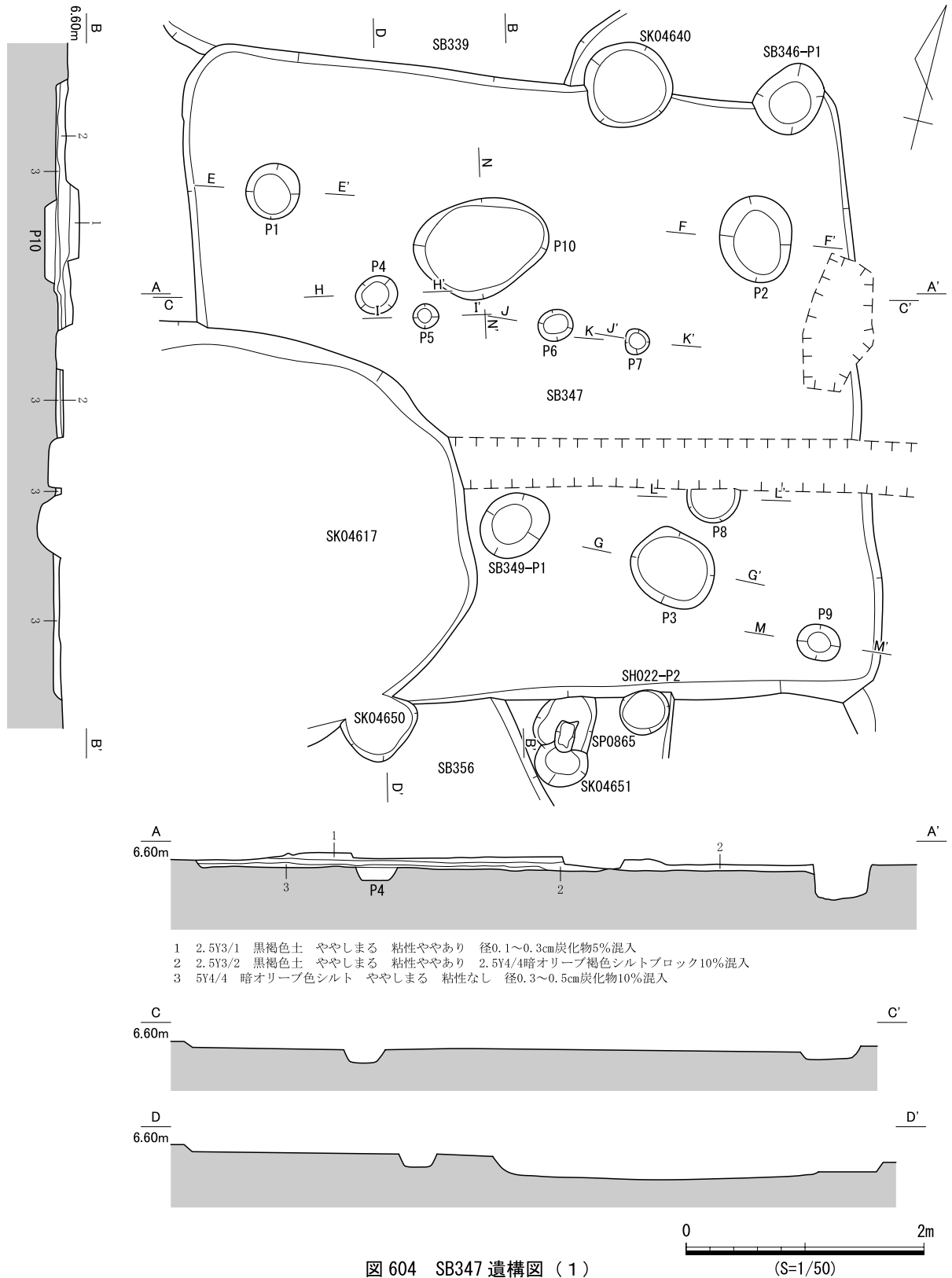


図 604 SB347 遺構図 (1)

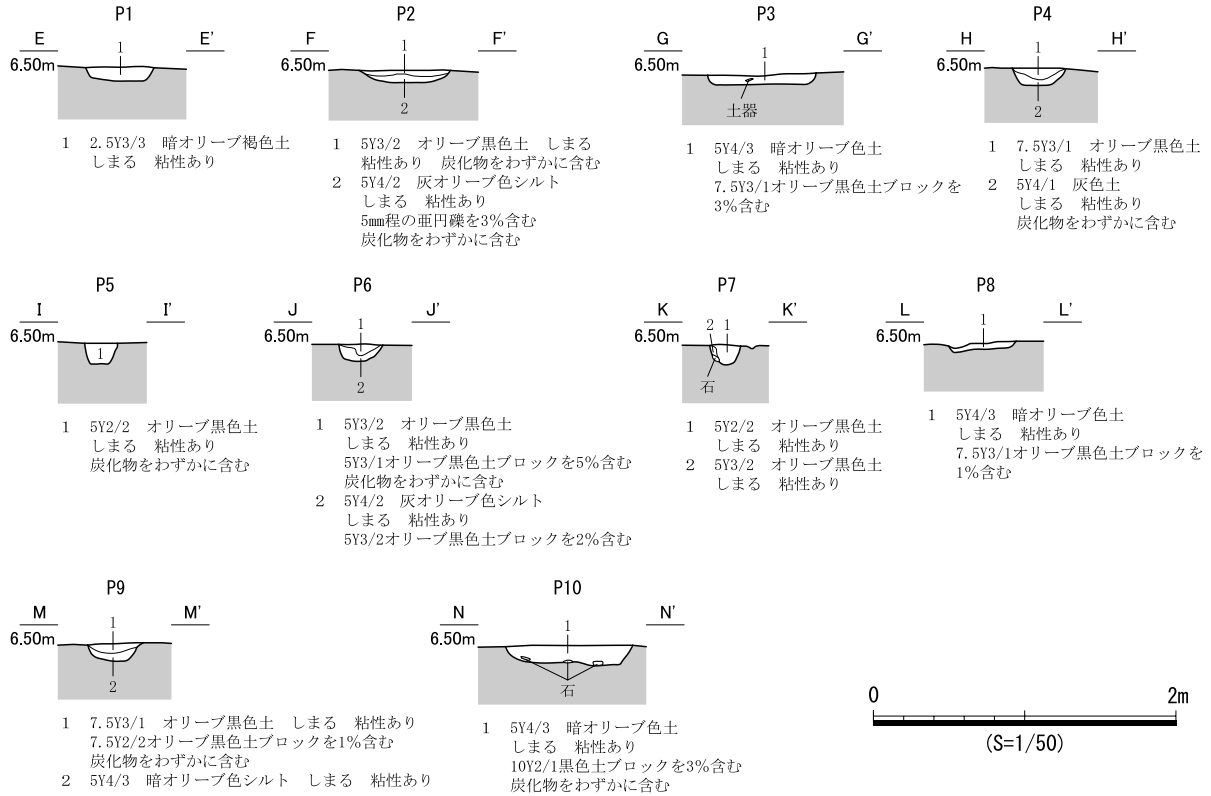


図 605 SB347 遺構図 (2)

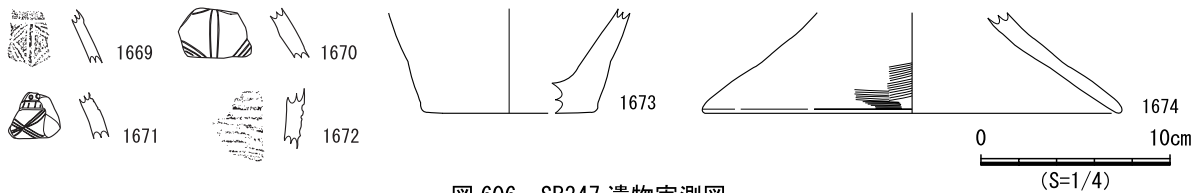


図 606 SB347 遺物実測図

SB348 (遺構：図 607)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB345、SB349、SB351に切られ、SB356を切る。東辺と西辺の一部を攪乱によって滅失しているが、ほぼ全形を検出した。

形状 南北長約4.1m、東西長約5.5mで、平面形は台形状である。北辺、西辺、南辺は直線的だが、東辺はやや蛇行する。また、東辺の幅が西辺より広い。壁面の高さは約0.1mが残る。

埋土 2層に分層した。いずれも灰色土であり、ブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にて4基の小穴を確認した。平面的な位置関係から、北東隅の小穴を欠くがP1、P3、P4が柱穴の可能性がある。しかし、柱痕跡は認められなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器1,154点、小穴から土器20点が出土した。遺物の多くはVI期～VIII期に属するが、いずれも小片であり図示しなかった。

時期 出土遺物の時期と、VIII期のSB351より先行し、VIII期のSB356より後出することから、VIII期と考えられる。

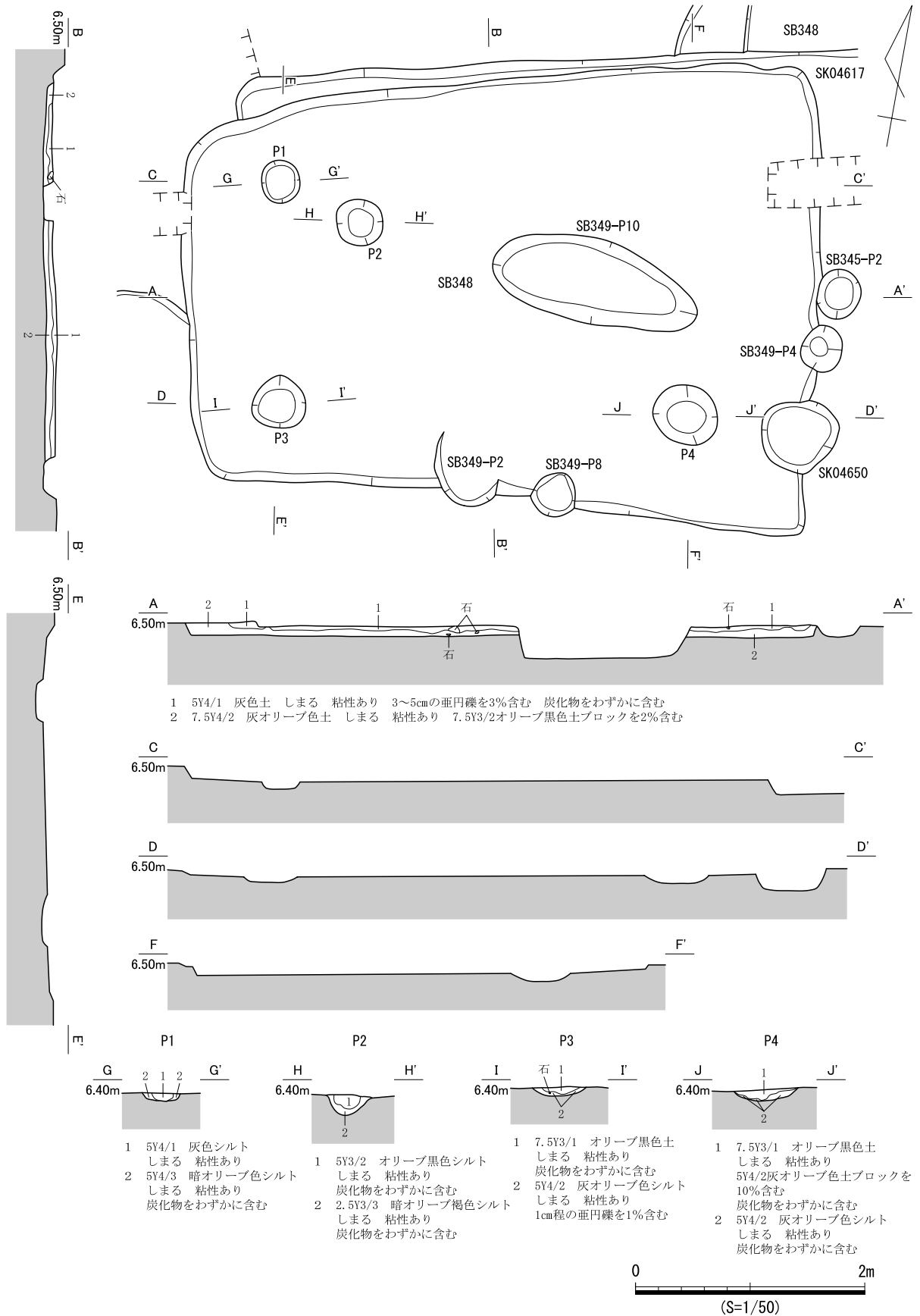


図 607 SB348 遺構図

SB349 (遺構：図608・609、遺物：図610)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB345に切られ、SB347、SB348、SB350、SB351、SB356、SB357、SB359を切る。東辺、西辺の一部を攪乱によって滅失しているが、ほぼ全形を検出した。

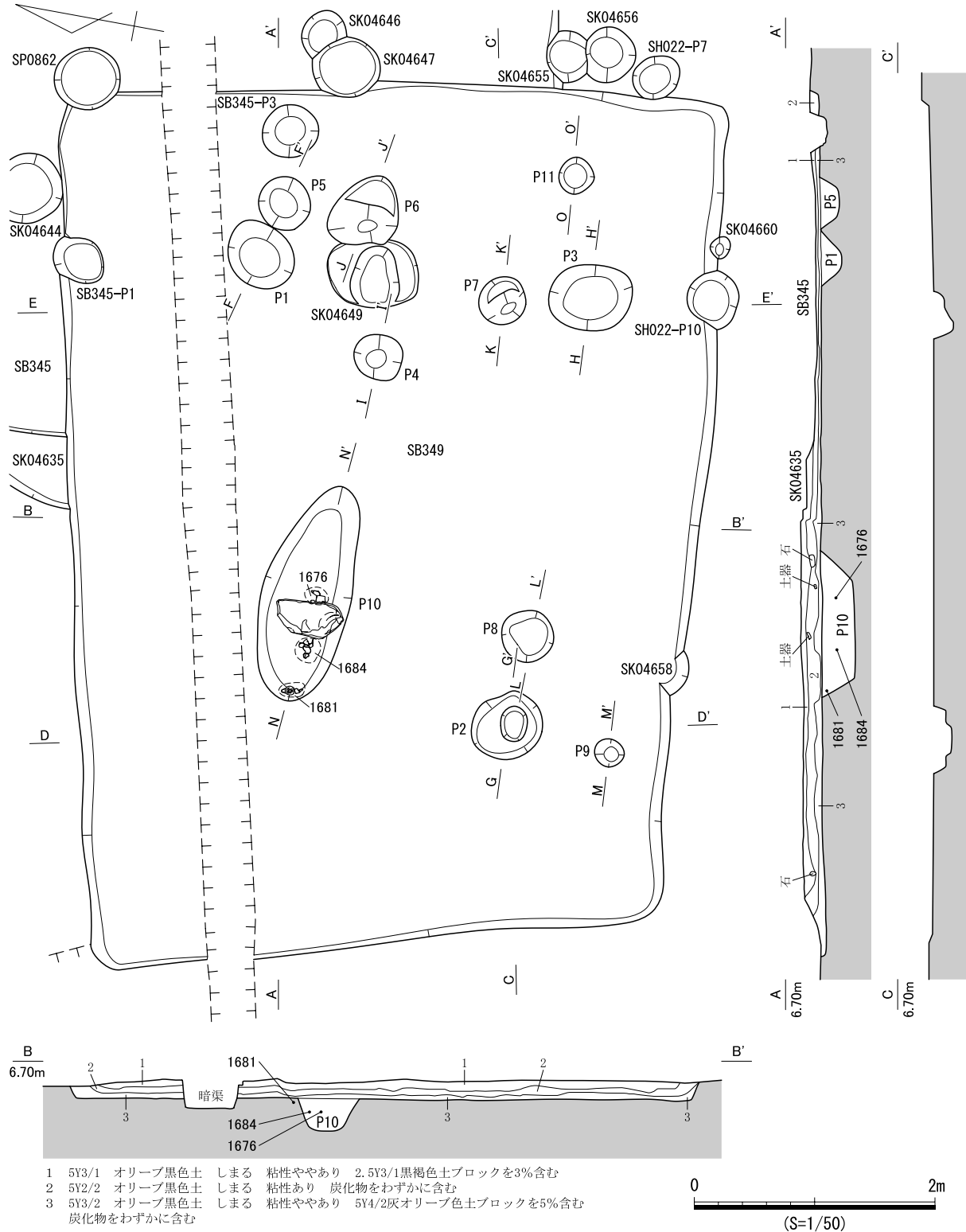


図608 SB349 遺構図(1)



図 609 SB349 遺構図 (2)

形状 東西長約7.2m、南北長約5.2mで、周囲の竪穴住居跡と比べて大きい。平面形は隅丸長方形で、各辺とも直線的である。壁面は遺存状況のよい南壁で0.2mが残り、傾斜は急である。

埋土 3層に分層した。ほぼ水平堆積であり、全体に炭化物が含まれる。ブロック土が混入し、層界の凹凸がみられることから、人為堆積と考えられる。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にて11基の小穴を確認した。北西隅の小穴を欠くが、平面的な位置関係からP1～P3が柱穴と考えられ、P1とP2には柱痕跡が認められる。また、P4～P7でも柱痕跡を確認でき、東側に偏在するP10は中央やや北西寄りに位置し、長軸長1.85m、深さ0.26mである。穴の中央付近では、底面から約0.2m浮いた状態で長さ58.8cmの砥石が出土した。周囲には炭化物が散在していたものの、壁面や底面に被熱部位は認められなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器4,400点、石器類2点、小穴から土器343点、石器類1点が出土した。Ⅶ期～Ⅷ期の土器片が多く、Ⅴ期やⅥ期の土器片はほとんど認められなかった。P10からは二次的に熱を受けた土器片や打ち欠きのある土器片(1679～1681)が出土した。

出土遺物 1675はⅦ期壺E類。外面に赤彩が認められる。1676～1679はⅦ期甕D2b類。1678は口縁部が短く屈曲して、上段が直立気味で、端部が強く外反する。1680、1682はⅦ期甕D類脚部。1680には打ち欠きが認められる。1682は脚部がハの字に開き、端部をわずかに折り返す。1681は脚部が内湾するⅦ期甕脚部。破断面に被熱が認められる。1683はⅦ期の脚部。脚部が短く外反する例外的な脚部。1684はⅧ期高坏。脚部は短脚で付根からすぐ円錐形に広がり、透孔付近からわずかに内湾する。裾部内外面に円環状の被熱が認められ、端部には打ち欠きが認められる。坏底部は径が小さく、口縁部の立ち上がりの屈曲が弱くなり、口縁部が直線的に外傾する。内面の段は認められない。1685は砥石。

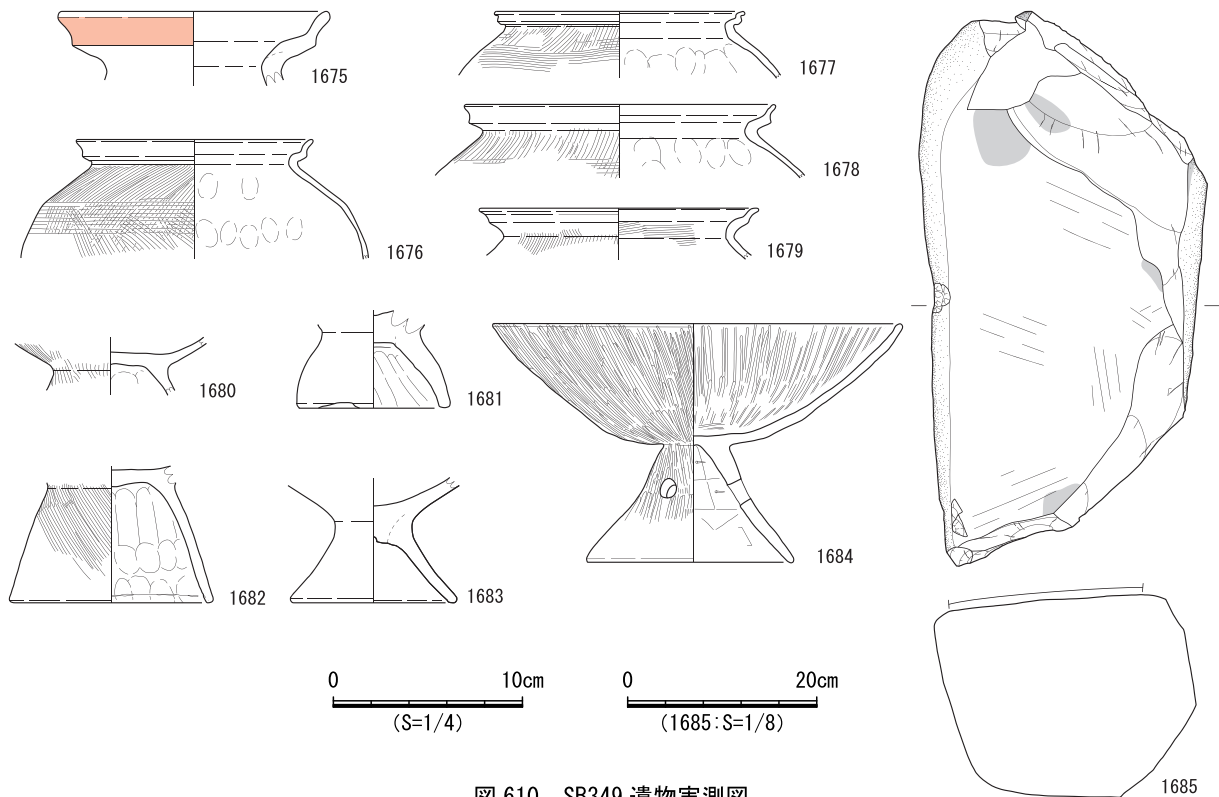


図 610 SB349 遺物実測図

長さ 58.8 cm、重量 56 kg の大型品であり、長楕円礫の平坦面を砥面として使用している。

時期 出土遺物の時期から、Ⅶ期～Ⅷ期と考えられる。

SB350 (遺構：図 612、遺物：図 611)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB339、SB341、SB344～SB347 に切れられ、重複する竪穴住居跡のなかで最も先行する。なお、南辺は攪乱によって滅失している。

形状 南北長約 4.6 m、東西長約 3.7 m で、平面形は隅丸長方形である。北辺と西辺は直線的で、東辺はわずかに弧状を呈する。壁面の残存はわずかで、その高さは 0.1 m にも満たない。

埋土 黒褐色土が単層で堆積する。ブロック土の混入が認められ、人為堆積と考えられる。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にて 6 基の小穴を確認した。いずれも底面が弧状で柱痕跡は認められないが、平面的な位置関係から P1～P4 が柱穴と考えられる。なお、幅約 0.1 m の壁溝が北壁、南壁に沿ってめぐる。

遺物出土状況 埋土中から土器 264 点、小穴から土器 4 点が出土した。土器はⅥ期～Ⅶ期に属し、わずかにⅠ期大型壺の土器片 (1686～1688) が認められた。なお、SB346 と SB358 から同一個体と考えられる破片が出土した。

出土遺物 1686～1688 はⅠ期の大型の壺で同一個体の可能性が高い。1686 の口縁部はなだらかに外反し、端部をやや肥厚気味にして、平坦に整え、1 本の沈線を施文する。また、内面には 2 本の沈線を加える。1687 の頸部は直線的に内傾し、頸胴部の境に削り出しの段を設け、その下には口縁部内面と同様の沈線 2 本を加える。

時期 出土遺物の時期とⅦ期の SB346、SB347 に先行することから、Ⅶ期と考えられる。

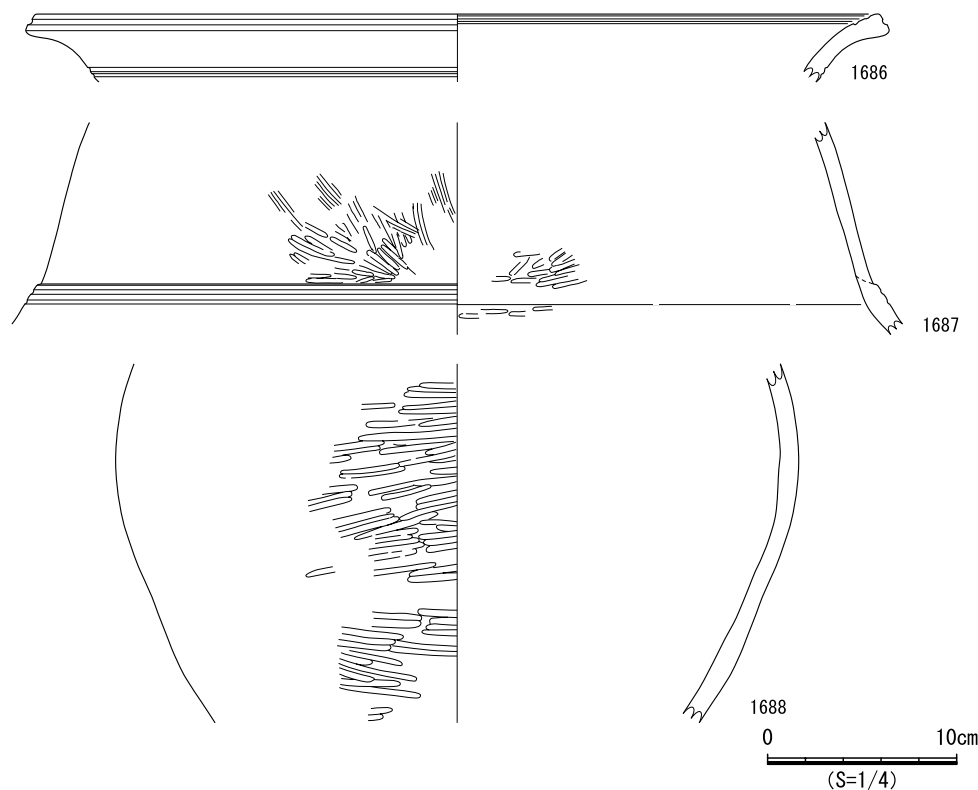


図 611 SB350 遺物実測図

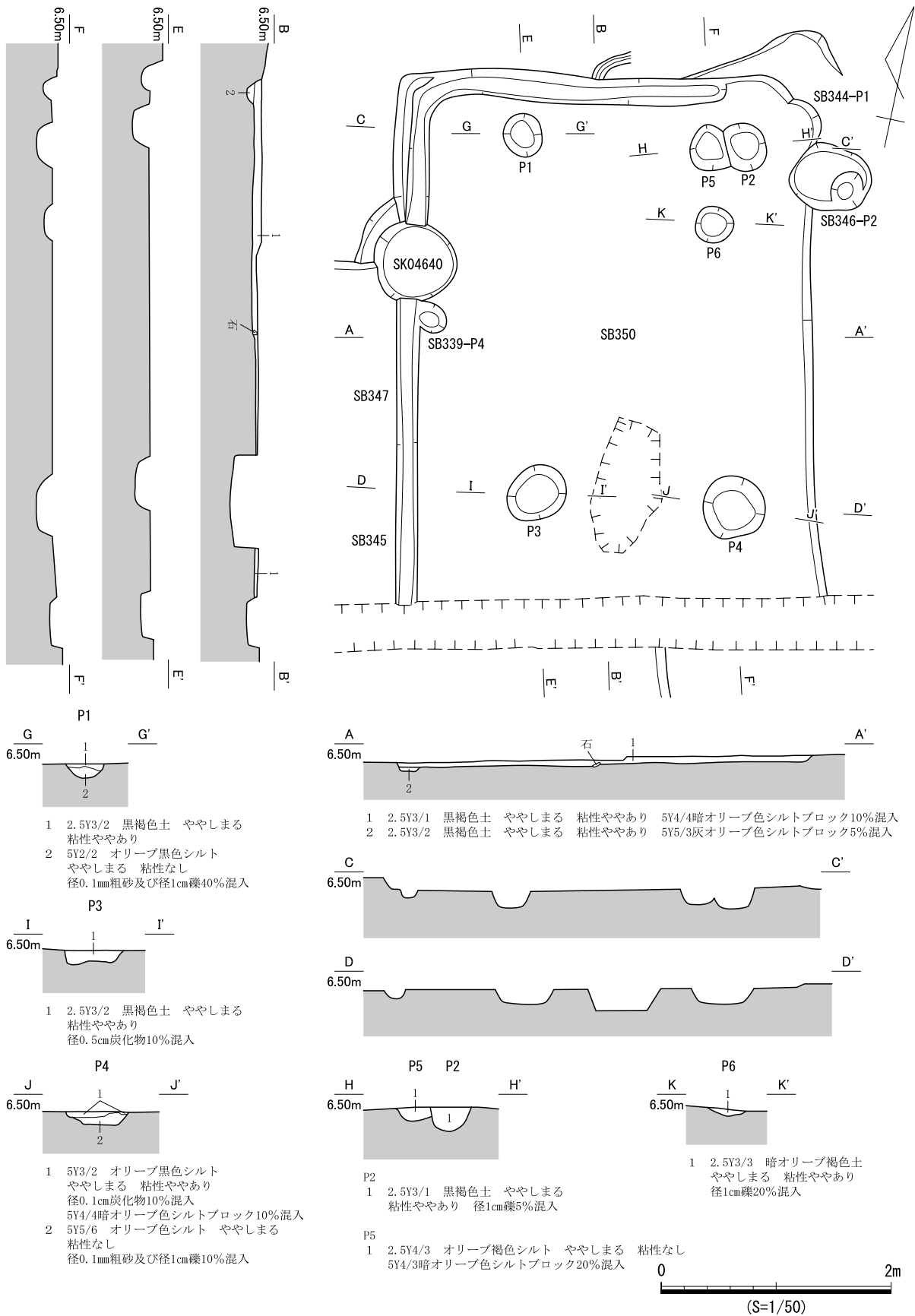


図 612 SB350 遺構図

SB351 (遺構：図613)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SB349、SD0997、NR005に切られ、SB354～SB357を切る。

形状 南北長約4.3m、東西長約5.0mで、平面形は隅丸長方形である。各辺とも直線的で、壁面の

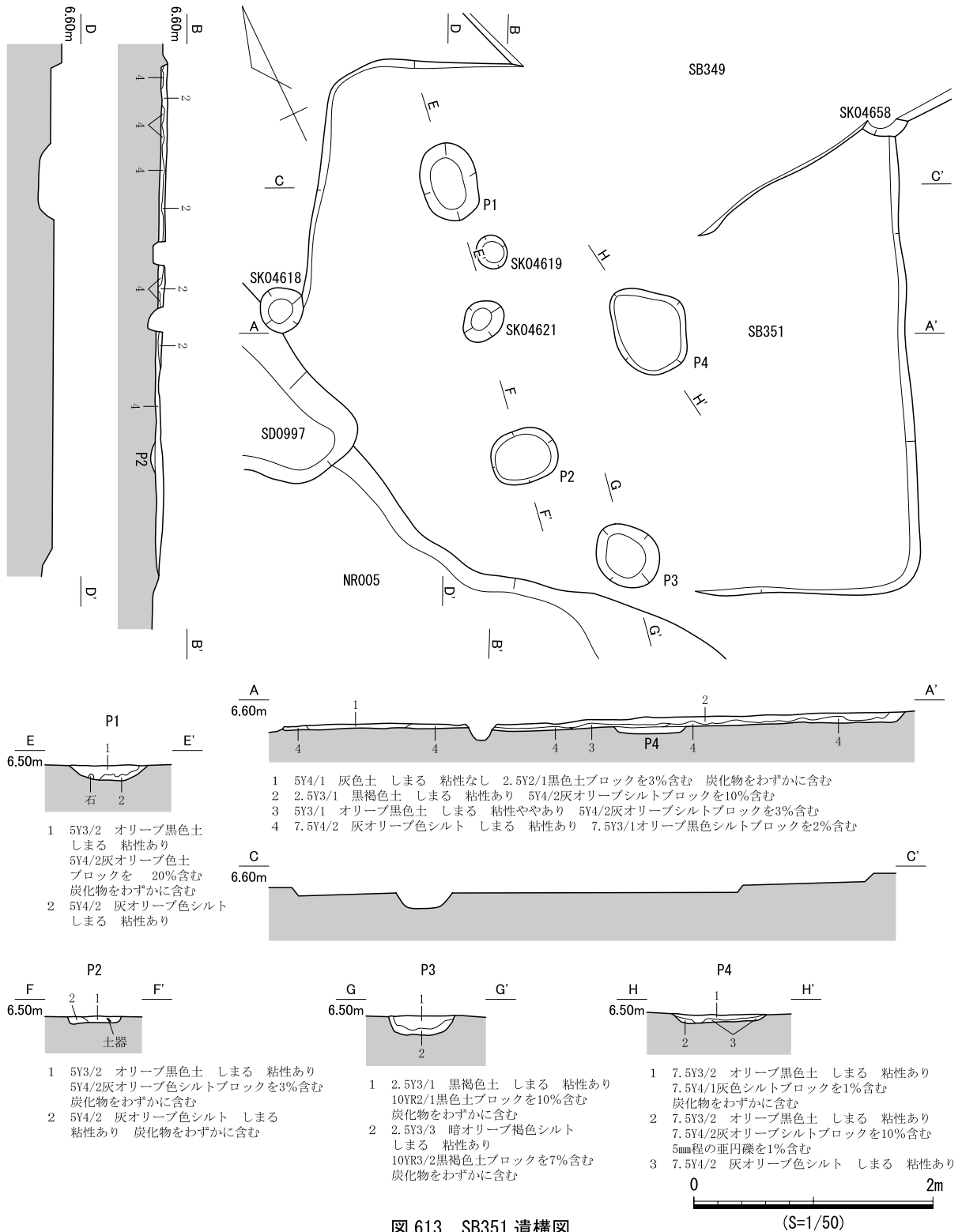


図 613 SB351 遺構図

大半は高さ0.1mにも満たない。

埋土 4層に分層した。ブロック土の混入が顕著で、層界の凹凸がみられることから、人為堆積と考えられる。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にて4基の小穴を確認した。いずれも直径約0.5m～0.7mとやや大きいが、柱痕跡は認められなかった。また、SB349底面で検出した小穴も含めて検討したが、柱穴配置の推定は困難である。

遺物出土状況 埋土中から土器524点、石器類1点、小穴から土器56点が出土した。土器はⅥ期～Ⅷ期に属するが、いずれも小片であり図示しなかった。

時期 出土遺物の時期とⅧ期のSB349より先行することから、Ⅷ期と考えられる。

SB352 (遺構：図614～616、遺物：図617)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SB351、SB356、NR005に切られ、SB353～SB355を切る。

形状 南北長約4.7mで、東西長は不明である。確認できた各辺は直線的で、壁面の高さは0.1mにも満たない。

埋土 床面までは単層であり、炭化物が混じる。2層は掘形埋土である。

床面 平坦であり、貼床(整地土)がある。硬化面や炉跡は認められなかった。床面上にて5基の小穴を確認した。P1～P4は直径約0.5mの小穴で、P1～P3は柱痕跡が認められる。P1～P3は平面的な位置関係から柱穴の可能性が高いものの、南東部の小穴を欠く。P5は長軸1.0mの大きな穴で、中央やや南寄りに位置する。埋土に炭化物が認められ、壁面に被熱痕はみられなかった。

掘形 埋土は単層で、ブロック土が混入する。底面はやや凹凸があり、P6～P11の小穴6基を確認した。いずれも直径約0.4m～0.5mであり、P11は床面上で検出できなかった南東部の柱穴と考えられる。なお、北辺は掘削位置を誤認してしまった。

遺物出土状況 埋土中から土器1,880点、小穴から土器174点、石器類2点が出土した。土器はⅥ期～Ⅷ期に属し、東壁面沿いの床面にて遺存状況の良いⅧ期の高坏(1692)と甕(1691)が並んで出土した。

出土遺物 1689はⅧ期の壺。頸部が短く直立する二重口縁壺。胴部は球形にちかく、口縁部から胴部上半にかけて煤が強く付着する。底部はやや突出気味である。口縁部の破損した断面にも煤が付着する。1690はⅧ期壺胴部。上半にやや乱雑な直線文、波状文が認められる。1691はⅦ期甕D2b類の中型品。ほぼ完存する。口縁部が短く屈曲するが、外面に比べると内面の屈曲は弱い。胴部は肩部が強く張り、肩部やや上位にヨコハケが認められる。脚部付根はやや太く、脚部はわずかに内湾しながら伸びる。1692はⅦ期の高坏D3類。坏部が完存する。口縁部が直線的に外傾し、内面上半2分の1程度に多条沈線を施文する。文様帯下段には段は認められないが、多条沈線とは別の太い沈線が認められる。坏底部内面にはわずかに段がある。

時期 出土遺物の時期とⅧ期のSB351に先行することから、Ⅶ期～Ⅷ期と考えられる。